ＩＳ　深海の探索者

雨夜 亜由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　深海の探索者

【Ｎコード】
Ｎ９９６７Ｖ

【作者名】
雨夜　亜由

【あらすじ】
スペインの大企業、Ｓ・Ｑ社。
そこに属する研究員、深水沙良。
沙良と、幼馴染の一夏がＩＳ学園に入学したときから、波乱の学園生活が幕を開ける。――よくあるオリ主介入型の物語です。筆者は気ままに書いているので、プロットなどありません。一応原作は読んでいますが、多分にオリジナル設定やら、設定の改変などがあったりすると思うので気をつけてください。

第一話　開幕（前書き）

筆者は気晴らしに書いてます。
つまり、いろいろと矛盾が出てきてもおかしくないということです（遠い目）
オリジナル設定が多いですけど、それでも楽しんでいただけたら幸いです。

第一話　開幕

ＩＳが世界に知れ渡ったのは沙良（さら）が小学生の頃だった。
世にも有名な『白騎士事件』である。
そのＩＳを開発した篠ノ乃博士は世界に追われ、その家族もバラバラになってしまう。
こうして、小学四年の頃、幼馴染の篠ノ乃箒は引っ越してしまうことになった。
それを沙良は幼馴染の一夏と涙で見送った。
大した言葉をかけれず、ただ涙を堪える箒の姿が印象的だった。
それから束の言うことを守り、秘密を抱えたまま一年が経った。
沙良はＩＳについての論文をとある科学誌で発表した。
それは、小学生が考えたものとは思えないと、世界中から注目を浴びることとなった。
そして、予想外な展開が沙良に訪れる。
スペイン国の大企業Ｓ・Ｑ社から、研究員として、本社に招きたいとスカウトを受けたのだ。

◆　◇　◆

「サラ、本当に行っちゃうのか？」

沙良は、玄関を出て空港までのタクシーを待っていた。

「なに言ってんのさ一夏。ずっと前から決めてたって言ったでしょ

？」

「でも、スペインだなんて遠すぎるよ」

そういう一夏は今にも泣きそうな顔で俯いてしまう。

それを見ると、沙良も泣き出しそうになってしまうのだが、一生の別れではない。何とか涙を堪えて、気丈に振舞う。

「たまには帰ってくるよ。それに姉さんみたいに世界を追われてるわけじゃないんだ。何時でも連絡は取れるよ」

一夏を心配させたくない。そう思う気持ちは一夏にも伝わったみたいだ。

一夏はこくんと頷くと、右手を差し出してくる。

沙良はその手をしっかりと握り、別れの握手を交わすと、すぐ後ろで、幼馴染の別れの挨拶を待っていた、千冬に顔を向ける。

「行って来ます、千冬さん。二年間でしたがお世話になりました」

そういい深々と頭を下げる。

二年間だが住まわしてもらっていた織斑家を離れるのは寂しいが、これも決めたことだ。

後悔はしないと決めたのだ。

「ああ、向こうでも元気にな。束に会うことがあればよろしく言っておいてくれ」

「はい、必ず伝えておきます」

千冬とも握手を交わした沙良は最後に一夏と抱き合い、タクシーに乗り込む。

「一年間は忙しいと思うから、来年の夏に一回帰って来るよ」

「約束だからな」

一夏と約束を交わした沙良は、スペインに向けて飛ぶために空港に向かうのであった。

◆　◇　◆

「ここがエスパーニャか」

バルセロナの空港から出ると大きく深呼吸する。

――ここが僕の生まれ故郷か。

僕は自分が生を受けた街を眺める。

その町並みは日本とは違うが、何故か落ち着く雰囲気を醸し出している。

「おっと、ぼんやりしてる場合じゃない。迎えに来てくれている人がいるはず」

指定されていた待ち合わせ場所に急ぐ。
そこには、Ｓａｒａ　Ｒｕｉｚとその上に片仮名でサラ・ルイスと書かれた紙を持った女性が立っていた。

（あれかな？）

女性に近寄り声をかける。

「！Ｍｕｃｈｏ　ｇｕｓｔｏ！　Ｓｏｙ　Ｓｅｒａ　Ｒｕｉｚ．？　Ｅｓ　ｕｎａ　ｐｅｒｓｏｎａ　ｄｅ　Ｓ　Ｑ？（始めまして、僕がサラ・ルイスです。貴女がＳ・Ｑ社からのお迎えですか？）」

「あら、あなたが沙良君ね」

返ってきた返事は流暢な日本語だった。
ビックリして、つい日本語で話してしまう。

「日本語がお上手ですね」

「社用語が日本語ですから」

へー、日本語が社用語なんだ

「ふふふ、意外ですか？」

「ええ、とても」

「ＩＳを扱う会社ですもの。全ての資料が日本語で書かれたものを研究するんだから、この業界ではみんな日本語を覚えるのよ」

なるほど、と頷く。それを見て、笑みを深くする女性。
そこで僕は、女性の名を聞いていないこと気付いた。

「あ、すいません。改めて自己紹介をさせてもらいます。サラ・ルイス・フカミ、日本名で深水沙良といいます」

「これはご丁寧にありがとう。私はカルラ・ファリーノス・イエロよ。気軽にカルラと呼んでくれて構わないわ」

「わかりましたカルラさん」

「それでは、早速行きましょうか」

そういって、車を指差すカルラさん。
その車は、何処から見てもリムジンだった。
正直、気後れしてる。

「何処に連れて行かれるのですか？」

「勿論、S・Q本社ですよ」

「本社に？」

そこから、カルラさんは楽しげに笑うだけで、質問には答えてくれなくなった。

着けばわかるってことかな？

そう楽観的に考えて、とりあえずは町並みを楽しむことにしよう。

車に乗り込み、流れていく景色を堪能してると大きなビルが近づいてくる。

なんかあそこに向かってるっぽいな。

予想的中

大きなビルに車が入っていくと、なにやらカードをスロットに入れている。

え？　もしかして指紋認証？　徹底的だなぁ

やっぱり、研究施設があるところは情報管理が凄いんだろうなぁ

そして、連れて行かれたのは、まさかの社長室だった。

えぇ、なんでこんな所に通されたの？
僕は、爺ちゃんに会えれば、それでいいんだけど……
カルラさんも楽しそうに僕の横で立っている。

今は、目の前のお菓子だけが、僕の心のよりどころだ。
お菓子を手に取り、遠慮がちに食べていると、パシャりと写真を取られた気がした。

「……何してるんですかカルラさん？」

そこには携帯をかまえたカルラさんがいた。

「ええ、ちょっと、つい」

僕は、よくわからなかったから首をかしげ、お菓子を手に取る。
ちょっと、カルラさん鼻息荒いんですけど、気にしないほうがいいのかなぁ。うぅ、身の危険を感じるんだけど。

そんなことをやっていると、扉が、コンコンとノックされる。

「社長が到着しました」

その言葉で、僕は席を立ち、姿勢を正す。
うわー、社長さんと顔合わせかぁ

ただ研究してればいいと思ってたから何も考えてなかったよ。

そして、扉が開かれる。

「始めまして、私がサラ・ルイス・フカミです。今回は、私を本国にお招きいただきありがとうございます」

そういって、深々と頭を下げる。

ん？

周りの様子がおかしいな？

なんで、みんな笑いを堪えてるんだろう。

「ぷ、いや、くっ。あ、頭を上げてくれたまえ、沙良博士」

社長さんも笑ってる。

てか、この声は聞き覚えがあるぞ？

そろそろと頭を上げると、そこには

「お、おじいちゃん！？」

腹を押さえて必死に笑いを堪えている祖父がいた。

「いやー面白かったぞ、サラ」

「おじいちゃん社長さんだったの？」

「そうだ。おじいちゃんは社長さんだよ？」

初耳なんですけど！！

ソファーに座り、今までのことなどを楽しそうに話す沙良。
社長である祖父も、その孫息子が歩んできた人生を、時に驚き、時に笑い、時に感動し、楽しそうに聞いてくれる。

「社長、家族の交流も結構ですがそろそろお時間です」

社長はあからさまに嫌な顔をし、カルラに睨まれたが、沙良に向きなおした時には、その目は真剣なものになっていた。

「そうだな、家族の交流もいいが、本題に入らせてもらおう。沙良博士」

そう社長が言うと、沙良も博士と呼ばれた意味がわかったのか、真剣な顔つきに変わる。

「今回、サラをエスパーニャに呼んだのは他でもない。現在、世界を変えていっているＩＳを研究してもらいたい」

沙良はわかってると頷く。

ＩＳの登場により、世界の構成はがらりと変わった。

それは、平和ボケしている日本がその法律を変え、ＩＳを配備していることからも分かるだろう。

いまでは、ＩＳを持っているかどうか。そのＩＳが最先端をいっているか。それがその国の力を表す事につながっている。

「我が社はエスパーニャで唯一、ＩＳの開発を行っている。既にドイツ、イギリス、イタリアには遅れを取り、最近ではフランスのデュノア社も動き出したとの事。あまり、悠長にしている時間はないのだ」

フランスはＩＳの開発でいうと後進国である。

そのフランスに遅れを取っているというのは、かなり良くない状況だろう。

つまり、研究者は何時でも不足しているという事態だ。

「今回のプロジェクトには、国からの莫大な支援がある。その意味がわかるな？」

それに沙良はゆっくりと頷く。

「遠慮は要らない。必要と思うものは全て用意する。目的は、一つ新世代のＩＳの開発だ」

社長は、右手を差し出す。

それは、沙良を、孫としてではなく、一人の研究者として捉えていると言うことに相違はない。

沙良もその右手を掴みしっかりと握手を交わす。

「太陽の昇る国から太陽の沈まない国へようこそ、世界で二番目にＩＳを動かした天災の一番弟子殿。私たち、Ｓｅａ・Ｑｕｅｓｔ社は貴方を歓迎する」

こうやって、篠ノ乃束に教えを受けた若き研究者、深水沙良の研究生活が幕を開けた。

第一話　開幕（後書き）

筆者はもう一作の気晴らしとしてこの作品を書いているので、更新は不定期となります。
一応、ＩＳ学園にはまだ入りません。あと４、５話ぐらいで入れる予定ではあります。

第二話　研究所での一日

スペインに来てから一年半が過ぎた。
研究に専念しようと、当初は学校に行く気は全くなかったのだが、社長（孫バカの祖父）に義務教育は出ておくべきと言われ、しぶしぶ学校に通うことになった。
しかし、優秀なＩＳ部門の研究員に支えられて、学校に通いながらも第二世代のＩＳを完成させることに成功する。
それは、会社名からを名を取ってシークエストと名づけられた。
ここで、世界に公表しようとしたところ、とある弊害があった。
それが沙良の存在である。
沙良は、世界で二番目。つまり千冬の次にＩＳを動かした。
つまり当時はまだ『女性しか使えない』と認識されていなかった。
だから沙良もどうでもいいやと考え、そのことを誰にも言わずに成長してきた。
知っていたのは、束と動かしたときにそばにいた千冬だけだ。
もちろん沙良は男である。
その沙良がこの『女性しか使えない』と認識された世界で、開発とテストパイロットを勤めたシークエストを世界に出したとしたら、沙良がどうなるかは誰の目にも明らかだった。
ここで、利益を最優先させるなら、ＩＳを公表するべきだっただろう。
沙良が、ＩＳを扱える男と知られること、それが広告版になる。
それが、沙良にどんな負担を与えることになっても、その利益は見過ごすことは出来ないほど大きいだろう。
しかし、この会社の社長は猛烈に孫バカだった。
世界に発表すべきだという首相にブチ切れて、首相宅まで殴りこみにいき、挙句の果てに経済の力を持ってして、首相の座から引き摺り下ろすという荒業を見せた。勿論、次の首相は発表に反対だと

いう者が選ばれた。
こうして、国の中で沙良という存在は大きく知られることになる。
性別は公表されていないが、国民の殆どが、ＩＳをエスパーニャにもたらした英雄として認識していた。
ここまで広まれば外国に広まってもおかしくはないのだが、その国民の口の堅さ、それに、どこかで篠ノ乃博士が絡んだのだろう。
他国に沙良の存在もばれる事はなく、シークエストも公表されぬまま、スペイン軍に支給されることとなる。
こうして、落ち着いた研究環境を手に入れた沙良は第三世代の開発に着手していた。

◆◇◆

沙良が、パソコンを弄りながら紅茶を飲んでいると、携帯が鳴り出す。
――この着信音は
案の定そこには姉さんの文字。
篠ノ乃束からの連絡である。
別に姉弟というわけでもない。沙良が束に色々教えを受けていた頃に、「お姉ちゃんと呼びなさい」と言われてから、ずっと姉さんで通してきたのが未だに残っているだけのことである。
「もしもし」
『はろー♪セラ元気してた？　あなたのお姉ちゃんの束さんだよー。束さんは元気モリモリ、イエイ！』

そのテンションの高さに沙良は顔を顰めてしまう。
ちなみにセラとは沙良の愛称である。

「姉さん、今度は何処にいるの？」

『オヨヨ……、セラが束さんをシカトするんだよ……』

「はいはい、僕は相変わらず元気ですよ、姉さんも元気で何よりです。で、今度は何処に身を潜めてるんですか？」

『ふっふっふ、そんなこと教えると思ってるのかい！？』

電話しながら、ひたすらにキーボードを叩き続ける。

「別に教えてくれなくてもいいです」

『えー、面白くな～い♪』

そして、お望みの結果が現れる。
それを見て、額に手を当てる。これは面倒くさくなった時の沙良の癖である。

「……そうですか、ノルウェーですか。また逃亡しにくい所に行きましたね」

『……セラ、ハックしたね？』

「何のことでしょう？」

『まぁセラは束さんの味方だから別にいいけどねー』

「で、またスペインの入国に手引きして欲しいと？」

『……たまに、セラが年を誤魔化してないか、疑わしくなるよ』

「まぁ、姉さんには、コアを頂いたりしてますから断るわけにはいかない。てのをわかって、僕に連絡を入れる姉さんほどではありませんよ」

電話越しに、楽しそうな笑い声が広がる。

その声を聞いて、あぁ、いつも通り元気だなぁとだけ思うのはどこかズレているのだろうか。

『ご想像の通り、マドリードまでお願いできるかな』

沙良は、メールで束に極秘暗号を使い、とある一文を送る。

それは、Ｓ・Ｑ社の沙良が統括している部門で使われている合言葉みたいなものである。

『ん？　海の王者たるオルカに誓って？　これは何だい？』

「明後日の午前四時から五時の間に、バルセロナの空港で降りてください。僕が一時間だけ空路を止めておきますから。降りた所に社員を向かわせますので、その合言葉を伝えてください。あとは社員に何とかしてもらうように言っておきます」

沙良は中学生とは思えないことを指示する。それは、それだけ沙良がスペインに必要とされているかがわかる。

『ううん、いつもすまないねぇ』

「そう思うなら、たまには顔を見せに来てくださいよ」

『もちろんだよ！！　今回は無理だけどまたいずれ顔を見せにいくよ♪』

「楽しみにしてますよ、姉さん」

『じゃね～、束さんもセラの第三世代機【オルカ】を楽しみにしてるよ♪』

「ちょ、なんでそれを知ってんの！？」

しかし、先に通信が切れてしまったため、沙良の叫びが束に届くことはなかった。

「……向こうもちゃっかりハッキングしてるじゃないか」

――おかしい、シークエストが完成してから、ハッキングに備えて、対策員を数人持ち回りで在住させていたはずなのだが……

一通りの流れを見ていた研究員たちは、沙良が振り向くとビクッとして身を硬くした。

その顔には笑顔が浮かんでいるが、目が明らかに笑ってない。

「ここ一週間のハック対策員って誰？」

その言葉に、研究員は、同期を庇おうと必死に言葉を重ねる。

「ほ、ほら、ハッキングされたといっても相手はあの篠ノ乃博士じゃないですか」

「そ、そうですよ。それを責めるなんて少し可哀相じゃないですか」

「セ、セラ。ほら、また好きって言ってたチェロス買って来てあげるから」

「ほら、ここにプリンがあるよ！？　所長が楽しみに取ってたやつだけど」

そこにたまたまロサが通りかかった。

「みんな集まってどうした？　おいちょっと待て、それは私の」

「「「「所長は黙っててください！！」」」」

研究員の必死な説得により、沙良はしぶしぶプリンに手を伸ばす。なんだかんだ言っても沙良も中学生である。好きなものが目の前に出てきたら、おいそれと欲望を封じてしまうことは難しい。

沙良がチビチビとプリンを食べ始めたのを見て、所長以外の研究員はホッと一息つく。

そのチビチビと食べる癖は小さい頃から変わらない。

研究員の安心した顔は、いつの間にか沙良を温かく見守る顔となっていた。

しかし、結局、ハック対策員は呼び出され、罰として束の手引きに駆り出されることとなった。束に発信機を付けてこい、と命令を下されることになった対策員は、涙目で同期に助けを求めたのはまた別のお話。

◆◇◆

「ロサ居る？」

そう言い、所長室を覗くと、そこには茶色の髪を後ろで結上げている二十台前半の女性がゆったりとコーヒーを飲んでいた。

「カルラさん」

「あら、セラ。所長なら会議でしばらく帰ってこないわよ？」

「なんとタイミングの悪い」

カルラは自分の横をポンポンと叩く。
ここに座れば合図だ。
これといって断る理由のない沙良はチョコンとそこに座る。
しかし、横に座ったはずが、いつの間にか膝に抱えられている。

「何で後ろから抱っこされてるのですか？」

「ちょっと待ってなさい。今、社長に自慢のメール送るから」

「おじいちゃんも頑張ってるんですから、あんまりいじめないであげてくださいね」

沙良は、ため息をつき。大人しくカルラの腕の中でじっとしている。

頭には、豊かな双丘が押し当てられているのだが、幼い頃から束に引っ付かれ、スペインに来てからは、同僚が全員年上の女性という環境で働いているのだ。そんなことでは全く動じなくなっていた。

「それで、ロサに何か用でもあったの？」

「ちょっと機密事項なんですけど、聞きたいですか？」

「私を誰だと思ってるの？　社長の右腕よ？」

「その右腕さんはこんなところで油売っててていいんですか？」

「もちろんまずいわ」

「……」

今、沙良は「おじいちゃんにメール送ってたよね」とか思いつつも、指摘するのが面倒くさくなったので何も言わないことにする。

「で、何があったの？」

本当は軽々しく喋っていいようなことではないのだが、ロサに言ったところで、その報告を受け取るのはカルラなので、大した問題でもない。

そしてここはスペインである。唯一、篠ノ乃束を追わない国である。そこで、先程の話をしても、誰も何も思わないだろう。

ましてや、研究所では束は沙良の姉として認識されているため、研究所の人間なら誰の耳に入っても大丈夫だろう。

「またあの兎さん連絡してきましてね。スペインまで逃げ切りたい

から手引きしてくれと」

兎さんとは束のことである。

沙良に会いに研究所に来たときに、その頭についたウサ耳から兎さんと研究所では呼ばれている。

「また？」

「またです」

「半年前にも来たばっかじゃない」

「それが、よりによってノルウェーに逃げちゃったから、東欧方面に逃げられなくなったんだって」

「それで、エスパーニャ経由でアメリカにピョンかしら？」

「そこまでは知らないですけどね」

カルラは考える素振りを見せ、携帯で社員のスケジュールを確認する。

胸が強く押し当てられる形となった沙良も、もう諦めたかのように何も言わない。

「出来れば、先週のハック対策員を連れてってもらえません？」

そこで、カルラはパタッと携帯を閉じ、恐る恐る聞いてくる。

「まさか……ハックされたの？」

「兎さんにですけどね」

ホッと胸を撫で下ろすカルラ。

それを背中に感じ、沙良は少し機嫌が悪くなる。

「姉さんだからってハックされていい訳ありません」

「それでも荷が重いのは確かじゃない。兎さんは沙良レベルじゃないと無理よ」

「それはわかってますよ。でも、もしミスがあった場合の事を考えると、一回、こういうことになるぞというのを理解させておくに越したことはないんです」

カルラは心の中で、先週のハック対策員に同情の念を送り、兎さん手引き作戦のメンバーにその名前を書き込むのであった。

沙良は用も言ったし、良いかなって思い、ソファーから腰を浮かす。

「もう行っちゃうの？」

「うん、そろそろシエスタだからね。さっきザイダがチェロス買ってくれるって言ってたから、一緒に行こうと思って」

「そう、時間に遅れないように気をつけてね」

「そんなこといって油断させて覆面で護衛つけてるくせに」

「あら、気付いてたの？」

「そりゃ、街の人にさらわれそうになるたびに、そろそろ仕事ですから、って出てこられたら誰でも気付くよ！」

「次からは気をつけるように言っておくわ」

沙良は違うと身振りで表現する。

「そうじゃなくて！　護衛を外してって言ってるの！」

「それは無理ね」

カルラはさもあっけらかんと言ったぐらいで肩をすくめる。

「なんで！？」

「あの孫バカの社長がそんなの許すわけないもの」

カルラはコーヒーを飲みながら、近くの雑誌を手に取る。

「でも、僕だって、専用機持ちだよ！？　襲われたって、襲ったほうが可哀相になるぐらいの戦力差があるのはカルラさんでも分かってるでしょ！？」

ペンダントの状態で待機しているシークエストを掴み、訴える

「ええ、分かってるわよ」

「じゃあ」

「それをあの孫バカの社長に納得させることが出来たら考えてあげ

る」

それは、つまり無理ということを表している。
沙良はプルプルと震えると、声を大にして訴える。

「そんなの、最初から行動する気がないのと一緒じゃないですか！」

「ええ、全く持ってその通りよ」

悪びれもせずコーヒーを飲み続けるカルラに沙良の怒りが頂点となる。

「もういい！　カルラの馬鹿！　ｔｏｎｔｉｔａ！　ｉｄｉｏｔａ！　ｎｅｃｉａ！　ｂｏｂａ！　大嫌い！！」

そう叫び走り去る沙良をひらひらと見送ったカルラは、沙良の足音が聞こえなくなるぐらいまで耳を澄ませてから、おもむろに手を叩いた。
すると、研究室から研究員がぞろぞろと入ってきた。
みな、思い思いに撮影機器を持っている。
皆の顔には、晴れやかな顔が浮かんでいる。中には鼻から赤い液体を垂らしている者までいるようだ。

「どう、撮れた？」

カルラの問いかけに皆が力強く頷く。

「もう、セラってば普段から可愛いのに、怒るとより一層可愛くなるから」

「それに、聞いた？　普段カルラさんって呼んでるのに、呼び捨てよ呼び捨て！」

「でも、膝の間に座るセラもかーわいー」

研究員は集まって、各自撮った写真やら動画を見せ合いっこしている。

「で、あんたらはこれのためだけに私に隠れてろと言ったわけかい」

「あ、所長」

「まったくあんたらは」

みんなが、「えへへ」と誤魔化し笑いを浮かべてるのを見てロサはため息を一つ吐く。

「セラも頑張ってるんだから、あんまりいじめないでやりな」

それは、ついさっき沙良がカルラに言ったこととまったく同じ。

Ｓ・Ｑ社のＩＳ開発部門は今日も平和であった。

第二話　研究所での一日（後書き）

んぁー
むわぁー

あ、「ｔｏｎｔｉｔａ！　ｉｄｉｏｔａ！　ｎｅｃｉａ！　ｂｏｂａ！」はスペイン語で、『馬鹿』とか『愚か者』って意味で、一般的な罵倒です。
馬鹿って連呼している姿をイメージしていただけたらいいのではないかと思います。

第三話　テストパイロット

沙良はダウンしていた。

なんせ先程の授業は、苦手なスペイン史だったのだ。人生の殆どを日本で暮らしていた沙良にとっては、全く分からないと言っても過言でもない。

そして、昨日はシークエストのテスト起動を行っていたため、疲れがたまっている。

「セラ？　大丈夫？」

「ああ、ソフィ。もうお手上げだよ。日本史なら得意なんだけど、どうしてもスペイン史はわからないよ」

「もう、普通は逆なんだけどね」

そい言い、ソフィアは笑う。

「誰か、スペイン史教えてくれないかなぁ」

「そ、それなら私「日本史教えてくれるならいいぜ」ちょっと、トーニョ！」

「やぁ、トーニョ。いつも通り元気そうだね。僕にもその元気を分けてくれよ」

アントーニョは沙良の前の席に座り、ニヤニヤと笑っている。

「ちょっと、トーニョ！　セラには私が教えるの！」

「どうしたソフィ？　そんなに必死になっちゃって？　もしかしてセラのことが」

「な、な、な、なに言ってんのよ!!　ただ、セラが困ってたから助けてあげようとしただけよ!!」

「じゃあ、俺が教えといてやるよ。俺のほうがスペイン史は成績良いもんな。ほら、セラ。これがスペイン史のノート。どうせ、寝てて取ってないんだろ？」

「御明察。僕がノート取るわけないよ」

「威張ってんんじゃねえよ」

「痛」

軽くデコピンされて、二人で笑い出す。

「ちょっと、ほったらかしにしないでよ！」

ソフィがトーニョに食い付くのを、沙良は、仲が良いなぁといった目で見ている。

「おいおい、良いのか？　確実にセラが勘違いしてるぞ？」

「え？　いや、セラ？」

「二人は相変わらず仲がいいね」

「ち、違」

「二人のジャマにならないようにちょっと席を外そうか？」

「待って！　違う。セラは勘違いしてるよ！？」

明らかな好意を見せられても全く気付く素振りの見せない沙良を見て、トーニョは自分の幼馴染に心から同情するのであった。

◆◇◆

沙良は、世界で始めてＩＳを動かした、男性である。

その事実は世界に伏せられているが、如何せんエスパーニャでは活躍しすぎた。

スペイン第二世代機【シークエスト】

その開発とテストパイロットに携わっている沙良の存在は、シークエストを発表していない外国とは違い、国内では隠し通せるわけがなかった。

まさしく英雄である。

後進国であるスペインに、いち早く第二世代機をもたらした立役者。

沙良が、Ｓ・Ｑ社に出入りしている事を多くの人が知っている。

それは、沙良が通う学校でも同じことだ。

沙良自身は気付かれていないと思っているが、殆どの生徒が気付いている。

Ｓ・Ｑ社のテストパイロットに沙良が関わっているであろうということを。

沙良は、その仕事の性質上、学校を休まなければいけない時が多々ある。
そこで、沙良は信頼できる友人にのみ、自分がＩＳを研究していると教えてある。
だから、沙良に好意を持つソフィアがこういうことを言い出してもおかしくはない。

「私、学校を辞める。そして、十五歳になったら日本に、ＩＳ学園に行くわ」

沙良は飲んでいた紅茶を噴出してしまい、目の前のアントーニョに迷惑そうな顔をされる。
そのときに自分のお弁当に少し、紅茶がかかってしまったが、今はそんなこと言っている場合じゃない。

「ソフィ、本気で言ってるの？」

「もちろん本気よ。これを見て」

渡されたのは、先日行われたＩＳ適性テストの結果だろう。
そこには、Ａの文字が。

「私、ＩＳを動かせると判明したわ」

沙良は、驚きを隠せずにソフィアの顔を見つめる。
アントーニョは予め話を聞いていたのだろう。驚いている素振りが全く見えない。

「一週間後、シークエストが世界に発表されるのよね？」

シークエストはついに世界にその姿を見せるときが来た。
それは、世界が、既に第三世代機の研究に乗り出していて、後進国であるスペインが第二世代機を発表してもおかしくないと政府が判断したためである。
もちろん、沙良の存在は隠されている。
その開発代表者は所長であるロサの名前になり、テストパイロットは架空の人物で発表されることとなっている。

「そうだね。一週間後の世界会議でエスパーニャは開発戦争に足を踏み入れることになる」

それは沙良にとって、より世界の裏に関わっていくこととなる。

「既に、ＩＳ学園には先進国が、そのＩＳを送り込んで競い合っているんでしょ？　ならエスパーニャも負けていられない。私が、セラの機体の実力を、エスパーニャの技術力を証明して見せる」

沙良はその真摯な瞳に何も言えなくなる。

「私は、一週間後、この学校を去り、訓練を受ける。そして、代表候補生になって専用機を手に入れて、一年後にＩＳ学園に行くわ」

アントーニョを見ると、首を横に振る。
止めても無駄だ。
そう言っているのだろう。
その真っ直ぐすぎる思いに、沙良はある決意を固める。

「代表候補生になるための条件は知ってるの？」

「政府による訓練施設に入り、ある一定の成績を収めることよね？」

「そう。じゃあ、その訓練施設に入る条件も知ってるよね？」

「……試験を受けて合格したら」

「それは、スペインでは行われていないって知ってるでしょ？　なんせ、世界から見たらまだＩＳの開発が終わってないと思われてるんだから」

「……現在の代表か代表候補生に推薦してもらうか、企業などにテストパイロットとして配属され、ある一定の結果を出せたら」

「ここで、聞くけど、当てはあるの？」

「う、」

「もしかして、これから代表と代表候補生に接触して、お願いするなんて、非効率な方法を取ろうとしてたんじゃないだろうね？」

「……」

目が泳ぎだしたソフィアに、今まで黙っていたアントーニョがため息を吐きながら話しかける。

「だから、もう少し計画を煮詰めてから話をしたほうが良いと言っただろ」

「だって……」

そのショボンと落ち込むソフィアに、沙良は真剣に問いかける。

「ソフィ、いやソフィア」

「な、なに？」

急に名前で呼ばれたことで、背筋をピンと伸ばしたソフィアに、沙良はゆっくりと話し出す。

「ただ、ＩＳ乗りとしてではなくて、代表候補生となり、あろうことか専用機を手に入れる。それはこの世界の裏の部分に少なからず、触れていくことになるとは分かってるね」

ソフィアは力強く頷く。

「代表候補生は、その国に何かがあった場合、そのＩＳを持ってして事態に当たらないといけない。それは、自分の命に関わることにもなる。ソフィアのその意志は、命を賭ける程の価値があるんだね？」

ソフィアは迷うことなく頷く。

「そう、決意は本物なんだね。……で、その意志は、僕のため？」

そう沙良が問いかけるとソフィアは顔を真っ赤にして頷いた。

「ソフィアのその気持ちは弟のような存在として？　友達として？　それともまた別の気持ちとして？」

沙良は自分より一つだけ年上のソフィアにそう聞いた。

ソフィアは言いづらそうにもじもじしている。

「その、えっと……全部」

その答えを聞いて、沙良は決意を確かなものにした。

このときにソフィアは別な気持ちもあるといった意味で、全部と言ったのだが、沙良はそのことには全く気付いていなかった。

その事に気づいたアントーニョは、こっそりとため息を吐いていた。

「分かった。もうこれ以上聞かない。その決意が本物なら、今から僕についてきて」

そういい、沙良は広げていた弁当を纏めて、立ち上がる。

「トーニョ、今日は早退するよ。先生に伝えといて。大丈夫、ソフィに学校は辞めさせない」

沙良はソフィアが準備出来たのを見て、歩き出す。

――ここからが大変だ

沙良は研究所へと向かうのであった。

◆◇◆

それは深い青。

まるで深海をそのまま表したような青。

それを沙良は見に纏う。

第二世代型ＩＳシークエスト

それを身に纏い、沙良は待ち人を待つ。

「すいません、遅れまし……セラ！？」

同じくシークエストを纏ったソフィアがそこには居た。

「どうして、セラが？」

「生憎、人手が足りなくてテストパイロットは僕しかいないんだ」

「やっぱり噂は本当だったんだね」

それを聞いて沙良は眉を顰める。

「そんな噂が立っていたのかぁ」

「気付いてなかったのはセラだけじゃないかな？」

額に手を当てる沙良は、問題を先送りすることにした。

「そんなことよりも、ソフィがここに居る意味は分かってるよね」

ソフィアはゆっくりと頷く。

「ソフィ、君には一週間後の発表までに、S・Q社のテストパイロットとしておかしくないレベルまで成長してもらう。そして、シークエストのテストパイロットとして僕の、影武者になってもらう」

そう、それは架空の人物だと怪しまれてしまうと前々から言われていた、今回の発表に対しての打開策だ。

代表候補生になりたい。その気持ちが本物なら、この道を通るのが一番の近道だろう。
それがどんなに険しくとも。

「三日以内に戦闘が行えるレベルまでは達してもらう。安心して。このテスト室にはエネルギーピットがある。いくらエネルギーが切れても大丈夫だから、出来るようになるまでやってもらうよ」

ソフィアの額からたらりと汗が垂れるが、そんなこと誰も見てはいない。

「今日は基礎的動作から、空中起動までを『完璧』に終わらせて。出来なかったら出来るまで続けさせるから、本気でやってね」

こうして、ソフィアの地獄の訓練が始まった。

◆◇◆

死ぬ。
このままだと間違いなく死んでしまう。
ソフィアは張られ続ける弾幕にそう思った。

「無理無理無理無理!!こんなの対処できないよ!」

無情にもその弾幕はソフィアのシールドエネルギーを削っていく。

「それをどうにかしないと訓練にならないでしょ」

シールドで捌こうにもその弾幕が厚すぎる。
最初は弾切れまで、様子を見ようと思ってたけど、今では逃げることに必死だ。
よくよく考えると、あのセラが弾切れを起こすはずがない。
今でも片手で余裕そうにアサルトマシンガンを撃ち続ける。
こうやってＩＳにのってみて初めて分かる。セラは天才だ。
あんな、自分の身体の一部みたいに動かすなんて、私には無理だ。
前に、そのことをボソッとザイダさんに言ったら、「あの子は天才じゃないわ。ただ、努力の質と量が他の人より高かっただけよ」と言われたことがある。
あれはどう意味だったんだろう。
いけない。いらないことを考えていると、刻一刻とシールドエネルギーが削られるだけだ。
何とかしないと。

「瞬間加速！」

ソフィアは急な加速により、弾幕から抜け出そうと試みる。
しかし、抜け出した先には、アサルトライフルを両手に構えたセラが見えた。

「動きが大きい！」

抜け出したと思ったら、新たな弾幕を張られ、シールドエネルギーが一桁になる。
なんで、逃げ出した先に待ち構えてるのよ！？

「ちょ、ちょっと待って！！」

そしてあっけなくシールドエネルギーがゼロになる。

『そこまで、セラもソフィもピットに戻ってください』

「はぁ、了解」

「はい」

今日もダメだったかぁ。

訓練を始めて四日目。

私は、戦闘を行えるようになったけど、未だにセラに手も足も出なかった。

「お疲れ様、ソフィ」

「ザイダさん、お疲れ様です」

「今日も残念だったわね」

「ううん、道のりは遠いです……」

「そんなソフィに朗報です」

なんだろう、やけにザイダさんが輝いている。

「セラコレクションの新作が届きました」

それを聞いたとたん、私はザイダさんの手を握っていた。

「待ってましたよ！！」

「ふっふっふ、しかも今回は中々レベルが高いものがチョイスされているよ」

そういって、ザイダさんは一枚の写真を見せてくれる。

ブハッ

「……」

「どう？　最高の写真じゃない？」

鼻血を抑えながらもコクコクと頷く。

な、なんて可愛さだ。

反則過ぎる！！

渡された写真には、恥ずかしそうにウサ耳をつけている沙良の姿が写っていた。

これは、ずっと眺めていても飽きない！

しかし、ザイダさんはひょいと写真を取り上げてしまう。

あぁ、私の癒しが……

「これはね、あの兎さ……伝わらないか、篠ノ乃博士が来られたときに、こっそりと盗撮したものよ。これはその時に残った唯一の一枚。ふふふ、あの時は凄かったわ。まさか研究所が血で染まることになるとはね」

もちろん鼻血である。

「この写真も含まれたセラコレクション、欲しい？」

「もちろんです！」

「それじゃあ、今回の条件……どうしようかしら。そうね、今やってる戦闘訓練で、セラのシールドを１１５削れたらあげてもいいわ」

「……分かりました」

「分かりましたってそんな嫌そうに言わないの。セラは今まで戦闘訓練は積んでないんだからそれぐらい削れないと代表にはなれないわよ？」

百十五かぁ。一番威力の高い装備で５０削れたらいいほうだ。つまり最低でも三発、確実性を求めるなら四、五発当てなければならない。一撃を当てるだけで精一杯だったのに、大丈夫かな。

いや、やるしかない！

私の癒しのために！

「うおー！　やるぞー！」

「はいはい、その前にシャワー浴びて、着替えていなさい。学校に遅れるわよ？」

「しまった」

もうそんな時間か。

「ほら、セラを待たしたくなかったら、急ぎなさい」

「はい！」

こうして、早朝訓練を終えて、いつも通りに学校へ通う。

帰ったら早速訓練しなくちゃ。
頭の中ではウサ耳を付けたセラがピョンピョン跳ねている。

「ふふふ、ふっふっふ」

そして、夜の訓練で、いつもより気迫の篭った攻めを続けたソフィは、無事に、セラコレクションを手に入れることに成功したのである。

第三話　テストパイロット（後書き）

今回は完璧なるオリジナルとなりました。
早く原作キャラ出さないとなぁ

第四話　始動（前書き）

ようやく動きが出てきました

第四話　始動

纏うは白。
それに黒と蒼のラインが刻まれている。
胸には「Ｄｅｌｆｉｎ」と刻まれている。

「Ｅｌ　ｅｓｃｕｄｏ　ｄｅｌ　ｍａｒ！」

沙良は第三世代試作機、シークエスト【ドルフィン】のテストを行っていた。
今は、そのドルフィンの代名詞とも言える、装備を展開しようとしている。

『出力を下げてください。搭乗者への、危険段階まで迫っています』

急に、沙良が纏う白い装甲が、その輝きを失ってしまう。

『具現維持限界（リミット・ダウン）です』

「またか」

『一回ピットに戻ってください』

沙良はピットに戻り、ドルフィンを待機状態へと戻す。

「問題はイメージインターフェイスかな」

先程の、テストを思い出し、頭を掻く。
ドルフィンのイメージインターフェイスには、もう一つの第三世

代試作機、シークエスト【オルカ】のイメージインターフェイスの技術をそのまま流用したのだが、如何せんエネルギー効率が悪すぎる。やはり、同じシークエストだからといって、同じ技術は通用しないのか。

「やっぱ相性とかもあるのかな」

オルカは全距離攻撃型として設計されている。

それに対して、ドルフィンはどちらかと言えば防御に重点を置いた作りとなっている。

攻撃型のオルカのインターフェイスを、ドルフィンが受け入れられなかったのだろうか。

「設計しなおそうか」

沙良はまだ中等教育三年生だ。日本なら高校への受験やらで忙しいが、ここはエスパーニャ。日本と違い、中等教育が三年ではないのだ。まだまだ、時間に余裕がある。

それに、ドルフィンは沙良と相性が悪い。

しかし、テスターが沙良しかいないため、効率よくデータを集めることが出来ないのだ。

――いつでも問題は人手不足か……

『そのまま、オルカのテストに入る。整備はドルフィンを回収、セラはそのままオルカを付け直して』

「了解」

沙良は首から白いチョーカーを外すと、それを整備員に渡す。

整備員がピットから出たのを確認し、沙良はピットの出口に近づ

く。

そして、残った黒いチョーカーに触れ、瞳を閉じる。

目を開けたらそこには黒い装甲に包まれた自分の体がある。

第三世代試作機、シークエスト【オルカ】である。

ドルフィンとは対になるような、黒。

それに、白と蒼のラインが刻まれている。

胸には、同じく『Ｏｒｃａ』の文字。

沙良の専用機となる予定の機体である。

「オルカ、テストを開始します」

『オルカのテストを始めます』

沙良は、上空に躍り出ると、そのまま指示を待つ。

『今回は機能向上させたハイパーセンサーのデータを取得します。

今からランダムで出現する的全部を撃ち抜いてください』

「りょーかい」

『始め』

ハイパーセンサーにより、感覚が鋭敏となる。

自分の周りの世界が、自らの手に収まったような錯覚すら得る。

それは五感を最大限に引き出し、ハイパーセンサー自体が新しい感覚として機能する。

沙良は、アサルトライフルを呼び出し、的が出現するのを待つ。

その時間はほんの一瞬だった。的が現れたとほぼ同時に、撃ち抜

かれていく。
的を撃ち抜く沙良の姿はまるで踊っているかのようだった。

◆◇◆

「お疲れ様」

カルラさんはいつの間に来てたのか、僕にスポーツドリンクを手渡してくれる。

「ありがとうございます」

それを早速飲むと、心地よい冷たさが身体に染み渡る。
ふぅ、生き返るー。

「結構長い時間やって疲れたでしょう。私は気にせずに、休んでていいのよ？」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

ソファーに座ると、溜まっていたものを押し出すように、肺から空気を追い出す。
あ、ＩＳスーツ着たまんまで来ちゃった。

「カルラさん、ちょっと着替えてきますね」

「あ、そうね。着替え終わったら声をかけてもらえるかしら？」

ん？　どうしたんだろう？
今日のカルラさんは少し落ち着きがないような気がする。
「分かりました。ちょっとだけ待っててください」
まぁいいか。
とりあえず着替えよう。ふわぁ、疲れたぁ。

どうしよう。
カルラの心情はこの一言に尽きた。
今まで、様々なことがあったけど、持ち前の判断力で、何とか乗り越えてきた。
しかし、この予想もしてなかったニュースにカルラは胃が痛む思いをしていた。

『世界で唯一ＩＳを動かせる男子、織斑一夏』

ついに現れてしまったのだ、世界で二人目の男性操縦者が。
世界で唯一といわれているが、一部の人間は知っている。
もう一人、男性操縦者がいる事を。

サラ・ルイス・フカミ。日本名、深水沙良。
日本とスペインのクォーター。
その４分の３が日本人のため、彼は日本国籍と、スペイン国籍の両方を持っている。

シークエストを発表した際に、欧州連合の上層部には、沙良の存在は伝わっている。それが、世界に伝わってないのは、公表することによって世界の力関係が崩れることを危惧したため。

そして、沙良を実験体とし、日本やアメリカに少しでもリードするため。しかし、スペインは必死に沙良を守った。そのせいで国力が下がろうとも、沙良を実験体から救い出した。

沙良はギリギリの境界で守られていたのだ。

しかし現れてしまった。その境界を崩す人間が。

拙い。これは拙いことになった。

カルラは必死に考える。

今では、沙良はスペインにとっていなくてはならない存在。

このニュースのせいで、沙良の存在を世界に隠し通すのが困難になってしまった。

隠し通せて、二ヶ月だろう。

隠し通せないなら、むしろこちらから公表してしまったほうが都合がいい。

それに、沙良がＩＳを操縦できると公表するのは、今が最もいい時期。

理由も、男性操縦者が発見されたので、検査してみたら適性がありました、と簡単に誤魔化すことができる。

なにより、興味がもう一人のほうに偏るであろうから、今、彼が注目を浴びて、関心を集めている横で、その影に隠れることが出来る。

彼はかの有名なブリュンヒルデの弟。世間は何もない沙良より、織斑一夏に話題を集めるだろう。

そして、織斑一夏は沙良の幼馴染でもある。

おそらくは、一緒に行動することとなり、面倒を見てくれるだろう。

しかし、ここで沙良のことを公表してしまうと、沙良のＩＳの研究を全て隠し通すことは出来なくなる。

確実に、情報の提示が求められるだろう。

わざわざ実戦訓練をせずに研究を続けてきた意味がなくなってしまう。

まだ、第三世代機が完成に至っていないこの時期に、それは大きな痛手となる。

それに、ブリュンヒルデの弟と違い、世界では名のない沙良は世界から実験体としてその身を引き渡せと言われる可能性もある。欧州連合も、沙良の身を守るとは考えにくい。味方に付く国など我がエスパーニャだけではないだろうか。

キリキリと痛む胃を抑えて、ひたすら悩み続けるカルラ。そこに予想もしていなかったところから助けの手が差し伸べられる。

ＰＰＰＰ……

「はい、こちらカルラ」

『あ、カルラさん、ご無沙汰してます、ソフィアです』

それは日本のＩＳ学園にいる、ソフィアだった。

「あら、お久しぶりね、どうかしたの？」

『いえ、今、ニュースを見てセラのことが気になったので』

「そう、貴女も分かってると思うけど、どうしようもないわ。あの子の身の危険がかかっているのに、おいそれと発表するわけには…

…」

『カルラさん、私に良い考えがあるんですけど』

「何かしら」

『セラをＩＳ学園に入れちゃえばいいじゃないですか』

「どういうこと？」

『ＩＳ学園特記事項です。本学園に所属する生徒はありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。またこれらからの干渉を受けることもない。つまりは、学園に居れば三年間はセラの身柄は保障されるってわけです。その間に何かしらの方法を考えればいいのではないかと』

◆◇◆

「というわけで、セラはＩＳ学園に入学することになったの」

「……」

僕はポカンと口をあけて、言われた事を頭で反芻する。

ＩＳ学園に？　僕が？　それよりもなんで一夏がＩＳを動かしてるの？

いろいろ考えて頭が爆発しそうだ。

「サラ・ルイスの存在を世界で二番目の男性操縦者として世界に発表することが決定したわ。政府にも社長が訴えるはず」

「い、いや、日本に行けるのは嬉しいんだけど」

「だけど？」

「オルカもドルフィンもまだ開発段階だし、そんなの政府が簡単にＯＫを出すとは思えないんだけど。だから、僕が抜けるわけには……」

カルラさんはモニターのスイッチを入れる。

『――ということで、スペイン政府は、サラ・ルイスを男性操縦者と認め、織斑一夏と共にＩＳ学園に入学を認めると決定した。サラ・ルイスには、スペイン代表候補生として、スペイン政府から第二世代機シークエストのカスタム機が専用機が渡される』

国内ニュースがありえないことを言った。

「ごめん、間違えたわ。決まったんじゃなくて、もう手は回しちゃったの」

え、え、え？

「あの、孫バカの社長を舐めちゃダメよ？　貴方のためなら手段は問わないんだから」

「えええぇぇぇぇぇぇ！？」

聞いてないよ！？
てかそんな大事なこと、本人に相談せずに決めちゃダメでしょ！！

「言ったら、絶対に行かないって言うでしょ？」

そりゃそうだけど……
てか、心の声を読まないでよ！！

「というわけで、セラ。貴方に拒否権はないの。むしろ、女として送り込もうとしなかっただけ感謝して欲しいわ」

そんな話まで出てたのか。
いや、でも

「オルカと、ドルフィンはどうするの？」

今まで研究してきたものが、ここで足踏みを食らってしまうのは、僕としても、本意ではない。

「もちろん、研究は続けるわ。ドルフィンは流石に無理だけど、オルカなら持ち出しても構わないって言われているから、ＩＳ学園で実働データを取ってきたらいいじゃない。向こうにはいろんな国のＩＳが集まっているのだから、いいデータが取れるでしょう。それにね、元々、セラの専用機として開発がされてきたんだから遠慮なんかする必要ないわ」

なるほど、持ち出してもいいのか。
なら、向こうでデータを取りながらパーツを送ってもらえれば何とかなるかも。
ん、いや、ちょっと待って。

「でも、さっき、僕にシークエストのカスタム機が専用機として送られるって言ってなかった？」

「ええ、そうよ」

「それなのにオルカも専用機として持っていくの？」

「だって、まだ完成してないんでしょ？」

それはそうだけど、別にＩＳ学園にも訓練機ぐらいはあるだろうし、オルカが完成するまでは、別に専用機なくてもいいと思うけどな。ちょっと過保護すぎないかな？

「今、別に専用機なんてなくてもいいと思ったわね？」

う、何でばれたんだろう。

「わかってる？　セラは世界で二人だけの男性操縦者。おそらくは、いろんな国から狙われることになる。そんな所に、専用機も持たないで放り出すなんて出来ないわ。ただでさえ守られる立場なの分かってるの？　貴方は、弱いの」

「ＩＳだって、剣だってあるよ？」

「それは武力としての強さ。立場としての強さと考えると、エスパーニャから出た時点で皆無よ？」

うぅそんなに言わなくてもいいのに。

弱いのは自覚してるけどさ、心に大きな傷を負いそうだよ……

「それに、セラはエスパーニャ国籍と日本国籍の二つを持っているわよね。のこのこと、専用機も持たずに日本に行って見なさい。オルカが完成するまで、日本政府に専用機を押し付けられて、日本に取り組まれてしまうわ」

「でも、僕はＥｓｐａｎｏｌだよ？」

「私たちは、分かってるわ。でも、他国がそう思うとは限らない。ただでさえ、貴方の半分以上は日本の血なの。シークエストカスタムは、ただの専用機として渡しているのではないの。セラに余計な虫が寄ってこないように、付け込まれる隙を無くすために渡してるの。わかった？」

「でも、ＩＳを二台も持つなんて、前代未聞だよ？」

「でも、やってはいけないなんて、誰も決めてはいないわ。ただ、出来なかっただけ。でもエスパーニャは違う。元々、兎さんがセラに渡したコアを政府が借りていただけ。所有物が帰ってきただけなんだから」

そうやって、おじいちゃんたちは政府を脅したんだろうなぁ。

真剣なカルラさんに、僕はしぶしぶ頷くしかなかった。

でも、日本に、その血を引いた僕が帰ると言うことは、国民はどう思うのだろうか。

向こうにも国籍を持っているわけだし、言ってしまえば向こうも故郷だ。年に二回は帰っているほどに。

すると、カルラさんは優しく微笑んで、頭を撫でてくれる。

「大丈夫よ。ここはエスパーニャ。日本に帰ってしまうからといって英雄を見捨てるような国じゃないわ」

僕はこくりと頷く。

「入学は一夏君に合わせると言ってあるわ。それまで、あと一週間ちょっとしかないの。準備しないといけないことはたくさんあるんじゃない？」

「うん、そうだね。シークエストのカスタムも調節しなきゃ」

「ほら、ならもう働かなくちゃね。これから忙しくなるわよ？」

「うん！」

よし、研究室に戻らなきゃ。

することは、山ほどあるんだ。

一週間。

短いけど、出来ることはやらないとね。

第四話　始動（後書き）

作者は、部活の夏合宿のため、しばし更新が止まります。
うぅ、パソコンのない環境なんて、地獄としか思えないよ

第五話　いざ、ＩＳ学園へ（前書き）

合宿疲れたよ……
これからまた頑張らなきゃ

第五話　いざ、ＩＳ学園へ

「……出来た」

目の前にはパンパンにふくれたスポーツバッグが二つ。

そして、日本にいるときからの愛刀、『水切』が竹刀袋に入っている。

その横には、長さが目立つ、薙刀が薙刀袋に収まっている。

薙刀に「号」をつける場合は女性の名をつけるのが慣しであるため、沙良の薙刀にも女性の名が付いている。

『茜』それが沙良の愛刀である。

篠ノ乃道場にて教わった剣術。それをエスパーニャに来ても大切にし続けた。

その教わった剣術は、一夏や箒が学んでいたものとは違う。使用するのは薙刀。そして太刀、それも大太刀である。その長さは三尺をゆうに超える。

それは元々は神社等への奉納の舞として生まれたが、時代の流れにより、今は古武術として伝わったと聞いている。

「よし、忘れ物はないかな」

ちゃんと、忘れ物がないかチェック表で確認する。

最初に、チェック表を渡されたときは、何処まで過保護なんだよ、と思ったが、使ってみると意外と便利だった。

「うん、大丈夫だね」

そろそろ出発しないと間に合わなくなる。

明日は、ＩＳ学園の入学式。

しかし、授業にギリギリ間に合うかどうかの強行軍になってしまったので、入学式には間に合わないだろう。

「カルラさん準備できたよー」

所長室でロサと喋っているはずのカルラに声をかける。

「荷物持ってこっちに来なさい」

声だけが返ってくる。

荷物を肩にかけ、愛刀を担ぎ所長室に入ると、そこには研究員が全員そろっていた。

その一人ひとりが一輪の花を持っている。

「みんな……行って来ます」

一人一人に抱きつき、頬にキスするとみんな泣きそうな顔で花を渡し、行ってらっしゃいと言ってくれた。

「おいおい、最後の別れじゃないんだ。もう少し、晴れやかに送り出してやらないか」

ロサは、沙良の花を纏めて花束にしてくれる。

しかし、所長らしいことを言っているのだが、その目が潤んでいるのは誰の目にも明らかだった。

「絶対に……絶対に帰ってきます」

皆が思い思いに別れの挨拶をしてくれる。

「じゃあ行ってきます」

後ろ髪が引かれる思いで、所長室を出ると、わざわざ席を外してくれていたのか、カルラがタバコを吸っていた。
沙良は苦笑いを浮かべて近づく。

「社内は禁煙ですよ」

「そう注意されるのも、これで最後なのかな」

笑いながらカルラはタバコの火を消した。その姿は哀愁が漂っている。

「じゃあ、行こうか」

そういい、向かう場所は、社内に設置されている滑走路。
そこには、あきらかに個人で使う用途ではない、旅客機がたたずんでいた。

「……」

「どうしたのセラ？」

「いえ、今更だったと思って」

本当に、何処まで過保護なんだろう。
沙良は呆れて何も言えなくなる。
そして飛行機に乗り込むと大きなモニターに気がつく。
そのモニターには日本のニュースが流れている。

『スペインで、第二の男性操縦者発見』

「ん？　日本では僕の名前は出ていないの？」

飛行機の中、先程、日本で流れたニュースを見て、沙良は思ったことを口にする。

「ええ、『スペインで見つかった少年Ｒ』として発表されたわ」

「でもイニシャルってエスパーニャではルイスを名乗ってるからＲだけど、日本なら深水と名乗るからＨなんだよね」

「エスパーニャ主体でいいじゃないの」

「それもそうだね」

それにしても

「一夏、驚くだろうなぁ」

◆◇◆

「空港にＩＳ学園の教諭が迎えに来ているそうだから、後はその人に頼りなさい」

長いフライトを終えて、無事に日本に着いた沙良は、カルラと別れを交わしていた。

「うん、ありがとうカルラさん。行ってきます」

沙良は、研究所の職員と同じように、カルラに抱きつき、頬にキスをする。

カルラはキスを頬に返し、沙良の首のチョーカーにふれる。

「完成するまで、オルカは戦闘に使っちゃダメよ？　セラの身体に負担が大きすぎる。オルカを使うときは、……死なないように」

「わかってる。僕が作ったんだから。だから安心して？　カルラさん、ここ最近寝てないんでしょ？　僕は大丈夫だから。ね？」

「もう……セラは最後まで人のことばかりね。帰ってきたら覚悟しなさい。職員全員からの頬擦りは免れないわ」

「あはは、それは覚悟しときますよ」

沙良は、荷物を台車にのせ、愛刀を右脇に挟む。

これ以上ここに居たら泣いてしまいそうだ。

沙良はカルラに背を向け、顔を上に向けることで涙を堪える。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

沙良の肩が震えているのに気付いたカルラは、それだけ伝えると、沙良の背中を見つめ続ける。

沙良の姿は空港に消えていった。

◆◇◆

「迎えに来てるといわれても、どんな人とか聞いてないんだけど」

落ち着き、涙を拭った沙良は、エントランスで、辺りをキョロキョロと見渡す。

すると、見覚えのある人が近づいてきた。

女性にしては背が高く、よくスーツが似合っている。

「千冬姉！」

それは、大切な家族である千冬であった。

「遅いぞ、沙良」

沙良は、文句を言う千冬に抱きつき、頬にキスをする。

千冬も呆気に取られたようだが、沙良の挨拶を受け止める。

「久しぶり、千冬姉！　ドイツで会った以来だね！」

「お前も変わらないな。特にその抱きつく癖だ。私や一夏には構わないが、ここは日本だ。スペインと同じように抱きつくんじゃないぞ？」

沙良はよく分かってないのか「なんで？」という顔をしているが、もう一度言うと、コクコクと頷いた。

「それでは、行くか。もう授業は始まってしまっている。途中から入るしかないだろう」

「新入生なのに転校生みたいだね」

「そうだな」

千冬は、軽く笑い、ふと思い出したように言った。

「沙良、分かっているとは思うが、私は教諭だ。学校では先生と呼べ」

「分かりました。千冬先生」

「織斑先生だ」

沙良の頭に拳骨が落とされる。

「いったぁ！！」

「学校で同じことをされたくなかったら気をつけるんだな」

「……はーい」

沙良は、重たい荷物を持ちながら千冬の後に付いていく。

しかし、荷物が多い上に、愛刀を脇に抱えてる状態で早く歩けるわけがない。

「千冬姉」

「却下だ」

「まだ何も言ってないのに」

「言わなくてもわかる」

「じゃあ持ってよ」

「そんぐらい、持てなくてどうする」

沙良は、考える素振りを見せて、笑顔を作り爆弾を落とした。

「学園のスポンサー打ち切っちゃおうかなぁ」

「っ！？」

「せっかく僕がお願いしてＳ・Ｑ社にスポンサーになってもらったって言うのに、ここの教諭はスポンサー先の人間に対してそういう態度しか取れないんだ。へー。ふーん」

沙良がこれまでにない笑顔で言うと、千冬は怒りを堪えているのか、拳をプルプル震わせている。

「頭の言い織斑教諭なら分かるよね？　いくらその名が有名だからといって、学園ではただの公務員だもんね」

千冬は、沙良に向けて片手を差し出す。

沙良はとてもいい笑顔で千冬にスポーツバッグを渡した。

「向こうに行ってから、要らないことを覚えてきたな」

そんな皮肉に、沙良は肩をすかして答える。

「それが必要な環境に追い込まれてたんだよ」

千冬は、沙良の特別な環境についてある程度は知っているため、顔を顰めてしまう。

実験体として身柄を拘束されそうになったことも。

その環境に自らが追い込んだことも。

「すまない」

「謝らないでよ」

沙良は何でもない事のように笑う

「しかし、沙良を平凡から遠ざけたのは紛れもなく、私と束だ。沙良が許しても、私は私を許せない」

千冬は、辛そうに俯いてしまう。

沙良は、その千冬に笑いかける。

「ねえ、千冬姉。僕、笑えてるでしょ？」

言われた意味が分からなかったのか、少し呆けている千冬に、もう一度笑いかける。

「あ、ああ、笑えている」

「うん、僕は今は笑えてるんだ。だから大丈夫だよ？」

千冬は、沙良の言いたいことが伝わったのか、その表情を変える。

「しかし、それでは……」

その、千冬を見て、沙良は言葉を紡ぐ。

「じゃあさ、こうしよう。過去のことはどうしようも出来ないじゃない？　だから、千冬姉は僕の未来を、笑って過ごせるようにしてよ」

それは簡単なことではない。

これから先、沙良には様々な企業から身柄の拘束やデータの提供を求められるだろう。

誘拐などがあっても全くおかしくない。

今では、一夏に注目が向いているが、それも時間が経てば沙良の、その徳逸した技術に注目が集まるだろう。

学園にいる三年間も安全とは言いきれない。その三年が終わればもっと危険が増えるのは目に見えている

それをこれから先、守り続けていくのは困難だろう。

それを分かっているからこそ、千冬の表情は柔らかくなる。

「それが贖罪と言うわけか」

「どう受け取ってもらっても結構だよ？」

千冬は、内心感謝していた。

罪悪感に押しつぶされないように罪を与えてくれたことを。

「お前も、一夏も、私の家族だ。家族ぐらい守ってやるさ」

沙良が横から見た千冬の顔は、とても晴れやかだった。

第五話　いざ、ＩＳ学園へ（後書き）

次はようやく学園に入学します。
入るまでが長くて申し訳ない。

第六話　幼馴染との再会

沙良は一人で歩いていた。
千冬は授業があるため学園に付いた時点で別れている。
沙良も荷物を持ったまま教室に入るわけには行かなかったので、荷物を預けに学生寮まで来たわけである。
千冬には荷物を置いたら一年一組の教室に来るようにといわれているので、今は廊下を歩いている。
その女性しかいない特有の雰囲気は、研究所を思い出す。

「うぅ、早速帰りたくなってきたよ」

そうこう考えているうちに、目的の教室にたどり着く。
一組の文字を確認し、ノックしようと拳を握ると、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

『全部分かりません』

それは、男の声。
ＩＳ学園には男は二人しかいない。
一夏である。

『……織斑、参考書は読んだのか？』

その威圧感のある声は千冬だろう。

『えっと、古い電話帳と間違えて捨てました』

一夏が言うと同時に何かが硬いもので叩かれた音がする。

『必読だと書いてあっただろうが、馬鹿者が』

『……すみません』

『後で、再発行してやる。一週間以内で覚えろ』

『いや、一週間であの厚さは……』

「えっと……入りにくいんだけど」

沙良は、肩まで持ち上げた手を、ノックする形で止めたまま、入るタイミングを見計らっていた。

『ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ』

場が一度落ち着いたみたいなので、ノックする。

すると、ドアに近づく気配を感じる。

開かれたドアの先には千冬が出席簿片手に立っていた。

「よし、来たな。一度場を整えるから、呼んだら入って来い」

「分かりました」

もう一度ドアが閉められ、千冬が声を張り上げるのが聞こえる。

『たった今、そこの空席に座る生徒が到着した。今から紹介するが、

騒がないようにな。よし、入って来い』

「失礼します」

合図と共に、ドアを開き、教壇に近づく。

沙良が入るとざわめきがピタリと止まった。

その静寂に居心地が悪くなった沙良は教室をぐるりと見渡し、一夏の姿を見つける。

ポカンとした顔の一夏にひらひらと手を振ると、頭に衝撃が走る。

「早く挨拶をしろ、馬鹿者」

「すみません、織斑先生」

もう一度教室を見渡し、挨拶を始める。

「深水沙良です。スペインより来ました。昔は日本にも住んでいたため、大丈夫だとは思いますが、不慣れなところもあると思います。特殊な立場ですけど、気軽に仲良くしてくれると嬉しいです。皆さんよろしくお願いしますね」

皆が、何か言いたそうにしているが誰かの呟きが耳に届いた。

「お、男？」

その呟きに、沙良は律儀に返事をする。

「ええ、男ですよ。ニュースであった、スペインの少年Ｒとは僕のことです」

そう胸を張って答える沙良は、生徒の様子がおかしい事に気付いた。

「きゃ……」

「ん？」

「きゃあぁぁぁぁ！！！」

黄色い悲鳴が沙良を襲う。

その圧力にやられ頭がグランングランしていると、生徒が堰を切ったかのように喋りだす。

「男子！！　二人目の男子！！」

「それもうちのクラスに！！」

「それも美形！！　織斑君とは違う感じの、可愛い系！！」

「さっき織斑君に手を振っていたよね！？　知り合いかな！？」

「織×深って訳ね！！　萌えてきたわ！！」

「待って！　深×織でも全然ありだわ！」

「……」

似てる。

沙良はそう思った。

本当に似ている。

あの研究所の空気に。

「静かにせんか、馬鹿者が！」

千冬が出席簿を振るうのを見て、沙良は、みんながいい意味で馬鹿であると確信した。

そこで、一人だけ沙良に他と違う視線を送る者に気付いた。

窓際に座る、髪の長い女生徒。

その生徒の姿を見つけると、沙良の顔に満面の笑みが浮かんだ。

小学四年のころから会っていない幼馴染、篠ノ乃箒が、そこに座っていた。

こんなところで会えると思ってもいなかった沙良は、嬉しさのあまりに、箒に向かって手を振る。

箒も最初は戸惑ったようだが、手を振り返してくれた。

そこで、頭に覚えのある衝撃が走った。

「早く席に着け。授業中ということを忘れるな」

千冬の叱責にわたわたと席に向かう沙良。その姿を見て、鼻を押さえだした生徒がいたが、沙良はスルーを貫いた。

◆◇◆

一夏の後ろの席に座ることになった沙良は、授業が終わると、その前に座る一夏に問い詰められていた。

「どういうことだよ沙良。沙良がＩＳ学園に来るなんて聞いてないぞ！？」

「そりゃ言ってないもん」

そう悪びれる様子もなく答える沙良に、一夏は頭を抱えたくなる。

「あ、でも姉さんと千冬姉にはちゃんと伝えたよ？」

「何で俺に伝わってないんだ？」

「それは、僕が口止めしたからに決まってるじゃん」

「何で口止めしてんだよ！？」

「ビックリさせようと思って」

そう楽しそうに笑う沙良の姿を見て、もう何も言えなくなったのか、一夏は話題を変える事にした。

「それにしてもビックリしたぜ。まさか沙良までＩＳを動かせるようになるとはな」

「そうだね、僕もニュース見てビックリしたよ。まさか国際ニュースで一夏の名前を聞くことになるとは思ってなかったから、懲役何十年ぐらいの罪を犯したんだろうって心配したんだからね？」

沙良はＩＳを動かしたときの話は出来るだけしないようにと心がけているため、軽く冗談を挟み、会話を誘導する。

本当はＩＳ学園に入った時点でその世界で二番目という特別な立場を話してしまってもいいのだが、面倒くさそうなことは嫌だなぁと沙良自身が感じているため、オフレコにしているのだ。

「酷い心配の仕方だな」

一夏も笑いながら冗談に乗ってくれたようで、ほっと胸を撫で下ろす。

「ちょっとよろしくて？」

「はい？」

「ん？」

声をかけられてた先に女生徒が立っていた。

長い金髪に、欧州によく見られる青い瞳。その白い肌は日本人とは違い、気品さを生み出している。

沙良はその姿を確認し、思い当たる人物がヒットしたため、顔を顰めてしまう。

セシリア・オルコット。記憶が正しければイギリスの代表候補生であり、専用機持ち。

どう見てもエリート風をふかしているお嬢様といった印象を拭えない。

「聞いてますの？　お返事は？」

「ああ、聞いてるけど……君は？」

一夏は戸惑いながらもそう答えた。

沙良は知っているが「誰、コイツ？」みたいな顔でセシリアを見つめる。

「わたくしを知らない？　このイギリス代表候補生でこの学年の主席たるセシリア・オルコットを！？」

「だって自己紹介すらされてないクラスメイトにいきなり話しかけられても知ってるわけないじゃん」

沙良は顔に出る表情を隠そうともせずに答える。

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも至極光栄な事なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

そのセシリアの上からの態度に沙良は不快感を募らせていく。
イギリスは女尊男卑が進んでいるのだろうか。エスパーニャではそこまで酷くなかったから、このような手合いはどうしても苦手になってしまう。

「あ、一ついいか？」

そこで一夏が空気を読まずに挙手をする。

「代表候補生って何？」

その言葉に、セシリアだけではなく沙良も呆れかえってしまう。

「その国の国家代表ＩＳ操縦者の候補として選出される人のことを言うんだよ。まぁエリートって思ってれば間違いはないかな」

「へー、そうなのか。流石、沙良は物知りだな」

「えへへ、そうでもないよ」

「ちょっとほったらかしにしないで下さる！？」

沙良は、あからさまな顔をして、一夏も、コイツ面倒くせえ見たいな顔をしている。

「で、そのイギリス代表候補生のエリートさんが何のご用で？」

一夏も対応が投げやりになってきているのが分かる。

「そうエリートなのですわ！　本来なら、わたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡！　幸運なのですわ！その現実をもう少し理解していただける？」

「へーすごいね」

「そうか、それはラッキーだな」

「……あなた方、わたくしを馬鹿にしてますの？」

「「別に？」」

あ、ハモッた。

「大体、あなた方ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

期待外れと言われても実力を見せたわけでもないのに、何で判断しているのだろうか。沙良は自分のほうがＩＳについては上だと確信的な自信があるため、セシリアの姿が滑稽に見えてしまう。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら、教えて差し上げてもよくってよ？　何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

分からないところがあれば先生に聞くのが手っ取り早いだろうに。沙良は、呆れて物も言えなくなっていた。

「入試ってあれか？　ＩＳを動かして闘うやつ」

そこに一夏は口を挟む。

「それ以外入試などありませんわ」

「俺も倒したぞ？　教官」

一夏が爆弾を投下した。

その一夏の言葉を理解していくと同時に、表情が変化していく。

「……わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってことじゃないの？」

沙良が会話に介入する。

「そ、そういう、あなたはどうですの！？」

「僕？　僕はまず、入試自体を受けてないよ？」

「「……え？」」

一夏とセシリアが綺麗にハモッたのを横目に、沙良はなに言ってんのこの人たちといった目で見ていた。

「入学してから歩行などの訓練を経て、戦闘が出来るようになるのに、今までＩＳに乗ったことのなかった者がイキナリ戦闘できるわけないじゃん。あの試験は、ＩＳを動かしてある一定の起動が出来たら合格なんだよ。だから、ある程度動かせるといったデータさえ存在していれば、入試を受ける必要はないんだよ？」

「な、な、な」

セシリアは顔を驚愕の色に変え、沙良に何かを言おうとしたが、予鈴に阻まれてしまう。

「また後で来ますわ！　逃げないことね！　よくって！？」

捨て台詞をはいて、自らの席に帰っていったセシリアを見て、どっと疲れが押し寄せてくる。

「ＩＳ学園は癖が強い子がいっぱいだね」

「……全くだ」

一夏は沙良の方を向きながら答えたが、それがどういう意味かは考えないことにした。

「面倒くさいね」

「そうだな」

しかし、二人は、この次の授業で更に面倒くさいことに巻き込まれてしまうことになるのだった。

第六話　幼馴染との再会（後書き）

親知らずを抜いたんだけど、ご飯が食べにくい……
こういうときのプリンは旨すぎる

第七話　挑発（前書き）

今回はちょっと短めに切っちゃいました

第七話　挑発

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

先程の授業とは違い千冬姉が教壇に立っている。大事なことなのか、山田先生までノートを手に持っていた。

でも、使用する装備の特性なんて、言ってしまえばキリがないと思うんだけどなぁ。

それこそ装備一つ一つに違った特性があるのに、まとまったジャンルで特性を教えても、それはただ【使える】というだけであって、【使いこなす】レベルじゃないと意味ないと思うんだけど。

まぁ、ここにいるみんなはまだ経験が圧倒的に足りないから、使えるようにはしておかないとって判断なのかも。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

千冬姉が良くわかんないことを言ったな。

クラス対抗戦って何？　代表者ってどういうこと？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみに、クラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

つまりは、成長の基準にされるわけだから、無駄に戦闘回数も多いんだろうな。データを取る目的ならいいんだけど、雑用も押し付けられるのはちょっとやだなぁ。僕だって開発のほうに気を回したいし。

どうか僕にその役目が回ってきませんように！

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

Ｂｉｅｎ　ｈｅｃｈｏ！！

よく言った！！

誰かわかんないけどＮＩＣＥ！！

一夏、何「織斑ってこのクラスにもう一人いるのかー」って顔してんの？

一夏のことだからね？

「私もそれがいいと思いますー」

ちょっと、何、頷いてんの一夏？　「うん。俺もそう思う」的な顔してるけど一夏のことだからね？

「では、候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

よし、この流れは一夏に決まりそうだね。

よかったよかった。

「お、俺！？」

「気付くの遅いよ！？」

つい、ツッコんじゃった。

立ち上がった形になる一夏は視線に晒されている。

まぁ、一夏なら何とかしてくれるんじゃないかな。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

一夏が、一瞬だけ僕のほうを見た。

嫌な予感がする。

「な、なら俺は、沙良を推薦する！　沙良なら俺よりしっかりしてるし、ＩＳについても詳しいしな」

「ちょっ、一夏なに言ってんの！？」

一夏は手を合わせて謝っているが、ここでそんなことしても状況が変わるわけでもないのは誰の眼にも明らかだ。

「織斑に、深水か。他にはいないか？」

あぁ、やるっていってないのに！！

これも一夏のせいだ。
本気で睨みつける。

（本当にすまん）

（いずれ、痛い目見ると思っといてね）

アイコンタクト終了。
とりあえず、今の状況を何とかしないと。

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

机を荒々しく叩き異議の声を上げたのは、どこぞのイギリスの生徒だった。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

嫌なら、立候補すればいいのに。自薦ありなんだからさ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたしくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

極東の猿ねえ。
僕自身、エスパーニャを祖国だと思ってるから、そこまで何も思わないけど、一夏はイライラしてそうだなぁ。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そして、それはわたくしですわ！」

入試の結果だけで、よくもここまで大きなことが言えるもんだよなぁ。

僕を含めたエスパーニャ勢はみんな入試を受けてないし、そこまで実力を測る指針になってるとは思わないんだけどなぁ。

あ、そろそろ一夏もキレる頃かなぁ。何か言っておくか

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「じゃあ帰りなよ」

ふう、言っちゃった。

でも一夏が何か言おうとしてたし、タイミングとしては良かったかな。

でもただ立ち上がっただけってなった一夏もちょっと恥ずかしいよね。

今も他の人の注目を浴びちゃってるし。

こっちはオルコットが目を見開いてるし。

「なっ……！？」

さて、黙らせようか。

「嫌なら帰ればいいじゃん。こんなところで駄々こねてないでさ。そんなこともわかんないの？　子供じゃないんだから少しは考えてから発言しなよ」

「あ、あなた、わたくしを侮辱しますの！？」

「侮辱？　何処をどう捉えたらそう思えるのかが不思議で仕方ないよ。それに、君が侮辱だと言い張るのなら、さっき君が言ったことは侮辱に入らないのかな？」

「う、それは……」

「それに、君は日本人を極東の猿と表現したけど、君が使うＩＳも元はその極東の猿が作ったものだよ？」

千冬姉に視線を向ける。

「そして、そこに立つ、人類最強のＩＳ操縦者も君の言う極東の猿だよ？　君はその極東の猿に勝てるの？」

「そ、それとこれとは話が別ですわ！！」

「じゃあ、別の話をしてあげるよ」

せっかく、穏便に話をしてあげようと思ったのになぁ。

人の好意は受け取るものだよ、普通。

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコット。君はイギリスの名を背負っているって分かってるの？」

「あ、当たり前ですわ！」

「じゃあさ、その国の代表の君が、日本を一方的に貶したと理解できる？　君の発言はイギリスが日本を貶めてるのとなんら変わりな

いんだよ？　それも、元日本代表の前で堂々とね」

オルコットがその事実に気付き、顔を青くする。

「エリートだと言うのなら、もう少しエリートらしくしたらどうかな？　君の行動は間違えたら国家問題に発展してもおかしくないんだよ？」

千冬姉の視線を感じてそちらを向くと、視線で言いすぎだと伝えてきた。

僕としては、一般的なことを言っただけなんだけどなぁ。

なんか教室の空気も説教されている感じになってるし。

「とりあえず、話を進めましょうよ。候補者は三人。それでいいですか？」

なんで僕が仕切ってんだろう？

「さて、どうやって決めよう」

「実力が認められたらいいんだろう？　戦ってみたらどうだ？」

千冬姉、それ絶対楽しんでるだけでしょ？

「いいでしょう、言われっぱなしっていうのも気に食いません。決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

一夏も乗ってきちゃったよ……

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

イギリスって未だに奴隷制度があるのか？　ってツッコミはしちゃだめかな？

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？　なんにせよちょうどいい機会ですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

あーあ、二人ともやる気になっちゃって。僕なんて眼中に無いみたいじゃん。まぁ、やらなくていいなら、やらないに越したことは無いんだけどね。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いやー、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

いや、どちらかと言うと、一夏がハンデ貰う立場なんだけどね。起動時間が数十分の一夏が、百時間を越えるであろう代表候補生相手にまともに太刀打ちできるとは思わないけど。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

ほら、笑われてる。

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「４６７個のしかコアがないＩＳの一つを専用に持ってる相手に勝てるとは思わないなぁ」

むかつかなぁ。この差別的な考え。

オルコットさんしかり、みんな勘違いしすぎだよね。

「確かに、今は女性のほうが強いって言われてるけど、ちょっと勘違いしてない？」

「え？」

僕がいきなり立ち上がったことに、周りの女子が驚いたみたい。

「女性のほうが強い。あぁ確かに強いだろうね。ＩＳが使える女性はね。でもここにいるのは、ＩＳが使える男だよ？　なんで、今までの理屈に当てはめて考えられるの？　それに、女性が強いって言われてるのは力じゃなくて立場だよ？　そこんとこちゃんとわかってんの？」

僕の言葉に、笑っていた女子はみんな居心地悪そうに黙ってしまう。

「例えば、さっき笑ってた君」

「は、はい」

「君は女性のほうが強いって言ったけど、今の君はＩＳが使える僕

や一夏に勝てる自信があるの？」

「そ、それは……」

「言葉って言うのは自分が思うより力があるんだ。よく物事を考えて発言しなよ」

「す、すいません」

「それに、今、出ている情報だけを真に受けてさ。馬鹿じゃないの？　コアが４６７個しかないだって？　そんなわけないじゃん。僕が知る限り、５００は既に超えているよ」

「沙良！」

おっと、千冬姉がお怒りだ。
まぁ、機密事項だったっけ？

「……さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と深水、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんっと手を打って千冬姉が場を纏める。
結局、名前含まれてたなぁ……。
めんどくさいことになった。
知識はある。ＩＳにも慣れている。
しかし、圧倒的に戦闘訓練が足りてない。

それはそうだ、ずっと開発側だったんだもん。テストパイロットだって戦闘まではやらないもん。

訓練、しなきゃなぁ。

第七話　挑発（後書き）

再来週、もう一本親知らずを抜くことになりました（ノД`、）シクシク

第八話　同郷の友

「うぅ……」

放課後、一夏は机にぐったりともたれかかっていた。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

「大丈夫、一夏？」

「沙良はよく理解できるな。俺には全くだ」

僕は苦笑いしながら、一夏の机に腰掛ける。

「僕は研究職だからね。ＩＳ作ってるのに理解してなかったらそれはそれで問題じゃないかな？」

「確かにそうだな」

「そんなに分からないなら、要点纏めた資料作ろうか？」

一夏はがばっと身体を起こし、僕をまじまじと見つめた。

「いいのか？」

「もちろん。そんなに手間じゃないしね」

その言葉は嘘じゃない。

昔、姉さんの教えを受けたときに自分用として作った資料が残っ

ているはずだから、それを改変するだけでいいのだ。

「じゃあ、よろしく頼む」

「任せて」

とりあえず、職員室に行かないと。

今日の決闘騒ぎで、いろいろしなければいけないことが出来たし。

「ああ、織斑くん、ルイスくん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

ルイスくんだって。

「ルイスって久しぶりに聞いたな」

そりゃ一夏もそう思うよね。

日本に来てから初めて呼ばれたかもしれない。

確かにルイスが父親の姓だから名乗るのはルイスなんだけど、日本の姓もあるからそっちで呼べばいいのに。実際に千冬姉は深水って呼んでるし。

まぁ、山田先生は真面目だしね。

「自己紹介で深水って言ってますから、別にルイスじゃなくていいですよ。むしろ日本にいる間は深水でお願いします」

「はい、分かりました。深水君ですね」

うわぁ、この先生小動物の印象を受けるなぁ。

僕もよく言われるけど。

「それで、何かあったんですか？」

一夏が話を促して、山田先生は、思い出したように言う。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを一夏に渡す山田先生。

確か、ＩＳ学園は全寮制だったっけ。

生徒の安全確保とか言ってたよね。

まぁ確かに何処の国も優秀な操縦者の確保に必死だろうし、妥当な制度だよね。一夏とか僕とか自宅から通わすと確実に学園にたどり着かないと思うし。

ちなみに、僕は授業に行く前に、先に部屋に荷物を置きに行ったから自分の部屋は把握している。

「あれ？　俺の部屋、決まってないんじゃなかったんですか？　前に聞いた話だと、一週間は自宅から通うって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです」

「部屋は沙良と一緒なんですか？　鍵は一個だけしか渡されてないですけど？」

「僕は個室だよ？　荷物置きに先に寮に行ったから鍵ももう持ってるし」

何、そのビックリした顔。

僕が個室だと文句あるの？

「てことは俺も個室ですか？」

「いえ、それが……用意できた個室は一個だけで、織斑くんは相部屋となります」

そんなに羨ましそうに見ないでよ。

「それでですね、織斑くんの荷物のことなんですけど――」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

千冬姉の手配って絶対生活必需品だけだよ。そんなに気が利くようには見えないし。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まぁ生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

やっぱり。

あぁ、一夏が潤んだ目で千冬姉を見つめてる。

可哀相だけど、千冬姉なら仕方ないよ。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、お二人は今のところ使えません」

まぁそりゃそうだよね。

「女子と一緒に入るわけにはいかないですしね」

エスパーニャには、ゆっくり湯船につかる習慣があんまり浸透してないから、シャワーでも全然構わなかったんだけどなぁ。やっぱり日本に来たらゆっくり浸かりたいよなぁ。

ん？　一夏、なに「そっかぁ」みたいな顔してんの？
周りの状況分かってる？

「ははは、沙良、ジト目で見るのやめてくれ」

「他に何か聞きたいことはあるか？」

「なんで沙良と俺が一緒の部屋じゃないんだ？その個室に相部屋の子に移ってもらえばいいだけじゃないか？」

「何かあったときに一緒にいられると対応しにくいからだ」

「どういうことだ？」

「つまりはね、一夏。もし何かあったときは僕を切り捨てて、一夏だけでも助けようということだよ。日本政府は一夏さえ無事ならいいって考えを示してるんだ」

千冬姉、そんな辛そうな顔しないで。
一夏も、そんな顔してないで、ね？

「そのとおりだ。日本政府は、沙良をよく思ってない。日本国籍は

持っていても、スペインの企業所属の人間は守る必要性はないということだ」

千冬姉、口調はいつも通りだけど、動揺してるのがよく分かる。
僕のこと名前で呼んだし。

「なんだよ、それじゃあ」

「一夏、僕は大丈夫だから」

「……くそったれ」

一夏はその怒りを隠そうとしない。
それで僕は充分だよ。

「他に聞きたいことはあるか？」

「……特に」

んーなんかあったっけな。
あ、そうだ、せっかくだし今のうちに言っておこう。

「織斑先生、放課後のアリーナの使用許可と、本国からの機体が到着するまでの訓練機の貸し出し許可をもらえませんか？」

「……いいだろう。しかし、私たちはこれから会議がある。それが終わってからになるが待てるか？」

「どのぐらいですか？」

「おおよそ一時間半ぐらいだろう」
「では、書類だけ書いて待ってます」
「わかった。では後で職員室まで提出しに来い」
「ｄｅ　ａｃｕｅｒｄｏ（了解しました）」
「そう、かしこまるな」
千冬姉は意味を分かってくれたらしい。笑ってくれた。
一夏と山田先生はポカンとしてる。
さて、行動を開始しますか！！

◆◇◆

「ふう、疲れた」
沙良は、職員室に書類を提出し、寮までの道を歩いていた。
「それにしても、シークエスト以外に乗るのは初めてだなぁ。ちょっとだけ楽しみだ」
今回、貸し出しの許可を貰ったのはラファール・リヴァイブ。そして、打鉄。
そう、二台借りたのだ。目的はもちろん、一夏にも訓練させるため。
正直、一夏が国家代表に勝てるとは思わないが、何もせずに負けるってのも気に食わない。ならば、出来るだけのことを一夏につぎ

込もうということだ。

「セラ？」

そう考え事をしていると、声をかけられた。

「セラだよね？　やっぱりセラだ！　！Ｃｕａｎｔｏ　ｔｉｅｍｐｏ！（久しぶり！）？Ｃｏｍｏ　ｅｓｔａｓ　？（元気にしてた？）」

「Ｌｉｎａ？」

そこには、スペイン代表候補生リナ・フェルナンデス・コロンがいた。

沙良はリナに抱きつき、挨拶として頬にキスをする。

「Ｅｓｔｏｙ　ｂｉｅｎ　Ｃｕａｎｔｏ　ｔｉｅｍｐｏ　ｓｉｎ　ｖｅｒｎｏｓ．（もちろん、元気だよ。本当に久しぶりだね）」

リナも沙良と同じように頬にキスを返す。

Ｓ・Ｑ社では頬にキスをするのが挨拶みたいになっていたため、お互いに躊躇いなくキスをする。

「入学してたのは知ってたけど、まさかこんなに早く会えるとは思ってなかった」

「僕もビックリ。いずれ、機体の整備で会うとは思ってたけど、初日で会えるなんて運がいいね」

リナは、Ｓ・Ｑ社から専用機を与えられている。

それは、つまり沙良が作った機体に乗っているということでもある。

「¡Ｑｕｅ　ｓｕｅｒｔｅ！（本当に運がいいわ！）ねえ、夕食は食べた？」

「まだだよ」

「Ｖａｍｏｓ　ａ　ｃｏｍｅｒ　ｊｕｎｔｏｓ！（それなら、一緒にご飯を食べようよ！）」

「Ｓｉ，！ｑｕｅ　ｂｕｅｎａ　ｉｄｅａ！（うん、それはいい考えだね）」

沙良は、リナと共に食堂に向かう。

その足取りは、祖国の人間に会ったからか、いつもよりは軽いように思われる。

「リナはなに食べるの？」

「せっかく日本にいるんだから和食定食Ａにするわ。セラは？」

「そうだなぁ。じゃあ、和食定食Ｂにするよ」

運ばれてきたのは、美味しそうな魚の煮つけだった。

それに、小鉢、おひたし、味噌汁、漬物、白米といった日本によくなじんだセットとなっている。

「先、席取っておくね」

沙良は、そう言い二人分空いている場所を探す。
「結構空いてるなぁ。なんでだろう？」
難なく端の席を確保する。
よく見ると一箇所に、人が固まってるのが見える。
そこには、見覚えのある生徒がいた。
「一夏……犠牲になってくれたんだね」
「それは何か違うと思うわ」
「あ、リナ」
リナが沙良の目の前に座る。
「もしタイミングが悪ければ、セラもああなってたってことね」
「！ｐｕｅｄｅ　ｓｅｒ！（ありえるね）」
「もう、他人事じゃないんだよ？」
リナはけらけらと笑う。
沙良もその顔には笑顔が浮かんでいる。
「なんか一日も経ってないのに、セラって呼ばれると懐かしく感じちゃうよ」
「今はなんて呼ばれてるの？」

「深水くんとか沙良とかだね」

「向こうでは全く聞かないね。名前もルイスだったし」

リナは喋りながらも、綺麗に焼き魚を口に運ぶ。

どうやら和食定食Ａは鯖の塩焼きのようだ。

「リナ、箸の使い方上手だね」

「えへへ、実はソフィア先輩に教えてもらったんだ」

「ソフィに？」

「うん。セラより大分早くにＩＳ学園に来てたから、そのときにお世話になったの。私たちは、みんなお世話になったんじゃないかな？」

「ソフィも頼られてるんだなぁ」

「セラの最高傑作を扱える人だからね」

最高傑作。それは、オルカ、ドルフィンと同じ第三世代シークエストシリーズ、ケートゥスシリーズの機体。ケートゥスとはラテン語でＣｅｔｕｓと書き、海獣を意味する。

「リナも実力が認められたら、そのカスタムをケートゥスにしてあげるよ」

「本当！？」

「もちろん、ソフィに勝てるぐらいまでにならないとだけどね」

「えーケチ」

食事の時間は他愛無い会話で楽しく過ぎていく。
気付けば、食器の上も綺麗に片付いている。
今はお茶だけ残っている状態だ。

「それにしてもソフィが頼られてるねぇ……」

その呟きには、様々な思いが込められている。

「人のベッドに潜り込んできて鼻血出して運ばれていくようなソフィがねぇ」

未だに納得していない沙良であった。

◆◇◆

「じゃあ、僕の部屋はここだから」

「１０３０ね、覚えたわ。私は１０３４だからいつでも遊びに来てね」

「気が向いたら行くよ」

「嘘、そういうときの沙良は絶対来ないって知ってるもん」

そんなことないと沙良は反論しようと思ったが、否定しきれない部分もあるため、何も言わずに、愛想笑いに留めた。

「Ｂｕｅｎａｓ　ｎｏｃｈｅｓ　Ｓａｒａ.（おやすみ、セラ）」

「Ｂｕｅｎａｓ　ｎｏｃｈｅｓ　Ｈａｓｔａ　ｍａｎａＮａ.（おやすみ、また明日）」

挨拶を交わし、自分の部屋に入ると自分のスポーツバッグがベッドに鎮座していた。

「片付けないと……」

沙良は、スポーツバッグの中身を取り出し、綺麗に収納していく。しかし、その量は問題ではないのだが、如何せん機器の配線がややこしい。

「明日にするか」

Ｎｏ　ｄｅjａｓ　ｐａｒａ　ｍａｎ~ａｎａ　ｌｏ　ｑｕｅ　ｐｕｅｄｅｓ　ｈａｃｅｒ　ｈｏｙ.

《今日できることは、明日に先延ばしをするな》とは有名なことわざだが、そんなもの、疲れきった沙良には関係ないことだった。

「あ、一夏の資料も作んなきゃ」

あの時の自分を殴りたい気分だが、そこは約束してしまった自分が悪い。

「……シャワー、浴びるか」

こうして沙良の一日は終わるのであった。

第八話　同郷の友（後書き）

早く決闘させた方がいいかな？
僕はもうちょい焦らそうかなって思うけどどうかな？

第九話　専用機、到着

放課後、沙良たちは剣道場にいた。
沙良は竹刀を膝の上に置き、一夏と箒が稽古しているのを眺めている。
箒は全国の頂点に立ったと聞いていたため、一夏が負けるんだろうなと思っていたが、一夏は箒相手に善戦していた。

「ふん、腕は落ちていないようだな」

「伊達に稽古を重ねてきたわけじゃねえよ」

二人は喋りながらも激しい打ち合いを続ける。
一夏が稽古を再開したのは、とある事件からだったはずだ。
この長くない期間で箒相手にここまで出来るようになるとは相当訓練を積んだのだろう。
しかし、それでも箒には及ばないのだろう。
息が切れ切れで、足元が覚束なくなってきているようだ。

「次は、沙良の番だ」

箒に呼ばれ、沙良は竹刀を片手に立ち上がる。

一夏に汗を拭くタオルを渡し、箒の前に立つ。

「一夏と違って、そんなに出来ないんだから手加減してね」

「冗談はよせ、沙良相手に手加減など出来るわけないだろう」

箒は苦笑いを浮かべ、竹刀を正眼に構える。
沙良はそれを見て、竹刀を下段に構える。
箒はそれを見て、一瞬嫌そうな顔をした。

剣道において、下段の構えはあまり好まれていない。見た目が地味な上に、結局は正眼に引き戻さなければ、相手の攻撃を受け太刀出来ないからだ。
しかし、沙良が使うのは剣道ではない、剣術だ。それも大太刀を使う、実戦的な古流剣術。沙良の持つ竹刀も普通の物より、長めに作られている。
下段に構えると地面に付くぐらいに長い竹刀は、沙良の体格で扱えるのか不安に思うものも多いだろう。

箒が、掛け声と共に、沙良に踏み込む。それは、素人には目視さえ難しい、キレと速さを掛け合わせていた。
しかし、その踏み込みから放たれる竹刀が、沙良の捉えることはなかった。

下だ。

沙良は箒の踏み込みに合わせ、重心を落とすことによって、動きの工程を最小限に抑え、箒の足元を竹刀で払った。

普通なら力を込め、踏み込み、下へ潜り込み、剣を振るう。
大まかに分けても四工程の動作を、沙良は身体の力を抜き、自然に倒れる力を利用することで一工程で行ったのだ。
動きは工程が少ないほど相手に認識されにくい。

箒にはいきなり目の前から消えたように見えただろう。

床に伏せた箒を見る限り、上手くいったみたいだ。

「箒、大丈夫？」

「あ、ああ、大丈夫だ」

箒に手を貸して、立ち上がらせる。

「沙良の剣はいつ見ても凄いな。俺も太刀を習えばよかったかな」

「今のは、太刀じゃなくて薙刀の応用なんだ。相手の力を利用する柔の技だね」

「俺も沙良みたいに強くならねえとな」

沙良は、その言葉にいい事思いついたとばかりに箒に声をかける。

「ねぇ、箒。一夏に、稽古つけてあげたら？」

「は？」

一夏が腑抜けた声を出すが沙良はシカトして、いまいち理解していない箒に小声で話しかける。

「一夏と一緒に居れるチャンスだよ」

箒に耳打ちすると、箒はすぐさま一夏に宣言する。

「そうだな、私が稽古をつけてやろう！！」

沙良の言葉が聞こえていなかった一夏は、急に箒がやる気を出したことに驚いたが、稽古自体に文句はないのか嫌そうな素振りは見せない。

「そりゃあ、こっちとしても稽古に付き合ってくれるのは嬉しいけどいいのか？　付き合わせて」

「もう、好意は素直に受け取るものだよ、一夏」

箒が昔から一夏に好意を抱いているのを知っている沙良は、内心、「ちょろいもんだよ」と思うのだった。

◆◇◆

月曜日、決戦の日。

「一夏、どうすんの？」

「いや、俺に言われても……」

「全く、なんという事態だ」

三人はピットで、戸惑っていた。
それは、たった一つのアクシデント。

「何故、専用機が届いていない」

箒の言ったとおり、一夏の専用機がまだ届いていないのだ。

決闘開始まで、三十分しかないという、この状況にも関わらずだ。

「どうする？　打鉄で出る？」

沙良は言ってはみたものの、それは出来ないと知っている。

「今更、貸し出し許可が貰える訳がないだろう」

「だよねー」

沙良は出来ることなら自分が出てもいいと思っているのだが、そういうわけにもいかない。沙良のＩＳは午後に届くと言われているため、沙良の試合は午後に回されているのだ。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

真耶が後ろに千冬を伴って駆け足で向かってくる。

「ふぅ、来たみたいだね」

「来ました……来ましたよ！　織斑くんのＩＳ！」

ピット搬入口が開く。

それはゆっくりと、駆動音を響かせながら、その向こう側を晒していく。

――そこに、『白』がいた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白。

「これが……」

「はい！　織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」

一夏は惹きつけられるかのように白式に近づく。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。わかったな」

一夏は白式に触れる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

一夏は、白式に体を任せ、その体に白を纏っていく。

「一夏、いけそう？」

沙良は、一夏に声をかける。それはＩＳが動くかと聞いたものではない。勝てるか。そう聞いたのだ。

「あぁ、ここまでお膳立てされておいてやれないわけがない」

「……」

何か言いたげな箒に気づいたのか、一夏は箒に目を向ける。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

一夏の意識がゲートに向かったのに気付いた沙良は、一夏に声をかける。

「僕はもう行くよ。勝ってね一夏」

沙良は、この次、セシリアと戦うことになっている。

そのため、この一夏ｖｓセシリアの試合を見ることを禁じられているのだ。

沙良がピットを出るのと、一夏がゲートを飛び出すのは同時だった。

◆◇◆

沙良は控え室で自らのＩＳに対峙していた。

それは深い青。

深海を思わす深い青。

「シークエスト、それも僕がテストパイロットとして使っていた製作試作機か」

沙良は本国から送られてきたＩＳに驚きを隠せなかった。

訓練機を持たせると聞かされていたから、一般的に復旧しているシークエストが送られてくると思っていたのだが、送られてきたのは、沙良が自らの手で作り上げたプロトタイプだった。

それに、沙良が指示していたように改良が加えられている。

「もう、やたら時間がかかってると思ったらそういうことか」

実際、使いどころがなく、研究用としか用いられてなかったということを考えると、有効利用なのかもしれない。

「もう一度、君と潜れるんだね」

飛ぶではなく潜る。

シークエストは元は水中で活動できるように開発されたＩＳだった。

今でもスペインは、海底からレアメタルを取得している。

ゆえに、シークエストに乗るものは、皆こう言うのだ。

『空に潜る』と。

沙良はその身をシークエストに任せる。

――Ｓｔａｒｔ　ｓｙｓｔｅｍ，　Ａｃｃｅｓｓ――

――Ｆｉｔｔｉｎｇ　Ｓｔａｒｔ――

――Ｓｅａ　Ｑｕｅｓｔ　Ｄｉｖｉｎｇ　ｓｙｓｔｅｍ，　Ａｃｃｅｓｓ――

――搭乗者を確認、搭乗者データとの一致が認められました――

――Ｓｅｃｒｅｔ　ｓｙｓｔｅｍ　ＳＡＲＡ，　Ｓｔａｒｔ　Ａｃｃｅｓｓ――

――皮膚装甲展開……完了――

――推進器稼動確認……完了――

――ハイパーセンサー最適化……完了――

次々と浮かんでは消えていくモニター。その最後に表示されたモニターに、沙良は頬を緩ました。

――『！Ｄｅ　ｌａ　ｂｉｅｎｖｅｎｉｄａ！，　Ｓｅａ　Ｑｗｅｓｔ．　Ｄｅ　ｌａ　ｂｉｅｎｖｅｎｉｄａ！，　ａｍｏ　Ｓａｒａ』――

《ようこそ、深海の探索者よ。ようこそ、私のマスター、沙良》

「覚えててくれたんだね。カイラ」

沙良は、身に纏う青を一度解除し、シークエスト製作試作機プロトタイプ『カイラ』を待機状態に戻す。

セシリアはまだ準備が完了していないようだ。

一夏の勝利と報告を受けてから二時間は経過しているだろう。

「セシリア・オルコット。専用ＩＳは『ブルーティアーズ』か」

この一週間、出来ることは全てこなした。

一夏と慣れない戦闘訓練を行ったし、情報を出来る限り集めた。

沙良は知っている。

敵のことを知っているかどうか。それが勝敗に大きく関わってくることに。

ゆえに調べ上げた。

敵の機体についての全てを。

そして、それに対する対策もしてきた。

負けるわけにはいかない。

『深水くん、オルコットさんの準備が出来たようです』

真耶の声に、沙良は『カルラ』を纏う。

カルラはすぐさま戦闘状態のＩＳを感知した。

操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。

戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り。

「いくよ、カルラ。まずは相手の行動パターンを把握しようか」

沙良は、とあるシステムを準備させる。

すぐにウィンドウが表示される。

――Ｄｉｖｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ――

これでとある言葉を言うとシステムが作動するようになる。

「さて、空に潜ろうか」

沙良は敵が待つ、空に、その身を投げ出すのだった。

第九話　専用機、到着（後書き）

次は初めての戦闘シーンですね。
上手く書けるかなぁ

第十話　決闘（前書き）

慣れない戦闘シーンですけど、楽しんでいただけたら幸いです。

第十話　決闘

「あら、逃げずに来ましたのね」

沙良は、セシリアの言葉などそっちのけで、武装の確認をする。その手に持たれている装備、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトｍｋ？》を見て、自らの情報収集力を手放しで褒めたくなった。

「最後のチャンスをあげますわ」

試合開始の鐘は鳴っているのでいつ撃たれてもおかしくはないのだが、セシリアは余裕を見せ続ける。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理」

沙良は、右手のアサルトライフルをいつでも撃てるように構える。

「ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ」

射撃モードは使わない。自動ロックにより、敵のアラームがなってしまう。

ゆえに、マニュアル射撃を選ぶ。

訓練が足りないといってもこの距離なら。

「今ここで謝るというのなら、許してあげなくてもな――」

外さない。

放たれた銃弾は喋っている途中のセシリアに見事命中する。

「ちょっと、あなた！？」

「試合開始のベルは鳴っていますよ？　オルコットさん？」

「っ～～～～～～！！」

沙良はアサルトライフルを粒子変換で一回拡張領域に戻してから、手ぶらで肩をすくめて見せる。

「可愛い顔して、やることは可愛くないですわね！」

――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「くらいなさい！」

耳をつんざく様な独特の音。それと同時に閃光が走る。

「ＤＩＶＥ！！」

沙良の叫びがＩＳに変化を起こす。

その叫びに『カイラ』が装甲を閉じた。

それと同時に閃光が直撃する。

「どうです？　これが実力の差というものですわ」

「たいした威力だね」

セシリアは、何もなかったようにそこに留まっている沙良の姿を見て驚愕した。

それは、ダメージを受けた形跡がなかったことではない。もちろんそれもあるが、セシリアはもっと違う所に、驚きを隠せなかった。

「なんですの？　その姿」

沙良の顔は、目元は完全に覆われ、口元だけがかろうじて見える。普通なら腹部などが露出しているはずの装甲も間接部分だけを露出している。

沙良は、先程の射撃のダメージを見るが、エネルギーもさほど減っていないようで安心する。

――バリアー貫通黙認。ダメージ５６。シールドエネルギー残量８９４。実態ダメージレベル低。

第一関門突破。

それは、セシリアの主砲の直撃をカイラが耐え切れるか。

見事、ＤｉｖｉｎｇＳｙｓｔｅｍを作動したカイラはそのダメージを最小で済ませた。

「よく耐え切りましたけど、次はそうはいきませんわ！」

射撃、射撃射撃射撃。それはまさに雨のように沙良に降り注ぐ。

しかし、それを的確に回避する。それも、最小限の動きで。

「いつまでも避け切れるものではありませんわ。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）は！」

セシリアが叫ぶと同時に、四つのパーツが、ブルー・ティアーズから切り離される。
それは、ビット兵器。もちろん、沙良はその存在を調べていた。
「いつまでも避けるよ。舞踏病（タランテラ）のようにね」
浮かべる笑みの意味はセシリアには伝わらないだろう。
自らの武装が調べつくされた戦闘など、誰が想定できようか。
沙良は、セシリアの攻撃パターンを引き出すために、空を舞台に踊りだすのだった。

◆◇◆

アリーナ管制室。
そこには二つの人影があった。
記録やデータを取るため、モニターに座る山田真耶と、現場監督責任がある織斑千冬だ。
「はぁぁ……。すごいですねぇ、深水くん。ＩＳの起動に慣れているとしか思えない動きですよ。それに、このデータ。ＩＳ全体のシンクロ率が並ではありません」
「慣れているとしかとしか思えないではなく、慣れているんだ。あいつがＩＳの起動に慣れているという話なだけだ」
「深水くんは、織斑くんと同じで最近ＩＳを動かせるようになったわけではない。そういうことですか？」

「山田先生。深水が使うＩＳについて、何かご存知ですか？」

「確か、スペインが作り上げた、第二世代機最後進機ですよね。たしか、その開発には中学生が関わっているという噂がありましたが……まさか！？」

「関わっているというレベルではない。スペインが開発しているシークエストシリーズは全て沙良が手がけたものだ。私の知る限り、あいつは小学四年の時点でＩＳを動かすことに成功している」

「深水くんが小学四年と言いますと……」

「そうだ、『白騎士事件』のすぐ後だ」

「このことは……」

「もちろんオフレコで頼む。ＩＳ学園に入学している時点でいずれはバレる事だが、それは我々が言ってしまっていいことではない」

「わかりました。……どうりでシンクロ率が高いんですね。自らが作った機体に乗るって言うのはどういう気分なんでしょう」

その言葉に千冬が一瞬顔を顰めたのに、真耶は気付くことはなかった。

「それにしても、なんで攻撃しないんですかね。深水くんの腕なら充分攻撃するチャンスはあると思いますけど」

「こういう戦い方なんだろう。あいつは」

「と、言いますと？」

「オルコットの癖を読んでいるのだろう。決闘が決まってから積極的にデータを集めていたところを見ると、何かしらの罠を仕掛けてる可能性もある」

「織斑くんの時といい、さすが姉弟ですね。そこまで分かるなんて」

「まぁ、なんだ。あれも私の弟だからな」

「今回は、照れないんですか？」

「……」

「いたたたたっっ！！！！」

「先程の試合で学習されたと思っていたが、そうではなかったようで」

「す、すみませんすみませんすみません！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！　わかりました！　わかりましたから、離し――あううううっ！」

◆◇◆

何故、彼は攻撃してこないのだろう。

先程から、攻撃できる隙はあっただろうに、彼は武器を手に持つことすらしない。

だからといってワンサイドゲームになっているとは到底思えない。

何故、絶対的な隙が出来ても、攻撃がこないのだろう。

試合開始から十分。

彼は避け続けていた。

今ではセシリアは彼を打ち落とすために全力を使っている。

それでも、それには至っていない。

的確に回避し、少し被弾したくらいではビクともしない機体。

（いったい、なんなんですのあの機体は！？）

セシリアは焦りが見えていた。

「そろそろ、いいや」

彼はそういい、回避行動を止めた。

「もう諦めましたの？」

「いや、もう見飽きたってことさ。『カイラ』、Ｄｉｖｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ解除」

彼が何か言ったと思うと、急に彼のＩＳが変化した。

それは最初に見たときと同じ。今までのＩＳと違い、装甲が薄くなっている。

「わざわざ、やられやすくなるなんてお馬鹿さんなのですわね！」

セシリアは彼に主砲を向ける。しかしその引き金が引かれることはなかった。

「なっ――」

狙撃された。それも的確に銃身を狙って。

「こっからは僕が指揮棒を振らせて貰うよ」

彼の手に持たれたスナイパーライフルがこちらに銃口を向けていた。

拙い。

セシリアの同じ狙撃者としての勘が訴えていた。

避けきれない。

「くっ……」

銃弾は右肩に当たり、装甲を地面に落としていく。

「負けませんわ！」

セシリアはビットを動かし、抵抗の狼煙とする。

先程までの装甲を解いたのだ。当たれば相当なダメージが期待できるはず。

しかし、その光線が当たることはない。

「なぜ、当たりませんの！？」

「ビットは右後方に誘導、左前方がけん制。意識を後方から逸らすのが主流」

「あなた、まさか！！」

「ビットを操作してるときは本体がおろそかに」

彼はセシリアにアサルトライフルを向ける。
それは左足に被弾する。

「っ……！」

セシリアはすぐさまスターライトｍｋ？を構える。

「本体に気を取られると、ビットがおろそかに」

いつの間にか持ち替えられたスナイパーライフルが三つのビットを打ち落とした。

「スターライトは、まだ充分撃てましてよ！」

スターライトを構えながら、あえてビットを操作する。
装甲が薄くなった分、ビットでも充分エネルギーを削れる。
だから、本体に気を引き付けてビットで撃ち抜く。
そのはずだった。

「ビットは、僕の反応が一番遠いところから射撃を始める」

セシリアが見たのは、ビットの方を向かずに、ライフルだけをそちらに向け、ビットを打ち落とす彼の姿。

拙い拙い拙い。

読まれている。

自分の行動パターンが。

いや、読んでいるというよりは、

「調べつくされている？」

一度、体勢を立て直そう。

セシリアは、ひとまず、宙に、上に逃げ場を求める。

空中戦においては上を取ったほうが有利なのは明白だ。

安全圏まで一度下がろう。

「きゃあぁ！！」

しかし、そこは待っていたのは安全圏ではなかった。

◆◇◆

かかった。

沙良はセシリアが上に逃げ場を求めたことに作戦の成功を確信した。

そして、宙では、沙良が望んだとおりの光景が広がっていた。

爆発だ。

元は水中戦に用いていた機雷をＩＳ用に改造したもの。

それは、使用者の遠隔操作で爆発するものと、接触により、爆発するものの二つがある。

それを、沙良は避け続けているときに、気付かれないように宙に設置し続けていた。

それも、一つだけではない。

一つの爆発が、また近くの起爆のきっかけとなるように幅広く。

しかし、密度は濃く。

これが今回用意した装備の一部。

スペイン製、空中機雷。

その威力は一発では小さいのだが、一斉に、多くが爆発すると先程までエネルギーが大量に残っていたはずのブルーティアーズの装甲を破壊し、シールドエネルギーを二桁まで削るほどの威力を誇る。

初見相手にのみ使える兵装。

一度使った相手にはもう通用しないであろう装備。

それを沙良は惜しげもなく試合に持ってきていた。

次に戦うときはどうするのか。

簡単だ。

違う武器を使えばいい。

それが開発者としての顔を持つ沙良の戦い方だった。

「爆音の奏でるカルテットはお嫌いですか？」

沙良は、爆発の余波に晒されて動けなくなっているセシリアに問いかける。

「え、ええ。とても乱暴な音色でしたわ……」

沙良の軽口に乗ってくれるセシリアだったが、そのシールドエネルギーは、口が言うほど余裕を見せてはいない。

その数値は１９。

あと一撃、何らかの攻撃が当たった時点でエネルギーが無くなってしまうのは目に見えている。

だから沙良は、あえて隙を作るためにとある事を聞いてみた。

「ねえ、オルコットさん。一夏はどうだった？　好きになりそう？」

「な、なな何を言ってますの！？」

そう言いながらも、沙良はライフルをセシリアに向けて発砲していた。

急に予想外のことを言われ、反応が遅れたセシリアにそれは避けることができなかった。

「はぁ、こんな所にも一夏の犠牲者がいたのか」

沙良は、わざとらしくため息をつくのであった。

『試合終了！　勝者、深水沙良！』

第十話　決闘（後書き）

こんな戦闘描写でいいのだろうか？
難しいなぁ

第十一話　クラス代表

セシリアとの戦いに勝利した沙良は、そのままピットに留まる。
今はエネルギーを回復するために供給機に身体を任せている。
エネルギーが回復しだい、一夏との試合が始まる。

沙良は、一夏の試合は、開始直後に勝負を決める気でいた。
おそらく、一夏には何かしら言われるとは思うが、自分の身が一番可愛いのは誰だって同じだろう。

――エネルギー残量８５０　ＭＡＸ――

カイラのエネルギーが回復したようだ。
カイラのエネルギー量は他のＩＳに比べ、格段に多い。
普通のＩＳは６００に乗ればかなり多いほうだというのに、沙良のＩＳは８００を簡単に越している。
沙良の機体だけではなく、シークエスト全般もエネルギー量が多く作られている。
それがスペインの持ち味である、長時間戦闘を可能にする。

「山田先生、こちらの準備は出来ました」

通信で、呼びかけると、すぐに返事が返ってくる。

「わかりました。織斑くんは先にアリーナに出ています。出撃が可能ならもう出ちゃってください」

沙良は、カイラを纏い、そのままピットを出た。

そのまま、空に身体を任せると、ハイパーセンサーが一夏の姿を捉えた。
始めて見たときとは違う形に、少しばかりの驚きを感じる。
――あの短時間でフィッティングを行ったってことか。
その洗練された白は、機動性重視だと簡単に読み取れる。
そして、手に持つブレードには心当たりがある。
（雪片に似てる）
しかし、雪片であるわけがない。あれは千冬の武器だ。
そうすると考えられるのは、雪片の後継武器。
考えられなくもない。なんせあの機体を作ったのは束なのだから。
（姉さんのことだから、一夏の機体も、千冬姉と同じ接近に特化した機体を作ったんだろうな）
「よう、沙良。無事に勝ったみたいじゃないか」
「当然。一夏こそ勝ったじゃない。おめでと」
宙に浮かび、先程の試合を思い出す二人。
『それでは戦闘を始めてください』
その思考を遮るかのように、真耶の声が届く。
そのアナウンスは試合開始を告げるもの。

「それじゃあ、行くぞ！」

一夏がその手にブレードを構えて、沙良に一直線に向かっていく。

――速い。でも、何処を狙ってるかがバレバレだよ

しかし、沙良はそれを避けようともせず、堂々と構えている。

そして、一夏はありえない発言を聞いた。

「この試合、棄権します」

それは、この試合の終わりを告げるもの。

「……え？」

一夏は振りかぶったブレードを止めて、呆けることしかできないのだった。

◆◇◆

「沙良！　いったいどういうつもりだ！？」

一夏が、僕に食い付いてくる。

どういうつもりだって言われてもねぇ。

「一夏、何のために決闘してたか忘れたの？」

一夏はポカンとした顔をしている。

え？　今まで考えてなかったの？

「ん？　そりゃあ、クラス代表を決め……あぁぁぁ！！」

一夏もようやく気付いたようだ。

「よかったね、一夏。二勝できたじゃん」

「さ、沙良、お前……」

「馬鹿だなぁ。さっきの試合で勝った方がクラス代表なんだから勝っちゃだめじゃないか。それに、一夏とは決闘する理由ないし、負けても何も言われないしね。おめでとう、クラス代表」

「うわぁぁぁ！」

一夏は頭を抱えて叫ぶのだった。

◆◇◆

翌日の朝のＳＨＲ。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そして、クラスの女子も楽しそうに盛り上がっている。もちろん僕も盛り上がってるほうに属している。その中で、暗い顔をしているのは一夏だけだった。

「先生、質問です」

一夏が挙手。

「はい、織斑くん」

「決闘において、棄権するなんて有りなんですか？」

「まだ根に持ってるの一夏？」

僕に押し付けようという魂胆はバレバレだからね。

こっちには、女子という味方が付いているから、今更何を言っても無駄だよ。

「そうだぞ、勝ったのだからいいではないか」

「そうですわ、一夏さん。貴方は、このセシリア・オルコット相手にどんな形とはいえ勝利を収めたのですから、クラス代表になるのは当然ですわ」

オルコットさんはいつの間に一夏を名前で呼び始めたんだろう。

箒も、そんな怖い顔でオルコットさんを睨まないの。

「これは、一夏のためでもあるんだよ？」

「どういうことだ、沙良？」

「ＩＳ操縦は実戦を積むのが一番の上達する道だからね。その点、クラス代表は他の生徒と比べて圧倒的に実戦回数が多いからね。あ

と、面白いし」

「最後のが本音だな！？　本音なんだな！？」

「もう、そんなに興奮しないでよ。冗談だよ」

「だよな、面白いとかそんな理由じゃないよな」

「前半部分が」

「やっぱそんな理由か！！」

「もう、なにそんなに興奮してんの？　何かあったの？」

「沙良のせいだろ！？」

一夏はわかってないなぁ。

この状況が一夏以外には求められてるってことが。

「いやあ、深水君はわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく世界で二人だけの男子がいるんだから、同じになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんは」

ほら、諦めなよ一夏。

「持ち上げるなら沙良も持ち上げてくれよ……」

何、呟いてんのさ。
てか、
「僕だって、副代表なんだから、自分だけが面倒くさいと思わないでよね」
そうなのだ。
僕が副代表になってしまったのだ。
くそぅ、あの時に負けておけばよかったのに……
「そ、それでですわね」
コホンと咳払いして、あごに手を当てているオルコットさん。いつものポーズはどうしたんだろう？
「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げるに違いありませんわ！」
あぁ、一夏と一緒にいる理由が欲しいのか。
どうしようかなぁ。
ここで僕が何か一言添えて、訓練に加えてもいいんだけど。
……うぅ、やっぱり箒が睨んでるよ。
「あいにくだが、一夏の教官は足りている。指導は沙良が行うし、相手は私が直接頼まれたからな」

僕の名前出すとかやり方が上手くなったなぁ。

「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ乃さん。Ａの私に何かご用事かしら？」

おおぅ、なんて喧嘩腰。
こういう言い方されたら……

「ら、ランクは関係ない！　頼まれたのは私だ！」

ほら、自棄になっちゃったじゃん。
もう仕方ないな。

「ランクで強さが決まるわけじゃないでしょ？　僕だって最初のランクはＢだけど、オルコットさんには勝ったわけだし。それに訓練機で出した最初の格付けなんて大した意味は持たないよ」

「沙良さん……」

あら？　僕まで名前呼びになってますね。

「座れ、馬鹿ども」

千冬姉がすたすたと歩いていってオルコットさんと箒の頭をばしんと叩いた。
僕はもちろん立ち上がるなんてことはしなかったから無事だよ？
ん？
一夏。何、下らなそうな事考えてるの？　顔に出てるよ？

バシン！

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

うわぁ痛そう……

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優越を付けようとするな」

そういう千冬姉だけど、その瞳は僕に「お前は例外だがな」と言ってくる。

もちろん、それが読み取れないような鈍さはしてないから肩をすくめることで返事としておこう。

さすがのオルコットさんも千冬姉には反論は出来ないみたい。でも、何か言いたそうな顔をしてるなぁ。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

千冬姉も外ではしっかりしてるよなぁ。

ドイツでも教官とか呼ばれて慕われてたし。

まぁ、部屋に入るとカリスマが一瞬で剥がれ落ちるんだけどね。

そういえば、一夏が寮に入ったってことは家はどうなってんだろう。

てか、寮長室ってどうなってるんだろう。どうせ服も脱ぎ散らかしてんだろうな。

ん、一夏も同じこと考えてたの？
やっぱり、家での千冬姉を知ってたらねぇ。

バシン！

「……お前たち、今何か無礼なことを考えていただろう」

「「いえ、滅相もありません」」

「……」

（一夏、なに棒読みで答えてんの！？）
（いや、沙良だって心こもってなかったじゃねえか！）

「ほう」

ドスッ

痛ったーい！！
角！　今、角で殴った！！
てか、一夏？　一夏！？　ちょっと返事して！？

「何か言いたい事はあるか？」

「す、すみませんでした」

「わかればいい」

こうして、一夏は理不尽な暴力の前に永遠の眠りにつくのであっ

た。

「死んでねえよ！？」

何、読心してんの？

てか一夏、後ろ

バシン！

「静かにしろ」

馬鹿だなぁ一夏。

「クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

もちろん、依存はありませんよ。

一夏は不満たらたらって顔してるけどね。

第十一話　クラス代表（後書き）

夏休みがもうすぐ終わってしまうよー

第十二話　授業＋監視（前書き）

前半は、まんま原作をなぞってます。

第十二話　授業＋監視

アリーナには生徒が整列し、ジャージ姿の千冬に、授業を受けていた。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、深水、オルコット。試しに飛んで見せろ」

沙良は、首から提げたペンダントに意識を集中させる。

（おいで、カイラ）

０．３秒の展開時間
その時間に、沙良の体に光の粒子が纏わりつきＩＳ本体として形成される。
ふわりと体が軽くなり、地面から数十センチ浮遊した形で留まる。
一度瞬きすると、その景色はハイパーセンサーにより解像度の高いものに変わっていた。

一夏とセシリアも展開が完了したらしく、その身を宙に浮かばせている。

「よし、飛べ」

その声をスタートの銃声のように沙良とセシリアはほぼ同時に急浮上を始める。
しかし、第二世代の沙良の機体が第三世代のセシリアの機体よりも先についてしまう。

少し遅れて一夏も浮上を始めるが、そのスピードは沙良やセシリアと比べ格段に遅いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力では白式のほうが上だぞ」

昨日、教えを受けたばかりの急浮上を、一日で物にしろというほうが無理があるとは思うが、そこは千冬には関係の無いことなのだろう。出来ないなら出来ないでお叱りを受けなければならないのだ。

「一夏、イメージはあくまでもイメージでしかないんだ。自分のやりやすい方法ってのを見つけたほうがいいよ」

「そう言われてもなぁ」

そういい、頭をかく一夏。

「一夏さんは、自分にあったイメージをまだ作れてないだけですわ。ずっと飛んでいると感覚だけでも掴めるようにはなりますわ」

「大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いているんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？　反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくてもいい」

お手上げとばかりに手を上げる一夏を見て、沙良とセシリアは笑みをこぼす。

「今日も訓練手伝ってあげるよ。今日のおさらいだね」

「助かる」

沙良は、決闘から一夏によく訓練をつけていた。
目的は、一夏にＩＳ操縦に慣れさせるため。
もちろん、沙良にも機体のデータ取りというメリットはあるが、どう考えても、一夏のほうに利がありすぎる。

しかし、沙良は喜んで一夏の訓練に付き合っていた。
身内にはとことん甘い。
この短い期間で一組の生徒が下した評価だ。

「あ、あのお二人とも――」

『一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りて来い！』

セシリアが何か言おうとした瞬間、通信回線から怒声が響く。
見ると、箒が真耶からインカムを奪ったらしい。

「すごいな、ハイパーセンサー。この位置から箒のまつげが見えるぞ」

一夏は少しずれた観点で感心していた。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々ＩＳは宇宙空間での移動を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度は見えて当たり前ですわ」

沙良の機体シークエストシリーズには、それに加えて、光がまったく無いところでも活動できるようパッシブ遠赤外線方式による赤外線捜索追跡システムが導入されている。
わかりやすく言ってしまうと、ナイトビジョンである。
元々、戦闘用という概念ではなく、沙良の『深海におけるＩＳの運用』という論文に始まりの基礎を置くシークエストは、深海に対応できるようにという機能が多く含まれている。

「織斑、深水、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地面±〇センチ。合格ラインは、地表から十センチだ」

「了解です。ではお二人とも、お先に」

言って、すぐさまセシリアは下降の体制に入る。そのスピードは代表候補生の名に相応しいものだった。

「いいお手本だね。やっぱり代表候補生は伊達じゃないね」

下では完全停止も成功したのか、小さい拍手が沸いていた。

「沙良、先に行くぜ」

一夏も下降の体制に入る。推進器が物凄いスピードを生み出す。
生み出した結果が

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

墜落だった。
その光景を、呆れの目で見ていた沙良だが、下の様子が落ち着いてきたので、下降の準備に入る。

「行くよ」

沙良は地面に落ちる。
そのイメージは、背の推進器で海を真下に泳ぐように。
周りの景色が一瞬で変わる。
徐々に近づく地面に焦ることは無く、沙良は体制を整えて体を捻るようにして勢いを殺し、スラスターを噴かしその身を宙に止めた。

「四センチ……です」

その真耶の一言に、周りの生徒がざわつく。
先ほどのセシリアで八センチだったのだ。
それの二分の一。
それは、沙良の操縦技術がセシリアを上回っていると言ってもいい。
そのざわつきを千冬は一喝する。

「このぐらい出来るようにならねば代表なんて夢のまた夢だ。深水も、これが出来たからと気を抜くなよ」

その千冬の一言に、場の空気は元に戻る。
なぜか言い争いをしていた二人を除いて。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやってろ」

千冬は箒とセシリアの頭をぐいいっと押しのけて、一夏の前に立

つ。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

一夏は正面に人がいないことを確認してから、突き出した右腕を左手で握る。

強く右腕を握り締める左手。

一夏の集中力が極限に達したとき、手のひらから光が放たれた。

それが像を結び、形として握られる。

「遅い、〇．五秒で出せるようになれ」

その千冬の一言に、一夏は項垂れる。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏のときのように光は放出することは無く、小さな爆発のように光ると、その手には狙撃銃《スターライトｍｋ？》が握られていた。

速い。
それは射撃完了まで一秒もかけることなく展開されている。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏めるために必要な――」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

千冬の前では如何なる反論も許されないのか、一睨みされただけで、口を噤むセシリア。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

いきなり振られ、反応が遅れたセシリアだが、代表候補生らしく一瞬で銃器を『収納』する。そして新たに近接用の武装を『展開』

しかし、手の中の光は中々に像を結ばず、その場で空中を彷徨っている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

武器の名前を叫ぶことにより、その光は収束し、武器として構成される。

しかし、それはイメージを纏めることの出来ない『初心者』が主に使う手段であり、代表候補生のセシリアが、それを使わねば展開できなかったというのは、かなりの屈辱だったであろう。

それを千冬は躊躇無く抉る。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！　ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

「まぁいい。深水、次はお前だ。武装を展開しろ」

沙良は集中し、イメージを固め、武装を展開する。

その自然体で立っていた沙良の右手にはいつの間にかアサルトライフルが握られていた。

「……次は右手に接近、左手に、違う銃器を呼び出せ」

沙良は姿勢を動かすことなく、アサルトライフルを『収納』し、

右手にブレードを、左手にスナイパーライフルを『展開』する。

その展開時間は〇・五秒は軽く下回っていた。

その左右違う系統を同時に展開するという技術を見せた沙良に、千冬は内心はどう思っていようと、さも出来て当たり前のような態度を見せる。

「要はイメージだ。イメージが確立できていればこのような展開が可能になる。これには慣れも関わってくる。訓練あるのみだ」

千冬は、チラッと時計を見ると、手を叩き、注目を集める。

「時間だ。今日の授業はここまでとする。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏はチラッと箒を見るが顔を逸らされてしまう。セシリアもその姿が見えない。

ならばと沙良の姿を探すが、先ほどまでいたはずの沙良が見当たらない。

一夏は諦めて、一人で後片付けをするのであった。

◆◇◆

「で、何のようだ深水」

千冬は、授業が終わり次第、沙良に声をかけられ、面談室に呼び出されていた。

この面談室は、政府の人間や、企業のお偉い方などが利用することも多いため、盗聴、盗撮対策がしっかりとしてある。

そこに千冬を呼び出すということは、ただの相談とは思えない。

沙良も座ることはせず、入り口付近に立ったままだ。

千冬も入り口付近に寄りかかり沙良が口を開くのを待つ。

「ねえ、千冬姉」

「……何だ、沙良」

それは、学園での教師と生徒での話し合いではない。

姉弟としての意見を求めているのだ。

「最近、誰かに監視されてる気がするんだけど、千冬姉は何か知ってる？」

「……それは、学園の人間を疑ってるというのか？」

千冬は、質問をあえて質問で返すことによって、この件については何も関わってないということを示す。

「じゃあ……こう聞くね。今の生徒会長、信頼できるの？」

「なっ……」

それは暗に生徒会長から、監視を受けてるといっているようなものである。

「僕も、そこまで気配に聡いわけじゃないから、尻尾を掴んだわけ

じゃない。けど断定するよ。何の理由かはわかんないけど、生徒会長は僕の動向を監視している。一夏ではなく、僕を」

はっきりと言い切る沙良に、千冬は動揺を隠せない。

「……目的は？」

「それが、わかんないから千冬姉に相談したんだけどね」

一夏ではなく沙良を監視している。

それはつまり、沙良のことを少なからず知っているということだ。

千冬は、現生徒会長、更識楯無が暗部に深く関わっていると知っている。

だからこそ、安易に信頼できると言う訳にはいかなかった。

千冬は他の人間よりも沙良の重要さを理解している。

あの、束からＩＳについての教えを受け、スペインにおいてたった一人でＩＳの雛形を完成させた人間。

そして、世界でもトップクラスのＩＳ搭乗時間を誇り、卓越した操縦技術を持つ人間。

技術者としても、操縦者としてもそのレベルは一般人とは比較にならない。

沙良の身柄一つで必ずスペインという大国は動く。

利用価値など掃いて捨てるほどある。

沙良もそれがわかっているからこそ、こうして千冬に相談しに来ているのだろう。

しかし、千冬には答えることが出来なかった。

信頼できると言って、更識に取り込まれてしまうかもしれない。

信頼できないと言って、無駄な不安を植えつけてしまうかもしれ

ない。
その答えが、どういう結果を招くかわからないから。
しかし、入学前に約束したのだ。

沙良が笑って生活できるようすると。

だからこそ、答えではなく、別のものを沙良に渡す。

「……私では、更識が何を持って動いているかはわからない。だから、こう言っておこう。何かあったら迷わず力を行使しろ。それに伴う責任は全て私が背負う」

それは何を行ってもよいとする許可。
沙良に何かあってからでは遅い。
しかし、千冬がずっと傍に居られる訳ではない。
自分で何とかしろと言うしかない。
だから、行動に制限は付けないと言っているのだ。

それは千冬の覚悟。
自分には立場というものがある。それは教師という枠を出ることは無い。
それでも、千冬は責任は負うと言っているのだ。
沙良もその意味がわからないような人間ではない。
だから、ここは大人しく頷くことで場を収めた。

「わかった。その時は躊躇しない」

「ああ、それでいい。何かあったら私に言え」

「うん。わかった」

こうして、相談事を終えた沙良は、面談室から出て行く。
その時に、周りを探るような素振りを見せていたため、先ほどの会話中も、監視されてないか気を使っていたのだろう。
会話内容を聞かれていなくても、面談室に、千冬と二人で話しているというだけで、考えられることはある。

「まったく、面倒くさいことになったものだ」

千冬は、これからの学園のことを思い、頭が痛くなるのだった。

第十二話　授業＋監視（後書き）

一応、予定より早く会長は出そうと思ってます。
まぁ予定なだけなんで、出るかどうかはわかんないですけど

第十三話　貧乳、襲来＋パーティー（前書き）

ついにチャイナからあの子が登場です。

第十三話　貧乳、襲来＋パーティー

「ふうん、ここがＩＳ学園ね……」

ＩＳ学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣合いなボストンバッグを持った少女が佇んでいた。

金色の髪留めで結ばれた黒髪は、まだ暖かな夜風になびいている。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

少女は、上着のポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出す。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれがどこにあんのよ」

文句を言いながら、紙をポケットにしまう。

中で、くしゃっと音がしたが、すでにくしゃくしゃな物を気にしたって仕方ない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

ぶつぶつと文句を言いながらも、その足は歩みを止めない。

思考より行動という少女のスタンスがよくわかる。

学園内の敷地をわからないなりに歩く。その視線は人影を探しているのかきょろきょろと動いている。

とはいえ、夜になって校内を出歩いている生徒は居ないのだろう。

歩き続けて既に二十分が経過していた。

（あーもー、めんどくさいなー。空飛んで探そうかな……）

しかし、あの、電話帳三冊分はあるであろう学園内重要規約書を思い出し、やめる。
それからまた歩き続けると、電気のついている建物が見つかった。

「あった……ふう、疲れたぁ」

少女はふらふらとその建物に近づいていくが、よく見ると本校舎には見えない。
しかも、少女が建物をじっと見ていると、

「あぁ！　電気がっ！」

電気が消えてしまう。
やはり、目的の建物ではなかったのだ。
少女は肩を落とし、来た道を引き返そうとする。
そのとき、声が聞こえた。

「ん？　誰かいるの？」

視線をやると、生徒らしき人影が、先ほどの建物から出てきたところだった。

――ちょうどいいや。場所聞こっと。

少女は小走りで生徒に近づき、その姿を目に入れると、大きな声を出した。

「すいませーん。ちょっといいで……さ、沙良！？」

「……鈴？」

鈴と呼ばれた少女は、幼馴染である沙良を見て驚きの表情を作る。
しかし、それは長いこと続かなかった。

「鈴、久しぶり」

沙良が抱きついてきたのだ。

「あんたも相変わらずね。その抱きつく挨拶」

えへへと笑う沙良に、鈴はつられて笑顔を見せる。

「鈴は何でここにいるの？」

「ふふん、あたしはここに転――」

「本校舎って正反対だよ？」

「……え？　そっち？」

「だって、ここにいるってことは転入しに来たんでしょ？」

「ええ、まぁ」

てっきり、何で生徒じゃないのにＩＳ学園にいるのかと聞かれたと思った鈴だったが、実際聞かれたのは、何で、この場所まで来てるのというものだった。

相変わらず、一だけで十まで理解して、三ぐらいを聞いてくる男だ。

「受付って、正面ゲートからグラウンド迂回してまっすぐだよ？何で整備棟まで来たの？」

「あはは、迷っちゃって……」

「ああ、鈴だもんね。いいよ、案内してあげる」

鈴だからという理由に納得いかないものを感じるが、せっかく案内してくれるというのに甘えない手は無い。

「沙良もＩＳ学園に来てたのね」

「よく言うよ、代表候補生だから知ってたでしょ？」

ギクリといった表情を見せる鈴に、沙良は笑みをこぼす。

「表情に出すぎ」

「そ、そういう沙良だってよく私が代表候補生って知ってたわね」

「中国でモデルみたいなことまでやってたら、そりゃ知ってるよ」

「あははー。そうそう、一夏って何組かわかる？」

鈴は、もう一人の幼馴染である少年を気にする。

「一組だよ。それでクラス代表」

「よくあいつが代表になれたわね」

「ふふん、僕が頑張ったからね」

「……あんたも相変わらずね」

身内にはとことん甘いが、その分厳しくもある。

鈴もいままで沙良の厳しさに助けられてきたことは多い。

「あれが本校舎だよ。そこまでついていったほうがいい？」

「ここで大丈夫。わざわざ、ありがとねー」

「あ、そうそう。一夏には黙っといたほうが良いの？」

走りかけた鈴を呼び止め、沙良が声をかける。

「もちろん！」

それに笑顔で答えた鈴は、本校舎に走っていくのであった。

◆◇◆

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

「ついでに深水くん副代表おめでとー！」

誰かの掛け声とともにクラッカーが乱射される。
クラッカーは沙良と一夏に降りかかる。
集まった生徒は皆、楽しそうな顔をしている。
一夏を除いて、だが。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

先ほど、相槌を打っていたのは二組の生徒だ。ここには一組の人数を超えて人が集まっている。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふん」

箒は機嫌悪そうに、お茶を飲む。
一夏は箒が機嫌の悪い理由がわからず、首を傾げるばかりである。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生の織斑一夏君と深水沙良君に特別インタビューをしに来ました～！」

新聞部と名乗る女生徒が食堂に入ると、周りの生徒のテンションはまた一段と上がっていく。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

「あ、どうも」

沙良は丁寧に名刺を受取り、自らも名刺を出そうとした。

しかし、制服のため名刺を持ち歩いていないことに気づき、慌てて手を引っ込めた。

その動作に気づき、何か言おうとした薫子だったが、沙良の苦笑いに感じることがあったのか、ターゲットを一夏に移す。

「ではではずばり織斑君！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーを一夏に向け、薫子は無邪気な子供のように瞳を輝かせる。

一夏は乗り気ではないものも、その無邪気な瞳の期待は裏切れなかった。

「えーと……まぁ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか」

一夏のコメントは薫子のお気に召さなかったようだ。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

薫子の反応に周りの生徒はうんうんと頷く。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして、次は深水君、インタビューしても良いかな？」

「ええ、大丈夫ですよ」

沙良は、テーブルに用意されているお菓子を食べる手を止めて、薫子に向かい合う。

「副代表になったきっかけとも言える、あの決闘。あれについてのコメントがいっぱい届いてるから何個か答えてもらっても良いかな？」

「答えれる範囲なら」

「まず、『あの機体はなんと言う機体ですか？』」

「この子は、スペインの第二世代機シークエストのカスタムです。強固な装甲と莫大なエネルギーが特徴です」

「ほほう、シークエストのカスタムと」

薫子はメモに会話の内容を書き込む。

「じゃあ、次ね。『代表候補生のオルコットさんに勝利を納めたわけですけど、ＩＳ学園に来るまでに何らかの訓練はされたんですか？』」

「そうですね。機密も入っちゃうので詳しくは言えないですけど、回答としては『ＹＥＳ』です」

「ふむふむ、では次の質問。『彼女は居ますか？』」

「残念ながら、今まで研究者としても活動してたので、良い出会いが無くて」

この発言には、スペインの代表候補生たちが憤慨するかも知れないが、沙良の鈍感さの前には、そういう出会いなどは無かったようである。

「はい、次の質問、『好きな人は居ますか？』」

「まだ、素敵な人は見つかってないです。さっきから質問がプライベートなことに変わってきていません？」

「気のせい気のせい。では、最後の質問です。『二年三組の二条初音です。あの決闘を見てから貴方のことが頭から離れません。可愛い顔立ちなのに、凛々しくＩＳを操る貴方に胸がときめいてしまいました。お付き合いしていただけませんか？』……ってなんだこりゃ！？　誰、こんな抜け駆けしてるの！？」

「お気持ちはうれしいですが、ごめんなさい」

「答えるんかい！！」

「なぜ、関西弁ですか」

「深水君、インタビュー慣れしてるよね。こちらの欲しい事言ってくれるし、対応も慣れた感じだし」

薫子は口でペンを咥え、ぷらぷらさせる。

「まぁ、向こうではいっぱいインタビューを受けてきましたから」

「そっか、男性操縦者だもんね」

薫子は男性操縦者だからインタビューされたのだと勘違いしたが、実際は孫馬鹿のS・Q社の社長のせいで、シークエスト発表時から、開発者としてインタビューを受け続けてきただけの話である。

「じゃあ、最後に、クラス副代表になった感想をどうぞ！」

「自分、不器用ですから」

「被せてきた！？」

薫子はけらけら笑うと、カバンからカメラを取り出した。

「とりあえず、ピンで写真良いかな？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「それじゃあ取るよー。『ｕｎｏ　ｄｏｓ　ｔｒｅｓ』」

スペインでよく使われるフレーズに合わせてシャッターが切られる。

「ほんと、気を利かせますね。本当、記者の鏡ですよ。」

「えへへ、それほどでもないよ。じゃあ、次は織斑君との写真もい

いかな？　おーい織斑君」

そんなに嬉しかったのだろうか、沙良は返事をする前に一夏を呼び出す薫子の姿を見て、笑みをこぼす。

「呼ばれましたか？」

一夏が両側に箒とセシリアを連れてやってきた。

「深水君と織斑君のツーショット貰えるかな？」

「ああ、いいですよ」

一夏は沙良の横に立つ。

小柄な沙良と大きくは無いが平均よりはある一夏が並ぶと周りの女子が騒ぎ出した。

しかし、沙良と一夏は意識からその声をシャットダウンした。

聞いてはいけない気がしたのだ。

案の定、横では周囲の盛り上がりを聞いてしまったセシリアが「非生産的ですわ！？」とうろたえている。

「いっくよー。はいチーズ」

カメラのシャッター音が響き、一瞬だけ固まった空気が穏やかになる。

沙良は、その場を動き、セシリアに近づくと、耳元でこう囁いた。

「一夏と二人で取ってもらいなよ。専用機持ちのツーショットだからたぶん断られないと思うよ」

セシリアにとってそれは天使の囁き。
セシリアに親指を突き出し、お菓子の山に向かう沙良に、親指を同じように突き出す。
今、セシリアには沙良が天使のように見えているだろう。
早速、薫子に話しかけようとする。

「あの、おねが――」

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

お願いを途中で遮られてしまったが、薫子が小声で、「ちゃんと深水君から聞いてるから」と囁くと、セシリアは意気揚々としゃべりだした。

「コホン、ではまず、わたくしと一夏さんが――」

「ああ、長くなりそうだからいいや。写真だけ貰おう」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたってことにしておこうかな」

「なっ、な、ななっ……」

そうニヤニヤしながら言う薫子に、セシリアは顔を赤くする。

（この人、絶対わかって言ってますわね！？）

「はいはい、とりあえず二人で並んでもらえるかな。写真取るから」

セシリアは来たとばかりに一夏の横にスタンバイする。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらうよ。あ。握手とかしてるといいかも」

「そ、そうですか……。そう、ですわね」

セシリアはチャンス到来とばかりに自分の手を見つめるが、自分から握手を求めることが出来ない。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

薫子は、一夏とセシリアの手をとって、強引に握手の形を作る。

赤面したセシリアは、薫子がウィンクしたのを確かに見た。

そのとき、セシリアは新聞部を今後も贔屓にしようと決めたのである。

もちろん、薫子も親切心でやっているわけでもない。

沙良から「セシリアは払いが良さそうだよね。顧客につけられたら美味しい思いが出来そうだと思うなぁ」とわざわざ聞こえるように呟かれたのだ。

それを実行に移しただけのこと。

薫子の頭の中では、利益の試算がすでに始まっていた。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１×２４は～？」

「え？　えっと……２？」

「ぶー、７４．３７５でしたー」

カメラのシャッターが切られる。

「……なんでみんな入ってるんだ？」

恐るべき行動力で一組の半分近くの生徒が一夏とセシリアの周りに集結していた。

残りの半分は、お菓子を食べている沙良の周りで餌付けのような状態になっていた。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

クラスメイトはセシリアを丸め込んでいた。

「う、ぐ……せっかく沙良さんにいただいたチャンスを……」

苦虫を噛み潰したような顔をしているセシリアを、クラスメイトはにやにやとした顔で眺めていた。

こうして『クラス代表副代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いたのだった。

だが、沙良にとってのパーティはまだ終わることは無かった。

第十三話　貧乳、襲来＋パーティー（後書き）

このパーティのお話は次のお話の最初まで続きます。

第十四話　ソフィアの試練（前書き）

なんと、オリジナルしか出てこないという。
そして、いつもより変な方向に走ってます。
これが、徹夜のテンションなのか……

第十四話　ソフィアの試練

沙良はあの後パーティーの後片付けを申し出たのだが、「主役は大人しくしてなって」の一言で大人しく自室へと向かっていた。

「まぁみんなの気持ちは嬉しいし、今日は空気を読んだのか、監視の視線も無いし、部屋でゆっくりしよう」

沙良は、一人部屋の自室でゆったりと休むことを考え、途中の自動販売機で炭酸飲料などを入手して、ご機嫌で鼻歌を歌っていた。

片手には、先ほどのパーティーで余ったお菓子が大量に詰め込まれている。

一夏がセシリアとが二人で写真を撮ろうとしているときに、沙良はひたすらお菓子を食べていた。そこで、余ったお菓子を沙良に渡してあげようと女子が結託し、一夏との写真に入らなかったグループは、沙良をお菓子で餌付けしながら、お菓子をかき集めていたのだ。

そんなことは露にも思わない沙良は、お菓子の袋と、ジュースの入った袋を嬉しそうにギュッっと抱きかかえて寮を歩いていく。

このときに盗撮された写真は、高値で取引されたらしい。

自室の前に着き、いつものように扉を開け、電気をつけようとした。しかし、なぜか電気は元々ついており、ベッドのほうから話し

声が聞こえてきた。
沙良は気づかれないように様子を伺う。
「ちょっと待って、この写真は私持ってないよ!?」
「ふふん、いくら先輩とはいえど、この写真だけは譲りませんよ。わたしがネガも持ってるから入手は不可能です」
「いーな、リナ。じゃあさ、こっちの寝ぼけてる写真とそっちの抱き枕抱いてるやつトレードしよーよ」
「うーん。まぁいいよ。はい、抱き枕」
「じゃあ、私は最終兵器出すから、その写真をくれない?」
「先輩の最終兵器ですって!? それってまさか!?」
「そう、あの伝説のうさ耳をここに出すわ」
「ゴクリ」
「どうかしら、この写真とそのネコミミ付けて猫とお昼寝してる写真をトレードしない?」
「くっ……! この写真は猫とお昼寝してたところにネコミミを付けてまで撮影した脅威の一枚。そうそう渡すわけには……。でも、うさ耳は研究所の門外不出の逸品。研究所に入れるソフィ先輩しか手に入れることは出来ない。く、私はどうしたらいいんだ」
「そう、まだ悩むの。なら、これも付けるというならどう?」

「こ、これは今は伝説となったミドルスクールの写真！　しかも水泳の授業！」

「ふふふ、これはその時に一緒に居た私しか持ってない写真よ？　これ、欲しくない？」

「先輩」

「何？」

「わたし、あなたと出会えてよかったです」

「私もよ」

「……」

沙良はベッドの上に寝転び、写真をトレードしている三人を見て、今まで浮かべていた笑顔を、能面に切り替える。

「へー、その写真をどこで手に入れたか、じっくりと話し合う必要がありそうだね、ソフィ？」

沙良は、出来るだけ低い声を出した。

「へ？　え、……せ、セラ？」

「あ、セラ……あはは」

ソフィアと、リナは写真を後ろ手に隠し、ごまかし笑いを浮かべる。

「ソフィ？　ＩＳ学園に居て、どうやって写真を手に入れたかは今は置いておくとして、とりあえず、そこの写真は全部燃やせ僕の目の前で」

「そんな御無体な！？」

「そ、そうよセラ。写真ぐらい良いじゃない」

真っ白になるソフィアを庇うため、リナがフォローに入る。

「リナも、写真燃やすんだよ？」

「御無体な！？」

しかしそれは、被害者を増やすだけに終わってしまった。

「まぁまぁ、セラさん、落ち着いて。ね？」

「フィーナ、君もここにいる時点で同罪ってわかってるよね？」

フィーナと呼ばれた少女は、ギクリとして、動きを止めた。

その動きに、思うことがあったのか、沙良は追及しようとする。

「ねえ、フィーナ、もしかして、君も――」

「待って、フィオナは何も関わってないわ！　全てはわたしが悪いの！」

「リナ……」

友をかばう少女。一見素晴らしい光景だが、やってることはコレクションの秘匿だ。実に見苦しい。

「もう、いいよ。写真は各自燃やしといて。僕は疲れてるの。休ませてよ」

沙良はそう言って、持ってきたお菓子とジュースを見せる。
それを見た三人は、沙良が言いたいことを理解した。
出ていけと。
そして、理解したが、行動には移さなかった。

「邪魔しなかったらいいんでしょ？」

ソフィアがいけしゃあしゃあと言い放ったので、沙良は諦めて、ベッドにダイブする。
お菓子とジュースはもちろん机の上に置いている。

「もう、どっから入ったのさ」

それは、今更過ぎる発言。

タイミング的には、最初に言うべきことだろう。

「堂々と正面から」

沙良はこの発言に頭を抱える。

「一応、セラが副代表に就任って聞いたからお祝いもかねて来たのよ。誰も居なかったからついハッスルしちゃったけど」

「はぁ、僕は今から会社に送るデータを纏めるよ。リナとフィオナは遅くなる前に部屋に戻りなよ」

「あれ？　ソフィ先輩は？」

「なんでわたしたちだけ？」

「せっかくだから機体のデータだけ取ろうと思ってね」

「なるほど、じゃあ、終わるまで待ってる」

「わたしもー」

「消灯過ぎちゃうけど、外泊取ってるの？」

「それを言うならソフィ先輩だって」

「あら、私は取ってるわよ？」

「……え？」

ソフィアの何気ない一言に固まる二人。

「上級生が下級生の寮に来るときは大抵外泊の許可を取ってから来

るものだからね」

沙良が一言添える。

「わ、わたしも外泊とって来る！」

「待って、リナ。わたしも」

「一年の寮長は織斑先生だよ？」

「「そろそろ、部屋に戻ります」」

そのリナとフィオナの変わり身の早さに、千冬の影響力の強さを改めて実感する。

「じゃあね。Ｂｕｅｎａｓ　ｎｏｃｈｅｓ」

「Ｂｕｅｎａｓ　ｎｏｃｈｅｓ　Ｓａｒａ」

「おやすみなさいセラさん」

リナとフィオナが名残惜しそうに出て行くのを見届けた後、沙良はソフィに視線を向ける。

「最初から泊まる気で来てたでしょ？」

「あれ？　やっぱりバレてた？」

ソフィアのその口調はさっきまでと違い、くだけたものとなっていた。

「パジャマ持ってきといてよく言うよ。まぁいいけどね、ソフィだし」

その言葉に嬉しくもあり、異性として認識されてないことに悲しくもあり複雑な気持ちのソフィである。

「とりあえず、ジュゴン出して」

沙良はソフィアの専用機、シークエストケートゥスシリーズ【ジュゴン】のデータを閲覧していく。

沙良の前にはどんどん空中ディスプレイが展開され、その数は二桁にまで上っている。

キーボードを叩く沙良の指は、残像すら見える。

「前、見たときとそう変わりは無いね」

「前から一回しか使ってないからね」

「じゃあ、後五時間稼動したらデータを出しに来て」

沙良は、S・O社に送るための資料をまとめ始める。

「ソフィ、そっちのデータの報告書は自分で作って」

「はーい」

ソフィは、先ほど取られたデータをまとめる。

それは、かなりの量があるが、あらかじめ沙良がデータごとにまとめてくれていた為、幾分かスムーズに終わらすことが出来た。

ちらと横を見ると、沙良がパソコンと向かい合って戦っていたため、ソフィアはまとめたデータを、先に自分名義で送っておく。
ふと手持ち無沙汰になったソフィアは、テーブルに放置されたお菓子を一つだけ取り出し、沙良の前においておく。余ったお菓子は、棚にしまい、ドリンクも冷蔵庫にしまっておく。
沙良のほうを見ると、早速お菓子に手を付けたようだ。
相変わらずの食い意地にふと笑みがこぼれてしまう。

「んー、終わったー！」

「お疲れさま」

沙良はジュゴンをソフィに返す。
それをソフィアが受け取ると、沙良はのそのそと寝巻きに着替える。
上着をハンガーにかけてると、ソフィアが顔を赤めていた。

「私がいるんだから恥じらいを持とうよ」

「ソフィだから大丈夫」

ソフィアは何か言おうとしたが、沙良がそのままベッドに倒れこむようにして飛び込んだので、何も言えなくなる。

「セラ、寝ちゃうの？」

「すること無くなったしね」

時間を見てみればすでに消灯から一時間は過ぎている。

「そういえば、ベッド一つしかなかったんだっけ」

沙良はどうでもいいことのように呟く。

「そうね。いいよ、私が床で寝るから」

「何言ってんの？」

その発言にソフィアが「何言ってんの？」という顔になる。

沙良はそんなことも気にせず、ベッドに潜り込むと、ベッドの横をぽんぽんと叩いた。

「一緒に寝ればいいじゃん。ベッド大きいんだし」

「……へ？」

その言葉に、一瞬フリーズするソフィ。

「えええぇぇぇぇぇ！？」

「何に驚いてるのさ？　早く寝巻きに着替えなよ」

その全く動揺しない沙良にソフィは悔しくもあるが、今は逃してはならないチャンスが到来してるのだ。嬉しすぎてニヤニヤが止まらない。

すぐさま、洗面所に向かい、一瞬で着替えを済まし、沙良の下に

帰ると、沙良は端によって眠る体制に入っていた。

「横、失礼しまーす」

恐る恐るベッドに身を潜らせる。

「どうぞー」

沙良の眠たそうな声が耳元で聞こえ、急に意識してしまう。

（あああぁぁぁぁぁ恥ずかしいよ!!　今更だけど恥ずかしいよ!!）

悶々とする思考を追い払って、煩悩の滅却に精神を傾ける。

すると、横から、寝息が聞こえてきた。

もう寝たのかと、何気なくそちらを向いたのが失敗だった。

（――――っ！　落ち着け私。ここで襲ってしまったら今まで築いてきた、セラとの信頼関係がっ!!）

その寝顔に、ノックアウト寸前のソフィア。

しかし、試練はまだ終わってなかった。

「んぅ」

「っ!!」

普段から抱きつき癖のある沙良が、寝るときに抱き枕を愛用していたとしても何も問題ではないだろう。

ただ、今回は、抱き枕が普段ある位置にソフィアがいたと言うだ

け。

つまりは、ソフィアは、沙良に抱きつかれていた。

（くっ！　神は私にどうしろって言うんだ！？　この状態で眠れるわけが無いじゃん！）

ソフィアはいろいろといっぱいいっぱいだった。

前回、似たような状況で鼻血を出してしまったため、今回はそのあふれる愛を抑えなければならない。

（普通、逆じゃん！　私がセラに抱きついて、セラがドキドキするのがテンプレートじゃないの！？　男女逆でしょ！？）

しかし、その叫びは届くことは無い。

沙良は女だけの環境に長いことといたから、女性に耐性が出来ているので、たいしたことでは恥ずかしがらなくなっていた。

（裸見られたときも、「風邪引いちゃうよ？」って言われたっけなぁ）

本当に女性として見られているのかが不安になってきた。

（むしろ、あの研究所の人たちを普通だと認識してるのかな。日常茶飯事的に沙良を着せ替え人形にしたり、一緒にお風呂に入ろうとしたり、やりたい放題だったからなぁ。あそこの人間は）

そう思うと、沙良がこうなってしまったのも理解できるような気がする。

ソフィアは思考に余裕が出来たのか、沙良のほっぺをつんつんとつついた。

「むぅ」

すると、その腕が取られて。

「……」

「むふー」

頬摺りされる。

「すーーはーーすーーはーー」

ソフィアは必死に深呼吸していた。

（頬摺りとか、反則技でしょー！！）

ソフィアは結局眠れることなく、朝を迎えたのだった。

第十五話　中国、恋敵との顔合わせ（前書き）

ちょっと展開が遅いかなぁ。
次から巻きで行くか巻きで。
シャルとかラウラとか早く出したいし。

第十五話　中国、恋敵との顔合わせ

「沙良聞いたか？　隣のクラスに転入生が来るらしいぞ」

一夏に話しかけられた沙良は、鈴のことを思い出す。

一夏の言っている転入生とは十中八九、鈴のことだろう。

しかし、黙っておくと言ったため、ここは知らない振りをするのがベストだろう。

「へー、転校生？　こんな時期に」

「ああ、なんでも中国の代表候補生らしい」

鈴だ。

確実に鈴だ。

沙良はそう確信した。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

同じ代表候補生として思うことがあるのか、セシリアは手を腰に当てるいつものポーズで話に入ってくる。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐほどのことでもあるまい」

箒も、いつのまにか自分の席から一夏や沙良の席に移動してきた。

「どんなやつなんだろうな」

一夏はセシリアを見ながらそう言った。
大方、代表候補生ということで似たところでもあるんだろうかと思っているのだろう。

「気になるの？」

「ん？　ああ、少しはな」

「ふん……今のお前に女子を気にする余裕など無いだろう。来月はクラス対抗戦が控えているのだぞ」

「そう！　そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ」

その発言に、眉を顰める箒だが、自らが専用機を持っていないため、訓練に参加することは難しい。

「まあ、やれるだけやってみますか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「そうだよ。僕のフリーパスは一夏にかかってるんだからね」

セシリア、箒、沙良が好き勝手言うが、一夏としては簡単に返事が出来なかった。

「織斑くん、頑張ってね」
「フリーパスのためにも！」
「でも、今年は専用機持ちが多いらしいからどうだろう」
「大丈夫だって、多いって言っても第三世代はそうそう居ないんだから」
クラスメイトがわいわいとはしゃいでいると、水を差すような言葉がかかる。
「――その情報、古いよ」
その声は教室の入り口から聞こえた。
「二組も専用機持ち、しかも第三世代機乗りがクラス代表になったの。そう簡単に優勝は出来ないから」
そこには、鈴音が腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた。
「鈴……？　お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
トレードマークのツインテールを揺らし、鈴音は小さく笑みを漏らす。
「何、格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ？」

「……はぁ、あんたも相変わらずね。もう少し沙良を見習ったら？」

「どういうことだ、沙良」

「あぁ、転入手続きのときに挨拶は済ましたからね」

「なんで教えてくれないんだよ」

「そのほうが面白くなるかなぁって思ってさ」

「本当にあんたら、相変わらずね」

呆れたように鈴音は肩をすくめる。

「まぁ私は早く戻るわ。沙良から担任が千冬さんって聞いてるし」

そういい、教室に帰ろうと振り返ったのだが、

「残念だが、手遅れだ。もう少し早くに行動を起こせ」

「ち、千冬さん……」

その名で呼んだ瞬間に、頭に出席簿が振るわれる。

「織斑先生だ。ほら、さっさと戻れ」

「すみません……」

鈴音は、ドアを千冬に譲り、教室を出ると、一夏に指差して吼え

る。

「一夏、覚えてなさいよ！　あんたが喋ってたから、入れる空気になるまでずっと待ってたんだから！　あんたのせいなんだからね」

そう言って、ドアの向こうに消えていった鈴音に対して、皆が「そんな理不尽な」と感想を持ったのである。

「ＳＨＲだと言う事を忘れるな」

千冬の一声で、クラスの意識は鈴音から千冬へと戻る。

「あいつ、ＩＳ操縦者だったのか」

その一夏のつぶやきに、セシリアと箒が問い詰めようとしたのか、席を立とうとした。

「座れ、馬鹿共」

しかし、その頭に出席簿が食い込み、それは叶わなかった。

千冬の出現により、質問攻めを免れた一夏は、授業中に鈴音のことに思考を傾けるのだった。

◆◇◆

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みになると、セシリアと箒は一夏に詰め寄る。

「なんでだよ……」

身に覚えの無い罪で訴えられている一夏は、苦笑するしかない。

「鈴のことじゃないの？」

「それでなんで俺のせいなんだ？」

一夏は怒られている理由がいまいちわかってないようだが、沙良に「女の子って言うのはそういう生き物なんだよ」と言われ、なんとなく頷いておいた。

「まあ、話なら飯食いながら聞くから」

「む……。ま、まあお前が言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

そのほかクラスメイトが数名一夏たちについていく。

「じゃあね、一夏。また後で」

「おう、沙良も頑張ってな」

沙良が、お弁当を持って、食堂と違う方向に向かい出すのを見て、

箒が声をかける。

「おい、沙良はどこに行ったのだ？」

「ん？　ああ、箒たちは聞いてないのか」

セシリアと箒は「何がだ？」といった顔で一夏が話し出すのを待つ。

「まあ、それも一緒に話すよ。とりあえず学食行こうぜ」

セシリアは、しぶしぶといったようすで一夏に付いていく。箒は納得は出来てなかったが、置いて行かれそうになっていたため、急いで、その後を追った。

食堂に着くと、券売機で各自、自分の好きなものを購入する。

食券を出そうと、集団を引き連れて移動しようとしたとき、その行く手に立ちふさがる影が一つ。

「待ってたわよ、一夏！」

そこには鈴音の姿があった。

しかし、一夏はその姿を見ても構うことはなかった。

「鈴、とりあえずどいてくれ。食券出せなくて後ろが詰まってきてる」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

その手のお盆に鎮座したラーメンがのびかかっているのを見た一夏は、鈴に残念そうな顔を向けた。

「鈴、いつから居たんだ？　麺、のびるぞ？」

「わ、わかってるわよ！　大体、アンタを待ってたんでしょうが！　なんで早く来ないのよ！？」

「別に早く来る必要もないだろ。席空いてんだし」

「そういうことじゃないわよ！」

一夏は、鈴音と会話しながらも食券を学食のおばちゃんに渡す。

「まあ、せっかく待ってくれてたんなら一緒に食べようぜ。悪いけど、席取っててくれないか？」

一夏が、一緒に食べようと誘ったことにより、鈴音の機嫌は良くなったようだ。

かわりに、一夏の後ろでは、箒とセシリアが殺気を放っているが。

「そ、そうね。せっかくだし、一緒に食べてあげるわよ。席取っとくから」

鈴音は、一夏の後ろを見て、席が多めに確保できるテーブルを探す。

鈴音が人数分の席を確保したところで、一夏たちがお盆を持ってくる。

お昼の込みだす時間帯に、すぐにテーブルにつけたのは僥倖といえば僥倖だろう。

「本当、久しぶりだな。沙良はちょくちょく帰ってきてたけど、鈴

は帰ってこれなかったもんな。そう考えると丸一年ぐらいか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……。そういえば、鈴はいつ日本に帰ってきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

一夏は、丸一年ともあり、思いつく限りの質問をぶつけていた。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「ああ、悪い。つい話しに夢中になっちまった。こいつは凰鈴音。箒が引っ越した後に引っ越してきた俺と沙良の第二の幼馴染ってところか」

箒の催促に、一夏は初対面同士を紹介する。

「で、こっちが箒。小学からの幼馴染で、ほら、前に沙良が言ってただろ？　沙良が一時期お世話になってた剣術道場の娘」

「ふうん、あんたが沙良の言ってた恋敵ね」

「な、何を言っている！？」

鈴音の発言に慌てる箒だが、そこは聞こえないように考慮したのか、一夏には大した反応はない。

「始めまして。これからもよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

そう挨拶する二人には火花が散っていただろう。

「それで、こっちがイギリスの代表候補生のセシリア・オルコット」

「へー、アンタがＢＴ適正最高値のセシリアね」

鈴音はセシリアを嘗め回すように見る。

本来なら他の国に興味を持たない鈴音だったが、沙良が「イギリスの代表候補生が一夏の魔の手に落ちてしまった」と笑いながら言っていたので調べていたのだ。

「あんたも恋敵ってわけだ」

「な、な、なっ！」

顔を赤くするセシリアを見て、鈴音は改めて一夏のモテ具合を再認識したのだ。

「そういえば、見当たらないけど沙良はどうしたの？　あんたたちいつも一緒のイメージがあるけど」

鈴音にとって、沙良は鈴音の恋心を知る理解者であり、協力者でもある。

その沙良がいてくれればいいのにと思っていたのだが、どこにも見当たらない。

「そうだ、一夏。先ほど言っていたが、沙良はどこに行ったのだ？」

箒も、先ほどから気になっていたのかすぐさま話題に乗ってくる。

「ああ、最近訓練終わった後に良く整備棟に残ってただろ？　とある縁で知り合った子に、なんかデータ取りを手伝ってもらったんだって。で、その御礼にその子が一人で作ろうとしてたＩＳを作るの手伝ってるんだってさ。それで、もうすぐ対抗戦だろ？　それまでには何とか完成させてあげたいとか言って、今日からお昼も手伝ってあげるんだとさ」

すると、周りで聞き耳を立てていたクラスメイトが、反応を示す。

「それって……」

「四組の……」

「知ってるのか？」

一夏の問いかけに、噂程度ならと答えるクラスメイト。

「確か四組の更識さんだったと思う。でも、織斑君はあまり良い印象もたれてないからあんまり関わらないほうがいいかも」

「どうしてだ？」

「その子の機体の製作してた所が、織斑君の機体にかかりっきりに

なっちゃって、その子の機体の製作がストップしてるんだって」

それを聞き、一夏は、どこか居たたまれなくなる。

「それで一人で作ろうとしてるわけか」

「そういう噂だけどね」

どこか、静かになった場に、鈴音が話を変える。

「そういえば、一夏ってクラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……」

鈴はどんぶりを持って、そのままスープを飲む。

「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

その言葉に、一夏は難しい顔をする。

「そりゃ助かるんだけど、あまりにも訓練の申し出が多いから、今は訓練を沙良が管理してくれてるんだ」

「沙良……甘やかしすぎよ」

鈴音の呆れたと言わんばかりの言葉に、一夏は笑うしかないのであった。

第十五話　中国、恋敵との顔合わせ（後書き）

次は、沙良目線の昼休みを予定してます。
そして次で早くも簪が登場予定。
まさか姉より早くに出ることになるとは。
プロットを練らないからこうなるんですね。反省はしません。

第十六話　打鉄弐式（前書き）

簪の口調がわかんないわ
これは困った。
そして、本筋が進まないという暴挙ｗｗ
展開が遅すぎるね。

第十六話　打鉄弐式

沙良は一夏たちと分かれると、そのまま整備棟に向かう。
連絡通路を抜ける途中、見知った顔が一つあった。

「フィーナ」

フィオナが、沙良と同じようにお弁当を持って、整備棟へと向かっていた.

「あ、セラさん。奇遇ですね。セラさんも今からお手伝いですか？」

「そうだよ」

フィオナは人の良さそうな笑みを浮かべて、沙良の隣まで寄ってくる。
第一整備棟を抜け、目的である第四整備実習室へと向かう。
行く先で沙良は声をかけられ、そのたびに手を振ることで返事としていた。

「今日はどこまで進みますかねぇ」

「そうだね、外部装甲は大方完成してるし、後はスラスターの配置やバランス考えて補助のジェットブースターを取り付けたら、戦闘はまだ無理だけど飛行ぐらいは普通に出来るようになるかなぁ」

「今日は戦闘に耐えられるところまで作り上げてしまいましょうか」

沙良はそうだねと、朗らかに笑い返す。

この二人がほんわかと会話しているところは、整備課の癒しとして注目を集めていた。

「つきましたね。じゃあ、私は整備課の先輩に声をかけてきますので、先に簪ちゃんのところに行っておいてください」

「うん。じゃあ、また後でね」

フィオナは整備室の奥へと駆けていった。

その姿を見送り、目的の第四整備実習室へと、足を踏み入れる。

すると、そこに居た少女が沙良に気づいたのか、顔を上げ、軽く微笑んだ。

「沙良、おはよう」

「うん、おはよう。簪」

沙良は持ってきた弁当を顔の高さまで持ってきてお昼ご飯を促す。

簪と呼ばれた少女は、その意図にすばやく気づき、自分のお弁当を広げた。

そのタイミングで、フィオナが先輩方を連れてくる。

「あー、私をおいてご飯食べようとしてるー」

「……まだ広げただけだよ?」

「なんだ、そうだったんですね。では、私たちもご飯食べちゃいま

しょうか」

こうして、整備室では、お昼のお弁当の時間が始まったのだった。

◆◇◆

「簪も丸くなったねえ」

整備課の先輩に急に言われ、簪は反応に困ってしまう。

「そ、そうです……か？」

その言葉は、はっきりと口に出たわけではないが、その瞳はきちんと相手の目を見ている。

その反応に先輩は満足そうに頷く。

「少し前までは近寄りにくい雰囲気があったもんな」

「そ、そんなこと……」

「それが今では、簪がきちんと顔を上げて喋ってくれるようまでなったんだ。そりゃ嬉しくもなるわね」

簪は、照れくさいのか俯いてしまう。

「それは……沙良のおかげ」

沙良のおかげと言われ、沙良はキョトンとする。

「確かにあの時はすごかったよなぁ」

何のことを言っているのかに気づいた沙良はあわてて話を止めようとする。

「ちょっと、やめてくださいよ!?　僕だって今思うと恥ずかしいんですから」

「何だったけな?　『君はＩＳをなめてるの?』だったっけか?」

「あああああぁぁぁぁぁぁ聞こえないなぁ!!」

「それに、あれだろ?　『一人でＩＳを作れるなんて、君はいったい何様のつもりなんだい?』だっけな?」

「うわあああぁぁぁぁぁぁきーこーえーなーいーなー!!!!!」

沙良は、言葉に叫びを重ね、言葉を消そうとする。

『姉に対抗するため?　その姉について君は何を知ってるって言うんだ?　接することを避けて、相手のことなんかわかるはずがないじゃないか!　ＩＳは一人で作り上げることはあの篠ノ之束ぐらいしか出来ないよ。君はただその姉の栄光だけを見て、その裏側の努力を見ていないだけじゃないか』

「そのボイスレコーダーをよこせー!!」

沙良はボイスレコーダーを取り出した薫子に手を伸ばすが、ここ

はには沙良に味方をするものなどいない。

すぐさま沙良の体は取り押さえられ、その四肢は固定される。

「ふっふっふ、取り押さえたわよ、沙良君」

「取り押さえてるのは二条先輩ですけどね」

「はぁはぁ」

「ちょっ、二条先輩、人のうなじ見て息を荒くしないで下さい！本気で身の危険を感じますんで！」

「そっちばかり気にしてていいのかなぁ？　必殺、たっちゃん直伝くすぐり攻撃！」

「たっちゃんって誰……待って、あぁちょっ、ま、んぅ、やぁ、くぅ」

「「「「……」」」」

ここにいた簪以外が鼻を押さえた。

「だ、誰か、た、助けて……」

その色っぽい声に、ついに鼻から赤いものが押さえられなかったものが一人。

「ちょっ、二条先輩、人を抑えながらすごくいい笑顔で鼻血出してるよ！？」

「わあああ！　初音、ティッシュ！」

「ちょっと、こぼさないでよ！？」

「衛生兵はおらぬか！！」

一人がボケを挟んだが、それはあっけなくスルーされた。

「ふふふ」

そのやり取りを見ていた簪がこらえられないというように笑みをこぼす。

「ふっ」

「ははは」

「「「「あはははは」」」」

それは周りに伝染して、大きな笑いを生みだす。

整備室に笑いが響くというのはここ最近ではなかったことだ。

これも、沙良が整備室に出入りするようになってからのことだ。

「あー、お腹痛いー。……あ、京子。今回の実習当番って京子じゃなかったっけ」

薫子が時計を見ながら横に座っている少女に話しかける。

「あ、やば。実習の準備しないと！」

京子と呼ばれた女生徒は弁当を片付け、急いでカバンにしまう。

「ごめん、ちょっと時間ないから急ぐね」

「お疲れ様です」

沙良はひらひらと手を振って見送る。

その姿が見えなくなったところで、自然と全員がお弁当を片付け始めた。

ご飯の時間は終わった。

今からは、遊びじゃない。

その顔は、先ほどまでの気の抜けた笑顔ではない。

笑ってはいる。しかし笑顔の種類が違う。

まるで、試合などの前に自然と笑みが浮かぶような、そんな笑み。

「簪、ディスプレイを投影して」

簪は、空中ディスプレイを起動し、そのＩＳ【打鉄弐式】の情報を表示する。

「今回はスラスターの調節から入ろうか。たぶんこれは今日だけで終わると思うから、そろそろ戦闘に目を向けていってもいいと思う」

沙良の言葉に皆が頷く。

ここに集まるのは整備課の生徒。

その生徒にとって、スペインの第二世代の開発者である沙良は有名人なのである。

そのＩＳ設計の第一人者の言うことに誰も否とは言わない。

「じゃあ、戦闘用の構想は僕と簪と、そうだなぁ、黛先輩とフィーナが手伝ってください。他の人はスラスターをお願いします。スラスターさえ終われば、こいつは、空を飛べるはずなんで」

沙良がそう言うと、皆が言われたとおりに行動に移す。
沙良は、自分の近くに集まった三人に向かって、話し出す。

「今、簪の機体に絶対的に足りないものが一つ」

「稼動データ」

「正解。だから、これを使おうと思う」

「何、それ？」

簪は、首をかしげる。
沙良が持っていたのは一枚のディスク。

「僕の機体の実働データ」

「なっ、正気ですか！？」

その発言に、フィオナが驚きの声を上げる。

「正気も正気。だって、手っ取り早いじゃん」

「でも……いいの？」

「もちろん」

簪が、遠慮がちに聞いてくるが、沙良は笑顔でそれを肯定する。

「今日のところは、このデータの取り組みで一日が終わると思う。もうすぐ、昼休みも終わりだし、そろそろ、教室に戻ろうか」

「うん」

「はーい」

「私は、このまま実習だからここでお別れね」

薫子だけがただ頷くことしなかった。

「それでは、また放課後に余裕があれば手助けをお願いできますか？」

「もちろんよ。報酬は貰ってるしね」

「……報酬って？」

簪が不思議そうな顔をする。

「手伝ってもらう代わりに、一日密着取材を許可したんだよ」

「スペインの英雄に密着取材なんて、プロの記者でもそうそうしたことがない快挙よ。わたし、今から腕が鳴るわ！」

沙良は、苦笑いをするが、その表情に嫌そうな感情は見当たらない。

「では、みんな、また放課後に」

こうして、激動の昼休みが終わったのであった。

◆◇◆

放課後、沙良は整備室にいた。

薫子とフィオナは稼動データの取り組みを担当している。

スラスター組は、アイデアを貰いに沙良に話を聞きに来ていた。

「そうだなぁ、簪は機動型がいいんだよね？」

「うん」

「元々の打鉄が防御型だから、取り外せるところは取り外しちゃいましょうか。簪は、こんなのがいいってアイデアある？」

元々が防御型のため、シールドや装甲など、取り外せるところはたくさんある。

「……ウィングスラスター……とか？」

「ありだね。よし、肩部のシールドを取り外して、大型のウィングスラスターを一つに纏めようか」

「でも、微調節難しくない？」

「それなら補佐ジェットブースターを前後2基搭載すればいい。装

甲もよりスマートなラインに変更してるし、格闘戦における運動性を活かす構造に近くなると思う」

「OK。じゃあ、一回それでやってみようか」

「よろしくお願いします」

スラスター組がもとの配置に戻ると、沙良と簪は元の話し合いに戻る。

「じゃあ、話し合いに戻ろうか。武装の話だけど元が第二世代型の機体ってことで、拡張領域を利用するから、専用武装は積めても多くても四個、バランスを考えるなら三個が限度だと考えといて」

「……近距離武装が一つと、狙撃武装が一つ……」

「あとはミサイルとか面制圧武装もあったほうがいいかな」

「そこは、任せる」

「了解。近距離とかなんかリクエストとかある？」

簪は、少し考えるように、瞳を閉じる。

「薙刀……かな」

「薙刀かぁ、いいね！　僕のカイラにも薙刀型の武装があるからそれのデータを使おう。ただの薙刀はつまらないから、何かしらギミック付けたいね」

「私、力弱いから、そこを……」

「んー。あ、そうだあれを使おう！」

「あれ？」

「これだよ」

沙良は、自らのパソコンから、一つのデータを取り出す。
それは、最近発表された新しい技術。

「超高速振動機構……？　これって……！？」

「そう、第三世代技術の一つだよ。これによって、触れるだけでも絶大な切れ味を誇ってくれる」

「……超高速振動薙刀」

「そう、それを、接近武器にしよう。名前、考えといてね。じゃあ、狙撃はどうしようか」

「荷電粒子砲がいい」

簪のリクエストに何の迷いもなく頷く。

「わかった。それでいこう」

簪は、少し考えたような素振りを見せる。
そして、口を開く。

「最後の武装は、沙良が考えて」

それは沙良に託す言葉。

「いいの？　自分で言うのもあれだけど、相当馬鹿げた武装作っちゃうよ？」

それは、オルコット戦でも利用した空中機雷等を見ればわかるだろう。

「決闘見たから、わかってる」

簪もそれはわかっているようだ。

「わかった、任されたよ。あっと驚くような武装作ってあげるから」

沙良は、今出たアイデアを、パソコンに打ち込む。

「簪は、粒子砲のプログラムをお願いするね」

簪はこくりと頷く。

「薙刀は僕がやるよ。とりあえず三日後には形にしてくるから」

簪は、その発言に恐怖すら覚える。

それは、自らが一回、一人でＩＳを作ろうとしたからわかる。武装を一人で三日だなんて、相当馬鹿げている行動だ。

しかし、沙良ならやり遂げるのだろうと、根拠もなく思ってしまう。

沙良は、先ほどのアイデアを既に形にしているようだ。今は、空

中投影ディスプレイを見ながら、キーボードを叩いている。
簪も、自分の仕事となった、粒子砲のプログラムを作り始める。
これから、沙良も簪も、私語をすることなく、キーボードに向かうのだった。

第十六話　打鉄弐式（後書き）

今日は、親知らずを抜く日です。
ふう、あまりに痛いようなら更新が遅くなると思っといてください。

第十七話　監視

沙良は、いつものように簪の機体を作るため、整備室に訪れていた。

「おはようございます」

時間は放課後なのだが、ここでの挨拶は「おはようございます」という決まりがあった。

「あぁ、おはようございます、セラさん」

聞き覚えのある声が聞こえてきたので、周りを見渡すと、ＩＳの下に体をねじ込んでいるフィオナを見つけた。

「おはようフィーナ」

沙良は、ＩＳと睨めっこしていたフィオナに近づく。

フィオナは現在はスラスターの出力調節に回っている。

その作業着は油で汚れてしまっているが、本人は気にも留めていない様子でスラスターの下に体を突っ込んで作業している。

スラスターは話し合いの結果、大型のウィングスラスターを一つ、小型のスラスターを二つ、補佐ジェットブースターを前後二基という配置に落ち着いている。これにより、大幅な機動性の向上と、旋回力の向上が認められた。

「じゃあ、邪魔しちゃ悪いし、僕は自分の持ち場に行くよ」

「はい、セラさんも頑張ってください」

沙良は、自分の持ち場である特殊システム制御コンピューターの前に腰を下ろす。

沙良の仕事は、反応速度の向上。

元が、打鉄という機体を使っている以上、元々の反応速度は高くない。

それに、搭乗者が高い技術を持つ、日本の代表候補生の簪である。

並大抵の反応速度では、簪の動きについてこれないのだ。

沙良は、打鉄弐式の回路図と配線図を空中ディスプレイに投影しながら、キーボードを叩く。

そのキーボードは一つではない、同時に四つのキーボードを操作していた。

両手と、両足を使って。

その光景は、整備課の生徒の目を丸くさせるものだった。

「あれ、どういう原理なんだろうね」

「足でキーボードって、どういうプログラムをつんでいるのだろう」

周りで、生徒たちが騒いでいるが、沙良は聞こえていないのか、モニターから眼を離すことをしない。

「信号の伝達速度が気にかかるなぁ。これは、反応素子から変えたほうがいいかも」

沙良は、S・O社にパーツの要求書を送る。

素子はシークエストと同じもの利用するため、届くのに時間はかからないだろう。

沙良は、シークエストのデータを展開し、それを参考に回路の積み上げとプログラムを組み立てる。

「上手くいけば、今よりも二十四パーセントは反応速度が向上するはず」

沙良は、不意にその手を止めると、一つ伸びをして、時計をちらりと見る。

その短針は六の数字を刺していた。

沙良は、データを保存して、コンピュータを落とす。

ある程度のプログラムは組めているため、あとは素子が届くまでは他のことをしていたほうが効率がいいだろう。

沙良は、他の状況を見て回る。

スラスターは先ほども見たからいい。

エネルギー効率を担当する先輩チームも作業は順調なようだ。

簪専用のユーザーインターフェースを担当する薫子もぼちぼちと作業は進んでいるみたいだ。

ならば、自らが足を運ぶところは一つしかないだろう。

沙良は、武器を製作している簪の元へと向かった。

そこには、一心不乱に作業台へと噛り付いていた簪の姿があった。

「簪、調子はどう？」

「……沙良？　調子はいい。もう少しで、出来る」

「それは、重畳」

沙良は、簪の造っていたものを見て驚きの声を上げる。

「これは考えたね」

それは、背中に搭載するタイプなのだろうか。二門の荷電粒子砲が横たわっていた。

それは見ただけでわかる。

「連射型なんだね」

そう、連射が出来るように作られていた。

「秒間に2発だけど、1トリガーあたりの総ダメージは大幅に強化した」

「なるほど、リロード時間の長さは、二門というところでカバーするわけか」

「私のＡＩＭ力なら十分使えるはず」

沙良は、満足そうに頷く。

悪くない。

むしろとても良い武装だ。

自分が作った武装と横に並んでも遜色ないだろう。

「じゃあ、約束してた物を渡すね」

沙良は『収納』していた武装を『展開』する。

「……それ、規約違反」

専用機持ちに課せられる規約に違反していると簪は指摘してくる

が、沙良としては知ったことではない。ＩＳの武装を普通に運ぶなんて効率が悪すぎる。

「ばれなかったら問題ないんだよ。はい、これが簪の薙刀、『夢現』だよ」

「これが、『夢現』」

「そう、高周波と超音波により、超高速振動を可能にした第三世代技術武装だよ」

簪は、その武装を見て、心を振るわせた。
この武装の凄まじさは使わなくてもわかる。

「そして、まだプログラムだけだけど、これが最後の武装になる『百千颪』」

簪はそのデータを見て、言葉を失った。

「見てわかるとは思うけど、一対多を想定とする実弾系の面制圧兵器としては最高性能を誇るはずだよ」

簡単に言ってのける沙良だが、内容は馬鹿げている。

「使ったのはマルチロックオン・システム。それによって八機×八門のミサイルポッドから最大六十四発の独立稼動型誘導ミサイルを発射することが出来る。相手のエネルギーシールドに反応して追尾を行うようになってるから熱源を逸らされようと追撃を外される事はないよ」

「でも、これ……エネルギーが」

「そこが欠点なんだよね。一斉射撃するにはエネルギーの消費が激しいんだ。それに並の戦いでは使うことすら出来ないだろうし。だからこんな機能を持たせてみようと思う」

沙良は別のウィンドウを開く。

「……個別作動システム」

「そう、八機あるミサイルポッドに個別に特性を持たせて、別々に稼動できるようにするんだ。簡単に言ってみれば性能の違うミサイルを八機持ってるのと一緒。状況に応じて一機ずつ使えばエネルギーの消費も抑えれるし、多対多の戦闘のときにも使用することができる」

その、応用性はこの『百千颪』だけで射撃戦闘を行えるほどだ。

簪は驚愕を隠せなかった。

どう見ても第二世代に相応しくない兵装。

これにイメージインターフェイスが使われていたら、それを積むだけで第三世代と名乗っていいぐらいに。

「良いの？」

それは、ここまでしてくれていいの？　そういう意味が込められている。

沙良はきちんとその意味を読み取った。

「もちろんだよ。簪には借りがあるしね」

「あんなの、大したことじゃない」

「簪にとってはそうかもしれないけど、僕にとっては大きなことだったんだよ。簪のおかげで、【オルカ】がまた一つ完成に近づいたんだから」

沙良は、整備室で一人【オルカ】を調節していたとき、簪と出会った。

その時に、簪に【オルカ】の調節を手伝ってもらっていた。それは、沙良が一人ではどうあがいても出来なかったこと。

一回、本国に送ろうかと思っていたぐらいに、どうしようもなかったことだったのだ。

フィオナにも手伝ってもらっていたが、彼女はハードがメインのため、沙良と同じまでとは行かないが、ある程度のスキルを持った人物が必要だったのだ。

「じゃあ、素直に受け取る。……ありがとう」

「どういたしまして」

簪はその頬を赤くし、沙良に感謝の気持ちを伝える。

沙良はそれを、最高の笑顔で受け止める。

「……っ」

それを見て、簪は朱を濃くし、俯いてしまった。

沙良はそんな簪に首を傾げるが、簡単に思考を放棄した。

「じゃあ、この『百千颪』はこれで決定だね。さすがにここでは作

れないし、S・Q社に頼むことにするから届くのは対抗戦ギリギリになると思う」

簪は、こくりと頷く。

「じゃあ、僕は黛先輩の方を手伝ってくるよ。簪も、根を詰め過ぎないでね」

「沙良も、だよ？」

沙良は笑いながらわかってると言うと、薫子の元へと向かうのだった。

こうして、打鉄弐式は日々、完成に近づいていくのだった。

◆◇◆

「やっぱり、見られてるよなぁ」

整備室にいるときはより強く視線を感じる気がする。

それも、簪といるときにはその視線を隠そうともしていない。

何なんだろうなぁ。

そういえば、監視され始めたのも、簪と関わり始めてからだ。

もしかして、狙われているのは簪なのか？

そう考えると、ここは一回、千冬姉に話をした方がいいかな。

そうは決まると、早速、報告しに行こう。

もちろん、監視は振り切って。
僕は、急に走り出す。
そして、曲がり角を曲がった瞬間、窓を開け、そのまま窓から飛び出す。
ここは二階だけど、カイラを部分展開し、ＰＩＣをもって、衝撃を緩和する。

「ここまで来れば振り切れるだろう」

後は千冬姉がいる寮長室まで走るだけだ。

◆◇◆

「……というわけなんだ。千冬姉はどう思う？」

沙良の話を聞くと、私は頭を抑えたくなる。
あんなに真剣に悩んでいたのが嘘みたいだ。
真相はこんな簡単だったとは。

「沙良、監視は危害を加えるつもりはないだろう」

「なんで言い切れるの？」

沙良は首を傾げている。
その姿はまるで小動物のようだ。

「生徒会長の目的がわかったからだ」

「というと？」

「まぁ、沙良たち一年は知らないと思うが、今の生徒会長は妹がいてな。その妹を溺愛してるんだが、生憎その妹から避けられていてな。妹の前では完璧であろうとして、それが妹のプレッシャーになっているんだろう」

「それが、今回の件にどう関係あるの？」

「現生徒会長の名前は更識楯無。そして、妹の名前は、更識簪という」

沙良は、それを聞き、全てがつながったようだ。
額に手を当てて苦虫をかんだような顔をする。

「も、もしかして監視の理由って」

「妹と仲良くしている沙良が気になるのだろう。大方、妹といるときは視線が強くなったりしてたのではないか？」

「そ、そのとおりだけど」

沙良は、体から力を抜き、ベッドに倒れこむ。

「はぁ、くっだらなーい。あんなに嗅ぎ回ったのに、こんな下らないことだったなんて」

「更識は有名なシスコンだからな。本人にとっては一大事だったんだろう。そして、沙良のことを調べようと思ったら情報にロックがかかっていたから気にかかったというところだろう。今は少しばか

りの情報を得ているとは思うがそんなに大した情報は持ってないだろう。」

沙良は足をじたばたさせている。
いつもながらに沙良は可愛いな。
既に裏で写真が取引されていたが、それも納得できる。

「一度、直接顔を合わせたらどうだ？　早いうちに接触したほうが、優勢に立てると思うが。昼は生徒会室にいることが多い。仕事を振れば確実に生徒会室に居させることも出来る」

「そうだね、確か布仏さんも生徒会だっけ？」

「そうだ」

「じゃあ、布仏さんには悪いけど、彼女を伝って生徒会長に会ってみるよ」

「手加減してやれよ？」

「ふふふ、それはどうだろう」

そう言い笑う沙良は、楽しそうに立ち上がる。

「じゃあ、僕はそろそろ戻るよ」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ、千冬姉」

沙良は、私の頬にキスをし、そのまま部屋を出て行く。
全く、あの癖はどうにかならんのか。
弟とは言えど、私だって恥ずかしいものがある。
火照った顔を洗うために、私は洗面所へと向かう。

「おっと」

その際に空き缶を潰してしまったようだ。
部屋を見渡すと、足の踏み場も少ない。

「ふむ」

一夏でも呼んで、部屋でも片付けさせるか。
自分でも気をつけてはいるのだが、気づけば部屋はこの状態になってしまう。
普段から一夏やら沙良が身の回りを何でもやってくれていたため、家では、自分ですることはなかったが、こういう状況になると流石に自分でもどうかと思う。

思うのだが……

「……ふう、とりあえずビールでも飲むか」

誰にでも欠点はあるだろう。
私の場合がこれというだけだ。
何にも悪いことはない。
こうして、部屋は汚くなっていくのだった。

第十七話　監視（後書き）

次はチャイナ娘のイベントに入ります。
展開がのろのろ過ぎる……
これが後先考えてないやつの結末なのか。

第十八話　慰め

沙良は千冬の部屋から出ると、まっすぐ自分の部屋に向かう。
時刻は八時を過ぎているため、夕食は部屋で取ることになるだろう。
しかし、その途中、とある部屋が騒がしいのに気づき、その様子を見に行った。

「一夏の部屋じゃん」

大方また一夏が何かやらかしたのだろう。
沙良は、一夏の部屋ということで、躊躇することなく、その部屋に入る。

「失礼しまーす」

扉を開けると、そこには竹刀を持った箒とＩＳを部分展開した鈴音がいた。

「……えっと、どういう状況かな？」

沙良は理解できない状況に固まることしか出来ないのであった。

◆◇◆

「つまり、鈴は一夏が箒と同じ部屋というのが気に食わないんだね」

「そういうこと」

腕を組み答える鈴音に、沙良は冷たく言い放つ。

「鈴」

「な、何よ」

「諦めなさい」

「ちょっ、沙良までそっちの味方するの!?」

「いや、そうじゃなくて、この寮の寮長は千冬姉だよ？　何言っても無駄だと思うなぁ」

「う、確かに……」

鈴音は顔を顰める。

「大丈夫だって。だって一夏だよ？」

鈴音もその言葉に納得するように頷く。

「そうね、一夏だもんね」

箒も同じように頷く。

「そうだな、一夏だしな」

「ちょっと待て、お前らどういうことだ？」

一夏だけは、納得いかないのか、反論の声を上げる

「「「黙れ、唐変木」」」

しかし、その反論は三人の圧力の前に屈してしまう。

「……酷い」

一夏は、このままだと駄目だと判断したのか、話を逸らそうとする。

それが、あんなことになるとは知らずに。

「そういえば鈴、さっき何か言おうとしてなかったか？」

「え？　えっと、そのぅ、約束って覚えてる？」

鈴音は顔を伏せて、ちらちらと上目遣いで一夏を見ている。

「えーと、あれか？　鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べさせてくれるってやつか？」

そう一夏が言うと、箒がしかめっ面に変わり、対照的に、鈴音の顔が明るくなる。

「なつかしいな、そういえばそんな約束してたよなぁ。俺に飯をご馳走してくれるって約束だろ？」

一夏が笑いながらそう言うと、鈴音は気づいた。
約束はあっている。
しかし、一夏はその意味を理解していないことに。
箒もそれに気づいたのか、複雑な表情をしている。

「……」

鈴音は、うつむいたまま顔を上げることが出来ない。

「どうしたんだ？」

鈴音はその顔を上げた。
一夏が見たのは、涙を零さないように唇をかみ締める、鈴音の姿だった。

「り、鈴？」

パアンッ！

「……へ？」

一夏は、鈴音にいきなり頬を引っ叩かれて呆けてしまう。

「……今は、話しかけないで」

鈴音は床に置いたバッグをひったくるように持って、ドアにぶつかるような勢いで出て行った。

「り、鈴？」

まだ状況をわかっていない一夏は、呆けるしか出来なかった。
箒を見ると、視線をそらされてしまう。

「一夏、なんで鈴が泣いてたかちゃんと考えな」

沙良は、そう言い残し部屋から出て行ってしまう。
おそらくは鈴音を追いかけたのだろう。

「一夏」

「お、おう。なんだ箒」

「馬に蹴られて死ね」

箒もその怒りを隠せないのか、一夏に辛らつな言葉を浴びせる。

「なんだよ、いったい」

未だに状況が把握できない一夏は沙良の言ったことを思い出す。
泣いていた理由。
一夏は、それを考え、眠れない夜を過ごすのだった。

◆◇◆

沙良は部屋を出て、鈴を追いかけた。すると、すぐにふらふらと歩く鈴音の姿を見つけた。

「鈴」

振り向いた鈴音の顔は、もう限界に近いのだろう。
涙が決壊しそうだった。

「とりあえず、部屋においで。こんなところじゃ、落ち着かないでしょ？」

鈴音はこくりと頷き、沙良の後についてくる。
沙良は、部屋の扉を開け、鈴音を迎え入れる。
鈴音が、ベッドに座ると、沙良もその横に腰掛けた。

「よく耐えたね」

その言葉に、ついに鈴音の涙腺が決壊した。

「ひっ……ふぇっ……うわぁぁぁぁ！」

溢れ出す涙は、頬を伝い、床へと落ちる。
鼻水と涙でくしゃくしゃになった顔を、沙良は何も言わずタオルで拭いてあげる。
それは、鈴音が泣き止むまで続いた。

「……沙良、ありがと」

「いえいえ」

不意に鈴音が礼を言ってくるが、沙良はそれを軽く受け止める。
今は幾分か落ち着いたようで、沙良のお菓子を食べながら、一夏の愚痴を言ってくる。

「でも、本当に一夏って唐変木ね！　信じらんない！」

「それはフォローしようがないね」

「普通、意味を捉え間違えないわよ！？」

「でもね、鈴。一夏が恋愛面では鈍いってことは前から知ってたでしょ？」

「うっ、確かにそうだけど……」

「ただでさえ遠まわしな言い方だったんだから、一夏に通じてるのかは疑わないと」

「うぅ……」

「今回の事は確かに一夏が悪いけど、一夏を甘く見た鈴音にだって、全然落ち度がないってわけじゃないからね」

一夏のことも鈴音のことも理解している沙良の言うことに、鈴音は言葉を紡げなくなってしまう。
圧倒的に沙良の言うことは正しいのだ。
しかし、鈴音の怒りは収まることが出来ない。

「でも」

「でもじゃないの。僕だって鈴の味方をしてあげたいよ？　でも、それで鈴だけを庇うっていうのは鈴のためにもならない」

鈴音だって、沙良が鈴音のために言っているとわかっている。だから何も言い返せなくなる。

「……わかってる」

「だったら、大丈夫だよ。一夏もこのままはぐらかす様な男じゃない。きっと答えを出してくれるから」

それは、信頼。

沙良は、一夏のことを理解している。

その沙良がそういうのだ。鈴音も信じるしかない。

「うん、わかってる。ありがと。沙良に話を聞いてもらうとスッキリした」

荷物をまとめて、部屋から出て行こうとする鈴音を見て、沙良は違和感を感じる。

「鈴、どこに帰るつもり？」

「……じ、自分の部屋に戻るわよ」

「嘘、どうせ屋上にでも行くつもりでしょ」

「……」

返事がないことから、図星だとわかる。
沙良は、額に手を当てて、ため息をつく。

「鈴、泊まっていきな」

その言葉に、鈴音は驚いたように振り替える。

「いいの？」

「ルームメイトに泣き顔を見られたくないんでしょ？」

「……千冬さんにバレたら大変よ？」

「鈴を外に放り出してたほうが気にかかって大変だよ」

「……ありがと」

「いえいえ、さあ着替えてきなよ。そのバッグに着替え入ってるんでしょ？」

「うん」

鈴音は洗面所に入っていった。
おそらくそこで着替えるのだろう。
ならばと沙良は鈴音が出てくる前に、自分も着替えを済ましてしまう。
沙良の着替えが終わったと同時に、鈴音が洗面所から出てくる。

「じゃあ、寝よっか」

沙良はのそのそとベッドに上がる。
鈴は床にタオルを敷き、バッグを枕に寝転ぼうとする。

「何してるの？」

「へ？」

沙良が、声をかけるが、鈴音は何のことかわからず、変な声が出てしまう。

「早くおいでよ」

沙良は、ベッドをぽんぽんと叩いた。

「ベッド広いんだからさ、そんな床で寝なくても」

「え、え、え？」

「ほら、こっちに入りなよ」
沙良はその体を片方に寄せ、鈴音が入れるスペースを作る。
鈴音がその展開についていけず、ぼさっとしていると、沙良は寝息を立ててしまった。

「寝付くの早い……」

相変わらず、人のことを女性扱いしてるのだろうかと思う。
沙良はいつもこうだった。
しかし、今はそんな優しさが嬉しかった。
鈴音は、沙良があけてくれたベッドに入り込み、沙良に背を向けて瞳を閉じた。

こうやって一緒に寝るのは実は初めてではない。
鈴が一夏と沙良と出会った時には、沙良は既に織斑家に住んでいた。泊まりに行った際には布団が足りなく二つの布団を引っ付け三人で寝たものだ。そのときから、鈴音は一夏を気にして寝付けなかったし、一夏も寝付けていなかったが、沙良だけは布団に入って数分で眠りに落ちていた。

(沙良を好きになる子は大変ね)

沙良が女性に対して異性という接し方をしたところを見たことがない。大したことでは絶対に恥ずかしがらない。
女性の裸を見ても『風邪引いちゃうよ?』と言うような男だ。
枯れてるのではなく、性的な感情が幼いんだろう。
子供が異性の裸を見ても何も思わないのと似ている。
鈴音は一夏と沙良のことを考える。
二人とも、よくここまで鈍感なくせに他人のことは鋭いのだろう。
それが、鈴音には可笑しく感じる。
鈴音は穏やかな気持ちで眠りに落ちるのだった。

◆◇◆

翌日、沙良が起きると、鈴音の姿はなく、そこには手紙が一つおいてあった。

『いろいろありがと。あたしも頑張るわ　鈴』

沙良はそれを見て、笑みを浮かべる。

「一夏も鈴も吹っ切れたようだね」

沙良は、携帯のメール画面を閉じる。
それは夜中に届いた一夏からのメール。

「本当に手のかかる幼馴染たちだよ」

沙良は、軽くなった気持ちで、寮を出た。
そして、生徒玄関前廊下に張り出された紙を見て気持ちがまた落ちるのだった。
表題は『クラス対抗戦日程表』。
一夏の相手となるクラスは、二組。
鈴音のクラスだった。

第十八話　慰め（後書き）

ちょっとだけ鈴の性格に変化があるかな？
何気に作者が沙良の性格を掴みきれてないですｗｗｗｗ

第十九話　クラス対抗戦　前編

試合当日。

沙良はカイラを纏って、空に居場所を作る。
その前には鈴音にクラス代表を奪われた元クラス代表がラファールを纏っていた。

その目は意欲に燃えている。
確か、イタリアの代表候補生だったはずだ。
専用機は持っていないが、実力者に違いはない。
一夏と沙良がＩＳ学園に入学が決まってからたくさんの代表候補生や専用機持ちがＩＳ学園に送り込まれてきているらしい。
目の前の彼女もそういった部類なのだろう。
気を抜くことは出来ない。

『それでは両者、試合を開始してください』

鳴り響くブザー。
それが鳴り終わる瞬間、沙良と二組の副代表は動いた。

二組の副代表が取ったのは前進。
セシリアとの戦いから、沙良が射撃主体と見切りを付け、後方に下がって様子を見るだろうと推測したのだろう。
しかし、それは間違っていた。

「なに！？」

沙良はすぐ彼女の目の前まで迫っていた。

そう、沙良もすぐに前進していた。
それは、彼女が前進するだろうと推測しての行動。
それが見事当たったわけである。

沙良は、手に持っていたアサルトライフルを『収納』し、新たに近接武器を『展開』する。

それは薙刀。
それは、ＩＳを装着している沙良よりもその長さは飛び出ている。
沙良はその薙刀を、向かってきているラファールの腹部目掛けて、薙刀を振るう。

その動きは体の「伸筋の力」、「張る力」、「重心移動の力」だけを利用し、力むことはない。
そして、そこで得た運動量を、接触面で作用させる。

「かはっ……」

そのカウンターによって威力を増した一撃は、装甲に衝撃を通し、絶対防御を作用させる。
その衝撃は機体を後方に吹き飛ばすことなく、その機体を薙刀に食い込ませて止まっている。
衝撃は、体に響かせるようにして伝わった結果だろう。

これが、薙刀型武装『禊』の効果だ。

シールドエネルギーに接触した瞬間に機構が自動で作動し、衝撃を貫通させるのではなく全体に響かせる、対ＩＳ用武装。
これは、相手のシールドエネルギーを削ることに特化した武装である。

しかし、欠点もある。

それは、機構が一回しか作用しないこと。

つまりは、一回機構を作動してしまうと、ただの薙刀でしかなくなるわけだ。

沙良はその薙刀を体を回転させることによって、食い込んだ機体から取り外し、そのままの勢いでラファールのスラスター部をなぎ払う。

今度は機構が作動しなかったため、ラファールはその身を吹き飛ばされることとなる。

それを傍観する沙良ではなかった。

すぐさま薙刀を『収納』し、アサルトライフルを『展開』する。

ラファールもすぐさま姿勢を整え、ライフルを『展開』する。

「遅い！」

しかし、銃弾が届くのは沙良のほうが早かった。

ラファールはあれよあれよという間にシールドエネルギーを減らしていく。

そのエネルギー残量に気を取られたのか、一瞬だけだが沙良から注意が離れる。

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）！」

それを見逃す沙良ではなかった。

すぐさま接近し、体を捻り踵落しを決める。

「きゃあああ！」

地面に向かって蹴り落とされたラファールは、二組の副代表の悲鳴を伴いながら、地面にクレーターを作る。

『試合終了。勝者――深水沙良』

◆◇◆

沙良はピットに戻ると、入れ違いのように一夏がカタパルトにつく。

「お疲れ、沙良」

「頑張って一夏」

お互いが自然に手を伸ばし、ハイタッチする。

一夏は前を向き、アリーナに意識を向ける。

向こうのピットでは、鈴音も同じように気持ちを高ぶらせているのだろう。

沙良は、邪魔するのも無粋だろうと、無言でピットのドアセンサーに触れる。

指紋・静脈認証によって開放許可が下りるとドアが音を立てて開いた。

そのドアをくぐり、最後にピットを見ると、アリーナに飛び立つ一夏の姿が見えた。

「頑張って、二人とも」

対抗戦は副代表戦を行ってすぐに代表戦を行うため、副代表はその試合を見ることが出来ない。

急いで向かえばまた別だろうが、勝つことを信じるならば、体力の回復に努めるべきだろう。

沙良は男子にあてがわれた更衣室で、着替えを済ませる。

一夏はどうなってるだろうか。そう沙良が考えたとき、校内にブザーが鳴り響いた。

「な、この鳴り方は緊急ブザー!?」

沙良は急いで上着を着ると、そのまま飛び出した。

そこには慌しく動く教員と上級生の姿。

その顔色には戸惑いと焦りが見て取れる。

「何が起こったんだ?」

沙良はアリーナが見える場所へと走る。

しかし客席に入ろうとした瞬間、驚愕の事実が沙良に突き刺さる。

「扉がロックされている……」

それはただの非常事態では済まされない。

扉の向こうからは、混乱している生徒の悲鳴が聞こえてくる。

「くっ、ＩＳ学園のシステムをクラックできる存在なんてそうそういないよ！？」

それか、ＩＳ学園の中に敵が侵入したか。

「今は考えてる場合じゃない」

沙良は状況を把握できるであろう場所へと駆けるのであった。

◆◇◆

「先生！　わたくしにＩＳの使用許可を！　すぐに出撃できますわ！」

沙良が、管制室に到着すると、セシリアが千冬に迫っているところだった。

「織斑先生！　一体全体どうなっているんですか？」

「沙良か、良い所に来た。――これを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。

その数値はこの第二アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル４に設定……？　しかも、扉が全てロック

されて――あのＩＳの仕業ですの？」

「あのＩＳ？」

「沙良はまだ見てないのか、あのＩＳを」

箒はリアルタイムモニターを指差す。

そこに映るは異様に手が長く、深い灰色をした『全身装甲』

沙良は背筋に寒いものが走るのを感じた。

あれは、あれは、

「――ゴーレム」

沙良は、唇を噛む。

なぜ、あれがここにいるのだ。

あれは束が思索し、製作したもの。

だが、あれは盗まれたはずだ。

それに、束が作った人工ＡＩではあんなことは出来ないはず。

なら、何で動いて……

「……まさか」

その思いを打ち消そうと頭を振るが、出てくるのは、それを裏付ける物ばかり。

束は確かに言ったのだ。論文ごと盗まれたと。

「やりやがったな……」

窃盗者は束が超えることのなかった一線を越えたのだ。

「脳を、人間の脳を使ったのか！」

沙良は、モニターに拳を叩きつける。

「さ、沙良？」

その音で、沙良の状態に気がついた千冬は、恐る恐る声をかける。

「千冬姉、状況を」

「あ、ああ。今は三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できればすぐに部隊を突入させる」

言葉を紡ぎながら益々募る苛立ちに千冬の眉がぴくっと動く。沙良はそれを危険信号だと受け取った。

沙良が今からハッキングに加われば、確かに遮断シールドは解除できるだろう。

しかしそれは、一夏と鈴音の犠牲の上に成り立つ。

沙良はそんなことする気は更々無い。

沙良は優しいと言われてきたが、それも状況による。

沙良は二人の身内と、大勢の他人を秤にかけたとき、迷わずに身内を取る。

「はぁぁ……。結局、待っていることしかできないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!?」

「お前のＩＳの装備は一対多向けだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！　このわたくしが邪魔だなどと――」

「では連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　ビットをどういう風に使う？　味方の構成は？　敵はどのレベルを想定している？　連続稼働時間――」

「わ、わかりましたわ！　もう結構ですわ！」

「ふん。わかればいい」

このまま放っておくと一時間は続くであろう千冬の指導をセシリアは降参とばかりに両手を揺らして止める。

しかし、セシリアには予想外のところから助けが入る。

「このさい連携訓練は必要ない。後方からの射撃をメインにバックアップを担当。セシリア一人なら、僕が戦場に送り届ける」

「沙良、さん?」

「出来るのか?」

千冬はそれだけを聞く。

それは可能かどうかを聞いたわけではない。

技術があると見せていいのか?

そう聞いているのだ。
沙良は頷く。

「あれの落とし前は僕がつける」

その目は決意に燃えていた。

「……やってこい」

「はい」

沙良はセシリアを伴い、管制室を出て行く。

向かう先は――

「ピットに行きますの？」

「そう、ピットに使われている遮断シールドは、アリーナを囲う遮断システムとは別に動いている。クラックにかかる時間は少なくてすむ」

沙良たちはピットに向かって走る。

しかし、目的地は同じではない。

「セシリアはこのままピットＡに向かって」

「わかりましたわ」

沙良はそのまま、ピットＢへと向かう。

セシリアをピットＡに向かわせた理由は、単純にゴーレムの死角を付く事が出来るから。
そして、これからすることを見られたくないため。
沙良はピットに着くと指紋・静脈認証を経て、ピットの入る。

「カイラ！」

沙良はすぐさまカイラを纏い、遮断シールド管理システムへとカイラをつなげる。
同時に、空中投影ディスプレイを出せるだけ出し、カイラの処理能力を使い、システムへと侵入する。

ハッキング自体は管制室でも出来た。
むしろ、管制室の方が良かっただろう。
しかし、沙良は他人に見られることを拒否した。
それは、沙良のＩＳに関わることだから。
それは沙良の唯一仕様の特殊能力（ワンオフ・アビリティー）

「『絶対的管理者』発動」

◆◇◆

鈴音は青竜刀を円の動きで振るう。
青竜刀を振りぬくは足首の高さ。バランスを崩すことが出来れば

幸い。
あわよくば転倒を狙う。そんな一撃だ。
しかし、その一撃は防がれる。
元々上手くいくとは思ってなかった鈴音は続けさま二発目を放つ。
それは右へと突っ込み、すれ違いざまに振りぬく。
当たった。
それに続くように、鈴音は三発目、四発目と放っていく。
その連続した斬撃に、敵ＩＳはその巨体に似合わぬ速度で鈴音の猛攻を防ぐ。

しかし、ここで、戦っているのは鈴音だけではない。
鈴音の攻撃を捌ききった一瞬。
その隙を突いて一夏が後ろから切りかかる。

「うおおぉぉぉぉ！」

一撃必殺の間合い。
しかし、その躱せるはずの無い斬撃は尋常ではないスラスターの出力を持ってして、簡単に離脱されてしまう。

「くっ、鈴！」

「わかってる！」

敵ＩＳは攻撃を避けた後は決まって反撃に転じる。
それは、まるでコマのように高速回転しながらビーム砲撃を行ってくる。
その回転状態での砲撃は有効射程が通常の半分になるため、一夏と鈴音はギリギリで射程範囲を抜けることが出来る。

「くそっ、埒が明かない」

一夏は苛立ちを抑えることなく言葉に乗せる。

「こんないたちごっこじゃ、こっちのエネルギーが先に切れちゃうわ」

鈴音もこの状況に焦りを感じていた。

なんとか打開策を見つけないと。

しかし、先に行動に起こしたのは敵ＩＳだった。

高速回転からのビーム砲撃を行う。

「同じことなんて通用しないわよ！」

鈴音はこれをチャンスと見たのか、空間圧作用兵器・衝撃砲を持って、砲撃を行う。

しかしそれが仇となった。

砲撃による一瞬の隙。

そこを付かれた。

未だ回転している敵ＩＳの肩部から鈴音にミサイルが放たれる。

「えっ！？」

それは衝撃砲では落としきれない数量を持って、鈴音に襲い掛かる。

「くっ！」

すぐさま回避行動に移るが、遅い。
鈴音の体は爆発に巻き込まれた。

「りいいいいんっっ」

一夏は鈴音の元へ急ぐ。
先ほどの爆撃を受けてはシールドエネルギーなど残っていないだろう。
急がなければ、鈴が危ない。

一夏は目の前で鈴音が倒れたことで、気が動転していた。
敵は、一夏が鈴音に駆け付けるのを黙って見ているわけが無い。
そんなことにも気づかないぐらいに。

その敵ＩＳは一夏にその腕を伸ばし、銃口を突きつける。
一夏は、ロックされて、自分が狙われていると気づいたのだろう。
その直線的な動きは急に変えることは出来ない。
遮断シールドを突き破るビーム砲撃。
直撃したらただではすまない。

万事休すか。

「くそっ」

一夏は、必死に体制を整える。
しかし、その短い硬直時間は敵ＩＳにとっては充分なものだっただろう。

その銃口が光を纏う。

「ちくしょおおぉぉぉ！！」

光線がアリーナを貫いた。

第十九話　クラス対抗戦　前編（後書き）

後編に続きます

第二十話　クラス対抗戦　後編（前書き）

後編ですが、ちょっと短め。
区切る場所をもうちょいと考えればよかったかな？

第二十話　クラス対抗戦　後編

「りいいいんっっ」

一夏は鈴音の元へ急ぐ。
先ほどの爆撃を受けてはシールドエネルギーなど残っていないだろう。
急がなければ、鈴が危ない。
一夏は目の前で鈴音が倒れたことで、気が動転していた。

敵は、一夏が鈴音に駆け付けるのを黙って見ているわけが無い。
そんなことにも気づかないぐらいに。

その敵ＩＳは一夏にその腕を伸ばし、銃口を突きつける。
一夏は、ロックされて、自分が狙われていると気づいたのだろう。
その直線的な動きは急に変えることは出来ない。
遮断シールドを突き破るビーム砲撃。直撃したらただではすまない。

万事休すか。

「くそっ」

一夏は、必死に体制を整える。
しかし、その短い硬直時間は敵ＩＳにとっては充分なものだっただろう。
その銃口が光を纏う。

「ちくしょおおおぉぉ！！」

光線がアリーナを貫いた。

◆◇◆

光線がアリーナを貫いた。

その光線に貫かれた右腕は、その居場所を宙に移す。
ＩＳの右腕が吹き飛んだ。

「どうやら、間に合ったようですわね。一夏さん？」

セシリアはスターライトｍｋ？を構えたまま、開放回線で言葉をかける。

「セシリア！」

「早く、鈴さんを安全なところに」

一夏は、すぐさま鈴音に駆け寄り、その身を抱いて戦線から離れる。

鈴音の装甲はあらゆる所が融解し、破壊されていた。

しかし、その身には絶対防御が作用したのか、命に別状はなさそうだ。

それでも、安心は出来ない。

一夏が鈴音を運んでいる間にも、セシリアはスターライトｍｋ？による狙撃を続ける。

それは的確に敵ＩＳを貫く。

だが、敵ＩＳの停止には至らない。

それでもセシリアは撃ち続ける。

しかし、それを露にも思ってないかのように、敵ＩＳはセシリアに銃口を向けた。

セシリアは、それを笑みで眺めていた。

罠にでもかかったと言わんばかりに。

「わたくしだけに気を取られていてよろしいので？」

その言葉が何を意味するのか、一夏は理解できなかった。

しかし、すぐさまその意味を把握することになる。

「はあぁぁぁぁ！！」

沙良がピットから薙刀を持って敵ＩＳに接近したのだ。

その薙刀は先ほど使ったものと同じ、『禊』。
その衝撃は、シールドを貫通する。
ゆえに、沙良はそれをダメージ目的ではなく、体制を崩させるために使う。

沙良はこのＩＳが無人機だと知っている。
ゆえにダメージを与える目的では絶対に勝てないと分かっているのだ。
やるからには破壊する。

「姉さんの顔に泥を塗るような事は見逃せない！」

落とし前は自分で付ける。

沙良は左足に目掛けて薙刀をなぎ払う。
それは、セシリアに標準を合わせていた敵ＩＳには避け切ることは出来ない。

当たる。

その拡散された衝撃で、敵ＩＳは体制を崩す。
それを見逃す沙良ではない。

沙良は『禊』を『収納』。
新たに武装を『展開』する。
それはインパクトロッドと呼ばれる武装。

「吹っ飛べ！」

衝撃を一点に集めるインパクトロッドは、敵ＩＳに当たると、その身を遮断シールドまで吹き飛ばす。
結果を見るようなこともせず、すぐさまインパクトロッドを『収納』、そして新たな武装を『展開』。
追い討ちをかけるように沙良は重火器を手に持つ。

ミサイルランチャー。
それはＡＴＭ。対戦車ミサイルである。

「当たれぇぇ！！」

放たれた弾頭は、ゆっくりだが確かに敵ＩＳへと向かう。
吹き飛ばされた敵ＩＳに避ける手段は無い。
それは当たった瞬間、とてつもない爆発を起こす。

「まだまだぁ！」

沙良は両手にロケットランチャーを『展開』し、多目的ロケット擲弾をばら撒く。
多目的ロケット擲弾は、空中にその身を躍らせると、敵ＩＳに方向を変える。
それが爆発するまでに、沙良は次なる武装を『展開』する。

サテライトレーザー。

それは発射までに十秒かかるという欠陥品だがその分威力は抜群に高い。
『衛星すら落とす』と言う名に相応しい威力となっている。
今なら十秒確保できる。

十
九
八
七
六
五
四
三
二
一

「発射」

沙良の無情なる声に、全てを焼ききるレーザーは敵ＩＳの下部を割断した。

「すげぇ……」

一夏の呟きが聞こえてくる。

まだだ。

気を抜くな、終わってない。

「Ｃａｍａｒ?ｎ　ｑｕｅ　ｓｅ　ｄｕｅｒｍｅ　ｓｅ　ｌｏ　ｌｅｖａ　ｌａ　ｃｏｒｒｉｅｎｔｅ.（眠っている海老は流される）」

それはスペインでよく言われることわざ。

油断大敵。

そういう意味だ。

しかし、その想いと裏腹に、深い青に包まれた体は、輝きを失う。

「具現維持限界（リミット・ダウン）!?　こんなときに!?」

その機体は絶対防御だけを残し、機能をストップさせる。

クラックにエネルギーを使いすぎたのだ。

最後に機能が止まりかける瞬間。

沙良のハイパーセンサーはある動作を捉えた。

敵が左手を一夏に向けて動かしていた。

それは、遮断シールドを貫通する殺傷兵器。

拙い拙い拙い。

一夏は気づいていないようだ。

沙良は声を張り上げる。

「一夏ぁ！　逃げてぇ！」

しかし、その一夏の機体は回避行動に移ることができない。
そこには、ＩＳを解除している鈴音が横たわっている。
一夏が避けようとも、鈴音に当たっては話にならない。
このままだったら、一夏と鈴音が死んでしまう。

「一夏さん！？」

セシリアも、敵ＩＳの動きに気づくが、ピットからでは間に合わない。

「動け、動け、動いて、……動いてよ！！」

沙良は、反応を無くしたカイラを必死に動かそうとするが、その思いに反して、カイラは微動だにしない。
沙良は意味無き叫びを上げる。

（何のためのＩＳだよ！　誰も守れないようなＩＳしか僕は作れないのか！）

自分が作った機体では一夏を助けられないのか？

英雄だ何だ呼ばれても、大切な人は守れないのか？

沙良は悔しさを滲ませる。
その自分の弱さに、不甲斐なさに涙が零れる。

「僕に、力さえあれば」

――力を望みますか？

すると、頭に響くように、声が聞こえる。
この感じは覚えがある。
初めてＩＳに乗ったときの……

――力を求めますか？

（求める……僕に、僕に力を貸して）

――何の為に？

（一夏を、家族を守るために）

――この破壊の力で守ると？

（確かに、ＩＳは兵器だ。でも、それが力であるなら、利用してみせる）

――それは……

（何を犠牲にしても、僕がどんなに傷ついても！！）

――いいでしょう。貴方の覚悟は受け取りましょう。

（それじゃあ）

――その機体を借ります。さぁ、わたしの名前を呼んで。

（ああ、お願い力を貸して）

「【オルカ】！！」

◆◇◆

一夏は見た。

沙良が叫びを上げた瞬間、具現維持限界（リミット・ダウン）を迎えたはずの沙良の機体が、光を取り戻したのを。

その機体は、深い青から、蒼が混ざったような黒に色を変える。

その装甲には白いラインが走り、蒼のラインがその姿を彩る。

厚い装甲が、消え、その機体は洗練された形となる。

エネルギーが無いはずのその機体は、敵ＩＳを見据えると、そのスラスターを噴かせた。

その機体は、一瞬でトップスピードに乗ると、敵ＩＳに肉薄する。

その動きはまるで、一夏たちを庇うかのよう。

敵ＩＳと一夏たちを分断するように、沙良は体を入れる。

それでも構わず、敵ＩＳは左手から溜め込んだ光を放出しようとする。

「沙良！」

その直前に沙良は『展開』した『禊』で左腕を切りつけた。
機構は作動しない。
一度使ってしまっているから。
しかし、それでよかった、目的は装甲の破壊だから。

その刃は敵ＩＳの左腕に食い込む。
方向は、ずらす事が出来た。
しかし、それだけでは駄目だ。

ここで止めを刺さないと。

沙良は刃を押し込んでそのまま左腕を切り飛ばした。
その瞬間、行き場をなくしたエネルギーが、光の渦となって沙良の身を包み込んだ。

「サラァァァァ！！！！」

一夏の叫びを最後に、沙良は意識を手放した。

第二十一話　憂慮の刃

「う……？」

全身の痛みに呼び起こされ、沙良はまだぼやける意識を覚醒させる。

「……知ってる天井だ」

なんだか状況がわからず周囲を見回すと、どうやら保健室で寝かされていたらしい。

「……気がついた？」

「……簪？」

近くに設置された椅子に座るのは四組の更識簪だった。

「あれからどうなったの？」

「試合は中止。対抗戦も一年は中止。来月末の学年別個人トーナメントの成績で代用するんだって」

「そっかぁ。せっかく頑張って間に合わせたのにね。打鉄弐式。まぁ完成には程遠いんだけど」

「……気にするのは、そこ？」

「今回はデータ取りとしても重要だったんだから大切なことだよ？」

「……ＩＳバカ」

「褒め言葉として受け取るよ」

簪は、一瞬だけ笑顔を見せるが、すぐに隠してしまう。

「じゃあ、対抗戦、終わっちゃったけど、まだ手伝ってくれる？」

「もちろん。中途半端じゃ終われないからね」

簪は、その表情を明るくすると、椅子から立ち上がり、閉められていたカーテンを引く。

「織斑先生を呼んでくる」

それから程なくして、千冬姉が、ソフィアを伴って保健室に入ってくる。

簪はもう戻ったのだろう。おそらくは休ませて上げたいと配慮か。

「気がついたようだな。気分はどうだ？」

「ええ、特に悪くは」

「そうか、お前の体だが、一番ダメージが高いところが鎖骨のひび。安静三日全治一週間。次が、肋骨のひび。同じく安静三日全治一週間。そして、内臓へのダメージが大きい。全身にも打撲が見られる。いまは薬が効いているためマシだが、三日は地獄を見るだろう。我慢しろ」

沙良は自分の体が動かせない理由がわかった。

麻酔が残っているのだろう。

「医療が進歩してて助かったよ」

そうでなければ完治に一ヶ月以上かかっていたかもしれない。

ＩＳが発表されてから、世界の医療は格段に進歩していた。

場を和ませようと沙良は笑顔を見せる。

「まぁ、何にせよ無事でよかった。家族に死なれては流石の私も耐え切れん」

千冬の表情は普段より、柔らかなものだった。

「千冬姉」

「なんだ？」

「心配かけて、ごめんね？」

「そう思うなら、無茶な真似は止してくれ。心臓がいくつあっても足りない」

千冬は真剣な瞳で、沙良を見つめる。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、しっかりと休んでおけ」

それだけ言い残すと、千冬姉はすたすたと保健室を出て行ってし

まう。
それを切っ掛けにソフィアが行動を起こす。
「本当、無茶は止めてって言ってたよね？」
その声色は感情が押し殺されている。
今まで、黙って話を聞いていたソフィアが、沙良の横に立つ。
その噛んだ唇を見て、沙良は、ソフィアが本気で怒っていることを悟る。
パアンッ！
沙良の体を考慮してか、威力を抑えた張り手は体に響かない。
頬は痛まない。
それでも沙良の心には大きな波紋を与える。
ソフィアは泣いていた。
「約束したよね？　無茶しないって」
「……うん」
「オルカは危険って分かってたでしょ！？　絶対防御が作動しないんだよ！？　あんなに皆から言われてたのに……それなのにセラは使った。それも、よりによってあんな危険な状況で！」
「……El que quiera pescado que se moje el culo.（魚を得たい者は尻をぬらさなければならない）」
「……危険を避けていては成功できない。そうね、それはそのとお

りよ。でも、そのリスクをきちんと管理して、最低限の安全を確保することが前提。貴方みたいに危険に身を晒す事を躊躇せず、ましてやそれを良しとするような人間には当てはまらない」

言い返す言葉も無い。

完璧に自分が悪いと自覚している。

「別に危険に身を晒したことを悪いって言っているのではないの。あの状況では仕方ない。そう言われたら私たちは何も言えないわ。でも、それでも貴方には沢山の想いが乗せられているの。守るため、大いに結構よ。私だってあの状態ならセラと同じことをやったわ。でもそれは、全ての可能性を充分に吟味してから。どうしようもないって状況になったらの話」

わかってる。

沙良は、力があるというだけで、すぐにそれを選んでしまった。

それが、自分が傷つくことになっても。

「セラはあの時どうした？　オルカを使って、敵を切り伏せた。それはいいわ。でも、最後、セラはその身に危険が迫ったとき、それで守れるなら良しとした。私はそれが許せない。あなたはそれでいいかもしれない。死ぬかもしれないと言っても１００パーセントではない。自分の機体を信じてたからかもしれない。でも、私たちがそれで何も思わないとでも思ったの？」

ソフィアの零れ続ける涙に、沙良は身が裂かれるような思いを感じる。

「……ごめんなさい」

「今度あんな簡単に、危険に命を投げ出すことを、私たちの想いを踏みにじることを選んで見なさい。私は、セラを絶対に許さないから」

沙良の沈みきった顔をこれ以上見てられないのか、ソフィアは沙良に背を向ける。

「このことはしっかりと報告させて貰うわ」

ソフィアはその怒りを隠すことなく、出て行ってしまう。

沙良は、ソフィアの姿が見えなくなると、扉越しに様子を伺っていた二人に声をかける。

「リナ、フィーナ。入っておいで」

二人は気まずそうに顔を見合わせながら入ってくる。

「セラ……」

「いいんだ。今回のことは僕が悪い」

「でも、セラさんは織斑さんを守ろうとして――」

「それでも、だよ」

「――そう、ですか」

「ソフィが本気で心配してくれてたのは分かってるから。だからあの怒りは大人しく受け止めるよ」

「セラ」

「Ａｌ　ｍａｌ　ｔｉｅｍｐｏ，　ｂｕｅｎａ　ｃａｒａ．（悪い天気の時は、明るい顔で）」

「辛い時こそ笑顔で、セラは……強いね」

「弱いよ。だから笑ってないと潰れちゃいそうなんだ」

そうして沙良は瞳を閉じる。

すると、空気を読んでくれたのか。二人は音を立てずに席を外してくれる。

沙良はゆっくりと眠りに落ちていった。

◆◇◆

ふと眠りから覚めた沙良は、カーテンが全て開けられていることに気づいた。

（誰か来ているのかな？）

重たい体を動かし、横を向いてみると、鈴音が一夏に顔を近づけていた。

「何してんの、鈴？」

「さっ、沙良!?　起きてたの!?」

「いや、今起きたの」

「べ、別にさっきのはそういうんじゃ無くて……」

段々声量が小さくなる鈴音に沙良は首を傾げる。

「とりあえず、そんなに大きな声を出したから一夏起きちゃったよ？」

その言葉に、未だ一夏に顔を近づけた状態で固まっていた鈴音は慌てて、一夏から離れる。

「……何してんの、お前」

「おっ、おっ、おっ、起きてたの!?」

鈴音は沙良の時以上に驚きの声を上げる。

「お前の声で起きたんだよ。で、どうした？　何をそんなに焦っているんだ？」

「あ、焦ってなんかないわよ！　勝手なこと言わないでよ、馬鹿！」

しかし、その姿はどう見ても焦っている。

「そういえば、試合ってどうなったんだ？」

「無効だってさ」

「沙良、起きてたのか」

「さっきね」

「そうすると、勝負の決着ってどうしよう。再試合も決まってないんだよな？」

「そのことなら、別にもういいわよ」

「え？　なんで？」

「い、いいからいいのよ！」

一夏は納得はしていないようだ。
それゆえに、黙って頭を下げる。

「い、一夏？」

「その、なんだ……。悪かったよ。色々と。すまん」

「一夏……」

「俺、あの時からずっと考えてたんだ。なんで鈴があんなに怒ってたのか」

そう切り出す一夏に鈴は面食らったような顔をする。

「でもさ、俺って馬鹿だから、全然わからなくて。意味が違うのか

と思ったけど、あまり思い浮かばなくて。でも、俺、鈴と仲直りしたいんだ」

それは一夏が鈴音に真正面から向かい合って出した答え。

「これからもこんなことで怒らせてしまうかもしれない。でも鈴とは仲良くしていたいんだ。許してくれないか？」

鈴音は真剣な一夏を直視できないのか、赤い顔を一夏に見られないように俯きながら答える。

「ま、まあ、あたしもムキになってたし……。いいわよ、もう」

「で、一夏は他にどんな意味を思い浮かべたの？　あまりってことは何個かは考えたんでしょ？」

一件落着した所に、沙良が爆弾を放り込む。

「ちょっ、ちょっと沙良！？」

鈴音が慌てるが、一夏は迷いも無く答える。

「もしかしたら『毎日味噌汁を～』とかの話かとも思ったけど、それは流石に深読みしすぎたかな」

「――――っ！？」

鈴音が、ピキッと動きを止める。

沙良もまさか一夏がそこまで考えていたなんて思っていなかった

ため、驚いてしまう。

（あの、一夏が！？　あの何を言っても曲解して捉える一夏が！？）

本人が聞いたら怒るであろうが事実である。

「鈴？」

一夏は少し挙動がおかしい沙良よりも、完全に停止している鈴音に声をかける。

「へぇっ！？　そ、そうね！　深読みしすぎじゃない！？　あは、あははははは！」

急に笑い出した鈴音に、不思議そうな表情を向ける一夏。

これで気づかないなんて相当鈍い。

「そっか、それならいいんだ」

「……」

自分で否定しておきながら、悲しそうな顔を見せる鈴音。

『馬鹿、チャンスだったのに』

沙良は個人間秘匿通信（プライベートチャネル）で鈴音に呆れたと伝える。

『だ、だって……』

『鈴のそういうところも一夏の鈍さに拍車をかけてるんだよ？』

『うぅ……』

「沙良、鈴、俺はもう動いても大丈夫らしいから、部屋に戻るな。沙良はしっかり休んでおけよ」

「うん、ありがとう」

沙良は一夏に手を振れないため、にっこり笑うことで返答とする。

一夏は、沙良に笑い返すと、そのまま、保健室を出て行ってしまう。

残された鈴音は沙良の視線が自分に向いているのに気づいた。

「な、何よ？」

「勿体無い」

「も、もう少し、慰めてくれたっていいじゃない」

「……」

「何よ？」

「鈴の意気地なし」

「う、うわぁぁぁ！！」

鈴音は走り去って行くのだった。

◆◇◆

学園の地下五十メートル。そこにはレベル四権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。
機能停止したＩＳはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。
そこで、千冬は繰り返しアリーナでの戦闘映像を見ている。
そこに映るは、ジャミングのかかった映像。

「……」

室内の薄暗さは、千冬の冷たさをより一層引き立てた。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みで開かれたウィンドウには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可により自動で開かれるドアをくぐり、真耶は普段の姿からは想像も出来ないほどの堂々とした動作で入室した。

「あのＩＳの解析結果が出ました」

「ああ、どうだった？」

「はい、あれは――無人機です」

世界では、未だに完成されていないと思われている技術。遠隔操作と独立稼動。そのどちらかか、あるいは両方か。沙良の発言から恐らくは独立稼動だろう。その技術があの謎のＩＳに使われている。

「どのような方法で動いていたかは不明です。深水くんのレーザーで機能中枢が焼き切られていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

どこか確信のある表情をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔を見せる。

「何か心当たりでもあるんですか」

「いや、ない。今はまだ――な」

そう言う千冬の瞳には怒りが燈っていた。

登録されていないコア。

それは束しか作ることの出来ないもの。

しかし、一番の被害を受けたのが、沙良である時点で、束と言う線はほぼ消えた。

束は沙良には危害を加えない。

喧嘩などで怪我を負う事はある。

そういうことではなく、束は沙良に対しては絶対に敵意を向けたりしない。
そして、沙良の管制室で見せた態度。
あれは、束が研究が馬鹿にされたときに良く見せていた物と似ている。

（落とし前を付けるか）

おそらく、沙良はあれが何か知っていたのだろう。

「ゴーレム、か」

それは、沙良の呟いた言葉。
そのことから、作ったのは束だろうと千冬は確信していた。
しかし、その権限は束の手から離れていた。
沙良の態度から見て盗まれた可能性が強いだろう。
千冬はＩＳを盗むなんて馬鹿なことをする組織を二つ知っている。
それは、あの事件にも関わっていた連中。
千冬は拳を強く握る。

「次、私の家族を傷付けてみろ。その時は――」

そう言って千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。
かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代に、勝るとも劣らない鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けた。

◆　◇　◆

「～～～～♪」

彼女は浮かれていた。

なんせ、今まで距離を置かれていた妹に、昼食を誘われたのだから。

話すことはあまり無かったが、その一歩近づいたということが彼女にとっては大きなことだったのだ。

今も机に詰まれた書類に目を通し、署名を書きながら、横で仕事をする幼馴染に自慢話をしている。

その幼馴染の妹は、クラスの子に用事があるといって遅れている。

（ああ、楽しみだなぁ。明日の簪ちゃんとのご飯）

今の彼女は、生徒会長として見せてはいけない類の顔をしているのだろう。

横に座る幼馴染が、怪訝な顔をしている。

しかし、そんなことお構いなしに、彼女は鼻歌を歌い続ける。

そんな時、彼女たちのいる生徒会室がノックされた。

「はい、どうぞ」

彼女は、先ほどまでのだらけ切った表情をしまい、生徒会長らしい毅然とした態度をとる。

「失礼します」

入ってきたのは、生徒会役員の布仏本音。

そして、

「失礼します」

監視対象であった、深水沙良だった。

◆◇◆

先ほどまでの浮かれ気分と違い、彼女は焦っていた。

最近まで自ら監視をしていた人物が訪れてきたのだ。何か感じるものがあってもおかしくない。

「あら、何の用かしら。この学園の有名人の深水沙良君？」

彼女は、ここ最近、彼を監視していた。

最初は妹に仲良くする人間と言うことで、個人的に情報を集めていたが、その時に衝撃の事実がぞろぞろと出てきた。

スペインの英雄。

凄腕の研究者。

それは、有名すぎて隠し切ることが出来ないのだろう。

彼の名前は有名すぎたのだ。

なぜ、彼が妹に近づいているのかは分からないが、危害を加えるのならばと、ずっと監視していたわけだ。しかし、それは杞憂に過ぎなかった。

妹は彼のおかげで明るくなった。

彼は、ただのお人よしだった。

彼女に残ったのは、大量の彼のデータ。そこには暗部の更識だからこそ手に入った物もある。それは知ってはいけないものまで含まれていた。

彼に、情報を持っていると知られると拙い。

研究者なら、情報の強さを知っているであろうから。

彼は彼女に敵対できるだけの力を持っている。

「ええ、少しばかり生徒会の活動に興味があり、少し会長にお話を伺えたらと」

白々しい。

彼女はそう感じた。

彼はこう言っているのだ二人で話せる場所を作れと。

「ええ、いいわ。部屋を移るのも手間になるでしょう。虚ちゃん、本音ちゃん。その資料を職員室まで運んでくれるかしら」

彼女は幼馴染たちに指示を出すと、彼に腰掛けるように、手で示す。

彼は、虚と本音が出て行くのを確認してから、腰を下ろす。

「流石の手際ですね」

「あら、何のことかしら」

実際、彼女はそれが何のことを示しているか絞り込めていなかった。

「接近した敵ＩＳの第二波を、学園に近づかせること無く始末するなんて流石は生徒会長ですね。助かりましたよ」

「――――っ！？」

「なに驚いているんですか？」

「どうして、それをあなたが？」

「どうしてって、僕は当事者ですよ？　織斑先生から聞いただけですよ」

「そ、そう」

確かに可笑しい事ではない。
疑心暗鬼になっていたようだ。

「流石は十七代目。その年で楯無の名を持つだけはありますね」

「――――っ！？」

拙い、拙い、これは拙い。
相手は調べてきている。
それに対して、受身になったこっちは切れるカードが少ない。
その上で、こちらのカードである。敵ＩＳの増援殲滅というカードが封じ込まれてしまう。
彼女は冷や汗が流れるのを感じた。

「さて、交渉を始めましょうか。僕に有利な交渉をね」

第二十一話　憂慮の刃（後書き）

ようやく第一巻が終了しました。
二十話超えて第一巻終了って遅くね？
あぁ、早くシャルを出したいよぅ

第二十二話　ソフィアとの一日

六月頭。
日曜日。

沙良はとある部屋に来ていた。
休日のため、どこかに出かけようかとも考えたのだが、一夏が中学の友達の家に遊びに行ってしまったので、暇をもてあました結果、

「なんで、抱っこされてるんだろうね」

ソフィアの膝の間に収まっていた。
ソフィアを怒らしてしまっていたので、機嫌を取るために訪れたのだが、いつの間にか、膝に抱えられていた。
沙良は特に抵抗することも無く、その膝に挟まれた状態で読書に耽っていた。
胸が押し付けられているが、沙良は慣れたとでも言わんばかりに関心を向けない。
沙良は小柄である。
ソフィアよりもその身長は小さい。
研究所にいたころから膝の間に抱えられることが多かった沙良は、いつものことだと認識していた。

「ねえ、ソフィ」

「ん？　なーに？」

既に、ソフィアの機嫌は最高に良くなっていた。
全く現金なものである。

「汗かいちゃったからシャワー浴びてもいい？」

「いいよー。一緒に入る？」

鼻息を荒くしながらソフィアが聞いてくるが、沙良は軽く流す。

「狭いからやだ」

狭くなかったら入るのかといわれれば、沙良は別にどっちでもと答えるだろう。

研究所は大浴場しかなかったため、男一人のために時間を決めたりなどしなかった。

ましてや、研究職に決まった時間に行動しろと言うほうが無茶がある。

皆が適当に大浴場に入るのだ。そこに混じる沙良としては、女性の裸など見慣れたものであり、なおかつ、皆が沙良と一緒にお風呂に入ろうと日々計画を練っていたりしていたので、既に興奮する対象ではなくなっていた。

「ちぇー」

「覗かないでね」

一応言っておく。

それが実行されるかは分からないが。

沙良は、ソフィアの抱擁から抜け出そうとするが、ソフィアが離そうとしない。

「ちょっと、シャワー浴びるから離してよ」

「えー、もうちょっとだけー」

そういって、体を左右に揺らし始めたソフィアに、沙良はため息をつくしかない。

そうして、沙良とソフィアがゆったりとした時間を過ごしていると、その部屋に来客が訪れる。

いや、来客ではない。元々がその者の部屋なのだから。

「ふ～、疲れたわ～。ソフィアいるの？」

帰宅と書かれた扇子を持った楯無がそこにはいた。

「あ、会長だー。お帰りー」

「たっちゃんお帰りー」

沙良とソフィアは帰宅した楯無に声をかける。

「ええ、ソフィアも沙良君もただいま」

そういって、自分のベッドまで歩こうとしたが、楯無はピタリとその足を止める。

そして、ギギギとゆっくり顔だけ動かし、ソフィアの膝に挟まれてる沙良の姿を視認する。

視線が合うと、沙良はにっこり笑って、その手を振った。

楯無は手を振り返し、そして数秒後叫んだ。

「どうしてあなたがここにいるの？」

「どうしてって駄目なの？」

「駄目なのって、ここは私の部屋よ？」

「ソフィアの部屋でもあるもん」

楯無は、こんな簡単なことにも気づかなかったのかと自分を責める。

（スペインの英雄と、スペインの代表候補生、それも専用機持ちが知り合いじゃないわけが無いじゃない！！）

楯無が、表面上は取り繕って、内面で大慌てしていたら、いつの間にか、沙良がソフィアの抱擁から抜け出していた。

「会長、シャワー借りますね」

そう言う沙良に、楯無はこれはチャンスと、いつものように飄々とした言動で沙良を惑わそうとする。

「あら、シャワー浴びるの？　お姉さんが一緒に入ってあげようか？　怪我治りきってないんでしょ？　お姉さんが色々と世話をしてあげるわ」

「えー、狭いから嫌です」

「じゃあ狭くなかったら入るのかしら？」

楯無の中では、これで沙良があたふたしてくれるはずだった。

その姿を見て、楽しもう。そう思っていた。

「別にどっちでも」

「――えっ？」

しかし、帰ってきた答えは予想の斜め上をいっていた。

ならば、実際にその状況になったら流石に恥ずかしがるだろう。

その時におちょくってあげればいい。

「じゃあ、大浴場に向かいましょうか。お姉さんが色々と教えてあげるわ。日曜だし、この時間なら生徒会長権限で――」

その言葉は背後から向けられる殺気で止まってしまう。

その禍々しい視線を辿ると、ＩＳを部分展開したソフィアが、アサルトライフルを片手に楯無へ銃口を向けていた。

その顔は笑顔だが、完全に目が笑っていない。

ソフィアとしては、せっかく沙良が自分から遊びに来てくれたこの時間を楯無に邪魔されてしまったことへの怒りも含まれている。

ソフィアの癒しの時間が奪われたことへの八つ当たりである。

「そ、ソフィア？　じょ、冗談よ？」

今まで滅多なことでは怒らなかったルームメイトの逆鱗に触れてしまったことを楯無は悟った。

「へー、面白い冗談だね。もっと聞かせてもらおうか」

銃口が頭に押し付けられる。
流石の楯無もこの状態から状況を逆転させることは出来ない。
「生憎だけど、今はネタを切らしてるの。また今度聞かせてあげるわ」
「そう。……それならたっちゃん、眉間に銃弾のプレゼントはいかが？　刺激で何か思いつくかも」
「流石にお断りするわ。そんなことされたら、いくら私といってもアイデアが思いつく前に思考が停止してしまうもの」
のらりくらりと怒りを流すが、段々ソフィアの顔から笑みが薄れていくのが分かる。
（あ、やば）
流石に、身の危険を感じた楯無は、助けを求めようと、沙良の姿を探す。
しかし、その姿はどこにもいない。
耳を澄ませば、シャワーの音が聞こえる。
（なんてマイペース！？）
楯無は、その無表情に近くなっていくルームメイトに本気で恐怖を感じ始めた。
生徒会長はＩＳ学園最強。それが不文律だが、流石に、ＩＳを展開していない状態で学年でもトップクラスの代表候補生に銃を突きつけられていたらどうしようもない。

（これは、本気で私もＩＳを展開しないとマズイかも）

そう楯無が思った瞬間。

「ソフィー。リンスーてどれー？」

助けが入った。

「あ、二番目の青いのがそうだよ」

ソフィアは、ＩＳを解除し、洗面所に向かう。

「わかんないー」

そして、躊躇無く沙良が居るであろうシャワー室に入った。

「これよこれ」

「ああ、ありがとう」

「いえいえ」

「……危なかった」

楯無は躊躇無くシャワー室に入っていったソフィアや、それに対して、何もリアクションを取らない沙良に突っ込みを入れることもせず、ベッドに座り込んだ。

◆◇◆

「エキシビション？」

「ええ、そう。それに出てくれないかしら？」

沙良は、またソフィアに後ろから抱きつかれた状態でベッドに腰掛けていた。

「それはどういうことをするの？」

「今月末の学年別個人トーナメントでは多くの来賓が来られるわ。そこで、ＩＳ学園としてはショーとしての模擬戦闘を見せたいってこと」

「なんで僕？」

「それは、あなたの武装が一年の中で一番派手だからよ」

沙良は、納得する。

「見世物としては最適なんだね」

楯無はそれに頷く。

「エキシビションはタッグで行われて、私と簪ちゃん対ソフィアと

沙良君で模擬戦が行われる予定なの」

ＩＳ学園最強の生徒会長と、日本代表候補生のその妹のタッグは確かに人目を引くだろう。。

それで、相手が学年トップクラスのスペイン代表候補生と今一番の話題の人物のスペインの英雄なら話題も尽きない。

「なるほど、それでスペインの機体もアピールして、Ｓ・Ｑ社の機嫌も取っておこうと」

沙良はあっけらかんと言い放つ。

「そんなはっきり言わないの。上層部だって、スポンサーへのアピールに必死なんだから」

「会長もはっきり言ってるじゃないですか」

「あら、楯無って呼んでくれていいのよ？」

「十七代目と呼んで欲しいと」

「冗談よ」

「なんと都合の良い」

「そういう時は聞き流してあげるのが紳士ってものよ？」

「淑女相手じゃないとエスコート出来ない性質なんで」

「はぁ、もういいわ。で、沙良君はエキシビションに出るから、本

戦は免除でいいそうよ」

「……まだ出るって言ってないけど？」

「もう、出るって書類出しちゃったから、今更訂正できないわ」

「……」

「えへ♪」

沙良は大きなため息をついた。

「もし、本戦に出る場合はどうなるのですか？」

「その場合は普通に参加できるわよ。でも、まだ本戦についての細かい規定が決まってないらしいから、そこは情報待ちね」

「了解。……ソフィ？」

沙良は、先ほどから一言も喋らないソフィアに怪訝な表情をする。そして、そのソフィアのにやけただらしない顔を見て、額に手を当てる。

目の前で手を振って見ても、反応は無い。

心ここにあらず。

これは、夜まで部屋に帰れなさそうだ。

沙良は、ソフィアに抱きつかれたまま、楯無とお喋りして、時間を潰すのであった。

◆◇◆

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と深水君の話よ」

「いい話？　悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まぁまぁ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？　女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで――」

沙良はソフィアと楯無と二年生用食堂に来ていた。

二年生用といいながらも、一夏と沙良が入学してから一年生用食堂に多くの上級生が押しかけているため、その区別はほぼ意味を成さなくなっていた。

「ん？　なんかあそこで盛り上がってるね」

沙良は食堂の一角を指差す。
二年生用食堂が騒がしいのは珍しいことだ。

「えええっ!?　そ、それマジで!?」

「マジで!」

「うそー!　きゃー、どうしよう!」

何かよほど面白いことでもあるのだろうか。
黄色い声が津波のように押し寄せてくる。

「ん、騒いでるの、二条先輩だ」

沙良は知り合いの姿を見つけ、集団に近寄ることにした。

「セラ?」

「ちょっとだけ」

ソフィアも後ろをついてくる。
楯無はその噂の内容に心当たりでもあるのかニヤニヤしている。

「どうしたの?」

沙良は近くに居た女子に話しかける。

「それが、すごい噂が流れてるの!!」

「噂?　どんな?」

彼女は相手が沙良と気づいていないのか、女子だけと言っていた噂を語りだす。

「なんと、今回の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と深水君とつ――」

「葉月待って!!　その人沙良君だから!!」

その葉月と呼ばれた少女の発言は、途中で沙良に気づいた初音によって止められる。

「えっ？」

「優勝したらどうなるの？」

沙良は首を傾げ、初音を見つめる。

その「教えてくれないの？」という沙良の視線に初音は耐え切った。

「くっ、そんな目で私を見ないで。うぅ、いくら沙良君でも、これだけは言えないのよ!!」

初音は、そのまま走り去ってしまう。

残された沙良はポカンと口を半開きで固まってしまう。

「ほうほう、それはおいしいわね。上級生にも当てはまるの？」

「そこまではわかんないけど、期待は持てるわね」

後ろではソフィアがちゃっかり別の人から噂を聞きだしていた。

「ソフィ？」

「何？」

「優勝したらどうなるの？」

その首をかしげている沙良の頭を撫で、ソフィアは物凄くいい顔を作る。

「なんでもないわよ。女子にはご褒美が当たるってだけの話」

それは全くの嘘ではないだろう。

だから沙良もそれを疑わずに鵜呑みにする。

「そっか」

沙良はそれで納得したのか、食券を買いに、販売機に並ぶ。

その後ろでは、ソフィアを筆頭に、二年女子が狩人のような瞳で沙良を見つめていた。

それを、楯無は面白そうな顔でただ眺めているのであった。

第二十二話　ソフィアとの一日（後書き）

次は、シャルの登場だー！！

第二十三話　転入生

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」

「え？　そう？　ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

女子がカタログを持ってあれやこれやと意見を交わしている。

「そういえば織斑君のＩＳスーツってどこのやつなの？　見たことない型だけど」

「あー、特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリット社のストレートアームモデルって聞いてる」

一夏は時々思い出すような素振りを見せながら答える。

「深水君のは？」

「僕のはＳ・Ｑ社のオリジナルモデルだよ。まあ、オリジナルといっても、シークエストシリーズに特化したスーツを男性用に改造しただけなんだけどね」

沙良は自社の製品となるスーツの宣伝を忘れない。

「S・Q社のスーツは、作業のときにも使用されてて、それだけで潜水も可能という優れもの。それに防弾防刃機能も優れてるんだ。デザインもモニターを募って日々意見を取り入れてるから、きっと満足できる一品が見つかるはずだよ」

沙良はそういって、S・Q社のカタログを取り出し、女子の談笑に混じっていった。

その後ろで、一夏は、真耶にISスーツの説明を受けているようだ。

時折、真耶を褒める声が上がっている。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

千冬の登場で、クラスの雰囲気が一瞬で引き締まる。

皆が言われる前に席に着くと千冬は満足そうに頷く。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ、下着で構わんだろう」

一夏と沙良は顔を見合わせると苦笑いをする。

どうやら同じ意見を持ったようだ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

真耶は千冬からホームルームを促されると、眼鏡を拭いていた手を止め、慌ててかけ直した。

その姿に一度笑いが起こる。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！」

「え……」

「「「「ええええええっ！？」」」」

いきなりの転校生発言に一気にクラスが騒がしくなる。

それもそうだ。噂が好きな十代女子が過半数を占めるこのＩＳ学園の情報網をかいくっぐてきたのだ。驚きが大きくても仕方ないだろう。

しかし、沙良は、一人別のことを考えていた。

（この時期に転校生？　鈴のことを考えると、それなりの実力があって、専用機持ちの可能性が高い。でもそれなら一組に入れる必要がない。鈴だって違うクラスだし。そう考えると、何かの圧力がかかったのか？　政府か、企業の）

「失礼します」

沙良の思考は、転校生が入ってきたことにより一時中断される。

クラスのざわめきがピタリと止まる。

それもそうだろう。
入ってきた転校生は少女ではなく、少年だったのだから。

◆◇◆

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れたことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

えっ……男？

それにデュノアってあのフランスの大企業の？

「お、男……？」

誰かがそう呟く。
その気持ち分かるよ。僕も驚いてるもん。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

僕は、転校生の事などそっちのけで個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で千冬姉を問い詰める。

『千冬姉！』

「男子！　三人目の男子！」

『おい、沙良。授業中にＩＳを無断で使用す――』

『あのデュノア社の関係者に男性のＩＳ乗りなんていないはずじゃないの！？』

「しかもうちのクラス！」

『なっ！？』

『まず、秘匿なんて出来るわけがないんだよ。僕ですら連合には存在が知られていたんだ。もし彼が男性だったとしたら、僕にそれが伝わってこないわけがないし、僕や一夏が発表された時に発表しないとおかしい。そう考えると、考えられる可能性は少ないよ』

「美形！　深水君もそうだったけど、守ってあげたくなる系の！」

『……やはり、沙良もそう思うか』

『千冬姉も？』

『ああ、あいつのことは沙良に頼む。一夏では何があるか分からん。お前なら、データが盗まれたとしても大した痛手ではないだろう』

「地球に生まれてよかった～～～～！」

元気だね、うちのクラスの女子一同は。ちなみに他のクラスから誰も覗きに来ないのはＨＲ中だからかな？　担任の皆様お疲れ様です。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬姉がぼやく。おそらく、面倒くさいのは先ほどの会話のほうだろう。

僕は、もう一度転校生をまじまじと見る。

人懐っこそうな顔。礼儀正しい立ち振る舞いに中性的に整った顔立ち。濃い金色の髪を首の後ろで丁寧に束ねている。その体はともすれば華奢に思えるぐらいのスマート。僕と同じくらいの身長。

一度意識してしまうと男には到底見えない。

僕だってよく女顔だと言われるが、女に間違われたことはない。性別などそうそう間違えることなどない。

「ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬姉が行動を促す。

このままクラスにいると女子と一緒に着替えないといけなくなる。それは彼もデュノア君も困るだろう。

確か、今日は第二アリーナ更衣室が空いてたはず。

「深水、デュノアの面倒を見てやってくれ」

了解。

「デュノア君、行こ」

「君が深水君？　初めまして。僕は――」

「あぁ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

流石、一夏。説明と同時に教室を飛び出て走っていく。

「僕たちも行くよ！」

僕はデュノア君の手を取るとそのまま教室を出た。

「とりあえず、男子は毎回空いているアリーナ更衣室で着替えるから、早く移動に慣れてね」

「う、うん……」

ん？　どうしたんだろう？　なんか妙に落ち着きがなくなってきた。

「トイレか？」

「トイ……っ違うよ！」

「一夏、流石にその発言はデリカシーがないと思うな」

「まぁ、違うならそれは良かった。今からトイレに行ってたら間に合わないからな」

とりあえず階段を下って一階へ。速度を落とすわけにはいかないのだ。なぜなら――

「ああっ！　転校生発見！」

「しかも織斑君と深水君と一緒！」

そう、ＨＲが終わっているということで、情報先取のための尖兵が動き出したのだ。捕まったら最後授業には間に合わず、鬼の特別カリキュラムを受けることになる。

それは絶対に嫌だ！

「いたっ！」

「者ども出会え出会えい！」

待っていつからＩＳ学園は武家屋敷になったの。

「待て、いつからここは武家屋敷になったんだ。……おい、誰だ法螺貝吹いてるやつは！？」

一夏も同じこと考えてるし。

てか、法螺貝吹いてるの黛先輩だ。

なに仲間を呼んでんのさ！

「ああ、織斑君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！　沙良君と一緒！　お似合い！」

「きゃああっ！　見て見て！　ふたり！　手！　手繋いでる！」

「これは沙良×シャルか……？」

「何言ってんの！！　沙良君は総受けでしょ！！」

「いや、デュノア君なら沙良君の攻めを受けてくれると私は信じてる！」

「日本に生まれて良かった！　ありがとうお母さん！　今年の母の日はちゃんと形のある物をあげるね！」

いや、プレゼントぐらいしっかりしてあげようよ。

てか、そこの腐った人たちは何を言ってるのかな？

「沙良シャル？　総受け？　なんの事だ？」

「一夏は知らなくていいことだよ」

一夏、君は知ってはダメなことだよ。

一夏は綺麗な一夏でいて欲しいんだ。

だからそんな顔で見ないでよ。僕だって言いたくないんだから。

「な、なに？　何でみんな騒いでんの？」

状況が飲み込めないのか、シャルは困惑顔で聞いてくる。

でも、さっきの意味は知っていたのか、顔を赤くしていた。
あぁ、この子、むっつりに違いない。

「そりゃ男子が俺たちだけだからね」

「……？」

なんで、意味がわからないって顔してるんだろうね。
本当に隠す気あるのかな？
まだ、本当にそうとは決まったわけじゃないけど、疑ってくださいって言ってるようなものだよ？

「いや、普通に珍しいだろ。ＩＳを操縦できる男って、今のところ俺たちしかいないんだろ？」

「あっ！　――ああ、うん。そうだね」

まずい、会話に夢中になってたら包囲網が完成しつつある。

「一夏、喋ってる場合じゃないよ」

「――っ！　そのようだな。沙良、デュノアは任せても大丈夫か？」

「任せて」

一夏は、急に方向を変えると、階段から下に降りていく。

「相手は二手に分かれたぞ！　こちらも分散して追い詰めろ！」

「新聞部二人組みを追います！」

「なら私たちは織斑君を！」

その統率力はもっと別の場所で活用して欲しいな。
でも、その追撃部隊に、新聞部を混ぜたのが間違いだよ。
なぜならそこには黛先輩がいるからね。

「黛先輩！」

僕は走りながら声を上げる。

「ダメ！　どんな条件でも、インタビューはしないといけないの！！」

なんて記者魂だ！

「なら、後でデュノア君に個人インタビューを受けさせます！」

「えぇ！？　なに言ってるのさ！？」

ごめんよデュノア君。
でもこれが一番手っ取り早いんだ。

「……」

考えてる、考えてる。

「もう一押し！」

くっ、取れるところで取ってくるなぁ。

「密着取材を三日にしてもいいですよ」

「ここは私に任せて沙良君たちは早く行きなさい！！」

黛先輩率いる新聞部は振り返り、追撃部隊を食い止める。

「流石、先輩！！」

その切り替えの速さは脱帽物です。

よし、このままいけば逃げ切れる。

「甘いわ、沙良君」

「くっ二条先輩」

いつの間にか回り込まれていたみたいだ。

「くっ、そこを退かないとあの事言いますよ！？」

「えっ？」

「整備室で昼寝してたら二条先輩が寝込み襲おうとしてきたって話言いふらしますよ！？」

「待って、言ってる！　それ、全部言ってるから！！」

「……目標、二年三組整備科二条初音」

「ひぃ……！」

よし、後ろの集団の狙いが変わった!!

「デュノア君、今のうちに逃げるよ！　二条先輩の犠牲を無駄にはしちゃいけない！」

「えぇ!?　犠牲にしたの深水君じゃん!」

え?　何のことかな?
よし、どうにか群集は抜けたようだ。

「よーし、到着!」

いつも通りの圧縮空気の抜ける音が、心に落ち着きを取り戻してくれる。
この斜めにスライドするドアはいつ見てもかっこいい。

「沙良、無事だったのか!」

「一夏こそ」

「それより、時間がやばいな！　すぐに着替えちまおうぜ」

一夏は制服のボタンを一気に外し、それをベンチに投げて一呼吸でTシャツも脱ぎ捨てた。

「わぁっ!?」

「?」

そうだよね、男子なら普通はそういう反応しないよね。
本当に男に思えないなこの子。

「荷物でも忘れたのか？　って、何で着替えないんだ？　早く着替えないと遅れるぞ。デュノアは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあ時間にうるさい人で――」

「う、うんっ？　き、着替えるよ？　でも、その、あっち向いてて……ね？」

「？？？　いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……って、デュノアはジロジロ見てるな」

「み、見てない！　別に見てないよ！？」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるデュノア君。
もう、いいよね。女って確定で。
反応がおかしすぎるもん。
デュノア社にハッキング仕掛けてもいいけど、リスクが高いし、地道に調査するかな。

「一夏、時間やばいよ！」

仕方ないから助け舟を出してあげるよ。

「しまった！　先に行ってるぜ！」

「うん。遅れたら、新聞部に捕まりましたって言っておいて」

「了解」

一夏は急ぎ、第二アリーナに向かう。
僕は、下にＩＳスーツを着ていたので、制服を脱ぐだけですむ。
「デュノア君着替えないの？」
まあ、理由はわかってるけど。
「す、すぐに着替えるよ！」
「ふーん、先に行ってるね」
「うん」
先に行くって言ったらわかりやすいぐらいにホッとしちゃって。
まあ、あとで千冬姉に報告しておくかな。
「デュノア君」
「ん？　何？」
「むっつり」
「な、な、なっ！？」
「急ぎなよ、織斑先生は、怒ると怖いからね」
僕も急いで、アリーナに向かうか。
今日は、大変な一日になりそうだなぁ。

第二十三話　転入生（後書き）

たまに一人称視点になるのは練習のためです。
苦手なんですよねぇ一人称。

あ、ラウラはシャルのイベントがある程度進んだら出します。

第二十四話　実習授業

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦戦闘を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合が入っていた。

一夏が、鈴音に蹴られて騒いでいるが、沙良は、横に立つシャルルに注意を向けていた。

（うーん。目的がわかんないと接触しにくいなぁ。大方データ盗りだと思うけど）

「今日は、戦闘を実演してもらう。専用機持ちで二人誰でもいいから前に出ろ」

案の定誰も前に出ない。

千冬がため息をつき、催促を促そうとしたところ、

「では、僕がいきます」

シャルルがその手を上げた。

「そうか、ではその相手だが……」

（これで、もし僕か一夏を選んだ場合、データ盗りの可能性が強まる。さぁ、どうだ）

「僕が選んでもいいですか？」

沙良と千冬はとっさに視線を合わせる。

それだけの動作で、意思は伝わる。

「それなら、深水君でも構いませんか？」

（来た。公然とデータが取れる機会を逃さないのは良いけど、大胆だな）

「ええ、もちろん」

沙良は、頷き、一歩前へ出る。

「それで、相手は誰になるんですか？　僕とデュノア君ですか？」

「そうだな、本当なら山田先生とやってもらう筈だったのだが、ＩＳの準備に手間取っているようだ。五分間だけ二人で模擬戦を行ってくれ」

沙良は、その発言に千冬の考えを読み解く。

（千冬姉も同じ考えかな？　五分で取れるデータなんか高が知れてるし、模擬戦って言ってるから出したくない情報は出さなくても良い）

「では、戦闘を開始してくれ。ただし、本気ではやるなよ？　近接から遠距離まで一通りの戦闘を流してくれればいい。ストップはこちらからかける」

「わかりました」

「わかりました」

沙良とシャルルは同時にＩＳを展開する。
シャルルの纏う機体はオレンジ。

「ラファールのカスタムかな？」

「御明察。そっちは見たことがないね。スペインの後発機かな？」

「一年後には世界に普及することになるよ」

沙良が纏う機体は、深い青の機体。
カイラだ。
沙良とシャルルは他の生徒に被害が出ないよう、少し離れた位置まで移動する。

「では、始め」

号令と同時にシャルルは飛翔する。
それを沙良は、地面から見上げていた。

「え？」

てっきり空中で戦うと思ってたのだろうか、シャルルは疑問の声を上げる。

「号令から試合は始まってるんだから、気を抜いちゃダメだよ？」

沙良はシャルルに向かって、銃を構える。
そして撃った。
シャルルは咄嗟に、回避行動に出る。そのため、沙良から視線を外すことはない。射線を予測するため。それはＩＳ操縦者としては優れた動作。
しかし、沙良の前ではそれが、失敗だった。
沙良が銃から放ったのは強烈な弾ではなかったのだ。
それは、強烈な閃光。
そう、指向性スタングレネード。
それがシャルルの目を焼いた。
「うわあぁぁぁぁ！！」
ハイパーセンサーにより増幅された光は、防御機構によって防がれるが、それにはタイムラグがある。その刹那の閃光は見当識失調を引き起こし、数秒の間、視界からの情報をシャットダウンする。
アリーナにいる生徒には指向性のため、光は当たらない。
これは元々深海用の水中ライトを小型化し強烈にしただけなのだが、その威力は絶大である。
沙良は千冬に個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で報告する。
『今から遠距離射撃に移ります』
『了解』
そして開放回線（オープンチャネル）でこう言い放つ。

「今から近接戦闘に入りまーす」

千冬から話を聞いた生徒は首を傾げるが、何も知らないシャルルはその情報だけで近接戦闘に備えブレードを構える。

そこに沙良は遠距離から六十一口径アサルトライフルで射撃を行う。

「ちょっ！　えっ！？」

射撃が来ると思わなかったシャルルは、視界不良のまま、ハイパーセンサーだけを頼りに宙で飛び回る。

しかし、きちんと弾道が読み取れるわけではないので、その機体には何発か当たってしまう。

「ダメだよデュノア君。戦闘において相手の言うこと信じちゃ」

そう、言い放つと沙良はデュノアの視力が回復する頃だろうと銃を持ち替える。

持った銃は先ほどと同じ、指向性スタングレネード。

思惑道理、視界が回復したであろうシャルルはブレードを『収納』し、ライフルを『展開』する。

そして、模擬戦開始から一切動いてない沙良に狙いをつける。それは、相手の銃弾を避けながらも自分は当てることが出来るという自信の表れ。

それがまた思わぬ結果を生む。

先ほどの弾幕から狙撃されると思われた沙良の銃口から放たれたのは、銃弾ではなく、またしても閃光だった。

「うわぁぁぁ！！」

本日二度目の叫びを上げるシャルルに、アリーナの端によっている生徒は同情するしかない。

この戦闘だけで、シャルルの実力が高いことは皆がわかっている。

咄嗟の判断。視界が奪われた状態での回避行動。細かな微動性。

その全てが高いレベルで行われている。

ただ、その相手が沙良だったのが不運だろう。

沙良は弱い。

まともに戦ったら、どの専用機持ちにも勝てないだろう。

元々が戦闘用ではないのだ。スペックがまず違う。

機体が勝てているのは耐久性とエネルギー量だけだろう。

だから、まともには戦わない。

その圧倒的技術力で、奇を衒った武装を作り、長い経験による操縦技術でそれを活用する。

そのセオリー無視の戦い方は実力差をひっくり返す。

『次は近接攻撃に入ります』

『了解』

沙良は個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）でまた千冬に報告する。

そして、沙良はまた開放回線（オープンチャネル）で皆に聞こえるように声を上げる。

「じゃあ、近接攻撃に入ります」

シャルルは先ほどの事もあり、銃を持ったまま、その身を遠くに逃がす。

「同じ手は食わないよ！」

「ところが、違うんだなぁ」

沙良は、瞬時加速（イグニッション・ブースト）でシャルルに肉薄する。

「え！？」

沙良はラファールの頭部を、組んだ両手で叩き下ろし、顕になった背中に回転の力を利用し踵落しを決める。

そのまま地面に垂直に落ちていくシャルル。

その視界はまだ回復していないのだろう。スラスターを噴かせるが、思った方向に進まないようだ。

そのふらふらした機体に、沙良は慈悲も与えない。

「チェックメイト」

アサルトライフルを構え、スラスターを打ち抜く。

「敵に背中向けちゃダメだよ？」

「うわぁぁぁ！！」

急に推進力を奪われたシャルルはその身を地面へと落とす。

「なんか『うわぁぁぁ』しか聞いてない気がするなぁ」

沙良は、ゆっくりと地面に降り立つ。

「ご苦労だった。二人ともＩＳを待機状態に戻してもいいぞ」

沙良はすぐにカイラを解除し、シャルルを起こしに行く。

「大丈夫？」

「う、うん。目が回ってるだけ」

「あれが戦闘の実演だ。……と言いたい所なのだが、生憎、今の戦闘は特殊すぎる。あんなもの参考にされても困る」

みなが頷く。されても困るというより誰も真似できないだろう。

「そういうことで、他の専用機持ちに同じく実演をしてもらう。今回は、手本となるように山田先生と戦ってもらう。そうだな……凰！　オルコットお前らが出ろ」

いつの間に来たのか、そこにはラファールを纏っている真耶が立っていた。

「何であたしが！？」

「何でわたくしが！？」

「実演も見ずに、こっそりと織斑に構ってるのが気づかれてないとでも思ったのか」

「「うぅ……」」

二人して、言いにくそうに顔を逸らしてしまう。

「さて、小娘どもいつまでぼさっとしている。さっさと始めるぞ」

「え？　あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

その『負ける』の言葉に、二人は闘志を瞳に宿す。

「でははじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴音が飛翔。それを目で一度確認してから真耶も空中へと躍り出る。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

言葉こそいつもの変わりがないが、真耶の瞳は鋭く冷静なものへと変わっていく。

専用機組みの初撃はあっけなく回避されていく。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あっ、はい」

空中での戦闘から目を離すことなく、シャルルは淀みなく説明を始める。

「山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代開発の後半期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の期待です」

シャルルの説明には多くの生徒が聞き入っている。

沙良はというと、あらかじめ頭に入っている情報なので、興味を空中での模擬戦闘に移している。

今は鈴音が考えなしに撃った衝撃砲がセシリアの射線を遮ってしまったところだ。

「現在配備されている量産型ＩＳの中では後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています」

沙良は、その説明を聞かずに、戦闘風景に夢中になっていた。

それは一言で言うなら優雅。

一切の無駄のない動きは、基礎といえど、美しさすら感じる。

射撃による、誘導。回避行動による場所取り。相手の攻撃を利用する狡猾さ。先読みの正確さ。

レベルが違いすぎる。

「特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティー多いことでも知られています」

沙良は筆舌に尽くしがたい思いに駆られていた。

おそらく、あれでも手を抜いているのだろう。

応用とされる技術が一切使われていない。

これが教員の実力なのだろう。
沙良は嘆声をもらす。

「ああ、いったんそこまででいい。……終わるぞ」

真耶の射撃がセシリアを誘導。回避先にいた鈴音にその機体をぶつけさせる。
その気が逸れる一瞬を狙い、グレネードが投擲される。
それは回避させる隙を与えぬ時間を計算されているのだろう。
二人の影が重なった瞬間に、爆発を起こす。
煙から、二人の機体が地面に落ちていったときも、真耶はその銃口を二人から外すことはなかった。

「すごい……」

沙良のその呟きは、皆の気持ちを代弁したものといっても過言ではないだろう。

「くっ、うう……まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何、面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！　無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！　なんですぐにビットを出すのよ！　しかもエネルギーが切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

竜虎相打つ二人は醜く言い争う。

専用機持ちと代表候補生の株価は猛烈に落ちていっているだろう。

スイス銀行が凍結した並の株価の急落は視線の冷たさとなって二人に突き刺さる。

「さて、二人の悪かった点を説明できるやつはいるか？」

千冬の問いかけに、誰も手をあげることはしない。

「深水、熱心に見ていたな。答えてみろ」

「鈴は衝撃砲を使ったのがまず間違い。二対一なら近接に専念するべきだった。セシリアはビットを使ったのが失敗。大人しくライフルで狙撃してたほうがまだマシだった。二人とも第三世代機の武装を使うことに躍起になって、肝心な勝ちへの道筋が立ててなかった。それに連携という意識のなさ。何のための二人なのか全くわからなかった」

沙良の辛辣な批評に千冬は満足そうに頷く。

「概ね正解だ」

その言葉に、周りからは、感嘆の声が上がる。

千冬は、皆の意識を集めやすいよう一歩前へ出る。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

手を叩き、皆の意識を切り替えると、千冬は声を張り上げる。

「専用機持ちは織斑、深水、オルコット、デュノア、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？　では分かれろ」

千冬が言い終わるや否や男子に女子が集中する。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「わかんないとこ教えて～」

「デュノア君、さっきはお疲れ様。一緒に頑張ろ」

「ね、ね、私もいいよね？　同じグループにいれて！」

「深水くん、さっきの凄かったね！」

その状況に千冬は額を指で押さえる。

自らの浅慮に嫌気がさしたのか、その声はいつもより低い。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンドを百周させるからな！」

千冬の鶴の一声に群がっていた女子たちは蜘蛛の子を散らすように移動し、わずかな時間でグループを完成させる。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ため息を漏らす千冬に聞こえないように、女子はぼそぼそとおしゃべりをする。

「ええと、みなさん、これから訓練機を渡しますので、一般につき一体を取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイブ』が二機です。早い者勝ちですよー」

沙良は、迷わずにラファールを選ぶ。

それは、扱いの簡易さから、この実習にはもってこいだと判断したためである。

出遅れて、ラファールしか残ってなかったなどと言う理由では決してない。迷う以前に物がなかったというわけではない、決して。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定で、セッティングとパーソライズは切ってあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

開放回線（オープンチャネル）で真耶が伝えてくる。

「じゃあ、番号順にやろっか。一番目は――」

「はいはーい。谷本癒子！　いっきまーす」

その元気のいい返事に沙良はつい微笑を浮かべてしまう。

「――っ！　その顔は反則だと思うな……」

「なにか言った？」

「ううん！　何も！」

「そっか、じゃあやろうか七月のサマーデビルこと谷本さん」

「その呼び方はちょっと恥ずかしいんですけど……」

癒子はＩＳの外部コンソールを開いてステータスを確認している。

「とりあえず装着して、起動までやろう。時間をはみ出すと放課後居残りだしね」

「それはマズイね！　よーし、真面目にやるよー！」

癒子は何の問題もなく装着を完了し、起動、歩行を済ませる。

「おお、スムーズじゃん。上手上手」

沙良の満面の笑みでの褒誉に癒子は顔を赤める。

「なんか、面白い動作はないの？」

その言葉は照れ隠しだろうが、沙良は真面目に答える。

「簡単なのなら一個あるよ。左肩を前に構えて」

「こう？」

「そう。それで、右手は脇をしめて拳を口の前まで持ってきて。そう、それで、左手は脇を開いて右手の手首に手首を合わせるように構えて」

「これでいいの？」

「そう。じゃあ、そのまま、左肩に敵ＩＳの拳が当たりそうな状況をイメージしてね」

「うん」

「それをかわすように、左肩を引き、左手を敵ＩＳの腕に当てて、流す。その流れで右肩を前に出して。そしたら、腰の回転によって自然に前に出していた左足のスラスター部が前を向くでしょ？　それで足を浮かしてスラスターを最小で噴かしてみて」

癒子は言われたとおり、スラスターを噴かせる。
そうして行われた行為は右足を軸にしての回転回避行動。

「うわぁ、凄い！　名前はなんていうのこれ!?」

癒子は、自分が特別な機動が出来たことに驚きを隠せない。
その説明の無駄のなさに、有名な機動なのだと勘違いする。

「今のは僕のオリジナルだから名前は付けてないんだ。近接では相手の背を取れるし、結構使い勝手は良いよ」

沙良のオリジナル発言に、班員は言葉を失う。
この機動をオリジナルで完成させるそのセンスに、班員は称嘆のため息をつく

「じゃあ、次の人に代わろっか。屈んでから装着解除してね」

こうして、沙良は班員全員に先ほどの機動を教えた。
機動をマスターしようと、沙良の班はどこの班よりも真面目に実

習を行った。
その機動に夢中になっていた班員たちは、一夏やシャルルが抱っこして班員をＩＳに運んでいるのに気づかなかった。

第二十五話　その名も、『錦』

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

千冬は連絡事項を伝えると、真耶を引き連れすぐさま出て行ってしまう。

残された生徒たちは各班ごとにＩＳ専用のカートを使って運ぶのだが、それは完璧な人力であり、相当な力を使う。

一夏の班は一夏が一人で運び、シャルルの班は体育会系の女子が運んでいるようだった。

沙良の班はと言うと、

「じゃあ、せーので押してね」

「「「「「せーの」」」」」

「わぁ！　動いたぁ！」

盛大に遊んでいた。

最初は一夏を見習って沙良が一人で運ぼうとしていたのだが、沙良の力じゃ一人では運べず涙目で「いちかぁ」と助けを求めていたら、班員が帰ってきてくれたのだ。

そうして、今は沙良はカーとの上に乗り、班員が押してくれているという状況だ。

簡単に言うと、カートに沙良と荷物を積んでそれを押しているようなものだ。

沙良はカートの上できゃっきゃはしゃいでいる。

班員の顔は皆仕方ないなぁという顔をしている。

しかし、午後の授業は整備ということは、沙良の班というだけでもう終わったも同然なのだ。

いや、終わったも同然ではない。終わっているのだ。

先ほど、早く実習が終わったために、沙良が整備を教えてくれていたため、沙良の班は午後の整備は出席だけ取ってやることがないと言う事態になっている。

そのことを思うと少しぐらいサービスしてもいいではないかというのが班員の気持ちだった。

「よし、僕も押すよ！」

沙良がカートから降りると、そのまま持ち手に回りこむ。

「うわぁ軽い」

先ほどと違い簡単に進むカート。

ニコニコと笑顔を振りまく沙良に、班員は微笑ましい気持ちになるのだった。

◆◇◆

沙良が昼休み、お弁当を持って整備室に行こうとすると一夏が後ろから声をかける。

「沙良、一緒に飯を食わないか？　箒に屋上で食べようと誘われてるんだ」

沙良はそれが一夏だけへの誘いだと気づき、一夏の鈍さにため息をつく。

「はぁ、一夏、君って人間は……」

「なんだよ？」

「ううん、なんでもない。僕は今日は整備室で機体の調節しようと思ってるから、一緒は出来ないなぁ」

「そっか、シャルルはどうする？」

一夏はいつの間にか呼び名をデュノアからシャルルに変えたようだ。

「うーん、そうだなぁ。まだ食堂も行った事ないし、食堂でもいいかなって。お弁当も持ってきてないし」

そのシャルルの言葉に沙良は否定の言葉を投げる。

「ダメだよ。確実にデュノア君目当ての女子が群がってるからご飯食べれなくなっちゃうよ？」

「あ、そっか」

「シャルルも屋上来るか？」

「でも、篠ノ乃さんの邪魔をするわけにはいかないし……」

一夏は「邪魔？　何のことだ？」と首をかしげている。

「整備室で一緒に食べる？　整備棟もまだ行ってないでしょ？　専用機持ちなら何かとお世話になるから見てたほうがいいと思うな」

「じゃあご一緒させて貰おうかな」

シャルルは、沙良の提案にすぐさま頷く。

「じゃあ、一夏また午後の授業で」

「ああ」

沙良とシャルルは整備棟へと足を向けた。

◆◇◆

「……深水君、騙したね」

「別に、僕はシャルルに一緒にご飯食べよって誘っただけだもん。

何も騙してないよ？」

沙良は、シャルルのことをデュノアと呼ばずにシャルルと呼ぶことにした。

「ふふふ、こういうときに沙良君と仲良くしておくとお徳ね」

シャルルは整備室に着いたとたん薫子に捕まってインタビューを受けていた。

沙良はシャルルを薫子に任せて、自分は簪のもとへと進む。

後ろからはシャルルの恨み言が聞こえてくるが全てシカトする。

「どう？」

「とても順調」

そう笑う簪の顔に嘘はないだろう。

「それは重畳」

沙良は簪に打鉄弐式のスペックデータを見せてもらう。

「凄い……ほぼ完成系に近いじゃん。後は実働データさえ取れれば、それを元に微調整して終わりかな？」

「うん、これだけでも……戦える」

「そうだね。生半端な機体じゃ弐式には勝てないと思う」

「エキシビション、沙良に勝つから」

「エキシビションには勝ち負けはないけど、その気持ちは受け止めようじゃないか」

沙良はニヒルに笑うと、簪の横に腰を下ろし、お弁当を広げる。

「そういえばフィーナは？」

「お手洗い」

「おっと、それは失礼」

「あーセラさんだー」

噂をすればといったところだろうか、フィオナが、お弁当を持って沙良の近くに腰を下ろす。

「かんちゃんの機体見ました？」

「見たよ、ほぼ完成したね」

「それでですね、さっき思いついたんですけど、完成記念パーティーしません？」

「「完成記念パーティー？」」

簪と沙良の声が重なる。

「お世話になった人たちを呼んで、パーとやりましょうよ！」

「まぁ、いいんじゃない？　簪は？」

「いい、と思う」

「じゃあ、決定しますね。じゃあ、今日の夜七時に二年生食堂に集合にしましょう」

「了解」

「わかった」

話が纏まると、二人は自分のお弁当に関心を向ける。

しかし、沙良だけは空中ディスプレイを投影し、仮想キーボードを叩く。

それを見た簪とフィオナはいつものことだと、自分のお弁当を食べる。

そこにインタビューが終わったのか、シャルルと薫子が近寄る。

「あれ、沙良君作業中？」

「あ、黛先輩お疲れ様です。そちらの方は？」

フィオナは薫子の横に立つシャルルに視線を向ける。

「この子が噂の転校生よ」

「シャルル・デュノアです。よろしくお願いします。」

薫子はそれだけで伝わると思っていた。

しかし、フィオナにはそれが通じなかった。

「へー、いつの間にか転校生が来てたんですね」

「……そこから？」

箸もつい、突っ込みの声を上げる。

そして、作業に夢中になっている沙良の口にお弁当のおかずを一個放り込む。

「三人目の男子って騒いでたのに」

薫子はまさか知らないと思っていなかったので少しばかり反応に困ってしまう。

「ＩＳ使える男子って言われても、セラさんがずっと身近にいましたし、私たちにとったらそこまで大したニュースでもないんですよねー」

なるほどとシャルル以外が頷く。

シャルルと薫子は、ひとまず腰を下ろす。

シャルルの手には、先ほど薫子から貰った惣菜パンが乗っている。

これは、シャルルのご飯がないだろうと思ったため、沙良が薫子にお願いして用意してもらったものだ。

シャルルは、インタビューも難なく終わり、なおかつ自分のために色々と手を焼いてくれていることを知り、先ほどの怒りを納めて、沙良に感謝の念を覚えていた。

シャルルは、フィオナと箸にご飯を食べさせられている沙良を見て、薫子に疑問をぶつけた。

「深水君はなにをしてるんですか？」

「沙良君の専用機の調節よ」

「見てもいいんですか？」

それは、簪とフィオナがそのモニターをたまに見てることに気づいたから出た言葉。

「見てもいいんじゃないかなー。ここで理解できるはフィオナぐらいだから」

そう言われ、シャルルはそのモニターを覗き込む。

そこ目に映ったものは、

「……スペイン語？」

そう、スペイン語だった。

ＩＳのデータには日本語が使われることがほとんどだ。

ＩＳ業界においての共通語が日本語のため、ＩＳに日本語以外を使う国はあまりない。

使っても英語だろう。

それが、目の前の少年の機体には日本語も英語も使っていない。

シャルルはどういうことかと頭を捻る。

「開発国がスペインで、なおかつ、沙良君の専用機として作られているから、スペイン語でも問題ないそうだよ。むしろ、データなどを視認で盗まれる可能性も減るし、自国のものにとっては日本語より解読が早いんだって。メリットが多いらしいよ」

シャルルは愕然とする。
その意識の高さに。
だから、フランスはスペインに負けたのだとなんとなく納得してしまう。
そこに、空気をぶち壊すものがやってきた。

「あれ、一人多いわね？」

ソフィアである。

「あ、ソフィア先輩」

「あら、フィーナお疲れ」

「ソフィアさん」

「簪ちゃんもお疲れ」

そういって、沙良の後ろに腰を下ろすと、沙良を膝の上に乗せた。

「って、えええぇぇ！？」

その光景にシャルルは驚きの声を上げ立ち上がる。

そのされるがままの沙良にも。

別におかしいことなどありませんよと言わんばかりのソフィアにも。

いつものこととスルーしている簪とフィオナにも。

面白そうに写真を撮り出した薫子にも。

全てに対しての驚きの声だったのだが、

「えっ！？　僕がおかしいの？」

一人だけ、騒いでいるシャルルは、皆の「どうしたの？」という視線に耐えられなくなり、声を上げたのだが、皆がそれを普通と認識していることに気づくと、すごすごとその場に腰を下ろすのだった。

そして、沙良が作業を終わらすまで、シャルルは自己紹介をして、楽しく談笑することが出来たのであった。

◆◇◆

「――というわけで、無事に完成に至りましたことを祝って、乾杯！！」

「「「「「「乾杯！！！！！」」」」」」

なぜか楯無の音頭で乾杯すると、皆が思い思いにグラスをぶつけ合う。

その中に、おどおどとした影が一つ。
シャルルだ。

まさか自分も呼ばれると思っていなかったため、未だに空気に馴染むことが出来ていない。
頼りの綱の沙良はこの完成の立役者と言うことで、いろんなところにあいさつ回りに出ている。
ふぅ、とため息をつくと、シャルルは服の裾を引っ張られていることに気づいた。
振り向くとそこには昼に知り合ったばかりの簪とフィオナがいた。
二人とも四組ということでいつも一緒にいるイメージがある。

「こっち」

「そろそろ始まりますよ」

そう言われ、手を引かれていくシャルル。連れて行かれたのは最前列。
目の前には大きなモニター。

「みんなはもう知ってるけど、シャルルさんは知らないもんね。前で見てたほうがいいよ」

その言葉に首を傾げる。
何のことかわからないが、こちらのことを思って言ってくれているのはわかっているので、素直に指示に従う。
すると、いきなり、食堂内の電気が消され、用意されたステージが明るく照らされる。
そこに、歩いていくのは沙良だ。
沙良がマイクの前に立つと、周りは水を打ったように静まり返る。

沙良がマイクのスイッチを入れ、喋りだす。

「ええ、みなさん、ここに集まりいただきありがとうございます。今回のパーティーのメインでもある。この打鉄弐式のお披露目会をしたいと思います！！」

沙良の言葉に会場は一気に盛り上がる。

「簪、上がってきて」

シャルルの横に座っていた簪が、音もなく立ち上がると壇上に立つ。

そして、その身に打鉄弐式を纏う。

その打鉄の面影を残す銀灰色の装甲に、周りは感嘆のため息を漏らす。

打鉄の重厚なイメージを覆すその洗練されたボディは、美しさすら感じる。

「特徴としましては、従来の防御重視の機体とは違い、機動性に特化しているところです。当初では機体速度は、あのイギリス代表の狙撃型と同程度と特化と言うには物足りないものでしたが、本校の優秀な整備科によって、その機体速度はイギリスの狙撃型の追随を許さないまでになりました。そして専用のユーザーインターフェースにより、その反応を向上させています。」

モニターにはその実働データが出る。

「耐久性に難はあります」

その耐久度を示すデータと、他の機体データとの比較グラフをモ

ニターに表示する。

「しかし、卓越する操縦技術を持つ簪ならこの耐久度で何ら問題はありません」

簪が皆の視線を受け、顔を赤らめる。

「そして、これがみなさんお待ちかねの武装でございます！！」

待ってましたと言わんばかりに皆が手を叩き、その武装に期待を膨らませる。

「まずはこちら」

その言葉に簪は薙刀を構える。

そしてモニターには大きくその名前が出る。

『夢現』

その表示された情報に皆が息を呑む。

高周波と超音波により、超高速振動を可能にした第三世代技術武装。

それは圧倒的な攻撃力を誇る。

それが機動性重視の機体に載せられているのだ。

その意味がわからない者などここにはいないだろう。

「モニターの通り、この武装は高周波と超音波により、超高速振動し、対象の分子結合を緩くし、その斬撃が通りやすいようにします。一言でいうなら、大体のものは切れる。そういうわけです」

この『夢現』の製作に関わったものは皆が胸を張っている。
そして、他の武装に関わったものたちは皆が驚愕していた。
それはこの武装に対してではない。
もちろんそれもあるが、この武装と、自らが製作に関わった武装を積む機体に驚愕していたのだ。

「そして、背に搭載されているこちら」

簪は、背中に搭載された連射型荷電粒子砲を見せる。

その名は『鳴神』。

秒間二発の速度で電荷を持った素粒子を放つ。
その1マガジンあたりの総ダメージ量は雷を思わせる。

「このリロードの遅さと言う点を二門というところでカバーしています。この武装を持って狙撃されると大抵の機体は避け切れないでしょう」

シャルルは驚きに言葉を無くしていた。
なんて武装を積んでいるのだ。
周りでは皆がハイタッチしているが、シャルルはそんな場合ではない。
フランスの代表候補生として、デュノア社の手のものとして、この武装を学生たちが作り上げたという点に、言い表せぬ感情が浮かぶ。
ここの技術が高いのか、向こうの技術が低いのか。
しかし、シャルルの驚きはまだ終わらなかった。

「実はこれだけではありません」

その沙良の言葉に皆がモニターに注目する。

「これは僕を含める選抜メンバーで作った、この機体のメインとなる武装です」

そして映し出された物に全ての人が言葉を失う。

それは八連装ミサイルポッド。

『百千颪』

八機×八門のミサイルポッドから最大六十四発の独立稼動型誘導ミサイルを発射される。

それだけならよかった。

その部分を沙良が読み上げる。

「この武装は第三世代型技術マルチロックオン・システムを使用。それによって八機×八門のミサイルポッドから最大六十四発の独立稼動型誘導ミサイルを発射することが出来る。相手のエネルギーシールドに反応して追尾を行うようになってるから熱源を逸らされようと追撃を外される事はない」

この次の言葉だ。

その言葉を皆が固唾を呑んで待つ。

「そして、ミサイルポッドの個別独立稼動にイメージ・インターフェースを搭載しています」

その沙良の言葉に会場が静まり返る。

「そう、この打鉄弐式は、第三世代として生まれ変わったのです！！」

沙良の言葉に会場は堰を切ったように騒がしくなる。
その沙良の煽りに皆が雄たけびを上げる。
それは、重なり合って会場が揺れているかのような錯覚を覚える。
沙良は会場が大人しくなるのを待つ。

「そして、これから、この打鉄弐式に一つの名を与えたいと思います」

沙良は、簪をちらりと見る。
簪がその沙良の言葉を引き継ぎ、言葉を紡ぐ。

「この子は、もう打鉄の後継機としてではない……新しい機体として生まれ変わった。だから、この子に、新しい名前を付けたいと……思います」

「でも、この機体は皆から『弐式』と呼ばれてきて、それに愛着がある人も多い。僕もそうです。だから、響きを残して、字を変えました」

沙良はモニターを指差す。
そこには漢字で一文字。
誰かがその文字を口に出した。

「……錦」

その漢字は『錦』

その洗練された機体に相応しい。

「これが、僕たちが、ここに集まる三十人もの精鋭たちで作り上げた機体『錦』です！！」

食堂が拍手で包まれる。

シャルルも無意識に拍手をしていた。

それは、純粋にＩＳ乗りとしてではなく、シャルル・デュノアとしての拍手であった。

沙良がステージから降りると、皆は思い思いにお喋りに花を咲かせる。

こうして、完成記念パーティーは夜遅くまで続いたのであった。

◆◇◆

シャルル――シャルロットは同居人が寝静まった頃に一度起き出した。

そして、胸を締め付けていたコルセットを外す。

楽になった胸から一度深い息を吐く。

男装までしてＩＳ学園に侵入したのは実家であるデュノア社に命令されたためである。

世界第三位のシェアをもつデュノア社だが、まだ第三世代機の開発が進んでいない。
欧州連合の統括防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されている。
ゆえに第三世代型の開発は急務。

しかし、第二世代型も後発なため、圧倒的にデータも時間も不足している。
それで政府からの通達で予算を大幅にカットされ、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カットされてしまう。
その上でＩＳ開発許可も剥奪されてしまう形となる。

そんな中、一つの国が名を上げた。
スペインだ。
第二世代型最後発機シークエスト。
それを引っさげて欧州連合にぽっと出てきたのだ。
その機体を見て、どの国も驚いた。
戦闘には全く向いていない。

しかし、その判断は間違いだった。
地中海での戦争。
そこにシークエストが投入されると戦況は一変した。
今まで空中戦が主だったＩＳに海中からの奇襲で勝利を納めたのだ。
その今まで見たことのない武装を見せ付けて。

スペインはシークエストの性能を高め、初期第三世代にも劣らないものを作り上げた。
そして、すぐさまスペインは第三世代型の研究に着手し、そして完成させた。

このままだと、デュノア社はスペインにも抜かれ、その地位をより落としてしまう。

そんなことシャルロットにはどうだって良かった。

父親の会社なんか知ったことではない。

しかし、シャルロットは従わなければならない立場にいた。

自分が愛人の娘だったからという理由。

それだけならシャルロットは従わなかっただろう。

母親さえ人質に取られていなければ

シャルロットはペンダントを握り締める。

「……お母さん」

シャルロットが命令されたのは、特異ケースの男性操縦者に接触し、そのデータと身体の一部サンプルの入手。

メインとなるのは敵国となるスペインの開発の柱となる深水沙良への接触。スペインの機体のデータ入手。そして妨害。

つまりは、模擬戦などで事故に見せかけて研究が出来ない体にしろと言われているのだ。

殺してもいい。

そんなことまで言われている。
シャルロットは同室となった沙良のベッドに近寄る。
そこには気持ち良さそうに抱き枕を抱える沙良の姿。
シャルロットは唇をかみ締める。
そして、沙良に馬乗りになると、その細い首に手を添える。
力を入れればそれで終わる。
しかし、シャルロットはそのまま手を外す。

「くっ、出来ない……そんなこと出来ないよぅ」

シャルロットは今までにいろんな命令を受けてきた。
その中には人の命を奪ってしまうものもあった。
体を使うものもあった。
ずっと心を殺してきた。

しかし、今回だけは出来ない。
そのまま自分のベッドに倒れこむ。
沙良とは少しの間一緒に行動してわかった。
なんてお人よし。
恐らくは気づかれている。
自分の正体も、その目的も。
それでも何も言わずにそばに居続けてくれた。
それは、こちらの目的ではなく、人柄で判断した結果だろう。
この娘は大丈夫。
そう思われてるのだろう。
それは一種の信頼。

シャルロットはそれを裏切れなかった。
しかし、ここで自分がやらないと　大切な人がいなくなってしまう。

母親が死んでしまう。

「でも、でも、引き換えに深水君の命を奪うことなんか出来ない！」

シャルロットは拳をベッドに叩きつける。

自分も深水君ではなく名前で、みんなと一緒に『沙良』と呼びたい。

でも、そう呼んでしまうと、決意が鈍ってしまう。

心が痛みつつも母親を助け出すまでは何があっても挫けないと。

そう決意したのだ。

だから呼べない。

それは自分を殺す行為。

シャルロットは枕に顔を押し付ける。

こぼれる涙はそのまま布に染み込んでいく。

「……誰か……誰か助けてよぅ」

第二十五話　その名も、『錦』（後書き）

なんでこんなシリアスになったんだろう

第二十六話　シャルロット・デュノア

「じゃあ、また明日な」

「ああ」

「うん、また明日」

「一夏、明日はあたしがコーチだからね」

「はいはい、わかってるよ」

シャルルは一夏たちと別れると、そのまま自室に入る。

沙良は未だ帰ってきていない。今日は機体のデータを取ると言っていたから遅くなるだろう。

「……はぁっ……」

シャルルは寮の自室に一人になったところで、深いため息をつく。

先ほどまでは一夏たちと共にいたのだが、一夏が書類を出さねばならないと言って職員室に行ったので、そこで皆が別れる形となった。

シャルルは沙良の首を絞めようとした日から、ずっと元気がなかった。

自分が皆を騙しているという自覚がある分、自分に向けられる笑顔が辛かった。

一夏の純粋なる優しさも、沙良の全てを包み込む優しさも自分には相応しくない。

（くよくよしてちゃダメだ）

シャルルはそう自分に言い聞かせるが、一度巡り始めた思考は簡単には止まらない。

「シャワーでも浴びよう」

シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへと向かった。

◆◇◆

シャルルはシャワーを浴びているとボディーソープがないことに気づいた。

（どうしようか、このまま取りに行っても大丈夫だよね？）

沙良はしばらくは帰ってこないはずだ。

シャルルはそう思って、バスタオルだけを持ってシャワー室を出た。

ボディソープの替えが置いてある棚を開けて、目的のものを見つける。

その瞬間、扉がノックされる。

「沙良、いるか？」

シャルルはその身を強張らせる。
拙い、一夏だ。
予想もしていなかった状況に慌ててしまう。

「いないのか？」

そして、一夏は扉を開けた。

（見られたっ！）

シャルルは、計画が崩れる音を聞いた。

「……。えーと……」

一夏の視線の漂いに、シャルルは自分がバスタオル一枚と言うことに気づき、すぐさまシャワー室へと逃げ込む。
誤魔化せない。
もういい、なるようになる。
シャルルは服を着て、脱衣所から出る。

「あ、上がったよ……」

「ああ……」

そのジャージを着込んでいるシャルルの胸は女性であることを主張する。

「……」

「……」

沈黙が場を支配しようとしたとき、一夏が声を上げる。

「……なんで男のフリなんかしていたんだ？」

「それは、その、実家からそうしろって言われて……」

「うん？　実家っていうと、デュノア社の？」

「そう、僕の父がそこの社長。その人からの直接の命令なんだよ」

シャルルは母親のことと沙良のこと以外を全てを喋った。

自分が愛人の子である事。

自らのＩＳ適応の高さからテストパイロットとして酷使させられていること。

自分の意志と関係なくＩＳ開発のための道具として扱われてきたこと。

ＩＳ学園へ転入したのも、デュノア社がＩＳ開発の遅れによる経営危機に陥ったため、数少ない男性の操縦者として世間の注目を集めることで会社をアピールするとともに、一夏と沙良に接近して彼らとそのＩＳのデータを盗め、という社長命令だったこと。

それは今まで抱えていたものを吐き出すかのように苦痛の表情に満ちていた。

良くて牢屋入りだろうね。

そう呟いたシャルルに一夏は言った。

それで良いのかと。

良いも悪いもない。自分には選ぶ権利すら与えられていないのだ。

絶望すら通り越した諦観。

母親すら救えない自分の弱さに涙がこぼれる。

「……だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項二十一、本学園における生徒はその在学中において、ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

その言葉に、シャルルは一夏の言いたいことがわかった。

「――つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろ？　それだけ時間があれば、何とかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろう」

「一夏」

「ん？　なんだ？」

「よく、覚えられたね。特記事項は五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふっ」

一夏の言い回しに少し笑ってしまう。

「ま、まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えて見てくれ」

「うん。そうするよ」

「沙良には黙っていたほうがいいか？」

その言葉に、シャルルは考え込む。

「……わかった。とりあえず様子見な。沙良が帰ってくるまでに着替えとけよ？」

それを否定と捉えたのか一夏はそう言い残し、部屋を出て行ってしまう。

そうして一人部屋に残されたシャルルはベッドに倒れこむ。

一夏の提案はとても魅力的だった。

その案に飛びついてしまいたかった。

母親の件さえなかったら飛びついていただろう。

「君は優しすぎるよ……」

こんな自分でもここにいても良いと言う。

こんな自分にも居場所を提案してくれる。
こんな自分を否定しないでいてくれる。
しかし、その優しさに甘えてる状況ではないのだ。
平穏な日々はもう終わった。
一夏は味方になったといえど、学園に気づかれる日もそう遠くないだろう。
それまでに学園を去らなければならない。
ならばやるしかない。
（深水君を……やるしかないんだっ！！）

◆◇◆

沙良はアリーナで、オルカの実働データを取っていた。
この絶対防御がないという欠陥を直すために色々な方面からデータを取る必要があった。
スペインの機密となる情報のため、手伝いを要求できない。
ゆえに沙良は一人で作業をこなしていた。
「ふう、今日はこんなもので良いかな」

沙良はオルカを解除し、カイラを纏う。
それは、先ほどから沙良に向けられている。殺気に対処するため。

「いつまで隠れてるの？」

沙良はその手にライフルを持ち、アリーナの柱の影へと向ける。

「いつから気づいてたの？」

そこから現れたのは、ラファール・リヴァイブのカスタム機を纏ったシャルルの姿。

「殺気を放ってれば誰だって気づくよ」

「そう」

いつもと違う様子のシャルルに困惑する沙良だが、ハイパーセンサーが相手からロックされていることを知らせてきているため、相手から気を逸らせない。

「深水君、君には恨みも何もない。けど、君には――」

シャルルはその手のライフルを沙良に向ける。

「死んでもらう」

撃った。
沙良はその銃弾を最小の動きでかわす。

「たいした挨拶だね、シャルロット・デュノア」

その呼ばれた名に、シャルル――シャルロットは身を強張らせる。

その隙を見逃すような沙良ではない。

すぐさまライフルを展開して弾幕をはる。

「やっぱり気づいてたんだ！」

「そりゃ、業界人だからね。デュノア社の内情ぐらい推測できるよ」

シャルロットはすぐさま接近ブレードに持ち替え、沙良に接近戦を挑む。

これはシャルロットが得意とする、攻防ともに高いレベルが安定した戦闘方法、砂漠の逃げ水（ミラージュ・デ・デザート）。

斬り合っていたかと思えばいきなり銃に持ち替えての近接射撃、間合いを離せば剣に変更しての接近格闘。押しても引いても一定の距離と攻撃リズムを保ち続ける。それは「求めるほどに遠く、諦めるには近く、その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ、綾やかなる褐色の死へと進む」とまで言わせる物だ。

しかし、沙良にはそんなセオリーは通用しない。

いや、このときは沙良が相手ではなかった。

狙撃。

それは目の前の沙良からではなく後方からのもの。

「――っ！　どこから！？」

シャルロットは腕を振り、その体制を直す。
しかし、ハイパーセンサーがその狙撃主の姿を捉える前に、右後方から衝撃を受けて前方へと吹き飛ばされてしまう。

「なっ！？」

すぐさま起き上がり、攻撃を受けた方向に銃を向ける。
そこには沙良と似たような機体を纏う見知らぬ生徒が一人いた。

「くっ」

「動かないで」

すぐさま行動を起こそうとしたシャルロットの首元へ薙刀が突きつけられていた。
この武装は見たことがある。
衝撃を装甲に通す『禊』と呼ばれる武装。
それを首に突きつけられていると言うことは、生殺与奪を握られていることと同意だろう。
その『禊』を突き立てている生徒を確認する。

「フィオナさん……」

今まで見ていた彼女とは別人のように、その表情は怒りを抑えていた。
そして、シャルロットを狙撃したＩＳが姿を現した。
それは青色に輝くボディに銀色のライン。輪状の非固定浮遊部位が特徴的だ。
その機体は見たことはないが、その搭乗者には見覚えがあった。

何回か会話したこともある。

ソフィア・アルファーロ・クリエル。

代表に最も近いとまで言われるスペイン代表候補生。

シャルロットはその表情に恐怖を抱いた。

それは感情を灯してない。

ただこちらを始末する対象しか見ていない。

シャルロットは終わったと、そう思った。

「……殺しなよ」

すぐにエネルギーを〇にされて自分は始末される。そう思った。

しかし、それは、沙良の一言によって違う道が付けられる。

「勝負しよう、シャルロット」

シャルロットは言われていることが理解できなかった。

「僕が勝ったら君が抱えているもの、全てを吐き出してもらう。君が勝ったら僕を好きにすればいい。殺すなり、モルモットにするなり好きにね」

それは沙良には何もメリットはないだろう。

「セラ！！」

「リナは黙ってなさい」

周りではシャルロットを吹き飛ばした少女がソフィアに注意されていた。

「フィーナ。武装を下ろして」

シャルロットはこの勝負を受けるしかない。

「後悔、しないでね」

「大丈夫だよ。君は絶対勝てないから」

シャルロットは沙良が言い終わる前に沙良に突貫する。

シャルロットはすぐさまアサルトライフル『ヴェント』を展開し、沙良に弾幕を浴びせる。

それを沙良は避けようとしない。

「――っ！？　死にたいの！？」

それを馬鹿にされたと感じたシャルロットは周りの注意が疎かになった。

シャルロットが地面に足を付けた瞬間、その地面が爆発した。

「きゃあああ！！」

その機体は、簡単に宙へと飛ばされてしまう。

そして、シャルロットは見た、沙良の機体がその姿を消すのを。

「どこにいったの！？」

シャルロットは混乱していた。

今まで積み重なってきた重荷がシャルロットから冷静さを奪う。

衝撃。

それは後ろから来た。

すぐさま体制を立て直したシャルロットは、その方向へと銃を向ける。しかし、その銃が目標を捕らえることはない。

何故？

そう思う時間も許さないといわんばかりに、シャルロットの機体に衝撃が襲い掛かる。

「くっ！」

その姿を探していると、沙良の姿がシャルロットのすぐそばに現れた。

その距離は手を伸ばせば届くほどに近い。

「なっ！？」

「ちぇっ、時間切れか」

そう言い、シャルロットのアサルトライフルを手に持つ。

武器を奪うつもりなら無駄だ。そうシャルロットは思った。

使用許諾（アンロック）されてない武装は使うことが出来ない。

しかし、沙良は全く予想外の方法でシャルロットの武装を奪った。

「使用拒否（ロック）」

沙良の言葉と共に、シャルロットのＩＳに一つのメッセージが出現する。

――ヴェント……使用不可。ロックがかかっています。

シャルロットの手から勝手に『ヴェント』が『収納』される。

「なっ！？」

シャルロットは驚きを隠せない。

「君には見せてあげるよ。これが僕の唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊能力、『絶対的管理者』だ」

シャルロットはすぐさま六二口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタディ』を両手に『展開』し、沙良から距離を取ろうとする。

――敵ＩＳからロックされています。

そのメッセージにシャルロットはすぐにスラスターを逆に噴かし、沙良に接近した。

ロックされているということは沙良は狙撃銃に持ち直しているということ。

それならば近距離からの射撃を浴びせてやる。

シャルロットはそう想い、接近したが、沙良のその手には何もも

たれていなかった。

「いらっしゃい」

沙良はシャルのショットガンを掴むと先ほどと同じように言葉を発する。

「使用拒否（ロック）」

先ほどと同じように『レイン・オブ・サタディ』が『収納』される。

すぐにアサルトカノンを『展開』するが、それも同じように強制的に『収納されてしまう』

シャルロットはもうなにが何だかわからなくなっていた。

自らの主戦力となる武装が片っ端から使用不可になっていく。

相手がどんな能力かすらわからない。

今、自らに残されたのは近接ブレードのみ。

それでも負けられない。

「負けられない……ここで負けると、お母さんが、お母さんが死んでしまうんだぁぁぁぁ！！！！！！」

シャルロットは叫びをあげ、沙良へと斬りかかる。

それはキレも技もない。

ただの武器の叩きつけ。

大した攻撃ではない。

回避して狙撃。

向かい合って切り伏せる。

選択肢はいくらでもある。
しかし沙良はただのブレードで只管受け止めることを選んだ。
そこからは、ただの斬り合いになる。
シャルロットは叫び続ける。
ただ溢れる思いをブレードに込めて、叩きつけるだけ。
「沙良に恨みはない！　けど、沙良をやらないと、お母さんが、お母さんが！！」
シャルロットは無意識に沙良とそう呼んだ。
「病気のお母さんを人質に取られて、治療費を出してやるってやりたくない仕事をさせられて、それでも、私は助ける機会をずっと窺ってきた！」
シャルロットはブレードを袈裟切りで切り下ろすと、その流れを利用して横蹴りを繰り出す。
「やっとチャンスが来たんだ！　この任務が終われば、母さんを助けてくれるってあいつは言ったんだ！　だから僕は、私はやるしかないんだ！　どんな手を使っても！」
シャルロットは叫び続ける。
それはまるで自分に言い聞かせるように。
そうしないと崩れてしまうと言わんばかりに。
だから沙良は聞いた。
押し付けられた感情ではなく、シャルロット自身の想いを聞くために。

「ここには居たくないの？」

その問いかけに、辛そうに顔を歪める。

「僕だって、皆とずっとここに居たいよ！」

それはシャルロットの本心。

「この暖かい空間で皆と過ごしたい！　僕だって、『沙良』って名前で呼んで、皆と一緒に――」

「じゃあ、居ればいい！」

「それが出来たら苦労しないんだ！！」

シャルロットはブレードを強く叩きつける。

「データを盗むことも任務！　だけど沙良の開発に支障をきたすこと。それが一番の任務なんだよ！？　それは、事故で、手を動けなくさせるとか、殺してしまうとか、そんな内容なんだよ！？　そんなことしてまでここに居れるわけがない！　居て良い訳がないじゃないか！」

「……」

シャルロットは壊れかけていた。

殺さないといけない。

殺したくない。

自分の想いと、やらねばならぬ命令に板ばさみになっていた。

その心はまさに破裂寸前だったのだろう。

シャルロットはブレードを手から離すとその場に膝をついた。

「出来ないんだよ……沙良を傷つける事も、お母さんを見捨てることも、僕には出来ないよぅ……」

そのままシャルロットはＩＳを解除してしまう。

シャルロットの精神が憔悴してしまい、ＩＳの具現維持限界（リミット・ダウン）がきてしまったのだ。

「殺してよ。お母さんを救えなかったのに、僕だけのうのうと生きて居たくはない」

ＩＳを解除して、シャルロットに近づく沙良。

その沙良と視線を合わせると、シャルロットは微笑んだ。

その瞳に映るは絶望の色ではない。

諦念。

絶望を受け入れた諦めの眼差し。

沙良は唇を噛む。

シャルロットにこんな顔をさせる原因に対してどうしようもない怒りを感じる。

シャルロットは沙良が拳銃を構えるのを見て、その目を閉じた。

これで、楽になれる。

（お母さん、こんな娘でごめんね）

銃声が鼓膜を揺さぶる。

しかし、予想していた衝撃が来ない。

シャルロットは疑問に思い、その瞳を開いた。

「なっ！？」

目に飛び込んできたのは、自らの左腕を打ち抜き、鮮血に染まる沙良の姿だった。

「なにしてるんだよ！！」

シャルロットはすぐさま沙良に近寄り、その傷口から溢れる血液を止めようとする。

しかし、沙良はそのシャルロットの頬をぶん殴る。

「傷つけることが出来ない？　助けることが出来ない！？　ふざけるなよ！　ならば一言だけでも言えば良いだろ！！　僕たちに助けてって言えよ！！」

その激昂した沙良にシャルロットは頬を押さえて何も言えなくなる。

「シャルロットの事情はなんとなくはわかってたよ。誰かを後ろに

取られてるんだと思ってた。だから僕は待ってたんだ！　君が助けを求めに来るのを！　研究の阻害？　手の一本や二本ぐらいくれてやるよ！！　母親を助けたいなら、何でも利用するんだろ！？　なら、僕たちを利用しろよ！　ここはＩＳ学園だろ！？　どの国にも属さない場所だ！　外的介入の許されないここなら、助けを求めることだって出来ただろうが！！」

「でも、それでも……」

「もっと周りを頼りなよ、シャルロット。僕はＳ・Ｑ社のサラ・ルイス、『スペインの英雄』だよ？　成長の限界に来たデュノア社程度に僕が潰されるとでも思ったの？」

それは、暗に助けてやる。
そう言っているのだ。
シャルロットの視界がぼやける。
それはいつもと違う涙。

「やってくれるの？」

「君が望むのならね」

「僕は……君に酷いことをしたんだよ？」

「その分、これから僕を助けてくれたらいい。過去を見るより、未来を視て生きていたいじゃない」

このお人よしは贖罪の場所すら与えてくれると言っているのだ。
シャルロットは沙良の胸に顔を埋める。
もう堪えていることは出来ない。

「……っ……くっ……うぅ……たすけて、おかあさんを、お母さんを助けてください！！」

そう泣き叫んだシャルロットを片手で強く抱きしめる。

周りではソフィアたちがその姿に涙を流していた。

「任せて、必ず助けるから」

沙良はカイラを部分展開する。

「なに、するの？」

シャルロットの涙に濡れた瞳に、安心して、と頭を撫でると、沙良はその能力を見せる。

「『絶対的管理者』発動」

その言葉を切っ掛けに、空中ディスプレイが物凄い速度で展開されていく。

「こ、これは」

「全ての物へのハッキングを可能にする。それが僕の唯一仕様（ワンオフ・アビ）の特殊能力（リティー）、『絶対的管理者』だよ」

沙良は空中ディスプレイに投影されている情報から、お目当てのものを探し当てる。

それは、シャルロットの母親が入院している病院の院内ネットワーク。

「ソフィ」

いつの間にか近くまで来ていたソフィアに呼びかけると、ソフィアはすぐさま携帯端末で、その情報をS・Q社に流す。

そして、沙良に抱かれているシャルロットの頭を撫でる。

「よく頑張ったわね。ここから先は私たちエスパーニャに任せなさい。必ずお母さんを助けて見せるから」

ソフィアはそのまま携帯端末を三つ出して、慌しく連絡を取り始める。

フィオナとリナは必死に沙良の手当てをしている。

沙良は、院内の監視カメラなどを簡単にシャットダウンさせるようにプログラムを送り込んでいた。

「シャルロット」

「は、はい！」

シャルロットは沙良に急に呼ばれて声が裏返ってしまう。

「明日、病院からシャルロットのお母さんを奪還する。そして、スペインで最高の治療を約束するよ。だから、安心して？　もう、自分を殺さなくてもいいから」

その言葉にシャルロットはまた目頭が熱くなってしまう。

「泣きたい時は泣いても良いんだよ。シャルロット。そして明日、いっぱい笑おう？」

「深水くーー」

「沙良、で良いよ」

「……うっ……ひっ……沙良……沙良ぁ！！」

シャルロットは再び泣き出してしまう。

それは溜まっていたものを流すかのように、長く、とても激しいものだった。

第二十六話　シャルロット・デュノア（後書き）

姿が見えなかったのはハイパーセンサーをクラックしていたというわけです。
使用拒否（ロック）が出来ると言うことはもちろん使用許諾（アンロック）も出来ます。

シリアスな展開は難しいね。
感情を吐き出すシーンがちょっとだけ満足出来てないんだよなぁ
雰囲気が伝われば良いけど。

第二十七話　独逸からの転入生

「……うぅ……ここは」

シャルロットが瞳を開けると見知った天井が目に入った。
自室だ。

「うぅ……ん、……すぅ」

横のベッドから安らかなは寝息が聞こえてくる。
時刻は朝方の四時を少し過ぎたところ。
昨夜は泣き疲れて眠ってしまった様だ。

シャルロットは未だ起きぬ同居人を眺める。
すると、昨夜のことを思い出してしまい、その頬を朱に染める。

『もう、自分を殺さなくてもいいから』

そんなことを言われたのは初めてだった。

母しか理解者の居ない中、シャルロットを理解してくれたのは沙良が初めてだった。
それだけではない。
沙良はシャルロットのしたことを許した。
一夏の否定しない優しさとはまた違う。
全てを受け入れる優しさ。
ただ、受け入れるだけではない。
暗闇に蹲るシャルロットに手を差し伸べてくれた。
罪の意識に潰されないようにと、贖罪の道まで示してくれた。

立場、しがらみ、血縁。
そんなものに囚われず、シャルロットという一人の人間を受け止めてくれたのは沙良が初めてではないだろうか。

母が病気になってからはずっと居場所などなかった。
血の繋がりだけの父親には氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、ただただ無為に日々を過ごしていた。
いつしか、自分が必要とされることさえ求めなくなって、温度のない灰色の生活が繰り返されていることにもやがて慣れてしまった。

それが今は違う。

世界は色に満ち溢れている。
顔を上げれば青空が広がる。

『自分の好きなように世界を知るがいい。世界は常に昼の側と夜の側とを持っているだろう』

そう言葉を残したのはゲーテだっただろうか。

それならば、自分の人生は夜明けを迎えたのだろう。
沈まない太陽はあるが、明けない夜はない。
シャルロットはようやく、暗く重い夜を抜けたのだ。

(沙良はずるいよ)

優しく傍に居てくれていると思うと、その情熱さに胸が熱くなる。

「さすがは情熱の国スペインって言ったところかな」

今もこうして安らかな寝顔を浮かべている少年が、あの熱情を吐き出したとは思えない。

「こうして見てると可愛いのにね」

シャルロットは沙良の顔を見つめる。

一度、その頬を撫でる。

その温もりを失わなかったことを有り難く思う。

そして、母親が我が子にするように、額にキスを落とした。

「……沙良も欧州の出だからおかしくないよね？」

火照った体を抱きながら、シャルロットは脱衣所に向かう。

こんな状況で二度寝など、出来るわけがない。

（せっかく早く起きたんだから、お弁当を作ってあげよう）

シャルロットは、服を脱ぎ、シャワー室に入り、その身に暖かいお湯をかける。

（喜んでくれるよね？）

シャルロットは今まで感じなかった未来への楽しみを胸にその火照りを沈めるのだった。

◆◇◆

シャルロットは早朝のキッチンでお弁当を二人分作ると、鼻歌でも歌いたい気持ちで廊下を歩いていた。
沙良に見せるのが楽しみで仕方ない。
早くお昼にならないか。
そんな気持ちがシャルロットの足を急がせる。

「ただいま」

小さな声で帰宅を告げると、ルームメイトは未だ夢の中だった。
今は抱き枕を抱え幸せそうな顔をしている。
時刻は七時を過ぎた頃だ。
そろそろ起こしたほうがいいだろう。
一緒に朝食を食べるにはちょうどいい時間だ。
シャルロットは沙良を起こそうとベッドに近づく。

「沙良、起きて。もう朝だよ?」

シャルロットは沙良の体を軽く揺らす。
すると返ってきた反応は、

「……んぅ……やぁ……もう……ちょっと」

その猫撫で声にシャルロットはつい顔を赤らめる。

（か、可愛い！　何この生き物！）

沙良は見た目はれっきとした男である。
確かにどちらかと言われれば女顔だが、それでも女に間違えることはない。
その可愛さは、顔立ちの幼さゆえだろう。
背も低いため、より、その幼い感じが強調されてしまう。

（こんなことやってる場合じゃない。起こさないと）

シャルルは沙良の肩を揺さぶる。

「さーらー、起きてよー」

すると沙良に一つの反応があった。
それはこちらの手を取ったのだ。
シャルロットはそれが起きる動作だと思いほっと息をつく。
しかしそれは目覚めの行動ではなかった。

「むぅ」

その手は頬に持っていかれた。

「え？」

そう、頬摺りである。

（えええぇぇぇ！？）

咄嗟に叫びを抑えたシャルロットは自分を褒めてあげたい気分に

なった。

反射でその手を抜こうとすると、沙良はとても悲しそうな顔をし、「ぁ……ゃ」と小さく呟くので、シャルロットはされるがままになっていた。

（ど、どうしたらいいんだろう！？）

シャルロットの中には二人のデフォルメされた天使と悪魔が追いかけっこしていた。

悪魔曰く、『襲っちゃえよ！　自分を解き放つんだ！』

天使曰く、『寝てる今がチャンスだよ！　今なら何してもばれないよ！』

（ダメだぁ！！　どっちも敵じゃないかぁ！！）

シャルロットが悶々としていると、沙良の携帯端末が音を立てる。

その着信音は、緊急ブザー。

その音に反応し、沙良がその瞳を開ける。

猫のように目をこすると、そのまま大きく伸びをする。

そして、シャルロットの手を離すと、携帯端末までとことこと歩いていく。

シャルロットはほっとしたような少し残念なような複雑な表情をしていた。

「？Ｈｏｌａ？　Ｌｅ　ｈａｂｌａ　Ｓａｒａ．（もしもし、こちらは沙良です）」

シャルロットはそのスペイン語につい身構えてしまう。

「ん？　……了解。流石は精鋭部隊だね。え？　……そんなことないよ。君たちなら僕の手助けがなくても出来たでしょ。うんうん、そう。Ｓ・Ｑ社の息のかかった病院に移しておいて。国籍問題？　そんぐらいどうにかしなよ。え？　パスポート？　そんなの偽装で良いでしょ？」

沙良の会話から判断するに、無事に母親は助かったようだ。

シャルロットはその大きな瞳に滲む雫を抑えることは出来なかった。

あんなに耐えてきた日々がようやく終わるのだ。

母親に会える。

それだけでシャルロットは何も考えられなくなる。

「もう、フランスが手を出せないように亡命手続きしといて。それで安全は保障されるでしょ？」

沙良は通話を切ると、シャルロットに満面の笑顔を見せた。

「お母さん、無事に救出できたよ」

シャルロットは我慢できず、沙良に抱きついた。

勢いのままベッドに押し倒される形となった沙良は、不満の声を上げようとする。

しかし、声もあげずに泣くシャルロットを見て、そっと、その背中をあやすのであった。

◆◇◆

「――てことはシャルルはスペインに亡命するのか」

一夏はシャルロットと沙良から話を聞いていた。

流石に本当のことは言えないため、シャルロットは沙良に相談したということにして、一夏に話を通す。

「うん、このままフランスに籍を置いておくのも怖いしね。ＩＳ学園とは言えど、やり方によっては介入できるわけだし、代表候補生を下ろされて、専用機を回収されたら、その時に何が起こるかわからないしね」

「そう、なのか？　俺には良く分からないけど、沙良と相談してそう決めたんならそれが正しいんだろうな」

一夏はその言葉をすんなりと信じる。

シャルロットはそれに深い信頼を感じ、それを言葉にする。

「一夏は沙良のことを信頼してるんだね」

その言葉に一夏は「何言ってんだこいつ」みたいな顔を作る。

「俺と沙良は家族だからな。家族が信じなければ誰が信じるって話だろ？」

沙良はその言葉に嬉しそうな表情を作る。

シャルロットは二人のデータを盗む際に詳細なデータを見ているために、その言葉の深さを知っている。

両者共に両親不在。

一夏は両親に捨てられ、沙良にいたっては、目の前で両親を亡くしている。

そんな二人だからこそ、家族の大切さを身に沁みて実感しているのだろう。

（羨ましいなぁ）

シャルロットは目の前の二人の理想的な絆に憧れの視線を送ってしまう。

（僕も、沙良とそういう関係になれたらなぁ）

シャルロットはその妄想を広げていく。

その妄想はだんだんエスカレートしていく。

シャルロットの顔がどんどん赤くなっていくのに、沙良は首を傾げる。

「シャルル？　どうしたの？」

「へ？　あ、ううん、なんでもないよ！？」

妄想から、現実に戻されたシャルロットは慌てて取り繕う。
しかし、シャルロットの顔の紅潮は収まることを知らない。
沙良はそんなシャルロットを見て、まだ疲れが残っているのかと思い、その額に、自らの額をくっつけた。

（――っ！？　近い、近いよ！？）

「熱はないね？　疲れが残ってるのかな？　今日は休みにする？千冬姉にも一応伝えてはあるから休んでも問題はないと思うよ？」

シャルロットはその羞恥に言葉を発することが出来ず、ただ首を横に振ることで答えとした。

一夏はそのシャルロットのトマトのように赤くなった顔から、納得したように頷いた。

「シャルルは沙良のことが好――」

「うおっしゃあぁぁぁー！！」

シャルロットは女子としては出してはいけない声を上げつつ、一夏の顔面にノートを叩きつけた。

『一夏、余計なことを言うと命が危ないと思ってね』

個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で一夏に脅しをかけると、一夏はコクコクと頷くのであった。

それにしても、まさかあの一夏に気づかれるとは。

それなら、みんなの気持ちにも気づいてやりなよ。
シャルロットは呆れたとため息を付く。

「諸君、おはよう」

千冬が教室に入ってくると皆が慌てて席に戻る。

「お、おはようございます！」

いつも通り、一瞬で変わる教室の空気に、千冬は満足そうな顔をしている。

「では、山田先生、お願いします」

「はいっ」

千冬からバトンタッチされた真耶は教卓の前に立つと、衝撃の発言をする。

「なんと、今日は転校生を紹介します！」

その言葉に、教室は水を打ったように静かになる。

「え……」

「「「ええええええっ！？」」」

沙良はその光景にデジャヴを感じてしまう。

「入れ」

千冬の声と同時に、教室のドアが開く。

「……」

クラスに入ってきた転校生を見て、ざわめきがピタリと止まる。

それはシャルロットの時のような驚きによるものではなかった。

◆◇◆

それは、力。

軍人をイメージさせるその冷たく鋭い気配は見るものに威圧感を与える。

その瞳の温度の低さに、誰しもその視線を合わせることをしなかった。

「……」

転校生は未だに口を開かず、腕組みした状態で教室の女子たちを下らなそうに見ている。

しかし、それもわずかなことで、今はその視線は千冬に向けられていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直し、素直に返事をする転校生にクラス一同がぽかんとする。

敬礼を向けられている千冬は面倒くさそうな顔を見せていた。

「ここではそう呼ぶな。私はもう教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

転校生は手を真横につけ、足を踵で合わせ背筋を伸ばしている。

その佇まいは軍の関係者を思わせる。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

クラスメイトたちは続く言葉を待つが、いつまでたってもその口が開かれることはなかった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

空気に耐えられなくなった真耶が声をかけるが、帰ってきたのは無慈悲ともいえる即答だけだった。

そして、ラウラは、教室を一回見渡すと、一人の生徒でその視線を止めた。

「っ！　貴様が――」

ラウラはその生徒、一夏につかつかと歩み寄る。
そしてその腕が振り上げられ――

「たいしたご挨拶だな」

振り下ろされることはなかった。

一夏はその振り下ろされる途中の腕をしっかりと掴んでいた。
それをラウラは忌々しく睨み付ける。

「認めない、私は貴様があの人達の家族であるなど、決して認めるものか！」

その言葉はクラス中の注目を集める。
箒でさえもぽかんと口を開けてしまっている。

そんななか、動じずに行動に移す者がいた。

「ラウラ」

沙良は一言、その名前を呼ぶ。

それだけで、ラウラはその怒気を収め、沙良を一瞥し一夏の前から立ち去ってしまう。

そして空いている席に座ると腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。

一夏はそのやり取りを見て、怒りの矛先を向けられている理由に気づく。

一夏は何か納得したように頷き、そして複雑な表情をするのであった。

第二十七話　独逸からの転入生（後書き）

ひとまずシャルのイベントは終わりかな？
次はラウラのイベントに入っていきます。

皆様の応援のおかげで、１０万ＰＶを達成することが出来ました！！
ありがとうございます！！
それを記念して、幕間として短いお話でも書こうと思ってます。
例えばですけど、シャルの亡命のお話とか、スペイン勢のお話とか、
黛先輩の密着取材とか。
それを実行するかは僕の気分しだいですけどｗｗ

第二十八話　ドキドキお弁当タイム（前書き）

今回は一夏寄り視点です。
シリアスが続いてたので、今回は明るくいきましょう。

第二十八話　ドキドキお弁当タイム

「……どういうことだ」

「ん？」

昼休み、一夏を中心にいつものメンバーが屋上の円テーブルでお弁当を広げていた。

本来、教育機関の屋上というものは安全上の問題のため、生徒の立ち入りを禁止しているところが多い。

しかし、ＩＳ学園ではそんなことはない。

美しく配置された花壇には季節の花々が咲き誇っている。

欧州を思わせるその石畳は、その花壇に合わさって、見るものの心を落ち着かせてくれる。

晴れているということもあってか、一夏たちのほかにも、多くの生徒が屋上を利用していた。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

箒はチラッと視線を横に向ける。

そこにいるのはセシリアと鈴音。そして沙良にシャルロットだ。

「せっかくなんだし大勢で食ったほうが上手いだろ。前は箒と二人だったわけだしな」

「待て、それは言わないって約束――」

箒は肩を鈴音に掴まれる。

「へぇ、ちょっとお話しようか、箒」

「そうですわね、今のは聞き捨てなりませんわ」

セシリアも、鈴音の後ろから、圧力を放っていた。

箒は、笑顔を作りながらも目が笑っていない二人の追求を受けることになった。

それを横目に、シャルロットは沙良に今朝作っていたお弁当を渡す。

「はい、これ沙良の分」

沙良はそれを、目を輝かせて受け取っていた。

「いいの？」

「うん。一人分も二人分もそう違わないから」

「じゃあ、有り難く頂戴するね」

沙良はお弁当を両手で持つと、満面の笑顔を見せた。

「う、うん……」

シャルロットは俯いてしまう。

よく見ると、頬に少しの朱色を差していた。

一夏はそれを見て、和やかな表情をしている。

「一夏、どうかした？　不思議な顔してるけど」

沙良はそれを見て声をかけた。

「不思議？　それはどんな感じだい？」

一夏は、娘が幼馴染の男の子と一緒に遊んでいるのを微笑ましく見ている父親のような口調になる。

「口調まで不思議だぁ。なんかね、娘が幼馴染の男の子と一緒に遊んでいるのを微笑ましく見ているお父さんみたいな顔をしてたよ」

「長いな。でも……」

一夏はチラリとシャルロットに視線を送る。

その視線に気づいたシャルロットは「何？」と首をかしげている。

「あながち間違ってないかもな」

その言葉にシャルロットは顔を紅潮させてしまい、あたふたしている。

「ふーん、変な一夏」

沙良はシャルロットから受け取ったお弁当を膝の上に置く。

どうやら、シャルロットの変化には気づいていないようだ。

今のうちにと、シャルロットは沙良に顔を見られないように手で押さえている。

「はやく食べようよ。僕お腹空いてるんだけど」

沙良はそんなシャルロットよりも食欲が勝ったようだ。

その言葉に、一夏は未だに言い合いをしていた三人に声をかける。

「喋るのはいいけど、そろそろ飯にしようぜ」

一夏は沙良を指差す、そこにはお腹を空かせて、だらーとだれてしまっている沙良の姿があった。

「そ、それもそうだな」

箒は助かったと言わんばかりに胸を撫で下ろした。

後ろでは鈴音が抜け駆けがどうこうと言葉を重ねているが、沙良の冷たい視線を受けてすごすごと引き下がってしまう。

セシリアも納得はしていないようだが、沙良のお腹がなったことで、そのバスケットをテーブルの上に置く。

「はい、一夏。前に食べたいって言ってたでしょ？」

鈴音から酢豚を受け取った一夏は嬉しそうにそれを眺める。

「おお、酢豚だ！」

「一人分も二人分もそう変わらないしね」

鈴音は自分の分だけ買ったのだろうか、食堂で売られているご飯をテーブルに置いた。

「自分だけ、ご飯かよ」

「酢豚が貰えただけでも感謝しなさいよ」

「コホンコホン。――一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

バスケットを開くセシリア。そこにはサンドイッチがきれいに並んでいた。

「お、おう。後で貰うよ」

一夏の返事はいささか引いていた。

その横で、鈴音がうわぁ……という表情を作っている。

その理由がわからないのか、沙良とシャルロットは首を傾げていた。

沙良は整備室で別に食べることが多く、シャルロットは転校してきたばかりなため、この料理の凄まじさが分からないのだ。

はっきり言おう。

このイギリス代表候補生、セシリア・オルコット、料理が全く出来ないのだ。

見た目は物凄くきれいに作る。

しかし、その味は見た目に反比例する。

本人曰く、「本と一緒になればいいのでは?」とのことだが、本と一緒なのはその写真だけであって、味は再現できてはいない。

一夏としては、味見の大切さを二時間ぐらい説きたいぐらいだ。

「はっきり言わないからずるずるいっちゃうのよ。バーカ」

しかし、せっかくの手料理を無下に扱うことの出来ない一夏は簡単に「不味い」とは口に出来ないのである。

自分が料理を作ることが多かったため、誰かが作ってくれるということだけで、一夏としては感無量なのだ。

「そうだ。箒、今日は弁当を作ってきてくれたんだろ？　そろそろ渡して貰えると嬉しいんだが――」

「……」

箒は無言で弁当を突き出す。

一夏は返事に困ってしまうが、それでも手作り弁当は嬉しいのか、その顔には喜の表情が浮かんでいる。

「じゃあ、早速。……おお！」

弁当を開けると、鮭の塩焼きに鶏肉のから揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和えというなんともバランスの良い献立が敷き詰められていた。

「これは凄いな！　どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで。一人分も二人分もそうたいして変わらないからな」

一夏は聞き覚えのあるフレーズが使いまわされている気がした。

「そうだとしても、嬉しいぜ。箒、ありがとう」

「ふ、ふん……」

箒は何でもないように振舞いながらも、その顔には嬉しそうな表情が浮かんでいる。

「じゃあまあ、いただきます」

一夏はとりあえず、から揚げに口をつける。

「……」

「ど、どうだ？」

箒が心配そうにその顔を覗き込む。

一夏はゆっくりと咀嚼し、じっくりと味わう。

「……飲み込むのが勿体無いぐらいに美味い」

その評価に箒の顔が輝くように明るくなる。

「これって、結構仕込みに時間かかってないか？　ええと、混ぜてるのは生姜と醤油、それにおろしニンニクか」

「……よくわかるものだな」

「へぇ、美味しそう」

沙良が横から顔を出してくる。
よく見ると、その弁当箱は空になっていた。
シャルロットの弁当を見るとまだ三分の二ぐらいは残っている。
食べるのが早すぎる。

「一個食べるか？」

一夏の提案に、沙良は口を開けることで答えとする。

「あーん」

「ほれ」

一夏は沙良の口にから揚げを放り込んでやる。

「あ、美味しい。下味付けるのに塩コショウした後に酒に浸けたのかな？　もしかして、衣に大根おろし混ぜたのかな？」

「ああ、正解だ。全く、どういう舌をしているのだお前らは」

「いや、でも本当に美味いな。箒は、食べなくていいのか？　そっちのお弁当には入ってないじゃないか」

「……――……」

箒は小さく何かを呟いたので、一夏には聞き取れなかった。

「ん？」

「あ、ああ、大丈夫だ。まぁ、その、なんだ。美味しかったのなら

ば、いい」

一夏は、から揚げを一口サイズに切ると、それを箸で持ち上げる。

「な、なんだ？」

「ほら、あーん」

「い、いや、その、だな……」

箒は頬を赤く染め、しどろもどろになってしまう。

「ほら、食ってみろって」

「……」

箒は困ったように自分の弁当と一夏の箸を交互に見ている。

その様子を一夏は首を傾げてみている。

「箒、食べないの？」

沙良が物欲しそうな顔で、一夏を見上げる。

どうやら、お弁当の具材を催促しているようだ。

「あ、あーん……」

「はい、あーん」

その光景に心を決めたのか、箒は差し出されている箸を咥えた。

「い、いいものだな……」

その言葉に、一夏は頷く。

「だろ？　美味いよな、このから揚げ」

「から揚げではないが……うむ、いいものだ」

箒は分かり易い様に機嫌を良くする。

「一夏！　はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん！　サンドイッチもどうぞ！」

鈴音とセシリアが一夏に押し寄せる。

その差し出された料理は先ほどの箒への対抗心だろうか。

「ま、待て。酢豚は自分のがあるし、サンドイッチは食べ合わせ的に最後にいただき――」

「はむ」

それを沙良が食らった。

「おお、この酢豚美味しい」

鈴音は、面を食らったような表情を作る。

しかし、沙良がべた褒めすると、機嫌を良くしたのか、上機嫌で料理の説明を始める。

沙良はそれを聞きながら勝手に一夏の酢豚を食べていた。

一夏はチラッと横を向くと、シャルロットが沙良と自分のお弁当を交互に見つめていた。

大方、自分も沙良にしたいとでも思っているのだろう。

どうにかして協力してあげられないかと、一夏は考える。

一夏が余所見をしている間に、沙良は差し出されている形となるサンドイッチを受け取り、それを口に運ぶ。

「っ！　……！？」

沙良の眉が顰められた。

その声に一夏は振り向く。

そして一夏は遅かったかと、ため息をつく。

「お味はどう――」

沙良はセシリアがなにか言い終わる前に、その開いた口にサンドイッチを詰め込んだ。

「――――――っ！！」

セシリアは詰め込まれた苦しさと、その味に言葉を呑む。

一夏も、そのサンドイッチを食べて見る。

「おおう、これは……」

甘いのだ。

ＢＬＴサンドが甘いのだ。

確実にバニラエッセンスは入っているだろう。
それに、蜂蜜も塗られている。
ベーコンも下味を付ける時点で砂糖を入れてしまっているのだろうか。
とりあえず、沙良が真顔でセシリアにサンドイッチを食べさせているのを見て、なんとなく納得してしまう。
セシリアは既に涙目だ。

「さ、沙良、ほら酢豚あげるから」

流石にセシリアが可哀想になったのか鈴音が助け舟を出す。
沙良はしぶしぶといった具合に口を開ける。
しかし、その手は未だにサンドイッチを掴んでいる。
皆が額に冷や汗をかいていた。

こいつ、徹底的にやる気だ。

皆が一度視線を集めて、頷き合う。

鈴音はひとまず口に酢豚を放り込むと、沙良の手からサンドイッチを離す。

箒は、沙良が咀嚼して、味に夢中になっている隙に、セシリアを救出する。

一夏とシャルロットは沙良にお弁当に与え続け、その興味をセシリアから逸らす。

この時、セシリアは誓ったそうだ。

料理を美味くなろうと。

「箒さん……鈴さん……」

「くっ、今は喋るな」

「動いちゃダメよ」

実際はそこまで大したことでもない。

「わたくしに、料理を……教えて、くれませんか？」

「ええ、もちろんよ。次は、沙良に美味しいって言わせてみせましょう」

「ああ、私も出来る限り協力しよう」

三人が固い握手を交わすのが見えた。

一夏は、聞こえてくる会話に、ほっと胸を撫で下ろす。

これで、セシリアの料理が美味くなれば、皆が幸せになるだろう。

一夏は、セシリアたちから意識を沙良たちに向ける。

そこには口を開けて待っている沙良と、嬉し恥ずかしそうに沙良にあーんと料理を運ぶシャルロットの姿があった。

一夏は、シャルロットに右手でサムズアップをすると、シャルロットは顔の朱をより濃くしてしまうのであった。

（シャルルも大変だな。なんせ、沙良は鈍感ってレベルじゃなく、

恋愛感覚が幼いからな）

自分のことを棚にあげて、一夏は一人考える。

そこで、一夏は気づいた。

見られている。

もちろん、屋上には一夏たち以外の生徒も沢山いるわけで、実際、この時、シャルロットと沙良は写真を取られていた。

「はぁはぁ、はぁはぁ」

「黛先輩？」

一夏はどこから沸いてきたのか、急に姿を現した薫子に恐怖を覚える。

「ふふふ、たれ込みがあってね。中々に面白い状況じゃないの。沙良君の写真は、とある筋に高く売れるからね。ふっふっふ」

薫子は、様々な角度から写真を撮ると、すぐさま走り去ってしまう。

「なんだったんだ？」

一夏は、ただその姿を眺めることしか出来なかった。

余談だが、次の日から、マン研が活動を本格化し、その製作物が高値で取引されたらしい。

第二十八話　ドキドキお弁当タイム（後書き）

弁当イベントだけで、まさか一話使うとは思ってなかった。
次はラウラを出すよー

第二十九話　一夏の理由（前書き）

一夏の設定が少し重くなってます。

第二十九話　一夏の理由

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？　一応わかってるつもりだったんだが……」

一夏は、シャルロットと軽く手合わせをしてもらった後に、戦闘に関するレクチャーを受けていた。

場所は第三アリーナ。

土曜日は午後が完全に自由時間となり、アリーナも全開放されるため、多くの生徒が利用している。

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「ううっ……確かに」

「一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予想で攻撃出来ちゃうからね」

「直線的か……うーん」

一夏は考え込むように、あごに手を当てる。

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に付加がかかると、最悪の場合骨折をしたりするからね」

「……なるほど」

一夏はシャルロットの分かりやすい説明に感嘆のため息をつく。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

一夏の後ろでは、自称コーチがぶつくさと文句を言っていた。

箒は、擬音で説明し、鈴音は全てを感覚で済ます。

セシリアの説明だけは沙良が居れば何とか理解できるレベルだ。

その頼りの綱の沙良は整備室に篭っている。

何でも、シャルロットに渡す機体を作るのだとか言っていた。

本人は「シャルルには内緒ね」と楽しそうにしていた。

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね」

「ああ。沙良に何回か見てもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だとさ」

「そっか、なら今回は僕のを貸してあげるから射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

一夏は先ほどまでシャルロットが使っていたアサルトライフルを受け取る。

「ああ、借りるぜ」

「うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「おう」

初めて持つ銃器は、妙な重さを感じさせる。
それは精神的なものなのだろう。
人の命を奪うための兵器。
その考えが、一夏に重さを感じさせるのだろうか。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはＩＳが自動で相殺してくれるから心配しなくてもいいよ」

「じゃあ、行くぞ」

一夏は一度深呼吸をしてから引き金に指をかける。
そして指先に力を入れる。
それだけで、その銃口からは人の命を簡単に奪う鉄の塊が放出される。
その火薬の炸裂音は一夏の鼓膜に響いた。

「どう？」

「あ、ああ。なんていうか、速い。弾丸の速度も、ワンアクションで放たれる動作の速さも」

「そう、速いんだよ。一夏の瞬時加速も早い。でも、その質量を考えたら、銃弾のほうが断然早いんだ。それは、軌道予測さえ合って

いれば、簡単に命中させることが出来るし、外れても牽制にはなる」

「それが、機体となるとどこかしらでブレーキがかかり、動きも読まれてしまうと……だから簡単に間合いが開くし、続けて攻撃を受ける」

「そういうことだね」

一夏は、理解をしたと、深く頷く。

そして、感覚を忘れないようにと、再び、銃口を的に向ける。

これを相手から向けられているときにどういう風に動くか。

それをイメージしながら、引き金を絞っていく。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

急にアリーナがざわつき始める。

一夏はちょうど一マガジン分を撃ち終わったところで注目の的に視線を移した。

「……」

そこには、転校初日に問題を起こしたドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒが腕を組み立っていた。

「おい」

開放回線（オープンチャネル）で声が飛んでくる。

「……なんだよ」

無視するわけにもいかず、一夏は言葉を返す。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば、話が早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

一夏は苦い顔を作る。

ドイツ、千冬、軍人、そう考えると考えると、考えられることは一つしかない。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

千冬のその強さに惚れこんでいるのだろう。

ゆえに、その経歴に傷を付けた一夏が憎いのだろう。

そして、あの事件に関わっている事柄なら、もう一つ理由があるだろう。

「そして、貴様の弱さのせいで、あの人までもが傷をおった。だから、私は貴様を――貴様の存在を許さない」

一夏と鈴音以外があの人という発言に首を傾げる。
一夏は、無意識に唇をかみ締める。
それは、一夏が訓練を再開した理由でもある。

弱かった。

そのせいで大切な人が傷を負ってしまった。
大切な人の笑顔を奪った。
それは罪。
一夏は、未だにあの日の無力さを許せていないのだから。
その一夏を近くで見てきた鈴音だけが、その一夏の拳がきつく握られていることに気づいた。

「一夏……」

「大丈夫だ、鈴」

一夏はラウラに視線を合わせる。

「相手はしてやる。だが、また今度な」

「残念だが、あの人のいない今しかチャンスはないのでな――戦わざるを得ないようにしてやる」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のＩＳを戦闘状態へとシフトさせる。
刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。
その銃弾は戦闘態勢を取っていない一夏に真っ直ぐに飛んでいく。
当たる。

「……こんな密集地帯でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

そう思われた銃弾は、シャルロットのシールドによって防がれる。

「貴様……」

シャルロットの右腕には六一口径アサルトライフルが展開させている。

「フランスの第二世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね」

互いに涼しい顔をした睨み合いが続いている。

しかし、ラウラはその均衡を破ろうとする。

シャルロットが身構えるのが分かる。

ラウラは引き金に添えた指に力を込めようとする。

「冷静さを失った銃弾は己をも貫く。忘れたの、ラウラ？」

しかし、その銃弾は放たれることはなかった。

その声に、一夏はアリーナの入り口に視線を向ける。

その人物を見て、ラウラが、引き金から指を離す。

「……ルイス博士」

「今は深水だよ」

そこには制服の上から白衣を着ている沙良が立っていた。

沙良はアリーナの中央まで歩くと、その射線に入る。

その身はＩＳを纏っていないため、銃を向けられるとその命を落としかねない。

「沙良！？」

シャルロットは沙良に講義しようとするが、一夏はその肩を掴み、止める。

シャルロットは疑念の表情を作るが、一夏はただ首を横に振る。

沙良に任せよう。

そう言いたいのだ。

「もう、一組の専用機持ちが騒ぎ起こしてるって言うから来たけど、何してんのさ。僕だって暇じゃないんだから」

沙良は肩をすくめて見せる。

「しかし、私は――」

「ラウラ」

「……今日は引きます」

ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。
その姿を最後まで見届けると、沙良がこちらに近寄ってくる。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

「なんだったんだろうね」

シャルロットもいつもの人懐っこい顔で一夏の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫ですの？」

「無事か、一夏？」

セシリアと箒は心配そうにこちらに駆け寄ってくる。
一夏の事情を知っている鈴音は複雑な表情をしている。

「なんでボーデヴィッヒさんは一夏に攻撃してきたの？」

シャルロットはそう尋ねる。
一夏はチラリと沙良を見る。
それは複雑な表情をしていたのだろう。
沙良は安心しなよと前を置きする。

「僕は構わない。それで一番の傷を負ったのは一夏なんだから、一夏が判断すれば良い」

沙良はそう言って、アリーナを出て行ってしまう。
恐らくは整備室に戻ったのだろう。

「一夏……」

鈴音が一夏の傍までやってくる。
鈴音が、事情を知っているものが居る。
そのことで、一夏は、語る重荷が減った気がした。

「ここでは話せない。部屋に戻ってから話すよ」

◆◇◆

一夏は、自分のベッドに腰掛けると、少し間を空けるてポツリと語りだす。

「第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』の決勝戦のことはみんな知っているな？」

皆が頷く。

「千冬姉が、決勝戦を棄権した。それの原因を作ったのは俺なんだ」

「でも、それは――」

「鈴」

「……ごめん」

鈴音は唇をかみ締めている。

皆は、一夏の言葉に驚きを隠せなかった。

「あの日、俺と沙良、そして鈴で決勝戦を見ようと、その会場まで行ってたんだ。千冬姉の、控え室まで行って、三人で応援の言葉を伝えて、そして会場に向かう途中――」

鈴音が顔を伏せる。

「――俺たちは誘拐されたんだ」

一夏は淡々と言葉を吐き出す。

「どういう目的かはわからない。でも、あいつらの目的は俺一人だけだったんだ。織斑千冬の肉親である、織斑一夏。それだけを誘拐する筈だったらしい。それは、拘束された状態で、見張りのやつ等が言ってたから間違いない。ただ鈴と沙良は巻き込まれただけなんだ」

一夏は辛そうな顔を見せる。

「そして、その時から沙良はスペインでは有名だったらしく、命は奪わないって言ってた。だから、沙良は俺のために、俺なんかのために無茶をしたんだ！　沙良は縄を抜けて、俺たちの縄を外すと、俺を銃からかばうように、俺に銃口を向けていた見張りに攻撃を仕掛けたんだ。自分は殺されないからって！　それでも危険なのに！」

一夏の語尾が強くなる。

「俺はそれを見てることしか出来なかった。その場から動けなかった。俺は弱かったんだ。その隙に逃げていればよかったのに、咄嗟に銃口を向けられてその場に足が凍り付いていたんだ。だから、沙良が、沙良が……俺を守るために俺の盾になったんだ。俺は、目の前で沙良が銃弾を体に受け、血を吐いて倒れるのをただ見てることしか出来なかったんだ。俺に出来たことは沙良を撃って、気が動転した見張りをただひたすら殴ることと、沙良の傷口に必死に布を当てることだけだったよ」

一夏は、乾いた笑いを浮かべる。

「それから十分ぐらいしてから、突然部屋に衝撃が走ったんだ。壁が崩れて、光が差し込んでくる中、現れたのはＩＳを纏った千冬姉だった。決勝戦の会場から知らせを受けて、文字通り飛んで来てくれたらしい。それで決勝戦は千冬姉の不戦勝となり、大会二連覇は果たせなかった。独自の情報網から俺たちの監禁場所の情報を入手していたドイツは千冬姉にその情報を渡したらしい。その『借り』があったから、千冬姉はドイツで一年間教官をやっていたらしい。そして、沙良は医療技術が発達しているドイツで治療を受けた。そのときの『借り』で、沙良はドイツと共同で武装を何個か開発した

らしい」

誰も言葉を発することが出来ない。

そんな空気ではない。

「あいつは、たぶん千冬姉に指導を受けたんだと思う。だからこそ、その強さに陶酔して、その経歴に傷を付けた俺が憎いんだろう。そして、沙良を傷つけた俺が許せないんだ。沙良はドイツでもその技術力から尊敬されていたはずだから」

「一夏……」

「沙良、その時から、背が伸びてないんだ。あいつの成長を俺は奪ってしまったんだ。それでも、あいつは気にしてないって笑うんだ。でも、沙良はいつでも笑うんだ。それが辛いときでも」

一夏は上を見上げる。

「俺はその日から強くなろうと思って鍛錬を再開した。剣を振り続けた。沙良と家族である為に。だからＩＳに乗れるって知ったとき凄い嬉しかった。守れる力が手に入ったと思ったんだ」

それは人を傷つける兵器。

それでも構わなかった。一夏は力を求めたのだ。

「あいつが殺意を向けている理由はわかった。しかし、そんなもの、お前に何の罪もないではないか！！　悪いのは誘拐した連中であって、一夏は何も悪くない！！」

「箒さんの言うとおりですわ。第一、なんの訓練も積んでいない中

学生が銃を向けられて咄嗟に行動できるほうがおかしいですわ」

「そうだよ、一夏に何か思うことがあったにしても、このことがボーデヴィッヒさんに喧嘩を売られる理由にはならないよ」

「そうよ、沙良も言っていたじゃない。一夏は何でも考えすぎなのよ。もう少し、あっけらかんとしてていいんだから。それに一夏が罪を感じるならあたしだって一緒よ。アンタだけじゃないんだから」

「お前ら……」

「そうだよ。僕は気にしてないってずっと言ってるのに」

一夏は、その声のする方向に視線を向ける。
そこにはドアにもたれるように沙良が立っていた。

「話は終わったようだね。もう、一夏はこの話のときだけ深く考え込むんだから。僕が良いって言ってるんだから、これはもう良いんだよ」

「……」

「まだ不満そうだなぁ。よし、ならさ、こうしよ。ラウラをぶっ倒してよ。もう過ぎたことを引っ張り出してきたあいつを倒して、清

算してよ。弱いって言われたんでしょ？　弱いことで悔やんでたんでしょ？　なら強くなったところを見せてよ」

「沙良……」

「僕はいつまでも過去に囚われるより、未来を見てるほうが好きなんだ」

それはシャルロットにも言った言葉。

「勝ってよ一夏。それを罰にしてあげる」

沙良はそれだけ言うと、一夏の部屋から出て行ってしまう。

「……はは」

なんて優しいんだ。

その優しさに、一夏は瞳が揺らぐのを感じた。

罪悪感。

それは一夏にずっと纏わりついていた。

それに罰を与えてくれる。

「勝つ。絶対に勝つ」

一夏は、その決心を新たにする。

「よし、こうなったら明日から猛特訓だ！　皆、手伝ってもらってもいいか？」

「ああ、もちろんだ」

「そんなこと当たり前ですわ」

「ふふん、あたしが教えるんだから負けたら承知しないから」

「僕でよかったら協力するよ」

一夏の瞳にはもう暗い感情はなくなっていた。
その頬に流れている、雫に、皆は何も言わない。
一夏は、いつもの明るさを取り戻したのであった。

第二十九話　一夏の理由（後書き）

ちょっと一夏にシリアスが入りましたけど、実際に誘拐されたりしたら、相当なトラウマだと思うんですよね。
もっと引け目を感じてもいいかと思ってたんで、沙良を巻き込んで、相当な引け目を与えてみました。

沙良も活躍しますが、ラウラ編は一夏主体で話が進むかもしれません。

第三十話　乱闘の劈頭（前書き）

次が戦闘に入るので、少し短めに切らせていただきました。

第三十話　乱闘の劈頭

「そ、それは本当ですの？」

「う、ウソついてないでしょうね！？」

月曜日の朝。

教室に向かっていた沙良と一夏は廊下にまで聞こえる声に目をしばたたせた。

「なんだ？」

「さぁ？」

沙良も不思議そうな顔をしている。

そこでシャルロットの声が、教室から聞こえてくる。

「僕も良く分からないけど、この噂で学園中持ちきりみたいだね。月末の学年別トーナメントで優勝したら沙良か一夏と交際でき――」

「あれ、今、名前呼ばれた？」

「俺がどうしたって？」

「「「きゃあああっ！？」」」

クラスに入り、普通に声をかけただけなのだが、返ってきたのは取り乱した悲鳴だった。

「で、何の話だったんだ？　俺の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？　そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴音とセシリアは微笑を浮かべながら話を逸らそうとする。

「あ、わかった！　今、学園に流れてる噂だね」

沙良がそう言うと、教室の空気が変わる。

それはまるで狩人のよう。

「沙良さん、あの噂は本当なんですの？」

セシリアが恐る恐る聞く。

その目は獲物を目の前にしたハンターのよう。

「アレでしょ？　女子は優勝したら御褒美が貰えるんでしょ？　その内容までは教えてくれなかったけど、とても良い物で、とても興奮して、とても涎が出そうになって、とても鼻血が出そうになるって二年の人に聞いたよ？」

その発言で、クラスメイトはしっかりと把握した。

この子は、誤魔化されたんだと。

クラスメイトは「食べ物かなぁ？」とその商品に心を躍らせている沙良に、「商品は君だよ」なんて言えないのであった。

「そうなのか、俺たちには何かご褒美は出ないのかな？」

一夏も、沙良の言う噂に納得したようだ。

「ね、女子だけせこいよね」

沙良と一夏は、何が欲しいか考える。

沙良は先ほどから食べ物の名前しか挙げていない。

その姿を見て、クラスメイトは思う。

優勝候補はこの専用機持ちの中でも、やはり、沙良だろう。

セオリー無視の戦い方は、初見の相手には対処できない。

誰かが、声を上げる。

「でも、優勝候補は深水くんかなぁ、やっぱり。そうなると御褒美が……」

その言葉が耳に届いたのだろう。

沙良が、その言葉に反応する。

「ん？　僕出ないよ？」

「――えっ！？」

「僕はエキシビションに出て欲しいって言われてるから、本戦は出なくて良いんだって」

その、沙良の言葉に、皆は瞳に闘志を燃やす。

チャンスはある。

皆が顔を合わせ、頷き合う。

「よし、じゃあ、あたし自分のクラスに戻るから！」

鈴音が、そのやる気に満ち溢れた声をだす。
それを切っ掛けにか、何人か集まっていた女子たちも同じように自分のクラス・席へと戻っていった。

「沙良」

「ん？　どうしたのシャルル？」

「えっと、その……」

シャルロットは言いにくそうに言葉を濁す。

「？」

沙良はただ首をかしげている。

「ぼ、僕が優勝したら、沙良から何かご褒美が欲しいなぁ……」

その言葉に沙良は簡単に頷く。
シャルロットは男子の姿をしているが、実際は女子。
シャルロットも御褒美が欲しいのだろう。
沙良はそう判断する。

「そっか、シャルルも欲しいよね。じゃあ優勝したら一緒に買い物いこうよ」

シャルロットは顔を輝かせる。

「ホント？」

「……嫌だった？」

シャルの返事を勘違いしたのか、沙良が悲しそうな表情を作った。

「ち、違うよ！？　嬉しかったから信じられなくて……」

沙良は顔を綻ばせる。

その笑顔を向けられたシャルロットは顔を赤くする。

「良かった。じゃあ約束ね」

「うん！」

その様子を見ていた一夏は、シャルロットに良く頑張ったと言いたくなる。

そして、周りの連中が、変な目で沙良たちのことを見ていることを教えてあげたかった。

「やっぱり沙良×シャルなのね。今年はこれで行くしかないわ！」

「シャルル君は尽くし受けね。ふふふ――おっと、鼻血が」

「ああ、指切りしてる、肌が触れ合ってるよ！！」

「デュノア君、顔真っ赤だよ！？」

「これは、本当に脈ありか！？」

「ああ、お母さん、私を生んでくれてありがとう！」

一夏はシャルロットが女子と知っているため、この光景は微笑ましいだけなのだが、周りの女子から見たら男同士が仲良くしているように見えるのだろう。

一夏は、そっとため息をつくのだった。

◆◇◆

一夏は全力で走っていた。

トイレが三箇所しかないため、走らなければ授業に間に合わないのだ。

のんびりしている時間はない。次の授業はＩＳの格闘技能に関する基礎知識と応用なのだ。

一夏にとっては死活問題となりうる授業だろう。

「この距離だけはどうにもならないな……」

一夏がぼそっと呟いたときだった。

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ」

声が聞こえた。
それは曲がり角の先から聞こえてきた。
その声に一夏は足を止めてしまう。
それは聞き覚えのある声。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

千冬とラウラだ。
ラウラは、不満や思いの丈を千冬にぶつけていた。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など、教官が教えるに足る人間など少数ではありませんか」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションか何かと勘違いしている。ＩＳは兵器です。それを理解できないような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど――」

「――そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……！」

ラウラは凄みのある千冬の声に言葉を途切れさせてしまう。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「……教官は何にこだわっているのですか？」

その声は震えている。

恐怖。

圧倒的な力の前に感じる恐怖と、かけがえのない相手に嫌われるという恐怖。

「教官の目的は教育よりも、この場所の維持なのですか？」

「……」

しかし、その恐怖を感じても言わねばならぬことがラウラにはあった。

大切なのは、生徒なのか、それとも一部の者だけなのか。そのような質問に千冬は答えなかった。

それが、答えだ。

「……授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

千冬は声色を元に戻す。

もう話す事はない。

暗にそう言っているのだ。

ラウラは、千冬に背を向けると、黙したまま早足で去っていった。

「まったく、沙良に出会ってからあいつも頭が回るようになった。

本当に扱いづらくなったものだ」

千冬は呟く。

それは本心だろう。

沙良は周りの人間によくも悪くも影響を与える。

「そこの男子。盗み聞きか？　異常性癖は感心しないぞ？」

「な、なんでそうなるんだよ！　千冬ね――」

「織斑先生だ」

「は、はい」

一夏が千冬の名を呼ぼうとすると、その頭に出席簿が振るわれる。

「そら、走れ劣等性。このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかってるって……」

「そうか。ならいい」

ニヤリと笑みを見せる千冬は今だけは姉として言ってくれているようだ。

「じゃあ、教室に戻ります」

「おう。急げよ。――ああ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな。……とは言わん。バレない様に走れ」

「了解」

どうやら見逃してくれるようだ。

一夏は教室までの道のりをバレないように全力で走り抜けたのだった。

◆◇◆

「「あ」」

二人そろって間の抜けた声を出してしまう。

鈴音とセシリアだ

時間は放課後。場所は第三アリーナ。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

鈴音とセシリアの間に見えない火花が散る。

「ちょうど良い機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上

かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうではありませんか」

セシリアは『スターライトｍｋ?』を、鈴音は『双天牙月』を構える。

「では――」

「面白そうなことをやっているな」

いきなり声を被せるように言葉がかけられる。
二人はそろって、そちらに視線を向ける。
そこには、あの漆黒の機体がたたずんでいた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。
その表情は欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見たときの方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的の物言いに鈴音とセシリアの両方が口元を引きつらせる。
一夏の話を聞いてから、二人はラウラにいい印象を持てていなかった。

「何?　やるの?　わざわざ　ドイツくんだりからやってきてボコ

られたいなんて対したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場ではそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまり苛めるのは可哀想ですわよ？　犬だってまだワンと言いますのに」

ラウラの全てを見下すかの目つきに並々ならぬ不快感を得た二人は、その怒りの捌け口を言葉に求めた。

しかし、それはラウラの口元を綻ばせるだけに終わった。

「その言葉を待っていた」

そう言ってとある機械を取り出す。

ボイスレコーダー。

「私から喧嘩を売ると、ルイス博士が怒ってしまうのでな。これで、私は、堂々と貴様らの喧嘩を買うことが出来る」

ラウラはボイスレコーダーをしまうと、二人を見下し気味に言い放つ。

「状況も把握できず、相手の挑発に対して後先考えぬ発言。それに二人がかりで量産機に負ける程度の力量。貴様ら本当に代表候補生か？　よほど人材不足と見える。数と真似することしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

鈴音とセシリアは、頭で何かがキレるような音を聞いた。

二人は、装備の安全装置を外す。

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわけね。――セシリア、どっちが先にやるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたしくしとしてはどちらでもいいのですが――」

「はっ！　二人がかりで来たらどうだ？　一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

それは明らかな挑発。

しかし、すでに堪忍袋の尾が切れている二人にはもはやどうだっていい。

「――今、何て言った？　あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「この場に居ない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようここで叩いておきましょう」

「言葉もきちんと扱えないようなやつと、自分のことは棚に上げるようなやつが何を言っているのだ。私を笑わせたいのか？　それなら笑ってやるぞ？　貴様らの頭に足を乗せてな」

得物を握り締める手にきつく力を込めるふたり。それを冷やかな視線で流すと、ラウラはわずかに両手を広げて自分側に向けて振る。

「とっとと来い」

「「上等！」」

第三十話　乱闘の劈頭（後書き）

次は、このまま戦闘に入っていきます。
二巻もまだまだ続きそうですね

第三十一話　私闘の結尾

鈴音はすぐさま距離を詰める。

その振りかぶられた青竜刀はフェイントを挟み、その漆黒の脚部を切りつける。

それは右足を引かれ避けられてしまうが、鈴音は青竜刀を振りぬいた勢いを利用し、回転により連撃を放つ。

それは円の動きでラウラを追い詰めようとする。

「甘い」

その言葉と同時に、ラウラが近接武器を展開する。

それは両手首に装着されたパーツから展開された超高熱のプラズマ刃。

鈴音はそれを見て、すぐさまラウラから離れる。

武器を振るうスピードからして向こうの方が有利である。

アレを連撃で放たれたら、大きさのある青竜刀では捌きにくくなる。

故に鈴音は後方にその身を飛ばす。

まるで、追って来いと言わんばかりに。

来た。

ラウラはその機体を鈴音に肉薄させる。

鈴音はその頬をニヤリと上げる。

「かかったわね！！」

その叫びに答えるように、セシリアの精密狙撃がラウラを襲う。

「ちっ」

ラウラは、その身を右方面に捻ることによって、その直線的な動きを射線から外す。

「アレを躱しますの！？」

ラウラは大口径レールカノンをセシリアに向ける。
その銃弾は狙撃場所からセシリアを動かす。

その隙を見計らって鈴音が青竜刀をラウラに叩きつける。
狙いは右腕、あえて胴体を狙うことはしない。
右腕のプラズマ刃さえどうにかできれば、接近戦に持ち込める。
しかし、その刃がラウラに届くことはなかった。
その右腕を突き出したラウラはその青竜刀を空中で止める。

「なっ！？」

押し込めない。
ならばと、鈴音はすぐさま青竜刀を引くと、回り込むようにその身を滑らせる。

背後を取る。

その判断は代表候補生に相応しい動き。

しかし、その機体すら動きを止められてしまう。

「ＡＩＣ！？」

ラウラは両腕のプラズマ刃で鈴音を切りつける。

腹部、胸部、脚部、腕部。

装甲が順次破壊されていく。

このままでは拙い。

ＡＩＣにより、されるがままとなった鈴音は声を上げる。

「セシリア！」

「分かってますわ！」

セシリアは展開したビットで、ラウラに射撃を集める。

その光線はラウラの装甲を削る。

「ふん」

ラウラは光線を体の捻りだけで避ける。

そのまま、ラウラは、鈴音の横を抜けるように加速する。

セシリアは鈴音の体が邪魔になり、その狙撃の精度が下がってしまう。

しかし、その射撃により、注意力が逸れたのか、鈴音は自由を取り返す。

鈴音はすぐさまその機体を空中に躍らせる。

中距離からの衝撃砲による射撃。

セシリアとの連携で、動きを抑えることが目的だ。
しかし、その自由は長くは続かなかった。

ラウラの肩部から刃が射出される。
それはワイヤーで本体と繋がれているため、複雑な軌道を描いて、
鈴音の右足を捕らえる。

「鈴さん！？」

セシリアはすぐさま援護射撃を行う。
しかし、それは鈴音を助けることにはならなかった。

「馬鹿め」

ラウラはワイヤーに捕らえられている鈴音を射線に放り投げる。
セシリアが放った光線は鈴音の無防備な体を貫く。

「きゃあああ！」

装甲を失っている鈴音はその光線に悲鳴を上げる。
シールドエネルギーが物凄い勢いで減っていくのが分かる。
そのまま、鈴音の体はセシリアに向けて放り投げられる。
空中で姿勢を崩す形となった二人へとラウラが突撃を仕掛ける。
ラウラはプラズマ刃で、セシリアに切りかかる。

近接戦闘が苦手なセシリアは、その身を漆黒の機体から離そうとするが、機体性能の差か、その距離は離れることがない。

「くっ！　インターセプター！」

セシリアは唯一の接近武器を取り出すが、慣れない近接戦闘に、そのシールドエネルギーは残り少なくなっていく。

「離れなさい！」

そのラウラを吹き飛ばそうと、鈴音は衝撃砲を展開する。その見えない砲弾がラウラを襲う。

「ち、衝撃砲か」

一撃を食らったラウラは、続けて放たれる砲弾に片手を挙げることで対処する。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

その不可視の弾丸がラウラに届くことはなかった。

「くっ！　まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」

ラウラは腰部からも刃を放出すると計六つのワイヤーブレードを自在に操り、鈴音の四肢を掴む。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

援護射撃を行いつつも、ビットを放出し、ラウラへと向かわせる。

「ふん……。理想値最大稼動のブルー・ティアーズならいざ知らず、

この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアの精密な狙撃も、ビットによる視界外攻撃も、ラウラには届くことはない。

ラウラは両手を突き出す。

その腕の先には見えない手につかまえられたようにビットがその動きを停止させていた。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアの狙い済ました狙撃はラウラの大型カノンによって相殺されてしまう。

すぐさま連続射撃に移ろうとするセシリアに、射線を塞ぐように鈴音を投擲する。

射線に鈴音が入ることによって、その狙撃を中断する。

その隙を見逃すラウラではなかった。

「瞬時加速――！」

その速度に、鈴音は体制を整えることが出来なかった。

ラウラはその体に、合わせた拳を腹部に叩き込む。

鈴音は、地面にその身を叩きつけられてしまう。

その鈴音にラウラは大型カノンを向ける。

「くっ！」

鈴音は衝撃砲を展開し、そのエネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとはな」

ラウラは、狙いを、機体から衝撃砲に移す。

そのエネルギーが集中している、非固定浮遊部位に銃弾が当たると、その空間圧作用兵器は爆散してしまう。

「終わりだ」

体制を大きく崩している鈴音にラウラはプラズマ手刀を腹部に突き刺そうと、加速する。

「させませんわ！」

その刃が届く前に、セシリアはその機体を鈴音とラウラの間に割り込ませる。

その刃をスターライトｍｋ？で逸らすと、同時にウェイト・アーマーに装着された弾頭型ビットを放出する。

それは半ば自殺行為でもある近距離爆破。

その爆発は鈴音とセシリアすらも巻き込み、地面へと叩きつける。

「無茶するわね。アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

セシリアの言葉は途中で止まってしまう。

「……」

煙が晴れると、そこには右手を前に差し出しているラウラが宙に浮かんでいた。

至近距離での爆発ですら停止結界にダメージを通すことがないのか、その装甲には爆発による傷がついてはいなかった。

「終わりか？　ならば――私の番だ」

ラウラは瞬時加速で二人に接近する。

その勢いを利用して、鈴音の体を蹴り上げる。

その蹴り上げた足をセシリアに叩き付け、近距離から砲撃を当てる。

ラウラは、六つのワイヤーブレードを利用して、飛ばされた鈴音の体をワイヤーブレードで捕まえる。

倒れているセシリアにもワイヤーブレードで体を捕縛して鈴音と並べる。

「これで終わりか？　どうした？　私をスクラップにするのではないのか？」

そのラウラの挑発にも、拘束された二人は、その瞳に憎しみを乗せることしか出来ない。

ラウラは、プラズマ刃を両手に展開する。

それは二人にとっては死の宣告に等しい。

振りかぶる。

しかし、それは、振り下ろされることはなかった。

「その手を、離せぇぇ！！！！」

ラウラに、白い機体が迫る。

その速度は、目を見張るものがあるが、直線的過ぎる。

ラウラは左手を上げる。

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

エネルギーの刃が届く寸前で、停止結界がその機体を止める。

「な、なんだ！？　くそっ、体がっ……！？」

一夏のエネルギーの刃は次第に小さく消えていく。

「やはり、敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、ぐるんと白い機体に砲口を向ける。

しかし、その引き金が引かれる前に、ラウラに銃弾の雨が降り注ぐ。

それはオレンジの機体。

シャルロットだ。

「ちっ……雑魚が……」

ラウラは回避行動を取り、セシリアと鈴音を開放する。

その隙を突いてか、一夏はすぐにセシリアと鈴音を抱え、瞬時加速により戦闘から離脱した。

「一夏、二人は？」

シャルロットは、アサルトライフルをラウラに向けたまま一夏に呼びかける。

向けられているラウラは、興味なさそうに、無防備な姿勢を取る。

意識を他のところに向けているところから、恐らくは個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で通話をしているのだろう。

「う……。一夏……」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。シャルル、大丈夫だ。二人ともなんとか意識はある」

「よかった」

安堵した声で答えるシャルロットだが、その注意はラウラから離さない。

「人が模擬戦を行っている最中に割って入るとは無粋な連中だな」

「ここまでしておいて、言うことはそれか！」

その一夏の言葉をラウラは鼻で笑う。

「その意識を甘いと言っているのだ。ＩＳは兵器だ。その兵器を扱う戦闘において怪我人が出ない方がおかしいのだ。お前が今まで見てきた戦闘は皆が無傷だったか？　お前はただ、身内が傷ついたのを見て激昂しただけだ。失せろ。もはや、貴様に興味などない」

「ここまでやっておいてよく言えるよ。それは同じことをされても、文句は言えないってことだよね」

シャルロットは、両手にショットガンを構える。

「面白い。その喧嘩、買ってやる」

ラウラは体を低くかがめる。

「行くぞ……！」

「くっ！」

ラウラが、その行動を起こそうとした瞬間。

その一瞬で、影が割り入ってくる。

金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、ラウラはその加速を中断する。

「……やれやれ、これだからガキ共の相手は疲れる」

「……教官」

「織斑先生！？」

「千冬姉！？」

その影はＩＳどころかＩＳスーツすら装着していない。

生身の状態でＩＳ用の近接ブレードを扱うことが出来るのは、世界中探しても千冬一人だけだろう。
その上で、今の横槍を入れてくる技術。
常人離れと言う言葉が一番しっくり来るだろう。

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

ラウラは素直に頷くと、ＩＳの装着状態を解除。地面に足をつける。

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

一夏は未だに惚けているのか素で返事をしてしまう。

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません」

返事をし直す一夏にシャルロットも追従する、
その言葉を受けて、千冬は改めて声を上げる。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁じる。解散！」

千冬は一度強く手を叩く。
それはまるで銃声のように鋭く響いた。

◆◇◆

「……」
「……」
一夏は保健室に足を運んでいた。
先ほどの戦いから一時間が経過している。
ベッドの上には治療を受けて包帯を巻いている鈴音とセシリアが不貞腐れていた。
「別に、助けてくれなくてもよかったのに」
「あのまま続けていても負けていたかはまだわかりませんわ」
そう言いつつも二人の顔には悔しさが滲んでいる。
「はぁ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」
「……あいつ、怪我をさせることを避けてた気がするから」
「装甲のないところは攻撃しない。それを行いつつもここまで差を

付けるだなんて……」

二人は相手の実力に恐れをなしていた。
連携を取り入れた二対一で圧倒されたのだ。
それほどに、相手の実力は高い。
一夏は、その先ほどの戦闘を思い出す。

「どうして、そこまで怪我をさせないように拘ったんだろうな」

「……あいつは、自分から喧嘩を売るような感じじゃなくて、こっちから喧嘩を売らせるように仕向けてた」

「沙良さんに怒られてしまうと言っていましたわ」

「つまりはお前らから喧嘩を仕掛けたわけか」

一夏の言葉に、二人は言葉を詰まらせる。

「なんでラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「ふうん？」

一夏はいまいち理解できなかった。

「好きな人を悪く言われたから、頭にきたんだよきっと」

「ん？」

シャルロットが飲み物を買って戻ってきた。

一夏はその言葉を聞き逃してしまうが、怪我人二人はしっかりと聞いていたようだ。

その顔は真っ赤に染まっている。

「ななな何を言っているのか、全っ然っわかんないわね！　ここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！　そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

「あれ？　冗談のつもりだったんだけどなぁ」

シャルロットはニヤニヤしている。

鈴音とセシリアはさらに顔を真っ赤にしてしまう。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましょうっ！」

鈴音とセシリアは渡された飲み物をひったくるように受けとると一気に体に流し込む。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――」

その言葉は最後まで紡がれることはなかった。
それは地鳴りのような音を立てる。

「な、なんだ？　何の音だ？」

廊下から響く音の正体は、保健室のドアを吹き飛ばし保健室に流れ込んでくる。

「織斑君！」

「デュノア君！」

保健室は雪崩れ込んできた数十名の女子生徒に埋め尽くされてしまった。
それも一夏とシャルロットの姿を見るや、一斉に取り囲み、手を伸ばしてくる。

「な、な、なんだなんだ？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「これ！」」

差し出されたのは、学内の緊急告知が書かれた申込書だった。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、ふたり組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来

なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまででいいから！　とにかくっ！」

そしてまた一斉に手が伸ばされる。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

一夏は、チラリとシャルロットを見る。

シャルロットは女子だ。

ここで、事情を知らない誰かと組むというのは非常に拙い。

今後ペアで行動することが増えるであろうし、いつどこで正体がバレてしまうか分からない。

（それなら、沙良と組ませてやりたいな）

しかし、沙良は本戦には出ないと、明言していた。

シャルロットは困った顔でこちらを見てくる。

しかし、一夏と視線が合うとすぐに逸らしてしまう。

助けて欲しいけど言い出せない、といったところか。

それならば。

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ」

沈黙が場を支配する。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士ってのも絵になるし……ごほんごほん」

「織×デュノか。これは派閥が別れるわね」

女子たちは納得したようだ。

一人また一人と保健室を去っていく。

それからは改めてペア探しが始まったのか廊下が騒がしくなる。

「ふぅ……」

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

安堵のため息をついた一夏に、鈴音とセシリアが食って掛かる。

「あ、あたしと組みなさいよ！　幼馴染でしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

締め上げる勢いで、ふたりは一夏に迫る。

「駄目だよ」

「「――っ！？」」

その肩をいきなり？まれて、ふたりはベッドに戻される。

その人物のいきなりの登場に、一夏は目をパチクリしてしまう。

「二人のＩＳを見たけど、ダメージレベルがＣを超えてたよ。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥が生じるかもしれない。ＩＳを休ませる意味でも、僕はトーナメント参加は推奨しないね」

沙良の説明に、怪我人二人は悔しそうな顔をする。

「うっ、ぐっ……！　わ、わかったわ。沙良が言うならそうするわ」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！　不本意ですが！　トーナメントの参加は辞退しますわ……」

ＩＳは負傷状況で稼動すると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、平常時に悪影響を及ぼす可能性が出てくるのだ。

怪我した際に無茶をすると、変な癖がついて治ってしまうのと同じだ。

「うん。先生からは僕が伝えておくよ」

沙良は忙しそうに保健室から出て行ってしまう。

実際忙しいのだろう。

先ほどのアリーナでの報告書もなぜか沙良が書いていたし、今回の鈴音とセシリアの辞退の話も、機体を見た整備士としての立場から、書類を作らなければならないのだろう。

「僕、沙良を手伝ってくるね」

シャルロットもその後姿を追って出て行ってしまう。
一夏としても手伝いたい気持ちはあるのだが、自分が行っても足を引っ張ることはわかっているので、大人しく怪我人を看ていることにした。

◆◇◆

書類を出し終わった沙良は、シャルロットと一緒に夕飯を取っていた。
そこは、二年生食堂。
一年生食堂に行くと、ペアを求めてくる生徒で騒がしくなるだろうとの判断だった。
時間も遅いため、食堂には沙良とシャルロットしかいない。

「へー。一夏と組むんだ」

「そう、一夏に助けられちゃった」

「シャルルなら一夏のこともフォローできるし、いい組み合わせだと思うよ。バランスは取れてると思う」

沙良はうどんを啜りながら、シャルルと会話する。
しかし、そのシャルルの手が動いていないことに気づく。

「どうしたの？」

「え、いや、その、食べるよ!?」

そう言って、すぐに箸を手に取るシャルロットだが、その箸は上手く物をつかめてはいない。

「箸、苦手なの？」

「う、うん。練習はしてるんだけどね。あっ……」

シャルルの箸は魚をつかむことがない。

「ごめん、焼き魚定食を選んだのは僕だね。フォークでも貰ってくるよ」

「ええっ!?　い、いいよ、そんな。これでなんとか食べてみるから」

「そうは言っても、冷めちゃうよ？」

「で、でも……」

「シャルルはもうちょっと他人に甘えることを覚えた方がいいよ。遠慮してばっかじゃ疲れちゃうよ？」

「ううう……」

「まあ、いきなりは難しいかもしれないけど、僕や一夏なら全然頼っていいんだから」

「沙良……」

シャルロットは迷っていたが、食事が進まないことに気をもんだのか、観念したように口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あの……」

「ん、フォークでいい？」

「え、えっと、ね。その……食べさせてくれると嬉しいなぁって」

顔を紅潮させながらシャルロットは言葉を捻り出す。

「あ、甘えてもいいって言ったから」

「まぁ、言ったのは僕だけど、それは、んー。却下。どうせなら箸を使う練習をしようか」

「そ、そうだよね……」

シャルロットのテンションがわかりやすいぐらいに地に落ちる。しかし、不意に、箸を持つ手に手を重ねられて、シャルロットは顔を上げる。

「え？」

自分が何をされているか理解したシャルロットはその頬を真っ赤に染める。

「じゃあ、いくよ。まずはお魚ね」

沙良は動きを教えるようにシャルロットの手を動かす。
そう、後ろから腕を回され、箸の使い方を教えられているのだ。
正直、食べさせられるより恥ずかしい。
その温もりに、シャルロットは何も考えられなくなる。

「美味しい？」

「う、うん……」

もちろん、味などわからない。
頭の中はお花畑が咲き乱れており、思考を放棄している。

「じゃあ、次はご飯だね。はい、あーん」

「あ、あーん」

シャルロットは自分の手にあーんされると言う滅多にない経験をするのだった。

第三十一話　私闘の結尾（後書き）

学校が始まると毎日更新ってきついね。

第三十二話　兎と沙良（前書き）

続けてトーナメントに入ると、戦闘描写が続いちゃうので、ちょっとした短いお話をクッションとして挟みます。

第三十二話　兎と沙良

時刻は二十四時を回っている。
しかし、沙良はその身をベッドの上で休ませてはいない。
現在いるのは、寮の屋上。

夜風に当たりながら、携帯端末を握り締める。

その顔は、普段のにこやかなものとは違い、真剣な瞳をしている。
沙良は、来る途中に買っておいた缶コーヒーのプルタブを開け、苦いコーヒーを胃に流し込む。
この空間には、沙良しかいない。
故に、沙良は今は思うがままに感情を押し出す。

「くそっ！」

沙良は拳を手すりに叩きつける。

それは、悔しさ。

怒り。

原因は少し時間を遡る。
それはクラス対抗戦に起因する。
無人機。
それは、束が開発した新しい可能性。
遠隔操作と独立稼動を可能にした、新しい探索機。

それは、沙良の研究による深海での作業稼動データと束の開発力により実現した、宇宙・深海探索用無人ＩＳ。

それは、未だに人類が足を踏み入れていない領域に挑む、希望の光だったはず。

束は語った。

宇宙ってどんな住み心地だろうね、と。

沙良は答えた。

住んでみればわかるよ、と。

しかし、その夢は簡単に打ち破られた。

研究所がＩＳ六機により襲撃を受け、無人機の製作試作機、論文、稼動データ、その全てが奪われた。

それの襲来は、沙良にとって決して許しがたいものであった。

希望の機体が、悲劇の道具に使われる。

その状況を沙良は許せなかった。

送り込まれてきた無人機を調査し、様々な研究所にハッキングを仕掛けた。

しかし、返ってきた結果はどれも『ＮＯＴ　ＤＡＴＡ』の文字だけ。

それは、普通の企業ではないということ。

それなら考えられる組織は二つしかない。

そのうちの一つを沙良は呟く。

「亡国機業……」

それは、沙良と一夏、それに鈴音すら巻き込んだ事件の黒幕。
あの誘拐事件から、相当な大きさの組織ということはわかっている。
それに、各国からＩＳを強奪する出来る組織力。
沙良は、親の仇のように憎しみを込める。
情報戦はこちらの負けに終わった。
あらゆる手を駆使しても、相手の尻尾を掴むことしか出来なかった。
古くは五十年以上前から活動していること。
第二次大戦中に生まれた組織だということ。
国家によらず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない。
ゆえに目的は不明。存在理由も不確かで、その規模もわからない。
わかっているのは、組織は大きく分けて運営方針を決める幹部会と、スペシャリスト揃いの実働部隊の二つが存在すること。
そして近年、その主な標的はＩＳであること。
そして、その実動員の中にアメリカで奪われた第二世代型ＩＳ『アラクネ』が用いられていること。
実働部隊の何人かは顔も割れている。
世界最高峰のハッカーと呼ばれる沙良でさえもこの程度の情報しか得られなかった。
これは、相手に感づかれないようにして、ということだ。
これ以上踏み込むと、こちらの情報が相手に漏れてしまう。
情報が漏れていいのならば、沙良は、敵を丸裸にすることは可能だと考えている。
しかし、それは大きなリスクを伴い、下手をすれば第四次世界大戦が始まる可能性も出てくる。

沙良は、昨日断腸の思いで調査を打ち切った。
そして、沙良はその過程で、思わぬ情報を見つけた。

それは独逸の秘匿研究資料。
そこに書かれた文字に、沙良は、目を疑う。

『ヴァルキリー・トレース・システム』

それは、アラスカ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されているはずのものだった。

沙良はすぐさま、束に連絡を取った。
今は、その束からの連絡を待っているところだ。

沙良の携帯が震える。
それは、耳に当てて使うのではなく、端末を手に持ったまま扱う。

「もしもし」

『やぁ、セラの愛しのお姉ちゃん、束さんだよ！』

空のような真っ青なブルーのワンピース。
エプロンと大きなリボンが目を引く。
その頭につけられたうさ耳が、視線を奪う。

端末から、束の立体映像が浮き出た。

束特製、テレビ電話システムだ。
作った理由は動いている沙良が見たいということらしい。

「調査結果は？」

『セラはお姉ちゃんがいなくて寂しいかな？　束さんは寂しすぎてセラの抱き枕を作っちゃったよー』

立体映像の束はクネクネしながら自分を抱きしめている。

そんな自称姉を、沙良は冷たい目で見る。

「そうですか、やはり独逸は研究を進めていたんですね」

噛みあわない会話に、沙良は束の研究室をハッキングして、無理やり話を進める。

『あぁ！　またハックしたねセラ！？』

「ふむ、政府はこのことに気づいていない様子だね」

『……セラ？　束さん、寂しくて泣いちゃうよ？』

束は、泣き真似を始める。

「はいはい、姉さんはいい子ですからそんなことでは泣きませんよね」

『いつもそうやって誤魔化されるお姉ちゃんではないのです』

「いい子にしてたら今度帰ってきたら添い寝してあげますよ」

その言葉に、ピシッと姿勢を正し、束は手元の資料を読み上げる。

『そうだね、束さんが調べた結果から言うと、とある軍の研究施設が独断で進めたっぽいね。どの機体に搭載されているかのデータが、

削除されてたから、恐らくだけど、相当追い詰められているよ。発動条件は、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、操縦者の意志および願望の三つが大きいみたいだね。どう？　束さん頑張ったよ？』

束はその身を褒めて褒めてと言わんばかりに揺らしている。

「流石は姉さんですね。ご褒美に一日だけ『お姉ちゃん』って呼んであげますよ」

『お、お姉ちゃん……はふぅ』

「もう、姉さん。トリップするのが早いよ。その研究所はどうしたのさ？」

妄想に浸ってしまい、現実に帰ってこない束を、沙良は呼び戻す。

『へへ、……ふふぅ……はっ！？　え？　何て？』

「その研究所はどうしたの？」

『もちろん、地上から消えてもらったよ。言わなくてもわかってると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手を捻るよりも簡単だったよ。なんせ束さんは――』

「完璧にして十全……でしょ？」

束は嬉しそうな顔を作る。

『流石はセラだね。束さんをことを良く分かってる』

「あんだけ一緒にいれば、そりゃ理解しますよ」

『ううん。セラは私を理解しようとした。それは、他の誰にも出来なかったことだよ』

「そこにしか、居場所がなかっただけだよ、『姉さん』」

『そうだね、『愚弟』』

「懐かしい。まだ姉さんが僕に興味を持ってなかった頃の呼び方だ」

沙良は、楽しそうに笑う。
それを束は目を半月状にして見守る。
いろいろあった。

最初は沙良も、全く相手にされない人間の一人だった。

しかし、沙良は、束を理解しようとした。
沙良が小学生に上がる前には束は既に、ＩＳの研究を始めていた。
だから、それに必要とされる知識を片っ端から集めた。
情報源は、束の部屋に転がっている。
束のやっている事を学び、束に話しかけ、また次のことを学ぶ。
両親が亡くなり、篠ノ乃家に居候していた沙良は、その居場所を箒ではなく、束に求めたのだ。
沙良が、束がやっている事を理解できるように学び始めてから一ヶ月以上経過した時、束は気づいた。
この人間は、私に追いつくことはなくても、私を理解してくれるかもしれない。
天才の思考に誰もついてこれないのなら、ついてこれる凡才を育

てればいい。

そう考えた束は、沙良に、『愚弟』と呼び名をつけ、自分を『姉』と呼ばせた。

そして、自分が持てる限りの知識と技術を沙良に教え込んだのだ。

沙良はそれを必死に習得した。

天才の束が教えても、凡才の沙良は理解するのに時間がかかる。

束が三分で理解するものを沙良は三日かかるなど、当たり前のことだった。

普通の者なら、ここで諦めてしまう。

しかし、沙良は諦めなかった。

諦めたら、篠ノ乃家での居場所が無くなってしまうから。

いきなり、十を教える束のやり方に、沙良は自分で一から調べることで付いていった。

そして、ついに、長年の指導の下、凡才が天才を理解できる領域まで達したのだ。

沙良が束に勝てるようになったものは唯一つ。

ハッキングの技術だけ。

しかし、それでも世界から見ると充分な技術を持っている。

天才と言われてもおかしくないぐらいに。

「そういえば、姉さんが、僕のために怒ってくれたときがあったね」

沙良は、世界から天才と呼ばれた。

それに対して、束は怒りをあらわにした。

天才といって簡単に考えてしまう。どうせ才能があるからといって、その過程を見ない。

常人では考えられない程の努力してここまでの技術と、知識を手に入れた沙良に対して、天才だからと、その過程を踏み躙ることを束は嫌った。

束は沙良をこう評した。

『世界最高峰の凡才』

それは、沙良の文字通り、血の滲む努力を知っている束だからこそ出来た評価。

『それは、あいつらがムカついたんだもん。束さんのセラなのにさ、ちゃんと評価しないんだもん』

「言いたいことは色々ありますけど、勝手に所有物にしないでよ」

『えー、弟は姉のものって相場が決まってるんだよ？　前やったゲームで言ってたもん。その弟がさぁ、セラに似ててねぇ。ぐふふ』

「そのゲームを即刻捨てなさい」

『いいよー、束さんには本物がいるもの』

「そのゲームみたいな内容はやらせませんよ」

『えー。子作りしよーよー？』

「よし、姉さんとは一回、家族会議が必要なようですね。もちろん、

お話は肉体言語で」

沙良は、拳を鳴らす。

その威圧感に、束は引き気味に冗談だよと言葉を紡ぐ。

「そっちはもう十七時半ぐらいですか」

沙良が、時計を見ながら呟く。

『そっちは二十四時半ぐらいかな。ていうか時差がわかってるってことは――』

「なんでバルセロナにいるんですか？」

『バ、バレてる』

「しかも、こっそりと僕の研究室に入ったでしょ？　システムにハック跡が残ってたんだけど」

『な、何のことかなー？　はてはて、束さんには分かんないなー』

「まあ、その分、僕も姉さんの情報を抜き出しましたけどね」

『ちょっ！？　セラ！？』

「まあ、何て機体を作り上げちゃってるんですか」

『本当に抜き出されてるしー』

「まあ、本人に乗りこなせる気はしないですけどね。この機体」

『そんなことないよ！？　箒ちゃんなら大丈夫だもん！！』

「ほほう、箒にあげる機体なんですね。これ」

立体映像の束がその動きをピタリと止める。

『……謀ったね？』

「騙される姉さんも可愛くて好きだよ」

『……はにゃん』

「姉さんトリップしないで」

沙良は、蕩けた顔をする自称姉に苦笑を漏らす。

しばらく、その自称姉の人には見せられない顔を眺めていた沙良はふと話を切り出す。

「……姉さんごめんね」

『ん？　いきなりどうしたんだい？』

「ゴーレムを悪用したやつら、取り逃がしちゃった」

『セラで無理なら、誰も出来ないよ』

「そう言ってくれると助かるよ」

『セラは、今回のイベントで、何かしら起こると思ってるの？』

「うん」

『大丈夫。お姉ちゃんがあの組織を見張っててあげるから』

「ありがとう『束姉』」

『た、た、束姉!?　録音してなかった!　ね、セラもう一回!　もう一回だけ――』

「こっちは夜遅いから僕はもう寝るね。お休み」

『あぁ、待ってよセラぁぁぁ!!』

沙良は、端末の横のスイッチを押して、端末の通話を切る。
そして、ため息をつくと、手すりに背中を任せる。
今回のトーナメントは結構な課題を抱えていた。
まず、一夏とラウラが確実に戦わなければならない。
正直に言うと、ラウラは決勝まで上がるだろうが、一夏は上がれるかどうかは怪しい。
途中で負ける可能性だって高い。
恐らく、フィオナとリナのチームには勝てないだろう。
ならば手を打っておく必要がある。
沙良は、先ほどの携帯端末とは違う端末を取り出す。
この時間にも関わらず、沙良はとある人物に電話をかける。

「……ああ、おはようございます。え?　寝付けたばっかりなんですか。それは申し訳ない。でも、そんなこと僕には関係ないんで。……ええ、そうです。それでお願いがあるんですけど……。はい、ええ。一夏を第一試合に、ボーデヴィッヒを、ええ流石、察し

の良い。それではそれでお願いしますね」

沙良は電話を切ると、屋上の扉にもたれかかっていた人物に声をかける。

そこにはジャージ姿の女性が一人。

「千冬姉、盗み聞きはよくないよ？」

「この時間に屋上に出る非行少年に言われたくはないな」

千冬は沙良に近づく。

「あぁ、そういう事言うんだ。僕は姉さんの相手をしてあげてたんだよ？　千冬姉の負担を減らしてるのは僕なんだから感謝してよね」

心外だよとぷんぷんして怒る沙良に、千冬は微笑を漏らす。

「わかったわかった。感謝している。ほら、そろそろ部屋に戻れ。トーナメントの工作は見なかったことにしてやるから」

「そういうのは口に出しちゃいけないんだよ」

沙良は笑いながら、屋上を後にする。

「おい、空き缶を放置するなよ」

「おっと、これは失礼」

沙良は空き缶を手に、階段を下りる。

空き缶を自販機横の空き缶入れに捨てると、エキシビションに備

えて、真っ直ぐ部屋に戻るのだった。

第三十二話　兎と沙良（後書き）

ほぼ徹夜で書き、推敲なんかしてないから、たぶん内容がひどいと思う。
だって、忙しいんだもん！！
レポート終わんないんだもん！！
うわーー！！
一日が３６時間欲しいよ

第三十三話　エキシビション（前書き）

なんとなくサブタイトルをつけることにしました。

第三十三話　エキシビション

ピットには二つの影があった。
一つは深い青で構築された機体。
その横には青色に輝くボディに銀色のラインが走った機体がその出番を待つ。

「来てるね、来賓がわんさかわんさか。あ、あそこに社長がいる」

「あ、本当だ。おじいちゃんが来たんだね。てっきりカルラさんが来るもんだと思ってた」

「カルラさんは横に座ってるみたいね」

「折角見に来てくれたのなら、いいところ見せないとね」

沙良は、手に持った太刀を一度光に翳す。
その刃は、煌きを持って、沙良にその存在を示す。

「新武装のオンパレード。エスパーニャの開発力を見せ付けるにはもってこいのイベントね」

「そして、第三世代型の開発もきちんと出来てるって証明しないとね」

沙良はソフィアの機体をコツンと叩く。

『只今より、本校生徒によるエキシビションが行われます』

「お、やっとだね」

「セラ、くれぐれも油断しちゃダメよ？」

「そっちこそ、墜ちないでよ？」

二人は、拳をコツンと合わせる。

「深水沙良、行きます」

「ソフィア・アルファーロ、出ます」

深海の如し青と、浅海の如し青が、空に潜った。

◆◇◆

大歓声によって包まれたアリーナには、先に二機が待ち受けていた。

向かい合うように四機のＩＳが対峙する。

水のドレスと薄い水色に包まれた機体。

洗練された銀灰色の装甲に守られた機体。

深海を思わせる深い青で構築された機体。
鮮やかな青に銀のラインが引かれている機体。

それぞれが、自分の武装を手に持つ。

楯無は大型ランス、『蒼流旋』を。
簪は超高速振動薙刀、『夢現』を。
沙良は背の丈程にも達する太刀、『逆桜（さかさざくら）』を。
ソフィアは大型ハルバート、『Ｅｌ（エル・トルナード）ｔｏｒｎａｄｏ（竜巻）』を。

沙良は簪と、ソフィアは楯無と戦闘を行う。
その瞳は今か今かと闘志に燃えている。

『試合――開始』

沙良が真っ先に動いた。

簪、楯無との距離はおおよそ三十メートル。
届くわけがないその距離にもかかわらず、太刀を二人の間を裂くように振るう。

瞬間、斬撃が走る。

それは、刀の軌道の延長線上にエネルギーを核と刃とする圧力波を放つ特殊機構兵器。

春一番がカマイタチを起こす様に、沙良は斬撃を飛ばす。

楯無と簪の間に奔った斬撃は、地面を削り取り、一瞬だが楯無と簪を分断する。

それぞれの戦闘が始まった。

◆◇◆

沙良が『逆桜』を振るったと同時に、ソフィアは疾走していた。

楯無に無理やりハルバードを叩きつける。

楯無はそれをランスで受け止める。

「重っ！？」

しかし、耐え切れることなく、流すことで、その刃から逃れようとする。

「甘い！」

ソフィアは楯無の脚部を鉤爪で引っ掛け、振り切る力を利用して、回転切りを放つ。
バランスを崩され、距離を取ることも出来ないまま、ランスでハルバードの一撃を受け止めた楯無は、その勢いを殺しきることが出来ず、機体を吹き飛ばされてしまう。
楯無が体制を整えた時には既に簪と沙良が空で刃を交えていた。
しかし、そんなことに気を向けている場合ではない。
楯無はすぐさま機体を右方向に移動させる。
瞬間、元居た場所に、爆発音が響く。
手榴弾。
それは数え切れない数をもって楯無を襲う。
ソフィアは、その両手に手榴弾を六つ抱えていた。
「ちょっ、ちょっと!?　スペインってこんなのばっかじゃない!?」
楯無は水のヴェールを展開し、爆発の衝撃を最大限まで減少させる。
その派手な爆発音に、会場が盛り上がるのがわかる。
「そりゃ、情熱の国だからね!!」
ソフィアは会場に答えるように、新たな武装を展開する。
それは十つの輪状の非固定浮遊部位。

その独自稼動する一つ一つから銃弾が放たれる。

しかし、その銃弾は金属ではない。

放たれた銃弾は水で作られていた。

それはＩＳに当たると、超音波によって、エネルギーにより水の中に閉じ込められた特殊ガスが膨張と収縮を繰り返し、収縮して再び膨張する瞬間に、バブルパルスと呼ばれる急峻な圧力波を発生させる。

それは単純な衝撃による金属の剪断以外に、空洞現象（キャビテーション）による壊食（エロージョン）も引き起こす。

ソフィア専用機、『ジュゴン』の特殊武装である。

ソフィアは水弾銃を四方八方から撃ちまくる。

弾となる水自体は、量子変換により、大量に収められているため、ほぼ無限に撃つことが出来る。

楯無は、水のヴェールでその水弾を受け止めるが、

「ウソっ！？」

その水弾は、着弾した水のベールに圧力波を浸透させた。

「そりゃ、同じ水なんだからおかしくはないでしょう！？」

ソフィアは水弾銃で楯無の回避先を絞りこみ、そこにハルバードを振るう。

楯無は、ランスで、受け止めることを選択するが、その一撃の重さについ機動を止めてしまう。

その瞬間に背後から衝撃波が襲う。

「くっ、ホント、悪趣味な兵装を考えるわね」

「ちょっと、沙良の思考に悪態つくの止めてくれる？」

ソフィアは楯無を蹴り飛ばす。

これは試合ではなく見世物なのだ。

実力を示しつつ、観客を楽しませなければいけない。

先ほどは、ソフィアが仕掛けた。

だから次は、楯無の番だ。

楯無は、ランスに超高周波振動の水を螺旋状に纏わせると、その先端をドリルのように回転させる。

突く。

それをソフィアは弾こうとするが、その超高周波振動により、ハルバードが弾かれてしまう。

「げっ」

ソフィアは、その胴体に、突きの一撃を食らってしまう。

しかし、自ら背後に飛び、その一撃を軽くすると同時に、距離を取る。

楯無は、それを高圧水流を以って斬りつけることを選択する。

それはウォーターカッターの原理を応用したもの。

その間合いは十メートルまで届く。

「食らわない！」

ソフィアは、量子変換で、大量の水を展開する。
それを壁にように配置し、その水の斬撃をいなす。
そのまま、楯無を大量の水で包み込む。

「え、なに!?」

「たっちゃん、覚悟!!」

ソフィアは、大量の水を球体の形に整える。
そして、超音波を利用し空洞現象を無理やり引き起こす。
それは、装甲に壊食を発生させ、最終的にはバブルパルスを生み出す。

水弾銃の原理を応用したもの。

それは、魚雷や、機雷などの破壊力と等しい。

「爆発しろ!!」

衝撃がアリーナを揺らした。

ソフィアの武装は二つに分けられる。
それは、接近用武器のハルバード。
そして、十つの輪状の非固定浮遊部位。

水弾銃としての使い方はメインではない。正しい使い方は別にある。
それは超音波。

液体に超音波を照射すると、空洞現象によって、百ミクロン以下

のごく微小な気泡核を核として液体が沸騰したり、溶存気体の遊離によって小さな気泡が多数発生する。
気泡は超音波が負圧になったときは膨張し、正圧になったときは収縮する。
特に、超音波の共振径付近のサイズの気泡は音速に近い速度で急激に収縮するため、断熱圧縮の効果によって瞬間的に数千度以上の高温状態となる。

ソフィアの専用機『ジュゴン』の特殊武装。
特殊超音波システム搭載兵装。
『マーメイド』。
イメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器である。

ソフィアは十のマーメイドを構えて霧が晴れるのを待つ。
水蒸気が立ち上り、視界が悪くなるなか、楯無の笑い声が聞こえる。

「ふふふ、お返しよソフィア！！」

水蒸気が爆発した。

「なっ！？」

ソフィアは、その衝撃に機体の体制を崩す。
絶対防御が作動したのか、そのシールドエネルギーは大きく削られていた。

清き熱情（クリア・パッション）。

ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や

熱で相手を破壊する楯無の技。
普段は水のヴェールを濃い霧状に変えているが、今回は、マーメイドによって生じた霧にナノマシンを含めたのだろう。
お互い譲らない攻防に会場が沸く。
「くっ、やるわね、たっちゃん……」
「ソフィアこそ……この技、結構きついんだから」
二人は示し合わせたように、武器をぶつけ合う。
ソフィアが縦横無尽にハルバードを振るい、楯無が、的確に捌いていく。
それは、まるで踊るかのように舞台を盛り上げていくのであった。

◆◇◆

沙良は太刀を振るう。
それは様々な型に振られ、縦横無尽に迫る斬撃の檻は簪に不可避の念を抱かせた。
故に、簪は薙刀で斬撃を消し去る。
「はぁ！」

その超高速振動によって、沙良の圧力波を掻き消すのだ。
しかし、打ち消すことは出来てもその数が多すぎる。

「くっ……」

簪は回避先を邪魔する斬撃だけを打ち消し、その身を高くに逃がす。
沙良はその機動に合わせて、ライフル銃を展開する。
その銃を見て、皆がアサルトライフルだと判断しただろう。
それの正体を理解できた、一部の生徒は、苦い顔を作る。
簪は狙撃に備えて、沙良の一挙手一投足に注意を集める。

撃った。

そこから放出されたのは弾ではなかった。
それは、強烈な閃光。
そう、一組の生徒には馴染みの深い、指向性スタングレネード。

シャルロットの目を焼いたのと同様に、簪の目を焼く。

「きゃあああ！！」

第三世代機ゆえに、防御機構がすぐに作動し、その視力が奪えるのは良くて十秒だろう。
簪は、悲鳴を上げるも、すぐに、その場から離脱する。
そして視界による情報に頼らずに、すぐさま『百千風』を展開する。

「良い判断だね」

沙良はすぐさま簪から距離を取る。

エネルギーシールドに反応して追尾を行うため、目で標準をあわせる必要がない。

それを、沙良は全て打ち落とさなければならない。

標準を合わせていないミサイルはソフィアにも飛ぶ恐れがある。

沙良は、両手にアサルトライフルを展開する。

『百千颪』からミサイルが発射される。

四機八門から放たれた三十二発のミサイルは、アリーナを爆発に埋め尽くす。

それを沙良は両手のライフルで一つ一つ打ち落としていく。

しかし、落としきれない。

「くっ！！」

何発か被弾してしまう。

シールドエネルギーが四分の一も削られてしまう。

しかし、下で戦闘を繰り広げているソフィアと楯無にはミサイルは飛ばなかったようだ。

――警告、ロックされています。

ハイパーセンサーの警告に、沙良は咄嗟に急上昇する。

先ほどまで居た位置に電荷を持った素粒子がビームとなって飛来する。

簪は『鳴神』を構えていた。

それは連射により、沙良の行動を制限する。
直撃は避けなければいけない。
一撃でも食らうと、連射によってあっけなく沈められてしまうだろう。
沙良は必死で回避を始める。
それは最小限で避けることもあれば、大きく引き離すこともある。
だが、いつまでも避け続けることに限界を感じたのか、沙良はふと動作を止める。
そして、その砲撃が当たる瞬間、手を前に差し出した。

砲撃が拡散する。

その手に現れたのは、透明なシールド。
それはシールドエネルギーを用いた防御兵装。

何発かの砲撃に耐え切ると、沙良は瞬時加速で簪に肉薄する。
そして、その肩に蹴りを叩き込み、体制を崩したところで横蹴りを腹部に放つ。

「きゃっ！」

簪はその機体を、地面と平行に飛ばされる。
そして体制を立て直した際に、その脚部を?まれる。

「墜ちないでね」

沙良は簪を地面に向かって叩き落す。
簪は地上間際で体制を整えようと考えた。
しかし、それは叶わなかった。

爆発。

それは、空中で何の前触れもなく起こった。

爆風により、また爆発が起き、それをきっかけにまた爆発が起きる。

超小型空中機雷。

威力は落ちるが、視認の難しさとその爆発範囲の広さから罠として好まれている。

それを大量にばら撒いたのだ。

簪は爆風で、機体の制御が疎かになる。

沙良は即刻、『逆桜』で斬撃を放つ。

それは遠距離から始まり、中距離、近距離と段々距離が近くなる。

沙良は『逆桜』を袈裟切りで振るう。簪はそれを『夢現』で受け止めた。

「――っ！？」

しかし、その受け止めたはずの刃が簪の身を切り裂く。

「そう、これは遠距離用の兵装ではないよ。こうやって、斬り合って初めて効果が出るんだ！」

斬撃を飛ばす。

それは牽制用の武装だと思われがちだが、真の目的は斬り合いに

ある。

斬り合い、お互いの刃が打ち合っても、こちらの斬撃だけは向こうに通るのだ。

これは、いくら太刀を、近接武装で止めようとも意味は無い。

武器をぶつけ合った時点で斬撃が入ってしまうのだ。

対処方法はただ一つ。

避け続ける。

それだけだ。

「いくよ！」

沙良は、連続で太刀を振るう。

袈裟、切り上げ、切り下ろし、足払い、回転切り、突き、回転切り、足払い、切り上げ、横切り。

その刃は容赦なく振られる。

それを簪は避け続ける。必死に体を捻り、スラスターを噴かし、隙を見つけては薙刀を振るう。

その攻防は、下で繰り広げられている踊りのような攻防と相まって会場を沸かした。

『残り１分』

個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）により、残り時間が伝えられる。

沙良は、簪と視線を合わせると、コクリと頷いた。

沙良は、『逆桜』を収納すると、『禊』を展開する。

残りは五十秒。

まるで、薙刀の型を行うように沙良と簪は優雅に薙刀を振るう。
それは、ソフィアと楯無を踊るようにと評するなら、こちらは舞踊と言うのがしっくり来るだろう。
その洗練された動きに、会場が息を呑む。

残りは五秒。

沙良と簪は一度距離を取る。
そして、お互いが同時のタイミングで薙刀を突き出した。

切っ先同士が触れると、その超高速振動と、衝撃透過機構によって、衝撃波が生まれる。
それは試合終了のブザーと共にアリーナに響いたのだった。

◆◇◆

「ふぅ、疲れた」

沙良は、更衣室で着替えを済ませると、すぐさま来賓席へと向かう。

そこに居るのは、沢山の人間に囲まれた祖父の姿。
先ほどの戦闘で、スペインの技術力が証明されたのだ。
少しでも繋がりを持ちたいと思う者が集中しているのだろう。

ふと、背中にぬくもりを感じる。

「社長、忙しそうだからもう少し待ってね」

後ろから抱きついてきたのは、茶色の髪を後ろで結上げている二十台半ばの女性。

「カルラさん、タバコくさい」

「もう、久しぶりに会うってのに第一声がそれなの？」

カルラは胸を沙良の頭に押し付けながら沙良の頭にあごを乗せる。
そしてその体を抱えると、左右に揺れ始めた。

「あぁ！！　カルラさんずるい！！」

ソフィアが制服に着替えて来賓席までやってきた。
目敏くその行動を発見すると、すぐさま沙良の開放を求める。

「おじいちゃんは忙しそうだし、僕らも観覧席に戻ろっか」

「ええ！？　今の状況に対してセラは何も思わないの！？」

沙良は一度周りを見渡すと首を傾げる。

「何が？」

「ごめんね、ソフィ。沙良の教育を間違えたみたい。まさかここまで鈍くなるとは思ってなかったわ」

「笑い事じゃないですよ!?　どうするんですか、沙良が子供の作り方が解んないとか言い出したら!?」

「ソフィ、僕をなんだと思ってるのさ。流石にわかるよ」

「だよねー」

沙良はカルラの拘束から抜け出すと、ソフィアの手を握り、来賓席を後にする。

「ちょっ、ちょっとセラ!?」

「じゃあまた後でねカルラさん」

いきなりの行動に顔を赤らめるソフィアだが、沙良はそんなことお構い無しに、ソフィアの手を引いていってしまう。

その後姿を見届けたカルラは、ソフィアの想いが伝わる日が来るのかと、ため息をつくのであった。

◆◇◆

エキシビションを終え、アリーナが学年別トーナメント用に変わる。
男性組みへと当て振られた更衣室で一夏とシャルロットはモニターで観客席の様子を見る。

「しかし、凄いなこりゃ……」

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

一夏は興味なさげに呟くと、シャルロットはくすりと笑う。

「一夏はボーデヴィッヒさんとの対戦が気になるみたいだね」

「まあ、な」

一夏は、鈴音とセシリアのことを思う。
二人はトーナメント参加の許可が下りず、今回は辞退している。
それは普通の生徒ならいざ知らず、国家代表候補生であり、なおかつ専用機持ちの二人にとっては、その立場を悪くする要因にもなるだろう。
そう思うと、一夏はやりきれない怒りが湧いてくる。

「感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年の中では現時点での最強だと思う」

「ああ、わかってる」

一夏は瞳を一度閉じ、大きく息を吸う。
開かれた瞳には、もう怒りは残っていなかった。

「そろそろ対戦表が決まるはずだね」

突然のルール変更があったらしく、対戦表が作り直されていたらしい。

「あ、対戦表が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わる。

「俺たちはAブロックだな。見た感じ脅威になりそうなペアはいないな」

「ボーデヴィッヒさんのペアはDだね。当たるとしたら決勝戦だね」

「おう、燃えてくる展開じゃないか」

一夏は、打倒ラウラだけを考えていたのだが、それがすなわち優勝と言われると、燃えてこないわけがない。

「やっかいなペアはDとCに固まってるね。Bは……えっ？」

「どうしたシャルル？」

言葉を無くしたシャルルが指差したところを良く見ると、一夏もぽかんとした声を上げてしまう。
それも仕方ない。

そこには先ほどエキシビションで活躍した沙良の名前があったのだから。

◆◇◆

沙良は一人頭を抱えていた。
どうしてこうなった。
当初は一夏とラウラを一回戦でぶつけてしまうはずだった。
しかし、突然、沙良たちも本戦に出なければいけなくなり、トーナメントに食い込まれた結果。

「一番離れちゃったじゃんかぁ」

不幸中の幸いとして、一夏のAグループには大したペアがいない。
おそらく、準決勝までは勝ちあがってくるだろう。

問題はBグループだ。

そこのは、沙良が棄権しようが、一夏ペアを倒せるペアが存在しているのだ。

リナとフィオナのペアだ。

沙良は考える。
どうしたら、舞台を整えられるか。

その時、沙良は閃いた。

簡単なことだ。

沙良がリナとフィオナに勝てばいい。

そして、理由をつけて棄権する。

そしたら舞台が整うはず。

沙良は立ち上がると、ペアとなる簪の元へと走るのだった。

第三十三話　エキシビション（後書き）

ようやく、トーナメント開始です。
ここからは戦闘描写ばかりになると思います。

第三十四話　トーナメント開始（前書き）

今回は短い戦闘描写の纏まりとなります。
まさかの人物が奮闘してくれました（笑）

第三十四話　トーナメント開始

一日目。

◆◇◆

一夏は疾走。
その機体は真っ直ぐに、対戦相手のラファールに突進する。
試合開始のベルと同時に一夏は雪片弐型を展開していた。

一夏の機体は燃費がとにかく悪い。
長期戦になる前に倒さなければならない。

一日目、第一試合。

トーナメントの最初の試合に於けるもっとも有効な手段は開始と同時の奇襲だろう。
一夏の突進に虚を突かれた対戦相手は、その回避行動を遅らせてしまう。
その一瞬の遅れで一夏は充分だった。

零落白夜。

それを刃が当たる一瞬だけ発動させる。
斬る。

それはラファールの腹部装甲を砕き、シールドエネルギーを一瞬で一桁まで削り取る。

「削り切れないか」

一夏は、振り切った雪片弐型を手放し、その慣性を利用して後ろ回し蹴りを叩き込む。

「きゃあぁぁ！」

蹴りによってアリーナの壁まで飛ばされた対戦相手はその衝撃で、シールドエネルギーをゼロにする。

「シャルル！！」

一夏はすぐさまペアの名前を呼ぶ。

「もうすぐ！」

シャルロットは、アサルトライフルで打鉄のシールドを削る。
近づこうとも距離を詰めれず、離れようとも距離を離せず。
打鉄に焦りの表情が見えた。
一夏はそれを好機と捉え、瞬時加速により、急速に接近する素振りを見せる。
それに気を取られたのか、打鉄に乗る対戦相手は、シャルロットから注意を逸らしてしまった。

それを、シャルロットは見逃さない。

「余所見してていいのかな？」

六一口径アサルトカノンを機体に押し付ける。
対戦相手の顔色が変わるのがわかった。

ゼロ距離射撃。

それは、残り少なくなっていた打金のシールドエネルギーを削りきった。

『試合終了。勝者――デュノア・織斑ペア』

◆◇◆

沙良は動かない。
それは動く必要がないから。

沙良はアリーナの壁にもたれて、腕を組んでいた。

アリーナの中央では簪がラファール二機を相手に悠々と薙刀を振るっていた。

「上手いもんだなぁ」

的確な位置取り、防御回避の判断、選択の迷いのなさ、何よりその技術の高さ。

沙良が端っこでサボっていても何も問題がない。

沙良には時々流れ弾が飛んでくるぐらいだ。

むしろ、「沙良はゆっくり休んでいて」とまで言われている。

なぜかやる気満々な簪に沙良は首を傾げるが、休んでていいなら休むに越したことはない。

元々、エキシビションしか出る気がなかった沙良は悠々自適に鼻歌を歌うのだった。

すると、一機が痺れを切らしたのか、簪がもう一機を墜とした隙に、沙良に強襲を仕掛けようとする。

沙良は、それを見ても、動こうともしない。

あろうことか、欠伸まで出る始末。

「馬鹿にしてるの！？」

その怒りを顕にした女生徒はその機体を吹き飛ばされることになる。

その射線上を見るとそこには『鳴神』を構えた簪の姿があった。

「シカトするなんて……良い度胸」

簪は、雷の如し砲撃を浴びせる。

そこに残ったのは、力なく膝を突いたラファールだけだった。

『試合終了。勝者――深水・更識ペア』

◆◇◆

一クラス約三十人
単純計算で一学年、百二十人。
ペアで考えると、六十組。
試合数で言うとシードを作り、三十四試合。
四つあるアリーナを使用しても、一つのアリーナにつき八試合。
そのうち一試合ずつがシードとなっているため、一試合二十分と計算すると、百四十分。
つまり、おおよそ、二時間である。

それが、一学年での一回戦にかかる時間。

それを三学年が行うのだ。
それは合計して六時間。

二、三年は整備科が試合を行わず、全員が試合に出ているわけではないため、時間は幾分か短縮される。
しかし、それでも食事休憩などを挟むことを考えると、第一試合だけで一日が終わってしまう。

一年が第一試合を全て終えた時点で、二年生の第一試合が始まった。
アリーナごとにブロックが分かれているため、沙良たちはそのままBブロックの試合を見ることにする。

二年の試合は、見るまでもなかった。
優勝するペアは元々決まっていたようなものだ。

ソフィア・楯無ペア。

既にペアが決まっていたため、エキシビションを行った相手で急遽ペアを組むことになったため、学年で最強と名高い二人が組むことになってしまった。
対戦相手は、既に戦意を失っているようだ。
開始三十秒で勝負を決めるという最短記録を叩き出し、その試合は幕を閉じた。

◆
◇
◆

二日目。

◆
◇
◆

Bグループ二回戦。
沙良は、簪をアリーナの中央で待機させると、すぐさま回りに機雷をばら撒いた。

「動くと爆発するよ？」

対戦相手は、下手に動くことも出来ずに、ただ戸惑うことしか出来ない。

開始５分。

機雷が爆発する。

爆発音が鳴り響き、衝撃がアリーナを揺さぶった。

機雷は宙に留まっていなかった。

ゆっくりと相手に向かっていたのだ。

『試合終了。勝者――深水・更識ペア』

沙良たちは、何もすることなく、二回戦を勝ち上がった。

◆◇◆

Ａグループ二回戦。

一夏は瞬時加速を以って本音に斬りかかる。

「うわぁ、おりむー、手加減してよー」

「残念だけど、勝負に手は抜けない性質でね」

一夏は、打鉄のブレードを、雪片弐型で受ける。
そしてすぐさま斬り返す。
振り切る流れで蹴りを放ち、蹴り足をそのまま相手の前足の横に下ろし、そのまま腰を入れる。
それは雪片弐型を腰で構えた状態での体当たりの形となる。

「わわわ、ちょっと待ってよ」

本音は、その体当たりの衝撃に、体制を崩す。

「もらった！！」

一夏はそのがら空きとなった腹部に雪片弐型を叩き込んだ。

「うわぁ！」

本音はアリーナの壁に激突する。
一夏はすぐさまシャルロットの方に注意を向ける。
そこには、癒子が必死にシャルロットの銃弾を避けていた。

「うひー！」

「ちょこまかと！」

シャルロットはブレードを展開し、癒子に斬りかかる。
ラファールを纏った癒子は同じくブレードを展開する。

「シャルル、スイッチ！」

すぐさま一夏は、入れ替わるように雪片弐型で癒子に薙ぎ払いを

行う。
それは、癒子を背後に飛ばせる動きを作らせる。
そこにアサルトライフルを持ったシャルロットが銃弾を打ち込む。

「うはー！」

癒子はブレードを収納し、アサルトライフルに持ち替える。
その隙を一夏が狙う。
斬り上げの動きでは、ライフルで防がれてしまう恐れがある。
故に取った行動は雪片弐型による突き。
一夏は勝負が決まったと思った。
しかし、現実はそう甘くなかった。
癒子が急に目の前から消えたのだ。

「甘いよ織斑君！！」

癒子はいつの間に背後に回ったのか、一夏にアサルトライフルによる射撃を浴びせる。
そのシールドエネルギーは数多くの零落白夜の使用により、残り少なくなっていた。
その残りを削り取ろうと、癒子は弾幕を増やす。

「一夏！！」

シャルロットは一夏を助けようと、ブレードで癒子に斬りかかる。
一夏は見た。
その癒子の機動を。
癒子はブレードにライフルを添え、そのまま体を捻り、片足のスラスターだけを噴かすことにより、残した片足での回転運動を行う。
その急な旋回行動に目の前から消えたように錯覚するのだろう。

「伊達に、これだけ練習してきたわけじゃないよ！」

癒子は旋回の勢いを利用してシャルロットの背を蹴り飛ばす。

そして、アサルトライフルをシャルロットに向ける。

「沙良君に教えてもらったこの機動は、そう簡単には敗れない！！」

癒子は引き金を絞る。

「くっ！」

シャルロットはすぐさま距離を取ろうとする。

「いらっしゃ～い」

そこには、装甲の欠けた本音が待ち構えていた。

「しまった！？」

本音はブレードを腰の捻りを最大限に利用して叩き込む。

「――っ！？」

シャルロットはシールドで防ぐが、その衝撃は殺し切れない。

衝撃により、本音と距離が開く。

「色物だと思ってたけど、やるね！！」

シャルロットは吹っ飛びながらもライフルを展開する。

そして、体勢を整える前にライフルを、ぶっ放す。
それは、的確に本音の装甲が欠けている箇所に当たり、絶対防御を作動させる。
あと一撃で、本音のシールドエネルギーはゼロになる。

「一夏！」

一夏は、その声が発せられる前に既に行動を起こしていた。
すぐさまその接近し、その身を薙ぎ払う。
本音のシールドエネルギーがゼロになる。

「あと一人！」

一夏が、癒子に振り返り際に薙ぎ払いを行う。
背後から近寄ろうとしていた癒子は、そのライフルを弾かれてしまう。

「やばっ！」

癒子は一夏から、距離を取る。

「ようこそ」

そこにはシャルロットが居た。

「うはー」

癒子は咄嗟にブレードを展開する。
しかし、その背中に衝撃が走った。

『試合終了。勝者――デュノア・織斑ペア』

そこには、雪片弐型を投擲した一夏が、残心を取っていた。

◆◇◆

Bグループ第三試合。

開始直後に簪が『百千颪』をフル展開した。

発射。

その八機八門から放たれる六十四発ものミサイルが、敵機を襲う。

それは、圧倒的圧力を持って場を制圧する。

沙良は自分が作っておきながら、その威力に引いていた。

煙が晴れると同時に、試合終了のブザーがなる。

『試合終了。勝者――深水・更識ペア』

◆◇◆

Aグループ第三試合。
一夏は開始直後からシャルロットと共に一機を先に落とすことに専念する。
相手は、イタリアの代表候補生だ。
一夏はその相手に見覚えがあった。
それは沙良がクラス対抗戦で戦った相手。
二組の副代表だ。

「はあっ！！」

一夏は連撃を放つ。

斬り上げ、斬り下ろし、横斬り、薙ぎ払い、回し蹴り、後ろ回し蹴り、足払い、斬り上げ、横蹴り、突き。

その気迫の篭った連撃に気を取られたラファールに、シャルロットが背後から恐ろしいものを突き出した。
それはシャルロットが秘密兵器として隠していたもの。

沙良が好んで使う『禊』と同じ機構を持つ、大型のランス。

『祓』。

相手は代表候補生という強敵。
出し惜しみは敗北に繋がる。

「墜ちろ！！」

シャルロットは全力でそれを突きさる。
それはあらゆる運動量をその一点に集めた必殺の一撃。

その機構が作動し、衝撃がシールドエネルギーを貫通し、装甲に響かせる。
普通ならその衝撃に機体が吹っ飛んでもおかしくない。
しかし、衝撃が拡散して響いたため、その機体はランスに突き刺さったままとなる。
それは、身動きが取れないということを示している。

「うおおおお！！」

一夏は零落白夜を発動する。
その雪片弐型にエネルギー刃が構成される。
エネルギー刃がラファールを斬り裂いた。

「シャルル！」

シャルロットはすぐさま残された形となっていたもう一人にライフルによる牽制射撃を行う。
一夏はその機体に後ろから回り込むように、位置取りをする。

その位置取りが完了したのを確認して、シャルロットが打鉄にブレードで斬りかかる。
その背後から、呼吸を合わせるように袈裟斬りを放つ。
二人から斬り付けられる形となる打鉄は捌き切ることが出来ず、刻一刻とそのシールドエネルギーを削られていく。

このまま、パターンから抜け出すことが出来ず、打鉄のシールドエネルギーはゼロになってしまった。

『試合終了。勝者――デュノア・織斑ペア』

◆◇◆

二日目は第二試合、第三試合を行い終了した。
これにて、各学年八組のペアが残ることになる。
準々決勝、準決勝、決勝は三日目に行われることとなった。

第三十四話　トーナメント開始（後書き）

うちの一夏は原作よりやや強化されてますね。

そして何より、七月のサマーデビルこと谷本さんが頑張ってくれました。

しかし、彼女はこの先活躍できるんでしょうか（遠い目）

次は沙良とスペイン勢の戦闘になります。

第三十五話　ＶＳエスパーニャ

「今日で全てが終わりか」

一夏はトーナメント表を眺めながらそう呟いた。

「ボーデヴィッヒさんと当たるのは決勝戦だね。でも、それより先に――」

「準決勝で沙良と、か」

「それも、Ａブロックを勝ち抜いたらの話だけどね」

次にの対戦相手は、三組のアメリカの代表候補生。
専用機は持っていないようだが、その実力は高いだろう。
一夏は、念入りに、イメージを固める。
勝利を勝ち取るための動きを、その頭に強くイメージする。

『選手、入場してください』

「一夏、行こう」

シャルロットが、ラファール・リヴァイブ・カスタム?を纏って、一夏に声をかける。

「ああ」

一夏はすぐさま白式を纏うと、シャルロットの横に並ぶ。

「織斑、行きます」

「デュノア、行きます」

◆◇◆

「くっ！」

一夏は雪片弐型を盾のように扱い、銃弾を弾く。

一夏は得意の接近戦に持ち込めないでいた。

伊達にここまで勝ち抜いてきたわけではないというところか。

位置の取り方が上手い。

一夏は、ラファールがリロードを行う隙をついて、瞬時加速を利用する。

「させない」

ラファールは、その機体を後方へ大きく投げ出す。

しかし、一夏はその機体を追うように、更に瞬時加速を重ねた。

「なっ！？　エネルギー切れが怖くないの！？」

「ここで決めれれば問題ない！！」

一夏は雪片弐型にエネルギー刃を纏う。

零落白夜。

そのエネルギーの刃はシールドを無効化する。

ラファールに乗る女生徒の顔に焦りが浮かぶ。

女生徒は、ライフルを一夏に叩きつけると、その衝撃で、雪片弐型の軌道上から外れようとする。

しかし、避け切ることは出来ない。

肩に当たることになった雪片弐型は女生徒のシールドをガリガリと削っていく。

「拙い！」

女生徒はすぐさま距離を離そうとする。

それを、一夏は利用した。

一夏は、距離を取ろうと、初動を起こしたラファールの腹部を、全力で蹴りぬいた。

その衝撃と、背後に飛ぼうとしていた動きが重なり、女生徒は思わぬ後退をしてしまうことになった。

それはアリーナの壁際まで達する。

一夏は、すぐさま距離を詰める。

零落白夜は発動させない。

ここまで来たら雪片弐型だけで充分だ。

背後に逃げ場はない。

一夏はシールドを削りきるために連続でブレードを振るった。

ラファールが膝をつく。

「シャルル！」

一夏はすぐさま相方の状況を確かめる。

アメリカの代表候補生を担当していたシャルロットは、その機体を追い詰めていた。

接近戦に持ち込んだと思ったら、近距離でゼロ距離射撃を行い、距離を離そうとしたら、いつの間にかブレードを手にし、機体に斬りかかる。

シャルロットの得意とする戦闘スタイルだ。

一夏はすぐさま代表候補生に接近する。

タッグと言うものは、戦闘に参加しなくてもその些細な行為が大きな影響を及ぼす。

代表候補生は、一夏が接近したことにより、二人を相手取れるように、その位置取りを変更する。

その一瞬の隙が勝負を決めた。

高速切替（ラピッド・スイッチ）

先ほどまでアサルトカノンを手にしていたシャルロットは、いつの間にか、その手に大型のランスを持っていた。

代表候補生は、顔色を変える。
それは、シールドエネルギーを削るだけではなく、その後の連携にも繋ぐことが出来る。
その意味を代表候補生は良く分かっていた。

「うおおおおお！！」

代表候補生は、ブレードを展開し、シャルロットがそのランスを振るうチャンスを奪おうとする。
その行為が、敗北に繋がるとは知らずに。

一夏は、自分から意識が離れたことを確認すると、雪片弐型にエネルギーを纏わせた。

「よそ見してていいのか？」

一夏は背後から斬りかかる。
その一撃は、必殺の煌きを以ってラファールに襲い掛かる。
それをハイパーセンサーで感知した代表候補生は、すぐに体を捻り、ブレードを使い、その軌道を逸らそうとする。
しかし、そんなことシャルロットが黙ってみているはずがなかった。

シャルロットはその背部に『祇』を突き込む。

その衝撃に、ラファールは機動を止めてしまう。
衝撃が、響いている隙に、一夏はその刃をラファールに突き立てた。

『試合終了。勝者――デュノア・織斑ペア』

会場が沸いた。

現在は各学年八組しか残っていないため、観覧席は多くの学生で埋まっていた。

その拍手を全身に浴びた一夏は、その場にへたり込む。

「勝った……」

一夏は、その自分の両手を見る。

一夏はこのトーナメントを通して、自分の実力が高くなっていくのを実感していた。

「一夏、やったね。僕ら、Aグループ代表だよ」

シャルロットが、嬉しそうに一夏に近寄る。

一夏はシャルロットに軽く頷きを返すと、対戦相手の元に向かった。

「流石は織斑先生の弟さん。強かったよ」

「そんなことないよ。タッグだから勝てたんだ」

「ははは、素直に受け取っときなって」

アメリカの代表候補生は、気持ちよく笑う。

一夏もつられて笑みを浮かべた。

こうして、一夏たちは準決勝進出を決めたのであった。

◆◇◆

試合開始のベルと同時に沙良は動いた。

まずは、相手を引き離す。

連携を取られると後手に回ってしまう。

すぐさま『逆桜』で、斬撃の壁を構築する。

それは縦横無尽に飛び回り、不可避の檻を作り上げる。

しかし、それはあっけなく突破されてしまう。

その方法は、ただ攻撃を受けながらも進むという、原始的な方法。

「くそ！！」

沙良はすぐさま指向性スタングレネードを展開する。

発射。

その眩い閃光は、深い青の装甲を包みこんだ。

沙良はすぐさま簪のフォローに向かおうとする。

「させないよ」

閃光に包まれたはずの機体が沙良の前に回りこんでくる。

「ちっ！」

沙良はその場で手を叩いた。
すると、沙良と青い機体の間に爆発が起きる。

機雷を放り投げたのだ。

それを、ちょうど間で起動しただけ。
沙良はその隙をついて、簪とスイッチを試みる。

「だからさせないって」

しかし、その機体は、爆風の中を突っ切って来た。
その機体は沙良の肩を掴むと、地面に叩きつける。

「うわぁ！？」

沙良はすぐさま起き上がろうとするが、その深青の機体に、上に乗られてしまう。

「まさかセラに馬乗りになる日が来るなんてね。ああ、興奮するわ。キスしてもいい？」

「ちょっと、リナ！？　目がマジだよ！？」

リナは顔を沙良に近づける。
それを咎める様に、リナに銃弾が襲う。

「ちょっと、リナ。それはダメだよ？」

「ちょっと、フィーナ。味方に銃口を向けないでくれる？」

「それは、抜け駆けしようとしたリナが悪いもん」

「なによ、コミュニケーションじゃない。本国では普通だわ」

「人の上で喧嘩しないでよ！！」

沙良は、リナを巴投げの要領で放り投げる。
すぐさまリナと距離を取ると、フィオナと戦闘をしている簪のフォローに入る。

「簪、支援！！」

沙良は、『禊』を構えて、フィオナの機体に斬りかかる。

「折角、かんちゃんの機体を堪能してたのに」

「だからだよ！」

簪とフィオナを戦わせるのは得策とは言えない。
簪の『錦』の製造に関わったフィオナは、その細かい癖、挙動、されたら嫌な行動などを理解している。

相性が悪すぎる。

「別に、セラさんでも一緒ですけどね」

フィオナは沙良と同じく、『禊』を展開する。
そして、斬り合いが始まった。
そう思わせて、フィオナはとんでもない行動に出る。
わざと『禊』を食らったのだ。
その機構が発動し、その衝撃が、装甲に響く。

「なっ！？」

その奇を衒う行動に、沙良は一瞬だが、身を硬くする。
その沙良を、横から衝撃が走る。
沙良が、衝撃の方向を見ると、リナがインパクトロッドを構えていた。

その衝撃は、沙良の機体を浮かし、壁に激突させる。

「『禊』は相手の行動を止めると同時に、機構を作動させている間は行動を停止せざるを得ない。ですよね？　その停止時間は一秒にも満たないですけど、私たちにはそれで充分です」

フィオナはすぐさま簪に襲い掛かる。

簪は、リナに斬りかかろうとしていた『夢現』をフィオナに向けて振るいなおす。
フィオナはそれを悠々と受け止めると、返す刃で、簪に『禊』を叩き込む。
その衝撃に簪の機体が大きな隙を見せる。

「せーの！！」

リナが、簪にインパクトロッドを突き立てる。
それは、加速の力も加わり、物凄いスピードで沙良と逆方向に簪の機体を吹き飛ばした。
その簪をフィオナが追う。その手にはインパクトロッドが展開されている。

「簪！！」

「よそ見してていいの？」

沙良は瞬時加速によって接近したリナにその四肢を押さえられる。
その際に、膝を腹にぶち込まれる。

「うっ」

加速の乗ったその一撃は沙良の身を壁に食い込ませた。
リナは右手にインパクトロッドを展開する。
背に壁を背負っている沙良には逃げる場所がない。

「ちょっ、やばっ……」

リナが物凄い笑顔を見せた。

「ちゃんと看病してあげるから」

リナは無防備の沙良の腹にインパクトロッドを突き立てる。
その衝撃は、沙良の身をアリーナの遮断シールドに押し付ける。
逃げ場のなくなった衝撃は、沙良の機体を破壊する。

「かはっ」

沙良がその衝撃に身を捩った。
確実に内臓にダメージが入っただろう。
シールドエネルギーが一気に二桁まで下がる。

「あと一押し！」

リナがその拳を沙良の腹部に叩き込もうとする。
そこはインパクトロッドにより、装甲が破壊されている。
拳でも、絶対防御は作動してもおかしくはない。

しかし、その拳は沙良に届くことはなかった。

リナは背に横から衝撃を受け、沙良から距離を取らされる。

「……沙良から離れて」

簪が『鳴神』によって、射撃を行っていた。

「なにこれ？　エネルギー減りすぎじゃない！？」

「だって自信作だもん」

フィオナが胸を張る。
それに簪も苦笑をもらしてしまう。
しかし、和んでいる場合じゃない。
すぐさま簪は『百千颪』を展開。

「発射！！」

様々な種類のミサイルが、フィオナとリナを襲う。
その隙に、沙良は、簪の近くへと避難する。

「ごめん、助かったよ」

「ううん。無事でよかった」

簪はほっとしたように笑顔を作る。

「……今ので、墜ちてくれればいいけど」

「そうもいかないだろうね」

沙良の言葉に同期するかのように煙の中から、青い機体が二機ゆっくりと出てきた。

「ちょっと、何その武装？　Ｄｉｖｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍを作動してる状態にもかかわらずシールドが半分しかないんだけど」

「私なんて『禊』を受けている分もっと少ないですよ。でも、やっぱ凄いですね。ＤＩＶＥしてなかったら墜ちてましたよ？」

第二世代型ＩＳシークエスト。
それは作業用に設計された機体と、軍用に設計されたものの二種類が存在する。
沙良の機体は前者。リナとフィオナの機体は後者に当たる。
二人の纏う機体は、製作試作機の沙良の『カイラ』とは違い、全体的にその機能が向上している。
スペックだけ見ると、第三世代型にすら負けていない。

特筆するはその硬さ。

Ｄｉｖｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍを作動することにより深海の水圧にも耐えられるその機体は、全ＩＳの中でもトップクラスの硬さを誇る。

負けたくない。

その想いが伝わったのか、『カイラ』がとあるメッセージを表示する。

それは、とある能力の使用許可。

沙良は一瞬だが考える素振りを見せる。

『簪、一分任せても良い？』

沙良は、決意したように簪に個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で伝える。

『何するの？』

『勝ちに行く』

◆◇◆

沙良は、その場に目を閉じて全身の力を抜く。

それを簪は守るように二人に立ちふさがる。

「かんちゃん一人でやるつもり？」

フィオナは首を傾げる。

「任されたから」

「そう、じゃあ、やってみなさい！」

リナは機関銃を展開する。

その圧倒的弾幕を、簪はただ避けることもせず、ただシールドで受け止め続ける。

その時間を稼ぐような動作に、フィオナは気づいた。

「リナ！　セラを狙って！！　ハックされてる！！」

「くっ！？　そういうことね！？」

沙良の単一仕様能力『絶対的管理者』によるハッキング。

その能力はあらゆるものへのハッキングを可能とするもの。

それだけ聞くと、何でもできるように思えるがそうではないことをフィオナは知っている。

可能とするだけであって、必ず成功するわけではない。

フィオナが同じ能力を使えたとしても、せいぜい監視カメラのハッキングが精一杯だろう。

それは沙良が使うから意味がある。

世界最高峰のハッカー。
時間はかかるが沙良はコアネットワークに侵入し、ＩＳをもハックする。

その条件には多くの制約があると聞いたことがある。
その一つにあったはずだ。
コアネットワークに接続する場合は、機動を停止した状態で、全神経を集中させる必要がある。
いまの沙良と同じ状態。

狙いに気づいたリナが、その狙いを沙良に向けるより早く、簪が『鳴神』をぶっ放す。

「……させない。任されたから」

簪は、電荷を持った素粒子を、秒間二発のペースで撃ち続ける。
その砲撃はリナとフィオナを交互に捉え、沙良への攻撃を許さない。

――拙い。この時間のかけ方……セラさんはセンサーハックするつもりだ。

フィオナは、沙良が何をしようとしているのかに気付き、焦りを募らせる。
フィオナは両手にライフルを展開する。
それを、マニュアルで狙いをつける。

「させない」

簪が『夢現』でライフルを切断する。

そのまま簪は沙良が守れるように、『鳴神』を構えたまま、フィオナから離れる。

「邪魔しないで！」

フィオナは簪にインパクトロッドを投げつける。

その機構により、簪は少しの距離だが後退を強いられる。

フィオナはその隙に沙良に『禊』で斬りかかる。

既に機構は作動しているため、ただの薙刀としか使えないが、今の状況ならそれで充分だった。

沙良のハッキングを止めるには、攻撃を当てるだけで良い。

しかし、寸前で沙良の姿が消えた。

「しまっ――」

瞬間、背後から衝撃を受ける。

しかし、衝撃がその身に襲おうとも、フィオナは沙良に気づくことはなかった。

――ハイパーセンサーをハックしましたね！？

フィオナのハイパーセンサーは沙良の姿を捉えていない。

ならば、とフィオナは、ハイパーセンサーに頼らず、自らの目で状況を見渡す。

そこには、

「えへへ、看病はリナにお願いしてね」

最高の笑顔を浮かべた沙良がインパクトロッドを構えて立っていた。
沙良の本気の突きをフィオナは腹に受ける。
「――――――っ！？」
その衝撃は内臓を痛め、言葉を失わせる。
しかし、それはまだ終わりじゃなかった。
シールドエネルギーがゼロにはなっていない。
沙良は笑顔のまま拳を腹にぶちかました。

◆◇◆

「フィーナ！？」
いきなりその身を壁まで吹き飛ばされたフィオナに、リナは気を取られた。
沙良の姿がどこにも居ない。
――センサーハックか。
すぐさまリナはハイパーセンサーを切る。
それは沙良がこちらに向かう可能性を考慮したもの。
沙良はそのままフィオナに追い討ちをかけようとしていた。

「させない！」

リナはすぐさま沙良に接近しようとした。

「……シカトしないで」

「きゃあ！！」

リナは地面に這い蹲った。

おそらく、薙刀で叩き落されたのだろう。

ハイパーセンサーを切ったのが裏目に出た。

「くっ」

すぐさまハイパーセンサーを作動させ、簪を相手にする。

展開するは『逆桜』。

簪に斬撃の雨を降らせる。

沙良と違い、未だに使い慣れていない武装だが、それでも強力な武装であることは、間違いない。

簪はそれを距離を取って対処しようとする。

「逃がさない！！」

その距離を詰めるようにリナは後を追う。

その瞬間、簪が笑顔を作った。

「――っ！？」

衝撃がリナを襲う。
その正体は見えなくてもわかっている。

沙良だ。

リナは遮断シールドに激突する。
すぐさまハイパーセンサーを切ろうとしたが、その前に、沙良が姿を現した。

「あら、時間切れだね」

リナは見た。
沙良がこれ以上ないほどに良い笑顔を作ったのを。

「リナ。ごめんなさいって言うなら今のうちだよ？」

そう言っておきながら、言葉を待つような事もせず、沙良はインパクトロッドを突き放った。

「きゃあああああ！！」

「まだ墜ちないか」

沙良は無情にも同じ箇所に同じように突きを放った。

「――――」

声にならない悲鳴が上がる。
絶対防御が作動し、そのシールドエネルギーが大きく削られる。
しかし、その猛追は、まだ終わらない。

シールドエネルギーはまだ残っていた。
沙良は笑顔のままインパクトロッドを振りかぶる。
「せ、セラ？　ちょ、ちょっと待って！？　それは拙いって！？」
流石に三発目は耐えられない。
「リナが僕にした事覚えてないの？」
沙良の額には青筋が浮かんでいた。
――あ、死んだ。
「大丈夫、看病はちゃんとしてあげるから」
リナは衝撃を腹部に受け、意識を手放した。

第三十五話　ＶＳエスパーニャ（後書き）

次は待ちに待ったラウラ戦です！！
なんか戦闘描写ばっかり書いてると頭がおかしくなる。
ちゃんと書けてるのかなぁ？
感想お待ちしております！！

第三十六話　決勝戦

「ん……あれ……？」

リナはその身を起こすと、周りを見渡す。
周りにはカーテンが引かれてある。
リナはカーテンを開ける。
そこには、

「あー、リナ、おはよー」

「おはようリナ」

沙良とフィオナがモニターを見ながら治療を受けていた。
薬品の臭いが鼻につく。
ここは保健室だろう。

「お、おはよう……じゃなくて！！　何でセラがここに居るの！？　試合は！？　準決勝は！？」

リナは状況が把握できず、口早に質問を重ねる。
沙良はあっけらかんとして答えた。

「棄権したよ」

「……はぁ？」

リナはぽかんと口を開いたまま固まってしまう。
棄権。

その言葉が頭に響く。

「何でよ！？」

「だって出れる状態じゃなかったしね」

「ど、どういうことよ！？」

リナは沙良に食って掛かる。

「リナさ、僕に何したか覚えてないの？　あのインパクトロッドのせいで機体損傷レベルがCを超えたんだよ」

「……ごめんなさい」

リナはその原因に思い当たり、しゅんとしてしまう。

あの時は勝つことしか考えていなかったため、その後のことなどそっちのけだったのだ。

「リナの機体も損傷レベルがCを超えてたから、一週間は使わないでね」

「はーい」

リナは軽く返事をする。

それもそうだ。沙良の機体が損傷レベルCを超えているのなら、リナの機体が超えていないわけがない。

「フィーナも一緒だよ？」

「わかってますよ」

フィオナも同じように返事をした。

沙良は満足そうに頷くと、モニターを眺める。

「それにしても凄い機体だね」

沙良は、モニターを食い入るように見ていた。

そこに移っているのは、

「独逸の第三世代機ですか」

フィオナの言葉に沙良は頷く。

「近接から遠距離射撃までこなす万能型。バランス良い機体だね。搭載されてる特殊兵装も機体のコンセプトにあってるしね」

「同じ開発者としてはどう？」

リナはふと思い聞いてみる。

「悔しいけど、技術は高いね。ＡＩＣ（慣性停止能力）とか良く思いつくよ」

「特殊超音波システムを開発する沙良もどうかと思うけどね」

「でも、コンセプトが違うからね。僕らはあくまでも、深海探索用の機体を筆頭に開発を進めてるんだ。そりゃ、軍事用として開発された機体には勝てないよ。でも、僕らが絶対に負けない領域もある」

「水中での機動ですね」

フィオナが答える。

「そう、僕らの扱うシークエストは水中でこそ、その強さを発揮する。伊達に『Ｓｅａ（深海の探索者）　Ｑｕｅｓｔ』なんて名前はついてないよ」

そこは誰も念頭においていない領域。

今でもＩＳによる戦闘は空中戦が主だ。

だからこそ、予想もしない領域からの攻撃には弱い。

地中海で勃発した戦争。

エスパーニャではマール・メディテラーネオの海戦の名で知られている。

地中海に接する全ての国が地中海の上で戦闘状態になった。

その際、一番に狙われたのはエスパーニャだった。

当初エスパーニャはシークエストを発表したばかりで、なおかつそれは今のシークエストのように軍用に開発されたものなど存在せず、全てが深海作業用だった。

その深海での作業により、大量のレアメタルを保持するエスパーニャは、各国に良い鴨だと思われた。

しかし、蓋を開けてみると、スペインは全戦全勝。

海中から狙撃され、対処しようと海に入ると、その動きに翻弄される。

空中から対処しようとすると、海中から岩盤採掘用の重機を携え、奇襲をかける。

そして、あろうことか、軍艦と連携を取り、ＩＳを沈める。

その姿は、各国のＩＳ搭乗者に大きなトラウマを残した。

その海戦での戦績から、エスパーニャの海軍は『Ｇｒａｎｄｅ　Ｆｅｌｉｃｉｓｉｍａ　Ａｒｍａｄａ』の異名をとることになった。

それは『最高の祝福を受けた大いなる艦隊』を意味する。

そう、歴史に名高い、無敵艦隊の名を引き継いだのだ。

リナは海軍に属する父親を持つため、そのことを誇らしく思っていた。

いずれ、父さんみたいに国を守る。

その気持ちがリナを代表候補生まで押し上げた。

スペインには代表候補生が数多くいる。

それは、沙良の本国での人気が高い故。

その中で、専用機として、シークエストカスタムを与えられるということは、とても名誉あることなのだ。

それは沙良にその実力を認められ、「カスタムを施してもいい」と思わせると言う事だ。

リナは初めて、国のためではなく、一人の人間のために戦いたいと思った。

エスパーニャで専用機を持つものは皆が同じ気持ちだろう。

「リナ？　どうしたの、考え事？」

沙良がこちらの様子を窺うように見ている。

そこで、ようやく自分が思考の海に落ちていたことを悟る。

沙良のことを考えていたリナは顔を赤くしてしまう。

「や、なんでもないわ」

「それならいいけど」

リナは、思考を一度手放し、モニターを見つめる。

独逸の機体が、決勝出場を決めたところだった。

◆◇◆

決勝戦を控えて、箒は更衣室で瞑想をしていた。

更衣室はラウラと箒しかいない。

まさか、抽選でラウラとペアを組むことになるとは思わなかったが、その結果、決勝まで上がることが出来た。

優勝したら、一夏と付き合える。

そのような噂を立てる原因となった箒は、この優勝が見えているのにそれを早々諦めるわけにはいかない。

しかし。

――一夏にはボーデヴィッヒに勝って欲しい。

沙良との約束を果たすために訓練を積んで来た一夏を見てると、強く思う。

その相反する思いに箒は揺れる。

しかし、その思いを見透かしたように沙良は箒にこう言っていた。

――一夏を倒すつもりでいかないと、一夏の罰にならない……か。

確かにその通りだ。

箒はそう思う。

情の入った試合に何の意味があるか。

――何も考えるな。ただ、勝つことだけを考えろ。

そうしなければ戦えない。

そうしなければ、一夏とは、戦えない。

箒は組んだ指に力を込める。

そして、静かに意識を集中させていった。

◆◇◆

アリーナには四つの機体が開始のブザーを今か今かと待っていた。

「わざわざ決勝まで待たせるとはな」

ラウラは腕を組みそう呟いた。

「決勝で戦えるって展開の方が俺は燃えるけどな」

一夏は雪片弐型を構えて、ラウラを見据える。

「ふん、ルイス博士が棄権していなければ、そこに立っていたのはお前ではなかっただろう」

「運も実力の内って言葉をしらねえのか？」

『試合開始まで後十秒』

一夏は雪片弐型を腰に添える。
それは居合いの形。

残り五秒。

四。

三。

二。

一。

「「叩きのめす」」

試合開始と同時に一夏は瞬時加速を行う。
その一手目が入れば、戦況は大きく傾く。
しかし、ラウラが右手を突き出した瞬間、一夏の機体が動かなくなる。

ＡＩＣだ。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも」

そういう一夏の顔には笑みが浮かんでいる。

「何を笑っている」

ラウラはレールカノンの安全装置を解除した。

それでも一夏の笑みは崩れることがない。

「作戦成功だ」

そのラウラの機体が一夏の前から姿を消した。

そこに現れたのは、スペイン製のインパクトロッドを携えたシャルロットだった。

ラウラは、急に現れたシャルロットに吹き飛ばされてしまう。

「なっ!?」

追撃をかけるようにシャルロットがアサルトカノンによる爆破弾の射撃を浴びせる。

「ちっ……!」

畳み掛けるシャルロットの射撃に、ラウラは急後退をして間合いを取った。

「逃がさない!」

シャルロットはアサルトライフルを展開する。

しかし、その射撃がラウラに向けられることはなかった。
シャルロットは背後から衝撃を受ける。

「えっ！？」

「忘れられては困るな」

箒が実体シールドを活用し、銃弾を捌きながらシャルロットに肉薄する。

「それじゃあ、俺も忘れられないようにしないとな！」

「それは私もだ」

一夏はすぐさま瞬時加速によりシャルロットとスイッチしようとするが、その機体は動くことを良しとしない。

停止結界。

そこにはラウラがレールカノンを構えていた。

「させないよ！」

シャルロットが箒からラウラへと狙いを変える。
その射撃に、ラウラは回避行動を取るが、その際に、停止結界が解けてしまう。
ＡＩＣから開放された一夏はすぐさま箒に斬りかかる。

ラウラに標準を向けたシャルロットは、そのまま箒から離れ、一夏と場所を入れ替える。

一夏は箒に雪片弐型を振るう。
狙うは肩部。
目的は打ち合いに持ち込むことだ。
その誘いに箒は乗る。
連続する金属音。
一夏はスラスター推力を上げる。
加速を増した斬撃は徐々に箒を後方に押していく。
「くっ！　このっ……！」
押され続けながらも、箒は冷静さを保ち、一夏の連撃を防ぐ。
その崩れない受けに、一夏も焦りを抱く。
しかし、一夏もこれまで何もしてこなかった訳ではない。
腰を捻り、箒の脚部に雪片を振るう。
それは下段に構えられたブレードによって防がれてしまう。
「上段が空いてるぜ！」
一夏は箒の頭部に腰を入れた拳を叩き込む。
それはシールドエネルギーに阻まれてしまうが、それでも箒の気を逸らすことに成功する。
その隙で、一夏は切り付けることではなく、蹴りを放つことを選択する。
箒の上半身が揺れる。

そのまま追撃として、一夏は蹴り足を軸に後ろ回し蹴りを放った。
その連撃に箒の機体は数メートル吹き飛ばされる。

「瞬時加速」

一夏は猛加速により箒の機体に膝蹴りを叩き込んだ。
そのまま箒を壁際まで追い詰める。

宙に飛ばされている形の箒はその一撃を防ぐことが出来ず、その身を遮断シールドに押し付けられることになった。

「くっ」

一夏はすぐさま雪片弐型にエネルギーを纏わせる。
その輝きに箒が青ざめるのがわかった。
一夏は雪片弐型を振るう。
しかし、その刃は箒に当たることはなかった。

「なに!?」

突然、箒の姿が目の前から消える。
一夏の雪片弐型はむなしく空を切る。

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。
そのワイヤーブレードの一つが箒の脚へと伸び、シャルロットに向けて投げ飛ばしていた。
ラウラはプラズマ手刀を展開し、連続で斬りかかって来る。

斬撃と突撃を混ぜた正確無比な攻撃に、一夏は押されだしてしまう。

しかし、一夏は耐える。

元々、最初に箒を墜とすと決めていたのだ。

先ほど剣を交わしてわかったが、一夏よりはシャルロットの方が箒と相性がいい。

ならば一夏がやらねばいけないことは、ラウラをシャルロットに向かわせないこと。

時間稼ぎだ。

一夏はラウラの波状攻撃に必死に食らいつく。

放たれるブレードワイヤーは蹴り飛ばし、余裕があるなら切り落とす。

雪片弐型でプラズマ手刀を弾き、危ないときには素手で、その腕自体を払う。

離れることは出来ない。

射撃武器を持たない一夏は、ラウラには的に等しい。

離れた瞬間にレールカノンが火を噴くだろう。

「うおおおお！！」

ほぼゼロ距離での高速格闘戦。

途切れてもおかしくない集中力を、シャルロットを信じ必死に繋ぎとめる。

「……そろそろ終わらせるか」

ラウラはプラズマ手刀を解除する。
一夏はそれの意味に気付き、すぐさまラウラに雪片弐型を振るう。
しかし、そのブレードは宙に止まったまま動こうとはしない。

「ＡＩＣか！」

「では――消えろ」

無事に残っている四つのワイヤーブレードが一斉に射出。
一夏に襲い掛かる。
一夏の装甲は三分の一を削られ、シールドエネルギーも半分近くが失われている。
さらにラウラの追撃は続く。
一夏の腕部をワイヤーブレード二本で押さえ込み、ねじ切るような回転を加えながら、地面へと一夏を叩き付けた。

一夏は咄嗟に受身を取るが、その腹部をラウラの蹴りが襲う。

衝撃を殺しきれなかったのか、一夏は、息を詰まらせる。
拙い。
一夏が咄嗟に感じ取った気配に後方へ飛ぶと、ラウラが大型レールカノンを構えているのが見えた。
標準は合わせ終わっている。

「とどめだ」

ラウラは冷酷に言い放つ。
その砲口からは対ＩＳアーマー用特殊徹甲弾が発射される。
それは当たり所が悪ければ一撃で勝負がついてもおかしくはない。

回避は間に合わない。
ならば、斬るしかない。
しかし、一夏の右腕はワイヤーブレードに捕らえられて動かすことが出来ない。
だが、一夏は、笑みを浮かべた。

「遅いぞ、シャルル」

「お待たせ！」

質量を持った重い音を響かせてシャルルの盾が砲弾を防ぐ。

一夏はワイヤーをあえてその手に結んだまま、後方へ瞬時加速を行う。

急にワイヤーを引っ張られる形となったラウラは予想もしない形で、シャルロットに接近を許す形となった。
その隙をシャルロットは見逃さない。

展開するは大型ランス、『祓』。

機構は本日既に一回使用しているが、関係ない。
これは二本目だから。

突く。

その衝撃はシールドを透過し、装甲に衝撃を響かせる。

シャルロットはすぐさま六二口径連装ショットガンを両手に構える。

撃った。
銃弾は近距離から襲い掛かり、ラウラの装甲を削る。

「ちっ」

ラウラは右手を突き出す。
シャルロットの機体がピタっとその動きを止める。

「お返しだ」

ラウラはプラズマ手刀を展開し、シャルロットを斬りつける。
ＡＩＣにより、動きを封じ込められたシャルロットにはなすすべがない。
その装甲は段々と削られていく。

「退け！！」

一夏はそのラウラに斬りかかる。
しかし、その刃はあっけなく回避されてしまう。
しかし、ラウラの停止結界は解除される。
そのままラウラは一夏とシャルロットから距離を取るように後方へと飛んだ。

「ごめん一夏、助かったよ」

「それはお互い様さ。箒は？」

「お休み中」

シャルロットの視線にしたがって視線を送る。

アリーナの隅ではシールドエネルギーをゼロにし、各部損傷甚大の箒が悔しそうに膝をついていた。

「かなり手古摺ったよ。箒も強くなってた」

「その箒に余裕で勝ってるとはさすがだな」

「その言葉はこの試合に勝ってから、ね」

シャルロットはショットガンとマシンガンをそれぞれ展開する。その瞳はラウラを捉えている。

「ここからが本番だね」

一夏は頷きを返す。

「ああ。見せてやろうぜ、俺たちのコンビネーションをな」

第三十六話　決勝戦（後書き）

なんだろうなぁ。
しっくりこないなぁ。
次は決勝戦の後半です。

第三十七話　ＶＴシステム（前書き）

書いてて思った。
うちの一夏さんは何でもありだな。
まぁ、努力した結果だと思えば何でもありでもいいかなとは思ってる。

第三十七話　ＶＴシステム

一夏は疾走。
ラウラのＡＩＣによる拘束攻撃を急停止・転身・急加速で何とか交わすと、ブレードを構える。

「ちょこまかと目障りな……！」

ラウラはワイヤーブレードをも活用し、一夏を追い詰める。

「前方二時！」

「了解！」

一夏はシャルロットの指示通りにワイヤーブレードをくぐり抜ける。
シャルロットは射撃による牽制と、一夏の防御を同時に行っていた。
一夏はすばやくラウラに回り込む。

「ちっ……小癪な！」

一夏はブレードを振りかぶった。
その刃にはエネルギーが纏われている。

「無駄だ。お前の攻撃は読めている」

一夏はニヒルに笑う。

「なら避けてみろよ」

一夏は肩まで雪片弐型を引く。

突きの形。

「無駄なことを！」

ラウラは予想通り、一夏の体をＡＩＣで固定した。

「腕にこだわる必要はない。ようはお前の――」

ラウラの機体に雪片が突き刺さった。

「なっ！？」

ＡＩＣが解ける。

一夏はその雪片弐型の柄を持ち直すと、全力で押す。

その一撃は装甲に食い込んだ刃を更に押し込むことになる。

その食い込んだ状態で大きく横に薙ぎ払い、その装甲を砕く。

「貴様！？　武器を投げたのか！？」

「おいおい、誰が刃は斬りつけるものだって決め付けたんだよ」

そう、投げたのだ。

ＡＩＣが一夏の機体を止めに来ると予想していたため、一夏は雪片弐型を投擲した。

その読みは見事当たり、雪片弐型は装甲を削り、一夏の機体は自由を得る。

零落白夜は手を離した瞬間に解除した。

もともと、零落白夜は意識をそちらに集めるための囮に過ぎない。
その零落白夜を恐れたからこそ、ラウラは一夏の機体を止めて、確実に零落白夜を防ぐ方法を取ったのだろう。

だからこそ、一夏はもう一度零落白夜を発動させる。

「今度はさせるものか」

ラウラは、一夏が行動に移る前にその機体を封じ込める。

「これで、私の勝ちだ」

ラウラは大型レールカノンを一夏に向ける。
その砲口を向けられても、一夏は余裕の笑みを崩さない。
このことを予測していたかのように。

「おいおい、忘れてるのか？　今は二対一だぞ？」

「――！？」

慌ててラウラが視線を動かすが、ゼロ距離まで接近していたシャルロットがショットガンの引き金を引く方が速かった。
ラウラの大型レールカノンは弾丸を受け、爆散する。

「一夏！」

「おう！」

一夏はすぐさまラウラにとび蹴りを放つ。
それはラウラの胸部に命中し、その機体を大きく吹き飛ばす。

その隙にシャルロットは大型ランスを持って突撃する。
その機構はもう使えないが、それでも武器としては充分だ。
ランスがラウラの胸部を捉えた。

「くっ！？」

収納する時間も惜しむようにシャルロットはそのランスを投げ捨てる。
すぐさまシャルロットはショットガンを展開、引き金を引く。
ラウラは、一度、距離を取ろうとする。
それを一夏は回り込んで阻止する。

「目障りな！」

ラウラはワイヤーブレードで一夏の動きを牽制する。
そして、一瞬の隙をつき、瞬時加速により、一夏とシャルロットから距離を取る。

「一夏」

「任せろ」

一夏は再度雪片弐型にエネルギーを纏う。

しかし、

「シャルル、エネルギー残量が少ない。これがラストチャンスだ」

そのシールドエネルギーが底をつきかけていた。

「それならば一撃入れれば私の勝ちのようだな」

ラウラの声が近い。視線を戻すと、懐に飛び込んできているのが見えた。

その両手にはプラズマ手刀が展開されている。

ラウラの言うとおり、一撃でも入れられたら、その瞬間に雪片弐型はその能力を失い、シールドエネルギーもゼロになるだろう。

つまり、一夏は、零落白夜を発動できている間にラウラに一太刀入れなければならないのだ。

だから、ラウラは接近戦を挑んできている。

その縦横無尽の攻撃でシールドを削れれば良し。

そうでなくても一夏に攻撃させる隙を作らせずに、その効力が切れるのを待つ作戦だろう。

「やらせないよ！」

シャルロットは援護射撃を行う。

「邪魔だ！」

ラウラは一夏への攻撃の手を休めることなく、援護に入ったシャルロットをワイヤーブレードで牽制する。

そのどちらもが高い精度とスピードを伴っていた。

「くっ！」

「シャルル！」

被弾したシャルロットに気を取られたほんの一瞬の隙。

ラウラはその隙を逃すことなく、一夏の機体を蹴り飛ばした。

「――ちっ！」

その一撃に、一夏はすぐさま体勢を立て直そうとするが、そこで、雪片弐型がその輝きを失った。

「くそ！！　ここまできてエネルギー切れか！」

白式からもその輝きが消える。

「は……ははっ！　私の勝ちだ！」

高らかに勝利宣言をするラウラ。

それもそうだろう。

一対一になった時点で、後はＡＩＣの網にかけてしまえばそれで試合が終わるのだから。

しかし、一夏は諦めていなかった。

ラウラに超高速で接近する影が見えているから。

「まだ終わってないよ」

シャルロットは瞬時加速により、一瞬で超高速状態へと移った。

「な……！　瞬時加速だと！？」

ラウラが始めて狼狽の表情を見せる。

事前のデータにはシャルロットが瞬時加速を扱えるなどは書かれていなかったのだろう。

「手札を簡単に見せるのは素人のやり方だよ。まあ始めて使ったん

だけどね」

「な、なに……？　まさか、この戦いで覚えたというのか！？」

シャルロットのその器用さに、ラウラは驚きを隠せないようだ。

「だが、私の停止結界の前では無力！」

ラウラは右手を突き出す。

そのＡＩＣの網はシャルロットの機体を捕らえた。

しかし、そのラウラの機体が衝撃を受ける。

ラウラがその衝撃の原因を探る。

それはすぐに発見されてしまう。

ラウラは足元に落ちている雪片弐型を見つけると、一夏に鋭い視線を向けた。

一夏は投擲の残心を取っていた。

一夏はまたしても、武器を投擲したのだ。

「貴様ぁ！」

ラウラは吼える。

しかし、その冷静さは失っていない。

雪片弐型を手放し、対抗する術を持たない一夏は一旦無視し、シャルロットに集中する。

一夏が笑みを浮かべたことにも気付かずに。

「これで間合いに入ることが出来た」

「それがどうした！　第二世代型の攻撃力ではこのシュバルツェア・レーゲンを墜とすことなど――」

ラウラは気付いた。
あるではないか。単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた武装が。

「この距離なら外さない」

シャルロットの盾の装甲が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。
六十九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』
通称――『盾殺し（シールド・ピアース）』
ラウラの表情が焦りを見せる。
まさに必死の形相。

「おおおおっ！」

「やあぁぁっ！」

シャルロットは左拳を強く握りしめ、叩き込むように突き出す。
その一撃は瞬時加速によって接近しているため、全身をＡＩＣで止めても間に合わない。
ピンポイントでパイルバンカーを止めなれれば直撃だ。
ラウラはその集中。
その一点に狙いを澄ます。
その網がパイルバンカーを捉えた。

「しまった！」

シャルロットは、その加速を止められてしまう。
そのパイルバンカーを突き出した形のシャルロットは悔しそうな

顔を見せた。

「これで、これで私の勝ちだ！」

ラウラはプラズマ手刀を展開し、シャルロットに襲い掛かろうとする。

「なーんてね」

シャルロットが、その表情を変える。
それは、いたずらが成功した子供のような表情。
ラウラは、その背部に衝撃を感じた。

「なんだと！？」

ラウラはすぐさまハイパーセンサーでその方向に注意を向ける。
そこには、何かを投擲したような一夏の姿。
そして、自分に突き刺さる形で停止しているのは大型ランス。
シャルロットが投げ捨てた『祇』だ。

「死に損ないがぁ！！」

「おいおい、俺なんかに注目してていいのか？」

その言葉に、ラウラはすぐさま、背後に跳ぶ。
しかし、

「逃がさないよ」

その回避行動は遅かった。

ラウラの腹部に大型の杭が叩き込まれる。
シールドエネルギーが集中、絶対防御が作動。
そのエネルギー残量は数字を減らしていく。
その相殺し切れなかった衝撃が深く体を貫いたのだろう。ラウラの表情は少し苦悶に歪んだ。
しかし、これだけで、終わりではなかった。
六十九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』は連射が可能なのだ。
合計で四発の杭を打たれ、ラウラの機体が大きく傾く。
その機体にＩＳ強制解除の兆候が見えたときだった。
ラウラの機体に異変が起こった。

◆◇◆

私は負けるのか？

全身に走る衝撃はシールドエネルギーを削り取るだろう。
相手の力量を見誤ったのは間違えようもないミスだ。
しかし、それでも負けることは出来ない。

欲しい。

力が。

あの人のような力が。
私を闇から光に引きずり上げたあの人のような力が。

あの人は私にとって憧れであって目標なのだ。

その人が、治療している博士を眺めて、いつも辛そうな顔を作った。
博士も、笑いながらも、その体に涙を流していたのを知っている。
それでもあの人達は言うのだ。
あいつがいるから強くなれると。
これは、あいつのせいではないと。

だから――許さない。
あの人達にそんな表情をさせる存在が。
こんな思いをさせておいて、のうのうと守られ続けるその弱い存在が。
だから敗北させると決めたのだ。
あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると！

『――願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのならば、それを得られるのならば――

（ラウラはラウラ。それは、識別上の記号なんかじゃない。ラウラという一人の人間を確立するものだよ）

ふと、あの時のことが思い出される。
私が、自分と言うものを手に入れたときのことだ。

（ねえ、ラウラ。君は何になろうとしてるの？　千冬姉？　それともももっと別の人？）

あの時、私はなんと答えた？
そうだ、答えられなかったのだ。

（なら、良かった。ラウラは誰でもないラウラ・ボーデヴィッヒにならないと。それとも何？　千冬姉になりたい？）

違う。

私は、憧れはしても、教官の『よう』になりたいとは思ったことはあるが、教官になりたいなどとは思ったことはない！！

私は自分を手に入れた。

ただの戦闘人形などではない！！

私は今、何を望もうとした？

今、偽者の力を借りようとしたのか？

そんなもの、必要ない！！

私は、私の力を持って、あいつを叩き潰す！！

それが私の強さだ。

力こそ私の強さ。

その『私』に入ってくるな！！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ……　Ｄ.
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ……Ｕｐｌｉｆｔ.

おい、止めろ！

私は認証などはしない！

Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ……Ｎｏｔ　Ｃｌｅａｒ．

そうだ、私はこんな力など頼らなくても私の力だけで勝ってみせる！！

《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》……ｂｏｏｔ．

なっ！？

なに！？

認証などしていないぞ！？

止めろ……止めろぉぉぉぉぉ！！！！！！

◆　◇　◆

沙良は、ラウラの機体に起こった事態に誰よりも早く気付いた。

――ＶＴシステム！？

ありえない。

発動条件から言って、ラウラが借り物の力を求めるとは思わない。

――ならば、なぜ？

沙良は、頭によぎった答えにまさかと呟く。

流石にそれは無い。

そう言い切りたいが、それを、モニターのラウラが否定する。

ラウラはこう叫んだのだ。

『止めろ、こんな力など望んでいない』

それは、一つの事態を示していた。

「搭乗者の認証というストッパーを外してあるのか！！」

ＶＴシステムとは過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステム。

その性質上、搭乗者に大きな負荷と負担を与えるため、その発動には搭乗者の許可が必要なはずだ。

しかし、ラウラに、その許可を出した素振りが見えない。

沙良は、怒りに拳を握る。

ドイツ軍はここまでするのか。

モニターではラウラが、支配から逃れようともがいている。

しかし、それもすぐにＶＴシステムに抑えられてしまうだろう。

『や、めろ。私を……消さないでくれ。私は、私なのだ……』

「――」

沙良はその言葉を聞くと、駆け出した。

「沙良！？」

「ソフィ！　付いてきて！」

今、会場は緊急事態レベルDとしている。

この来賓が多くいる中で、ラウラがVTシステムを積んでいると知れたら、ラウラの立場が危うい。

あらかじめ千冬に情報を流しておいて良かった。

アリーナは緊急シャッターが降りている。

おかげで、中の様子は管制室からしかわからなくなっているだろう。

「どこに行くつもり！？」

「アリーナに乗り込む！！」

「何で！？」

「あれの情報は前々から掴んでいた。姉さんもその存在を許してない。ISに無様なシステムを組み込むなんて僕だって許さない。それが、千冬姉のデータならなおさらだよ」

沙良はピットに向けて足を動かす。

「それに、ラウラは知り合いだ。黙ってみているなんて出来ないよ」

「でも、セラ。あなた機体の損傷レベルが――」

「オルカで出る」

「許可を出すと思って――」

「出さないともうソフィアなんか知らない。僕はもうソフィアに関わらない」

沙良は、ソフィアの言葉に言葉を重ねる。
自分が駄々を捏ねているとわかってる。
しかし、ここは譲れないのだ。

「……セラ」

「無茶はしないから……ね？」

二人の足は止まっている。
既にピットの前まで来ているのだ。
沙良は、必死に懇願する。

「はぁ……いいわ。いってらっしゃい。後始末はやっておくわ」

「ソフィ！」

沙良は顔を輝かせる。

「もし無茶をしたら犯すから。本気だから。それはもう、世間に顔向けできないほどにめちゃくちゃに」

ソフィアの目は本気だった。

「う、うん。そうならないように頑張る」

ソフィアはその身に浅い青を纏う。

「壊すわよ。責任はセラが取りなさいね」

「わかってる。後で千冬姉にしぼられるよ」

ソフィアは、ピットのドアをハルバードで叩き潰す。

沙良はすぐさまアリーナに走り行くのだった。

第三十七話　ＶＴシステム（後書き）

ラウラをどっちにデレさせるかでちょっと迷ってます。
過去のつながりを持たせちゃった分、沙良にデレさせた方が説得力はあるんですけど、ラウラは一夏にデレさせてあげたいという気持ちもあり、いっそのこと、両方でいいかなぁとか思ったりもしてます。
家族の一員にして欲しい！！とか言ってさ。
うわーどうしよう。
このことが解決しないと、続きが書けないよー
書けてもデレる前までかな。
いちおう、どっちにデレてもおかしくないように、沙良も一夏も戦いには参加させますけど、どうなることやら。
次はたぶん短いよｗｗ

第三十八話　ラウラ・ボーデヴィッヒ

沙良がアリーナに到着したとき、既にラウラの機体はその変異を終えていた。
ラウラをそのまま表面化したようなボディラインに最小限のアーマーが付属している。
頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。
そして、その手に持つのは、

「雪片……？」

見間違えるはずもなかった。
それは千冬が振るった刀。
千冬だけの力。
一夏は無意識に雪片弐型を構えていた。

「一夏、ダメ！」

沙良の叫びも間に合わない。
漆黒の機体は一夏の懐に飛び込む。
居合いに見立てた刀を中腰に構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。
それは紛れもなく、千冬の太刀筋だった。

「ぐうっ！」

一夏の構えた雪片弐型が弾き飛ばされてしまう。
漆黒の機体はそのまま上段の構えに移る。

「一夏！」

沙良はすぐさまカイラを纏う。
守りたい。
その気持ちを強く持つ。
すると、黒のチョーカーが反応を返した。

「行くよ、オルカ！」

沙良の機体が、深い青から、蒼の混ざった黒へと変わる。
縦一直線、落とすような鋭い斬撃にその身を割り込ませる。

「シャルル！　一夏をつれて離れて！」

沙良はすぐさま『禊』を展開して、漆黒の機体に斬りかかる。
足元を薙ぎ払い、そのまま返す手で上段を払う。そのまま腰を入れて、斬り下ろしを放ち、回転を加えて突きを放つ。
それは全て雪片に似せたブレードによって防がれてしまう。

沙良はタイミングを読み、一瞬で戦闘から離脱する。

その着地と同時に、一夏が拳を握り締めて漆黒のＩＳに向かおうとする。

「うおおおおおっ！」

「ちょっと！？」

それを箒が一夏の頭を掴み、後ろへ叩き落すことによって止める。

「馬鹿者！　何をしている！　死ぬ気か！？」

「離せ！　あいつふざけやがって！　ぶっ飛ばしてやる！」

一夏が怒るのも無理はない。

あの剣技は一夏が千冬に初めて教わった、『真剣』の技。

沙良もそこにいたからよく覚えている。

千冬は語った。

『いいか、一夏。刀は振るうものだ。振られるようでは、剣術とは言わない』

『重いだろう。それが人の命を絶つ武器の、その重さだ』

『この重さを振るうこと。それがどういう意味を持つのか、考えろ。それが強さということだ』

沙良は覚えている。千冬の厳しく、けれどどこか優しい眼差しを。

「どけよ、箒！　邪魔をす――」

だから沙良は一夏の頭部を蹴り飛ばした。

「沙良！？」

シャルロットはその沙良の行動に驚きを隠せない。

「今の一夏に、あれを相手にする資格なんかないよ」

沙良は一夏に言い放つ。

「今の一夏は、千冬姉の模範に腹を立て、感情に任せて力を振るおうとした。その状態で、力に呑まれたあれを相手にしようとするの？」

一夏は言葉を返せない。

「頭を冷やして。それぐらいの時間はあるから」

ＶＴシステムは迎撃だけを行うようにプログラムされている。こちらからアクションを仕掛けなければ、何もしてこない。

一夏はゆっくりと体を起こした。

その瞳には先ほどの感情のブレは見当たらない。

「うん、いい顔になった」

「手間をかけさせたな、沙良」

一夏は白式のエネルギーを確認している。

「ダメだ。戦闘に回せるエネルギーがない」

『非常事態発令！　トーナメント全試合は中止！　状況をレベルＤと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す！』

「聞いての通り、お前がやらなくてもやらなくても状況は収拾されるだろう。だから――」

「無理に危ない場所に飛び込む必要はない、か？」

箒の言葉に、一夏は言葉を重ねる。

「そうだ」

箒の言っていることは正しい。

理路整然としている。

しかし、それでは一夏は止まらないであろう。

それは沙良も同じである。

「違うぜ箒。全然違う。俺が『やらなくちゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いてしまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない。俺は、あいつを助けたいからやる。それで充分だ」

「ええい、馬鹿者が！　ならばどうするというのだ！　エネルギーはどのみち――」

「無いなら他から持ってくればいい。でしょ？　一夏」

シャルロットがふわりと沙良たちの元へと近づく。

「普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイブならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か！？　だったら頼む！」

「けど！」

シャルロットが沙良と一夏に指差して、強い口調で言う。

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「「もちろん」」

声が重なる。

「じゃあ、負けたら二人とも女子の制服で通ってもらうからね」

「うっ……い、いいぜ？」

「なにせ負けないもんね」

沙良は『禊』を肩に乗せる。

「じゃあ、一夏はシャルルにエネルギー分けて貰ってて。奴さん、そろそろ我慢の限界みたいだしね」

そういって示す先には、電流を体に纏わせ始めた漆黒の機体。

「たぶん、有り余ったエネルギーが機体を侵食してるんだろうね。適度に発散させてくるよ」

沙良は身を低く構える。

刃を下に向け、持ち手を高く構える。

篠ノ乃流薙刀術の構えだ。

「じゃあ、遊んであげるよ偽者」

沙良は一瞬でその身を機体に肉薄させる。
沙良は刃に近い方の手を離し、もう片方の手だけで薙刀を大きく振るう。
それが当たる瞬間、沙良はその身を反時計回りに回す。その流れで、薙刀を振るっている右腕を引き上げると、その形は自然と上段の構えとなる。
それを左手を利用し、叩きつける。
その上段の一撃も防がれてしまうが、沙良はすぐさま左手で薙刀を持ち直し、右手を柄の先に当てることで、薙刀をすばやく背に回す。
それを手首の捻りを以って下段に振るう。
その一撃ですらも防がれてしまう。

「千冬姉のデータは流石だね」

それでも沙良は、連撃を止めない。
それは、聞こえたから。

「一夏！」

「おう！」

一夏は右腕の装甲だけを具現化させている。
防御はなし。当たれば即死、良くて重症。
それをさせないために沙良が居るのだ。

「一夏に刃は振らせない！」

沙良は連撃のスピードを上げる。

その沙良の後ろでは一夏が雪片弐型を強く握る。

「零落白夜――発動」

一夏の雪片弐型は普段のエネルギーを纏う姿ではなく、日本刀のような形に集約されたエネルギー刃が展開されている。
沙良が漆黒の機体の刀を上に弾き飛ばす。
その隙を一夏は狙う。
しかし、漆黒の機体はそのまま一夏に袈裟斬りを放つ。
それは千冬と同じ太刀筋。
しかし、それは千冬のものではない。

「ただの真似事だ！」

一夏は叫んだ。
腰から抜き放って横一閃、相手の刀を弾く。
そしてすぐさま上段に構え、縦に真っ直ぐ相手を断ち斬る。

沙良はそれをよく覚えている。

一夏がよく練習していた動き。
それは一閃二断の構え。
一夏の雪片弐型が漆黒の機体を切り裂いた。

その機体から、ラウラが開放される。
その一瞬、沙良はラウラと目があった気がした。
それはひどく弱っている捨て犬のような目。
助けて欲しいと言っているかのようだった。

「……まぁ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

一夏も、沙良と同じ思いを抱いたようだ。
一夏は力を失って崩れるラウラを抱きかかえる。
その言葉が聞こえたかどうかはラウラにしかわからないだろう。

◆◇◆

全く、お前たちはどうしてそこまで他人のために躍起になれるのだ。
私など捨て置けばいいものを。

『僕がそんなのことすると思う？』

思わないな。
それが貴方だ。ルイス博士。

『俺は気付いてたら動いてた。理由なんてそんなもんだ』

ふ、貴様もとんだ馬鹿のようだな。

『助けてやったのに、馬鹿とはなんだ』

……強さとはなんだろうな。

『そんなの、人それぞれだよ』

『俺は、心の在処。己の拠り所、だと思う』

己の拠り所……。

『自分がどうありたいか。その意思の強さだろ？　大切なのはさ』

『やったもん勝ちだよ。遠慮してたら損しかしないよ？』

しかし、私は……。

『まだそのことを言うの？　『ラウラ・ボーデヴィッヒ』』

その名を呼ばれ、ハッとする。

そうだ、私は私でしかない。

『お前の人生ぐらい、お前が好きに生きないとな』

では、お前は？　お前はなぜ強くあろうとする？　どうして強い？

『俺は強くないよ。まったくな』

断言、か。

あれほどの力を持ってなお、強くないという。それが理解できない。

『けれど、もし俺が強いって言うのなら、それは――』

それは……？

『強くなりたいからでしょ？』

『あ、人の台詞取ってんじゃねえよ！』

『かっこつけようとしてー』

『サーラー』

『ごめんごめん』

……仲が良いな。

『家族だからね』

血も繋がってないのにか？

『家族ってのはな、血のつながりがなくても、心が繋がっていたらそれで良いんだ』

……家族、か。

『俺は、誰かを守ってみたい。自分の全てを使ってでもただ誰かのために戦ってみたい。それが、あの事件からずっと強さを求めている理由だ』

それは、まるで……あの人みたいだな。

『姉弟だからな』

嬉しそうに、笑う男だ。

『お前は何がしたいんだボーデヴィッヒ？』

私は……私は何がしたいんだろうな。

今まで、考えたこともなかった。

『じゃあ、ちょうど良かったじゃん。この三年間でそれを見つければ良いよ』

博士……。

『もう、ここでは博士って呼んじゃダメだって』

では何て呼べば……。

『沙良って呼べば良いよ。ここでは皆が一緒なんだ。自分を、自分の行く先を探しに来ている人間しかいない。なら、ラウラも一緒。遠慮することはないじゃん』

沙良……

『俺は一夏でいいぜ』

先ほどまで殺気を向けていた相手だぞ？

『そんなの関係ねえよ。俺は今、こうしたいと思ってやっただけだ』

ふ、ふふ。一夏に沙良……か。

私に自己を与えてくれただけではなく、道まで標してくれるなん

てな。

『おいおい、標しただけで、選ぶのはお前なんだぞ？』

わかっている。

ただ、短い期間でもいい。

私も同じ景色を見たくなっただけだ。

◆◇◆

「う、ぁ……」

「気がついたか」

その声に、ラウラは身を起こそうとする。

「くっ」

「無茶をするな馬鹿者」

その声は自らが敬愛してやまない千冬のものだった。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しば

らくは動けないだろう。無理をするな」

千冬の話題の誘導にラウラは引っかからなかった。

「何が……起きたのですか……？」

ラウラは身を起こし、ただ真っ直ぐに千冬を見つめる。

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

そう言われても引き下がるような相手でもないのを充分承知しているのか、千冬はここだけの話と無言で示すと、口を開いた。

「ＶＴシステムを知っているな」

「はい。しかしあれは――」

「そう、ＩＳ条約で研究・開発・使用全てが禁止されている」

「それが……積まれていたのですね」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するように細工されていたらしい。現在、学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

ラウラはきつくシーツを握る。

「私が、力を求めたからですね」

全てを叩き潰す力を。
ラウラは俯いたまま顔を上げることが出来ない。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる。

「お前は誰だ？」

それはいつも沙良がする問いかけ。

「私は……私は、私です。私は、ラウラ・ボーデヴィッヒです」

言葉に出来た。
自分を認めることが出来た。
そのことがラウラの涙腺を緩ませる。

「それなら話は早い。後は、お前の生き方を決めるだけだ。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな」

「あ……」

それは、特殊意識干渉での会話とまったく同じ。
まさか、千冬が自分を励ましてくれるなど思いも寄らなかったラウラは口をぽかんと開けたまま呆けてしまう。
千冬は席を立ってベッドから離れる。
もう、言うことはないといったように。

千冬は、ドアに手をかけ、振り向くことなく言葉をかける。

「たっぷり悩めよ、小娘」

千冬はそう言い、部屋から出て行ってしまう。

「ふ、ふふ……ははっ」

何て姉弟たちだ。

まったく同じことを言う。

結局は自分で考えろと、そういうことではないか。

その頬には涙が伝っている。

完敗だ。

織斑一夏。

――貴様には完膚無きまでに敗北したわけだ。

だが、それは決して悪いことではない。

そのおかげで、スタート地点に立てたのだから。

第三十八話　ラウラ・ボーデヴィッヒ（後書き）

これでラウラさんのイベントは一段落かな。
ラウラをどっちのヒロインにするかがまだ迷い中なんで、間にちょっとした話を挟んで時間稼ぎしたいと思いますｗｗ

第三十九話　お風呂

『一年、決勝試合は、デュノア・織斑ペアの勝利とし、トーナメントの全日程は終了します。お疲れ様でした。表彰式などは事故の影響を受け、執り行いません。今日を持って、学園は三日間の休養に入ります。各人、体を休めてください。授業の開始時間などは各自個人端末で確認の上――』

「へー一夏たちの優勝だって。おめでとー」

「おう」

沙良たちはのんびりと食事を取っていた。

「沙良の予想通りになったね」

「そうだねぇ。まぁ、僕が進言したところもあるしね。あ、一夏、七味取って」

「はいよ」

「ありがと」

当事者なのにどこかのんびりしすぎではないかとクラスの女子は言っていたが、先ほどまで教師陣から事情聴取されていたのだ。

そんなに優勝で騒ぐ気にもなれないし、事件の話を出す気にもなれない。

開放されたのは全ての試合が終わっており、夕食の時間も過ぎていたのだが、特例として、食事を取らしてもらえることになった。

「ふー、食べた食べた。食事取っといてもらえて良かったよー」

沙良はお腹をぽんぽん叩き、ふぅと息をつく。

「そういえば、沙良に聞きたいことがあるんだが」

「んー？」

「あの時のＩＳでの会話みたいなのってなんなんだ？　あの、プライベート・チャネルとは違う、なんか特別な空間みたいなところでの会話なんだが」

「あぁ、相互意識干渉のこと？」

「相互意識干渉？」

一夏が首を傾げる。

「僕も聞いたことある気がする。ＩＳ同士の情報交換ネットワークの影響って言われてて、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が起こるっていうあれ？」

「そう、それのこと」

シャルロットも少しの知識はあるようだ。

「波長……波長ねぇ。なんか良く分からんって感じだな」

「ＩＳはよくわかんない現象や機能がかなりの数あるよ。姉さんが

全機能を公表してない上に現在も失踪中だし、自己進化するように設定してある部分があるから、姉さんにも全部を把握するのは無理なんだって」

「うわっ、束さんらしいな、それ……」

「確かに、あの人は自分に興味のないことはどうでもいいって人だからなぁ」

どうせ調べるのが面倒くさいだけだろう。

沙良はそう思っている。

「あ、三人ともここにいたんですか。さっきはお疲れ様です」

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへんと真耶が胸を張る。

その真正面にいた一夏は、大きな膨らみが重たげにゆさっと揺れるのにさっと顔を背けてしまう。

「……」

「一夏のスケベ」

「一夏のエッチ」

ぼそっと呟いたのだが、一夏の耳には確かに届いた。

「な、なにっ？　ちょっと待て二人とも！　それは誤解だ！」

「「ふーん」」

一夏はあたふたとしている。

「？　どうかしましたか？」

「い、いえいえ。なんでもないです」

「そうですか。それよりも、朗報です！」

真耶がグッと両手拳を握り締めてガッツポーズ。
そのまたしても揺れる胸の膨らみに一夏はまたしても顔を背ける。

「なんとですね！　ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！　そうなんですか！？　てっきりもう来月からになるものとばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

それは嬉しいと、沙良も機嫌を良くする。
トーナメントの疲れを湯船でゆっくり癒せるとは幸運すぎる。

「ありがとうございます、山田先生！」

一夏も嬉かったのか、感動の余り、真耶の手を握り締めている。

両手を両手で包み込み、真耶を見つめるその瞳は凄く輝いている。

「あ、あのっ、そんなに近づかれると、先生ちょっと困りますというか、その……」

「はいっ？」

一夏は何のことだか分からずに首をかしげる。

「い、いえっ！　なんでもありません！　なんでもありませんよ？」

真耶の視線が泳ぎだす。

「先生？」

沙良は話を促すことにした。

「と、ともかくですね。三人は早速お風呂にどうぞ。肩まで浸かって、百数えたら疲労もスッキリですよ！」

「はい！　じゃあ早速、風呂に――あ」

一夏は何かに気付いたかのように言葉を止める。

「ん？　どうしたの？」

沙良はわかっていないのか、首をかしげる。

一夏は沙良に分かるように、視線でシャルロットを示す。

「ああ」

沙良はようやく言っている意味がわかった。
シャルロットは未だ男子で通している。
一緒に入るわけにはいかないといったところか。

「え、えーと……」

「どうしたんですか？　ほらほら、三人とも早く着替えを取りに行ってください。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣所の前で待ってますね。じゃあ」

真耶はすたすたと歩いていってしまう。

「どうしようか」

沙良は二人に問いかける。
何か案はないの？
そう目が語っている。

「と、とりあえず着替えを取りに部屋まで行こうよ」

シャルロットは問題を先送りにする。

「おう……。何かしらの名案が思いつくのを天に委ねよう」

とりあえず、三人は部屋に戻ることにした。

沙良は部屋に入ると、とりあえず着替えを用意する。
その間、何かいい考えはないものかと考えるが、何も浮かばない。
沙良としてはシャルロットにゆっくりお風呂に入らしてあげたいのだ。

「むぅ」

しかし、何も思いつかない。
これがエスパーニャの研究員たちや、ソフィアならまだ、一緒に入るという選択肢が生まれるのだが、今回はそうはいかない。

沙良としても、流石に抵抗はある。

「もう、部屋で浴びちゃえば」

「山田先生が脱衣所の前で待ってるんだから、行かなかったら呼びにこられるだけだよ？」

シャルロットの提案は、そう簡単にはいかない。
時間をかけても、ただ風呂の準備が進むだけだった。

◆◇◆

脱衣所で、背中を合わせる影が二つ。
その空間に、一夏はいない。

「逃げたね、一夏」

沙良はため息をつく。

「怪我を言い訳にするとは一夏も考えたね」

シャルロットもため息をつく。
そして、そのまま沈黙に包まれてしまう。

「……」

「……」

沙良はどうしようかと考える。
沙良としては風呂は好きだ。
スペインでは研究職ゆえにシャワーで済ませることも多く、今は別にシャワーでも良い。

ならば、シャルロットに入ってもらうべきだろう。
決勝まで出て、誰よりも試合数は多い。
それに、事件に関わっているので、事情聴取にも体力を取られているだろう。

「ねえ、シャルル」

「は、はいっ！？」

「何で敬語？」

沙良は背中合わせを止め、シャルロットと向き合う。

「シャルルも今日は疲れたでしょ？　お風呂に入ってきなよ。僕はここで時間つぶしてるからさ。頃合いを見て部屋に戻るよ」

「え？　沙良はどうするの？」

「一緒に入るわけにもいかないしね。僕は部屋のシャワーで良いよ。シャルルたちと違って、準決勝後に一回シャワー浴びてるし」

実際、その後にもう一度戦闘行為を行っているため、理由にはなってはいないのだが、そこはなんとでも言える。

「い、いいよ。僕が脱衣所で待ってる。沙良お風呂好きなんでしょ？」

「うん、大好きだよ」

沙良は満面の笑みで答える。

なんせ、わざわざバルセロナの研究所に大浴場を作るぐらいだ。

余裕があるときにはよく大浴場を利用していた。

「でも……シャルルも疲れてるだろうし、ゆっくりと湯船に浸かった方が……」

沙良は折れない。

シャルロットにはゆっくりして欲しいのだ。

「い、いいの！　僕のことは気にしないで！」

「シャルル、もしかして、お風呂嫌い？」

「そ、そう！　うん、そうだよ！　あんまり好きじゃないかな！」

シャルロットはあからさまな態度なのだが、沙良はシャルロットの言うことを鵜呑みにする。

「シャルルがそういうならそうなんだろうね」

沙良の迷いの無い信用に、シャルロットは一瞬胸が痛むが、そんなことはどうでも良い。

「まあ、西洋文化はあんまり浸かるってことをしないもんね」

沙良は一人で納得していた。

沙良はとりあえずはシャルロットの視界に入らないように服を脱ぐ。

きれいに畳むと、すぐに使えるように、バスタオルを取りやすい位置に置き、タオルを腰に巻く。

沙良は大浴場などを利用する際は必ずタオルを腰に巻くようにしている。

バルセロナの研究所では、沙良の裸体に興奮して風呂で貧血になったものや、理性を飛ばしかけたものがいたため、沙良は大浴場を利用する際には、タオル着用じゃなければいけないという決まりがあったのだ。

「じゃあ、お風呂いただくね」

「う、うんっ。ごゆっくり」

なぜかおっかなびっくりの返事が返ってきたが、沙良は気にしないことにした。

沙良は大浴場の引き戸を開く。

「おおぅ。これはこれは」

一言で言うなら『広い』だろう。

大きな湯船が一つに、ジェットやバブルのついた湯船が二つ。

それに檜風呂が一つ。

さらにはサウナや全方位シャワー、打たせ湯までついている。

「無駄に多機能だなぁ」

バルセロナの大浴場は、大きな湯船が一つと、大き目の檜風呂が一つだけなので、その広さは比べ物にならない。

「まあ、人数の差かな」

沙良はゆったりとした足取りで、桶を拾い、体をお湯で流す。

「シャンプーシャンプー」

そして、その髪を丁寧に洗っていく。

その長すぎず、短すぎない髪型はゆったりと泡に包まれていく。

「ふんふふーん」

沙良は機嫌よく、鼻歌を歌う。

「ん？　今、流したのってシャンプーだっけ？　コンディショナーだっけ？」

沙良は、ピタリと手を止める。

「まぁ、もう一回洗えばいいや」

意外と疲れてたんだろうなぁと沙良は呟く。
沙良は、疲れを取るために、手早く体を洗うと、大きい湯船に体を沈める。

「ん、ふぅ……はぁ、気持ち良いや」

沙良は全身に広がる安堵感に息をつく。
心地良い圧迫感と疲労感に沙良は瞳を閉じる。
その心地よさに、体を委ねる。
そのまま状態が何分か続いた。
沙良は、おもむろに瞳を開くと、声を上げる。

「湯船に入る前にはかけ湯をしなよ、シャルル」

◆◇◆

「湯船に入る前にはかけ湯をしなよ、シャルル」

「き、気付いてたの!?」

「そりゃ気付くよ」

沙良はそういい、また瞳を閉じる。
その沙良に、シャルルは動揺を隠せない。

（てか、なんでそんなに冷静なのさ!?）

とりあえず、言われたとおり、かけ湯をし、湯船に足を入れる。

「お、お邪魔します」

「どうぞ」

沙良は、その体を動かすことなく、返事をする。

（なんか、沙良が色っぽい……）

シャルロットはお湯に肩まで浸かると、ゆっくりと沙良に近づく。

「シャルルもやっぱお風呂入りたかったんだね。じゃあ、僕はゆっくり出来たし、シャルルもゆっくりと浸かりなよ」

「ま、待って。僕が一緒だと、イヤ……？」

「別にそういうわけじゃないけど、シャルルが落ち着いて入れないでしょ？」

「大丈夫だから、ね？　その……話があるんだ。大事な話」

その言葉に沙良はその体をもう一度湯船に沈める。

その体はこちらに気を使ってか、背中を向けている。その気遣いにまた嬉しくなってしまう。

シャルロットは、その背中に自分の背中を合わせる。

「あの、ね。その……ありがとう」

「何が？」

「お母さんを助けてくれて」

「じゃあ、どういたしまして」

「それと、私をデュノア社から助けてくれて」

「何のことかな？」

沙良は誤魔化す。

しかし、シャルロットは知っている。

（私のために交渉してくれたんだよね）

沙良は、シャルロットのことをスペインが処理するという条件でシャルロットの身柄をデュノア社から受け取っていた。

その処理に専用機を返さなければならないらしいが、それでも、

無理やり押し付けられた専用機だ。自由と天秤にかけると自由に傾いてしまうのは仕方ない。

デュノア社としても、国際問題に発展する爆弾を抱えるのと、テストパイロットを失うのならば、確実に後者を選ぶだろう。

スペインに、メリットなどない。

それでも、沙良は動かしたのだ。そのメリットのないシャルロットを助けるために。

「僕、ここにいようと思う」

「そっか」

「ううん、ここにじゃない。沙良の……近くにいても良いかな？」

「僕の？」

「うん。沙良は言ったよね。僕に頼って良いって。だから、頼ってもいい？」

「うん」

「僕ね、嬉しかったんだ。自分を殺さなくてもいいって、そんなこと言われたのは初めてだったから」

シャルロットは、背中合わせになっている沙良の背中に手を触れる。

「シャルル？」

そのまま沙良に後ろから抱きしめる。

「沙良がここに居るから、僕もここに居たい。沙良のおかげで、自由になったけど、その分居場所もないんだ。だから、沙良の近くに、居場所を……作って、もらえないかな？」

「……シャルル」

「シャルロット」

「呼んで良いの？」

「そう呼んで欲しいの」

「わかった」

沙良は、シャルロットの手の上に手を重ねた。

（――！？　ただでさえドキドキしてるのに！？）

シャルロットは言いたいことを全部伝えると、今まで意識していなかった、今の体勢に気付いた。

（はわわわわ。ぼ、僕なんて体勢を……）

今のシャルロットは胸を押し当てる形で沙良に抱きついている。

（……沙良、胸が当たっていても何も思ってないよね……）

シャルロットは、女としての自信がなくなってゆく。

「ねえ、シャルロット」

「は、はひぃ！」

急に呼ばれて、声が裏返る。

「な、なにかな？」

「明日から三日間用事ある？」

「えっ？　と、特にはないけど」

沙良は、それは良かったと前置きするとこういった。

「明日、エスパーニャに行くよ」

第三十九話　お風呂（後書き）

と言うわけで、今回はお風呂イベントでした。
いやー、流石にこのイベントは外しちゃダメでしょ。

次回はシャルロットのスペインへの帰化の話になります。
1，2話の予定です。
それが終わり次第、ラウラがデレます。多分。
感想、お待ちしております。

第四十話　シャルロットのドキドキな一日

沙良は夜遅くに空港に来ていた。
出発は二十五時。
今の時刻は二十四時三十八分。
そろそろチェックインの準備をしていた方が良いだろう。

「シャルロット、そろそろチェックインしようか」

「う、うん」

シャルロットは、緊張しているのか、いつもよりも硬い表情をしている。

「そんなに硬くならなくても良いよ。ただ、帰化の手続きをしに行くだけだから」

「う、うん……」

それでも、シャルロットの表情は変わらない。
沙良はどうにかしてあげたいとは思うのだが、これは本人の問題であるため、難しい。

「むぅ」

沙良は腕を組んで考えてしまう。
それを見たシャルロットが慌てて笑顔を作る。

「さ、沙良？　僕は大丈夫！　ほら、ね？」

しかし、その笑顔も強張っている。
沙良はその笑顔を見て、決めた。
本社に行く前に、何とかして緊張を解してあげようと。
日本からスペインまではおおよそ八時間。
バルセロナに着くのは九時頃になるだろう。
本社に行くのは十時頃と伝えている。

「よし、決めた」

沙良は携帯端末を手に、本社にメールを送る。
そのメールの内容は一行。

『時間変更。十七時から本社でおねがい』

「うん、これでオッケーだね」

沙良は携帯端末をしまう。

「沙良？」

「ううん、なんでもないよ。そろそろ行こう？」

「うん」

沙良は行動を促す。
沙良とシャルロットは搭乗口に向かうのであった。

◆◇◆

「ねえ、沙良？」

シャルロットは沙良に声をかける。

「何？」

それを不思議そうな顔をして聞き返す沙良。

「い、いや、なんていうかぁ……」

「ん？」

沙良は首を傾げる。

「何で僕ら観光してるの？」

シャルロットたちは大通りを歩いていた。

「僕と一緒は嫌？」

沙良は悲しそうな顔を作る。

「そ、そういうのじゃないよ！？　むしろ、その、物凄く嬉しいというか、もっと一緒にいたいと言うか」

シャルロットは後半モジモジしながら答える。

「なら良かった」

先ほどの悲しそうな顔から一変。破顔一笑、可愛らしい笑顔を作る。

「〜〜〜〜っ！！」

その顔を見て、シャルロットは顔を赤くする。

そして、実感するのだ。

自分は沙良が好きなのだと。

「見て見て、シャルロット！　あそこ、ほら。大道芸やってるよ。見に行こうよ！」

沙良はシャルロットの手を掴むと、そのまま気の向くままに歩いていく。

（〜〜っ！　手！　手繋いじゃったぁ！）

シャルロットの葛藤も気付かぬように、沙良は自由に通りを探索する。

「この通りはね、ランブラス通りっていってね。バルセロナといえばここ！　ってぐらい有名なメインストリートなんだ」

「へ、へー」

シャルロットはそれどころではないのだが、沙良は楽しそうに解説をしてくれる。

「さっき見てたデパートが、この通りの始点Ｅｌ（エル）　Ｃｏｒｔｅ（コンテ）　Ｉｎｇｒｅｓ（イングレス）。近くにあった大きな広場が有名なカタルーニャ広場だよ」

沙良は嬉しそうに語る。

（よっぽどスペインが好きなんだろうね）

フランスに対していいイメージを持たないシャルロットとしては沙良の笑顔が眩しく感じる。

「この通りのことを、スペインの詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカが「終わってほしくないと願う、世界に一つだけの道」と評したんだ」

「終わってほしくないと願う、世界に一つだけの道……か」

シャルロットはふと思う。

（僕もこの状態が続けば良いなって思うよ）

手を繋ぎ、街を探索する。

フランスにいた頃にはこんなことが出来るなんて考えられなかった。

（本当、ずっと続けば良いのに）

シャルロットは思わず手に力を込める。

「シャルロット？」

それを何か言いたいことがあると思ったのか沙良がこちらを見ている。

「ううん、なんでもない」

シャルロットは笑顔を返す。

その自然な笑顔に、沙良も笑顔を返してくれる。

「あ、似顔絵描いてるよ！　僕らも描いてもらおうよ」

「あ、ちょっと沙良！？」

沙良はシャルロットの手を引き、似顔絵を描いている青年に話しかける。

（何言ってるんだろう？）

スペイン語はまったく分からないため、シャルロットは何を話しているかがまったくわからない。

「？Ｌａ　ｍｕｊｅｒ　ｅｓ　ｕｎａ　ａｍａｎｔｅ？　？Ｃｏｍｏ　ｅｓ　ｔｕ　ｎｏｖｉａ？（その女性は恋人かい？　どんな人なんだ？）」

青年はシャルロットを示して、沙良に何かを話している。

「Ｎｏ　ｅｓ　ｔｏｄａｖｉａ　ｕｎ　ａｍａｎｔｅ．　Ｅｓ　ｍｕｙ　ｂｏｎｉｔａ　ｙ　ａｍａｂｌｅ．（まだ恋人とかそんなんじゃないよ。　でもとても可愛くて親切な人だよ）」

「！Ｑｕｅ　ｅｎｖｉｄｉａ！（それは羨ましいね）」

それを沙良はびっくりしたような顔で答えると、すぐに優しい顔を作った。

それを聞いて、青年は羨ましそうな顔をする。

「沙良？　なんて言われたの？」

「内緒」

沙良は可愛らしく笑顔を作る。

「えー。教えてくれたって良いじゃない」

沙良は、あごに指を当てて、考える素振りを見せる。

「恋人かい？　どんな人なんだ？　って聞かれたんだ」

シャルロットは茹蛸のように一瞬で真っ赤になる。

「こ、こ、こ恋人！？　それでなんて答えたの！？」

「恋人じゃないよーって」

その言葉を聞いて、シャルロットは少し、むすーとしてしまう。

「それと――――ってね」

沙良はシャルロットの耳元で囁く。

シャルロットは一瞬で顔を赤らめる。

（か、か、可愛い！？　僕が！？）

シャルロットは一瞬で思考を放棄した。

頭の中ではお花畑で小さなシャルロットたちがブレイクダンスしているのだった。

◆◇◆

「シャルロット？」

沙良はシャルロットが固まってしまったのを見て声をかけるが、シャルロットは反応を返さない。

それを見て、似顔絵描きの青年は笑っている。

「なんか変な事言ったかな？」

なにもおかしい事は言っていないはずなのだが。

「まあ、とりあえず描いてもらうか」

沙良は動かなくなったシャルロットを椅子に座らせると、その横に腰を下ろした。

「Ｐｏｒ　ｆａｖｏｒ．（お願いします）」

「Ｓｉ，　ｃｏｍｏ　ｎｏ．（ああ、いいぜ）」

沙良は開始五分でうとうとし始めた。

「？Ｄｏｒｍｉｓｔｅ　ｂｉｅｎ　ａｎｏｃｈｅ？（昨晩はよく寝たのかい？）」

「Ｓｉ，Ｔｅｎｇｏ　ｓｕｅｎｏ．Ｅｓｔａ　ｎｏｃｈｅ　ｐｒｅｆｅｒｉｒｉａ　ｄｏｒｍｉｒ　ｅｎｕｎａ　ｃａｍａ　ｙ　ｎｏ　ｅｎ　ｕｎ　ｓｉｌｌｏｎ．（うん、でも眠たいよ。今夜は椅子じゃなくてベッドで寝たいな）」

「Ｈａｈａ．　Ｄｅｓｃａｎｓｅ　ｄｅｓｐａｃｉｏ．　（はは、まぁゆっくり休みな）」

「Ｇｒａｃｉａｓ．（ありがとう）」

「Ｄｅ　ｎａｄａ．（どういたしまして）」

沙良はシャルロットの肩の上に頭を乗せる。

寝よう。

――少しぐらい良いよね。

沙良はそのまま目を閉じた。
意識はすぐに落ちていく。
筆の動く音だけが沙良の耳に届いた。

◆◇◆

「～～～♪」

「そんなに気に入ったんだね」

シャルロットは似顔絵を抱きかかえてニヤニヤしている。

「うん！　とっても嬉しいよ」

もう一度絵を眺める。
そこにはシャルロットにもたれ掛かって眠る沙良の姿が描かれていた。
その天使のような寝顔に、シャルロットはニヤつきを隠せない。
あの、似顔絵の青年もいい人だった。
絵を渡す際に、沙良には聞こえないように英語でこう言ったのだ。
『本当にお似合いのカップルだよ。強敵だとは思うけど、頑張ってね』

（～～～～っ！！）

思い出すと顔が紅潮してしまう。

「シャルロット？」

「えっ？　な、何？」

妄想に浸っていたシャルロットは現実に引き戻される。

「ううん。変な顔してたから」

「そ、そんなに変な顔してた？」

「うん」

シャルロットはがくりと肩を落とす。

「あ、そろそろ時間だね」

沙良は時計を見ながらそう呟く。

「じゃあ、本社に行こうか」

シャルロットはその言葉に身を硬くする。

（忘れてた。目的は後見人になってくれるＳ・Ｑ社への挨拶だったよね）

「シャルロットも遊んで、少しは緊張とけた？」

沙良は笑顔を見せてくれる。

「えっ？」

「いや、物凄い硬くなってたから気晴らしにと思って観光してみたんだけど、少しはマシになったかなぁって」

シャルロットは自分の手を見つめる。

震えてない。

（わざわざ僕のために？）

シャルロットは嬉しくなる。

（……本当に優しいんだから）

シャルロットは優しさを噛締めるように、瞳を閉じる。

「シャルロット？」

「うん。大丈夫。ありがとう沙良！」

シャルロットは顔を上げる。

その顔には晴れ晴れとしていた。

◆◇◆

シャルロットは大層豪華な応接室に通されていた。
その身は緊張でカチカチになっていた。

「僕、スペイン語わかんないんだけど大丈夫かなぁ」

沙良はここにはいない。
研究所に顔出してくると先ほど別れてしまった。
シャルロットとしては物凄く心細い。
部屋がノックされる。

「ど、どうぞ」

入ってきたのは一人の女性だった。
その女性は茶色の髪を後ろで結上げている。
見た感じ二十台中盤だろうか。
大人の女性といった言葉が良く似合う。

「あら、聞いてたよりも可愛らしい子ね。私はS・Q社の人事担当のカルラ・ファリーノス・イエロよ。よろしくね」

流暢な日本語で話しかけられたシャルロットは慌てて立ち上がる。

「わ、私はシャルロット・デュノアといいます」

「知っているわ。セラが連れてきたガールフレンドでしょ？」

「が、ガールフレンド！？　い、いえ、まだそんな関係じゃ……」

「あら、冗談だったのに、その反応は脈ありね」

（しまったー！！）

シャルロットは恥ずかしさの余り俯いてしまう。

「私は応援するわよ？」

「ファリーノスさん……」

「カルラで良いわ」

「ありがとうございます、カルラさん」

「ええ。でも頑張りなさいよ？　この会社の人間は沙良が連れてきた貴方を応援すると思うけど、あの子は人気が高いからね。代表候補は全員敵と思っていた方がいいわ」

「うわぁ」

シャルロットは嫌そうな顔をする。

確かに、モテるんだろうなぁとは思っていたが、そこまでとは思ってなかった。

「世間話はここまでにして、そろそろ本題に入りましょうか」

「は、はい！」

シャルロットはその背筋を伸ばす。

「話自体は私がするわけじゃないから部屋を移動するわね」

カルラは移動を促す。
シャルロットはそのカルラの後についていく。
（うぅ。いよいよだよ）
「ここよ」
そういい、たどり着いた場所は、
「しゃ、社長室？」
会社のトップがいる場所だった。
「そう、ここに社長と、貴方が所属することになる研究開発部の部長が待っているから」
そう言ってカルラは社長室をノックする。
「例の人物をお連れしました」
「そうか、通してくれ」
カルラはそのドアを開ける。
シャルロットは恐る恐るその扉をくぐる。
「ようこそ、ＳｅａＱｕｅｓｔＣｏｍｐａｎｙへ。私たちは歓迎するよ」
社長らしき人物が恭しく挨拶をする。

「私がこの会社を纏めている、エルベルト・ルイスだ」

「シャルロット・デュノアです」

シャルロットは深く頭を下げる。

エルベルト・ルイスの名は世界に知れ渡っている。

たった一代で会社を世界的企業にまで成長させ、その権力はスペインを言葉一つで動かすことも出来るとまで言われている。

世界中のレアメタルの流通を握っているとまで言われているその経営術は多くの敵を作りながらも、その会社を難攻不落のものにした。

ただ一つの欠点は、孫に甘いということ。

「君の事情は社員から報告を受けている。我がスペインは快く君の身柄を引き受けよう」

「あ、ありがとうございます」

「まぁ、とりあえず座ってくれたまえ」

シャルロットはソファーに腰掛ける。

「君の後見人には、私がなることになっている」

「社長自らがですか！？」

シャルロットは驚きを隠せない。

このスペインにおいて大きな力を持つＳ・Ｑ社の社長の後ろ盾を得られるということは、スペインでの立場は保障されているのにも

等しい。

「ああ、わが社の開発部長たってのお願いでな。フランスの影響に確実に対処できるようにしっかりと立場を示すべきと言うのでな」

シャルロットはエルベルトの横に座る、白衣の女性に頭を下げる。

「あら、私じゃないわよ？」

その女性が笑いながら答える。

「へ？」

シャルロットは変な声を出してしまう。

「私は開発室所長のロサ・オルティス。貴方の直接の上司になるけど、研究開発部の部長ではないわ」

シャルロットは不思議そうな顔をしてしまう。

（あれ？　カルラさんが社長と研究開発部の部長がいるって言ってたはずなんだけど）

そのシャルロットにロサは納得したような顔で頷く。

「あの子は何も言ってないのね」

（あの子？）

シャルロットが口を開こうとした時、社長室がノックされる。

「開発部長です。新しく配属されるシャルロット・デュノアの専用機となる機体が準備できましたのでお持ちしました」

シャルロットがその背筋をピンと伸ばす。
おそらくシャルロットがこれから一番お世話になる人物だろう。
礼儀を欠かさないようにしなければ。

「入ってもいいぞ」

エルベルトが軽い口調でそう答える。
心なしか笑いを堪えているような気がする。
よく見ると、ロサや、カルラもその口元に笑みを浮かべていた。

「失礼します」

シャルロットはその入ってきた人物を見て驚きの声を上げた。

◆◇◆

「沙良！？」

つい立ち上がってしまう。
いつもの制服姿や白衣姿とは違う。
特殊な作業着なのだろうか、その身に纏っている服は見たことのない形状をしていた。

「シャルロット、社長の前だよ」

いつもと違う厳しい口調に、ビクッとしてしまう。

すると、沙良がその態度を崩す。

「ぷっ……はは、そんなにビクってしないでよ」

ぽかんとするシャルロットに沙良は近寄る。

「ほら、座って、ね？」

そうしてされるがままにその場に腰を下ろす。

何がなんだか分からないシャルロットはただオロオロすることしか出来ない。

「なんか僕のときを思い出すなぁ」

そんなシャルロットに沙良は笑みを漏らす。

「セラもあの時はオロオロしてたもんだ」

「もう、あの時はおじいちゃんが仕掛けたんでしょ？」

「おじいちゃん！？」

シャルロットは本日何度目か分からない叫びを上げる。

「え？　知らなかったの？」

シャルロットはコクコクと頷く。

「改めて、自己紹介するね。社長のエルベルト・ルイスの孫でＳｅａＱｕｅｓｔＣｏｍｐａｎｙ研究開発部最高責任者兼専属テストパイロット、サラ・ルイスだよ。僕の研究室に入るということは今日から僕らは家族も同然だ。改めてよろしくね、シャルロット」

そういい、沙良は笑顔をシャルロットに向けるのだった。

第四十話　シャルロットのドキドキな一日（後書き）

何こいつらイチャイチャしてんだよ。
とか書きながら思った。

とりあえず、今回はシャルの顔合わせという話でした。
次回はシャルが新しい専用機を手に入れるお話となります。

第四十一話　海に対なす空

薄暗い廊下を三つの影が歩いていた。
そのうちの一人は白衣を着ており、その廊下ですれ違うものから、残りの二人を好奇の視線から守っている。
その二人のうち、金色の髪を持つ少女が、翠の瞳を持つ黒髪の少年に声をかける。

「ねえ、沙良。どこに向かってるの？」

黒髪の少年は答える。

「僕の研究室のハンガーだよ。そこにシャルロットの機体となるＩＳが整備されているはずだから」

沙良はシャルロットにとあるカードを渡す。

「えっと……『ＳｅａＱｕｅｓｔＣｏｍｐａｎｙ開発研究部第一深海作業開発研究室所属研究員　シャルロット・ルイス』……これって」

「ここでの社員証。研究室に入るのに使うから無くさないでね」

「えっと……そこじゃなくて、この名前の『ルイス』って……」

「ああ、お爺ちゃんが後見人だしね。ここではルイスって名乗っても良いよ。もう帰化の手続きでも『シャルロット・ルイス・デュノア』で申請しちゃったから、シャルロットはエスパーニャではシャルロット・ルイスって名乗ってね」

「シャルロット・ルイス……」

その名をシャルロットは呟く。

その顔を少し赤みを帯びている。

「おそろいだね」

沙良は自分の名札を指差し、そう笑った。

沙良の名札は『サラ・ルイス』と書かれている。

おそろいの意味に気付いたシャルロットは紅潮し、俯いてしまう。

「そうだ、僕のことは『セラ』って呼んでいいよ」

「『セラ』？」

「そう、僕に親しい人は皆そう呼ぶんだ。『サラ』って、エスパーニャだと女性名だから少し変えて『セラ』」

「セラ……うん、分かったよセラ」

シャルロットがセラと呼ぶと、沙良は嬉しそうに笑う。

「だったらさ、僕のことも愛称で呼んで欲しいなぁ……」

シャルロットはこれをチャンスと捉え、沙良に上目遣いでお願いする。

何でも無いように言っているが、心臓は物凄い速さで鼓動を打っている。

「愛称かぁ。シャルロット……ロッティ……シャル。うん、シャルなんてどう？　呼びやすいし」

「シャル……うん、それが良い！！」

「じゃあ、これからは『シャル』と『セラ』だからね」

「うん！」

シャルロットと沙良は楽しそうにはしゃいでいる。
それを和やかに見守っていたロサだったが、研究室が近いため、声をかけることにする。

「ほら、お喋りもそこまでにしな。研究室もすぐそこなんだから」

ロサは先ほどまでの外用の口調を崩していた。

「はいはい」

「わかりました」

沙良は研究室のＩＣカードリーダーに社員証を入れる。
そして、人差し指を、機器の指定されている部位に入れる。
その状態でパスワードを入力する。
すると、特殊なカメラが沙良の網膜を撮影する。

「サラ・ルイス」

『声紋認証完了』

すると、扉が自動で左右に割れた。

「厳重だね」

シャルロットはそう話しかけるが、

「ここは本社から直接来るルートだからね。研究員用の通路は違うよ」

沙良は軽く否定を挟む。

沙良は軽い足取りでその研究室へと足を踏み入れた。

そして、シャルロットに振り返ると、手を大きく広げて、言葉を放った。

「ようこそ、シャル。ここが僕の研究室、第一深海作業開発研究室だよ」

その歓迎の言葉にシャルロットは頬が緩む。

「うん、よろしく」

シャルロットは回りを見渡す。

そこには沢山のコンピューターとモニターが並び、職員がキーボードを叩いている。

奥の全面ガラスの部屋には白い機体がケーブルに繋がれて鎮座していた。

部屋の一角にはソファーや、机や椅子などが置いてあり、自由にテレビや本を見て休憩できるようになっているらしい。

今も、四人ほどがコーヒーを飲みながら討論を繰り広げていた。

聞こえてくる内容は、どこの化粧品が一番良かったかと言うもの。

「社員に配慮してあるんだね」

デュノア社は、こんなに自由は無かったよ。

そう言葉に表すシャルロットの前に、奥の部屋から一人の女性が現れる。

その女性はタンクトップに、ホットパンツというラフな格好。
その体はオイルで汚れている。

「おお？　この子が新入り？」

「もうザイダ、作業中はそれでも良いけど、研究室に入るときは白衣ぐらい着なって毎回言ってるでしょ」

沙良が腰に手を当ててザイダを叱り付ける。

「ごめんごめん、次から気をつけるわ」

しかし、そのザイダは意にも止めていないようで、軽く聞き流している。

「その言葉も聞き飽きたよ。行動に移してよ」

「ホント、さっきまで、三ヶ月ぶりの再会に泣きそうな顔してた子とは思えないわ」

「ちょっと、ザイダ！？」

「で、この子が？」

ザイダはシャルロットに視線を向ける。

「そうだよ。ザイダに頼んでた機体の搭乗者」

その言葉に、ザイダはシャルロットを舐め回すかのように見る。

「ふーん、この子が」

「あ、あの……？」

シャルロットはオロオロとしながらも、何か会話をしようと、言葉を探す。

「……うん、気に入った！　私は整備士のザイダね。よろしくね、シャルロット」

「は、はい！」

シャルロットはザイダに急に肩に手を置かれ、ビクッとする。

「ついて来なさい。見せてあげるわ。あなたの機体」

ザイダは軽い足取りで、研究室を進んでいく。

シャルロットは沙良に戸惑いの視線を向けるが、沙良が笑いながら頷きを返したのを見て、ザイダの後を追った。

その、大量のコンピューターが置かれた部屋を抜け、動く歩道に乗る。

その長い道のりの行く先は、

「……なんて大きなハンガー」

地下に作られた大型のハンガーだった。

所狭しと様々な機械が動いており、そこに配置されているのはＩＳだけではない。

「……潜水艦？」

その無駄を無くした形態は、見るものを圧倒させる。

「深海作業開発研究室だからね。海に関わるものなら何でも作ってるといっても良いんじゃないかな」

沙良がシャルロットの横に並び立つ。

「ほら、ザイダを待たせてるよ？」

「あ、うん」

シャルロットは少し急ぐように、ザイダの元へと近づく。

そこにいたのは大空のような蒼だった。

「セラの『海良（カイラ）』と対になる機体。シークエスト製作試作機プロトタイプ『空良（ソラ）』。セラの『カイラ』は作業用の製作試作機。この『ソラ』は軍事用の製作試作機。その性能は圧倒的に『ソラ』の方が高いわ」

「――っ！？　このスペックって！？」

そのスペックに、シャルロットは驚きを隠せない。
それはそのスペックの高さではない。

「うん、シャルのラファール・リヴァイブ・カスタム？の稼動データを使って、元の乗り心地に出来るだけ近いように、それでいて、追随を許さないように設計したよ」

沙良は簡単に言っているが、決して簡単なことではない。
フランスの最高傑作のカスタム機を再現しつつ、そのスペックは比べようもなく高い。
第二世代機の中ではトップクラスを誇る機体だろう。
その最大の特徴は、拡張領域の多さ。

それはシャルロットが使っていたラファール・リヴァイブ・カスタム？の二倍近くもある。

「乗ってみて」

シャルロットは、その機体に身を任せる。

――Ｓｔａｒｔ　ｓｙｓｔｅｍ，　Ａｃｃｅｓｓ――

――Ｆｉｔｔｉｎｇ　Ｓｔａｒｔ――

――Ｓｅａ　Ｑｕｅｓｔ　Ｄｉｖｉｎｇ　ｓｙｓｔｅｍ，　Ａｃｃｅｓｓ――

――搭乗者を確認、搭乗者を登録――

――Ｓｅｃｒｅｔ　ｓｙｓｔｅｍ，　Ｓｔａｒｔ　Ａｃｃｅｓｓ――

――皮膚装甲展開……完了――

――推進器稼動確認……完了――

――ハイパーセンサー最適化……完了――

次々と浮かんでは消えていくモニター。

――『！Ｄｅ　ｌａ　ｂｉｅｎｖｅｎｉｄａ，　Ｓｅａ　Ｑｗｅｓｔ，　Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ！』――

《ようこそ、深海の探索者シャルロット》

最後のモニター。

それは、『ソラ』がシャルロットを認めた証。

「どう？　気に入ってくれた？」

シャルロットは強く頷く。

「僕には勿体無いぐらいだよ」

シャルロットは確かめるように軽く体を動かす。

それは、問題なく反応をシャルロットに返す。

「フィッティングには時間が掛かりそう？」

シャルロットは軽く考えてから言葉にする。

「十分ぐらいかな」

沙良は時計を見ながら答える。

「じゃあ、アリーナまで動こうか。その間にフィッティングは終わるでしょ」

◆◇◆

『とりあえずは自由に動いていて良いよ』

沙良は、研究室の隣にあるモニター室からマイクを通して、シャルロットに呼びかける。

モニター室からはアリーナの全貌が見渡せる。

沙良の言葉に、シャルロットは、その身を空に躍らせた。

「急上昇ＯＫ。急旋回ＯＫ」

沙良の横では、研究員がシャルロットの機動データを取っている。

「急加速、急停止共に問題なし」

「高レベルの反動制御確認」

「機動面、問題なし。射撃体勢をお願い」

研究員の要求を沙良は自分の権限を以って許可する。

「了解、射撃体勢を取らせます」

沙良はマイクに口を近づける。

『的を出すから適当に射撃して』

「空間投影式作動」

「作動を了承」

空間投影技術を利用した的が無数に表示されていく。
それをシャルロットは黙々と撃ち落としていく。

「レスポンス良好」

「タイムラグも許容範囲」

「機体反応の確認のため、不意打ちでの射撃に対するリアクションを」

「了解」

すぐさまモニターを操作し、使用できる埋め込み式レーザー砲を確認する。
沙良はすぐさま各方面に指示を出す。

「１－Ａ、３－Ｂ及び９－Ｔからのレーザー狙撃の準備をお願いし

ます」

「了解、１－Ａ完了」

「了解、３－Ｂ残り三秒……完了」

「了解、９－Ｔ残り十秒」

「９－Ｔと同時に一斉射撃準備」

「三、二、一」

「発射」

その言葉と共に、シャルロットに三箇所からレーザーが襲い掛かる。

その奇襲にも、しっかりとシャルロットは反応する。

「ハイパーセンサーの反応良好」

「警告対応良好」

「一瞬の思考判断に対する、機体のレスポンス良好」

沙良は満足そうに頷く。

「一次移行はまだかな」

「もう少し掛かるわ。なんなら、戦闘でもさせる？」

その言葉は冗談も含んでいただろう。
決して本気ではなかったはずだ。
しかし、その案は沙良に「名案だね」と言わせることになってしまった。

「現在手の空いているパイロットはいる？　整備に来ている者とか」

沙良の言葉に、研究員は各部署に問い合わせを開始する。

「……いました。機体整備に来ていた代表候補生が一人こちらに回せるそうです」

「名前は？」

「それが……」

その言いにくそうにした研究員に沙良は首を傾げた。

「マルセラ・バスケス・サントです」

その名を聞き、その理由を把握した。
それは、沙良が苦手としている人間。
しかし、それでも専用機を与えられているということは、それだけの実力があるということだ。

「どうします？　セラが嫌なら、他の人間の予定を調節しますが」

沙良としては嫌なのだが、それで社員に迷惑をかけるわけにはいかない。
実力も確かで、模擬戦の相手にするにはもってこいの人間だ。

そう、沙良さえ我慢すれば、全てが丸く収まる。
沙良は、嫌そうに、本当に嫌そうに声を出した。

「いいよ、マルセラで」

「そんなに嫌なら別に大丈夫ですよ？」

研究員は苦笑いを浮かべている。

「いい、頑張る」

沙良は首を横に振ると、拳を握った。

「わかりました」

研究員は人事部に連絡を取り、スケジュールを取る。

「大丈夫よ、私たちが守ってあげるから」

ザイダが紅茶を沙良に差し出す。

「ザイダ……」

その微笑ましい光景に皆が温かい目で見守っていると、

『ちょっと！？　いつまでレーザー出るの！？』

いつの間にか狙撃箇所が六箇所に増えたレーザー砲に狙撃をされ続けているシャルロットが、悲鳴を上げていた。

第四十一話　海に対なす空（後書き）

遅くなってすみません！！
親知らず抜いたら痛くて執筆してる場合じゃなかったんですよ。
今回は痛すぎた結果、短いですが、勘弁してください。
次ももうチョイ時間貰います。
親知らずってこんなに痛いんですね。
前に二本抜いたときは痛くなかったから甘く見てた。
下の歯横向きに生えてたそうです。腫れて痛いよぅ

第四十二話　決意の模擬戦（前書き）

知ってるか？
親知らずって、痛いんだぜ？

第四十二話　決意の模擬戦

シャルロットはただ前を向く。
そこにいるのは自分と似た機体。
違うのはその青色の濃さだけ。
ハイパーセンサーはその機体の情報をシャルロットに伝える。

――マルセラ・バスケス・サント。搭乗ＩＳ『シークエスト・カスタム・マルセラ』。全距離万能型。特殊兵装無し。

シャルロットは手に汗を感じる。
模擬戦に用意された相手は、本場の代表候補。
その使いなれた機体を操るマルセラに、先ほど、使い始めたばかりのシャルロットが勝つのは難しいだろう。

シャルロットは拳を握る。
それでも負けたくないと言わんばかりに。

『それでは、模擬戦闘を行います。マルセラはシャルが一次移行を済ますまでは、全兵器を使って、そのサポート。一次移行が終わり次第、データ収集に入って。シャルは勝つことだけを考えてて。それが、一次移行に繋がるから』

開放回線（オープンチャネル）で沙良の声が飛んでくる。

「！ｖａｌｅ！（了解）」

「うん、わかった」

シャルロットは、アサルトライフルを手に呼び出しておく。
それは今までシャルロットが使っていた物とは大きく違う。
その重さも、その威力も、その使用目的も。
早く慣れなければという焦りもあるが、新しい武器に心を躍らせている自分も感じる。

『それでは、ブザー後に戦闘を開始して』

通信で沙良がそう述べると、アリーナの中央に、カウンターが表示される。
その数字が、一つずつ減っていくにつれて、シャルロットは、心を引き締める。
その数字がゼロになったと同時にシャルロットは動いた。
ブザーの音を後ろに感じ、シャルロットは、マルセラに銃を向ける。

「あら、大したご挨拶ね」

それを、マルセラは両手を広げることで応対とする。
それはまるで、撃ってこいと言わんばかりの動作。
だからシャルロットは、躊躇い無く撃った。
その螺旋状溝から発射された弾丸は旋回運動を与えられ、ジャイロ効果により真っ直ぐに敵に向かって飛翔する。

弾が深い青の機体に突き刺さる。

それは一発で終わるはずも無く、無慈悲な銃声が鳴り響く。
その銃弾を全てその身で受けたその機体は、なお悠々とその両手を広げていた。

シャルロットは戦慄する。

あれだけの銃弾を受けてなお何事も無かったかのように動く、その機体に。

弾幕を前に余裕を保ち続けるマルセラに。

「ふう、なんて情熱的な挨拶。でも効かないわ。硬さ、それが私の取り柄だから」

マルセラはゆっくりとその機体を動かす。

その動きは遅い。

しかし、確実にシャルロットに銃口を向ける。

それは、先ほどシャルロットが利用したのと同じアサルトライフル。

シャルロットは、その引き金が引かれるのを確認。

すぐさま回避行動に出る。

しかし、

「――っ！？」

機体が、ほんの僅かだがシャルロットの反応に追いつかなかった。

被弾。

その威力は比較的低いが、その圧倒的な連射力の前にシャルロットの機体は弾幕に飲み込まれてしまう。

「これが、シークエストシリーズに基本的に積まれているアサルトライフル、『ＣＥＴＭＥ』。威力を犠牲に、弾幕を張ることに特化

した銃よ。あなたも使ったから分かるでしょ？」

シャルロットは弾幕の中で踊るように回避を続けながらその声を聞く。

確かに、これは厄介な武装だ。

威力自体は低いが、確実にダメージがこちらに入ってくる。

牽制用に使うのが一番正しいのだろう。

そう考えると、一つ疑問が浮かぶ。

「なんでシールドが減らなかったの？」

先ほどのシャルロットの射撃に、マルセラの機体はシールドエネルギーを減らさなかった。

シールドに当たれば、どんなに威力が低くても、ある程度は削ることが出来るはずだ。

このライフルも、そういうコンセプトで作られているのだろう。

その疑問に、マルセラは丁寧に答えてくれる。

「簡単な話よ？　シールドを切っただけ。システムを起動した私の装甲なら、銃弾を食い止められるからね」

その発言に、シャルロットは驚くと共に納得する。

思い出すは、学年別トーナメントの準々決勝。

沙良の『逆桜』の斬撃の網に、リナとフィオナは正面突破という手段をとった。

それは、そのシステムとやらを作動させた結果なのだろう。

シャルロットは、自らの機体を確認する。

乗っているのは同じシークエストシリーズ。

シャルロットの機体にも同じシステムが使用されていてもおかしくはない。

「あった」

しかし、そのシステムはロックがかかっていた。

「残念だけど、一次移行してからじゃないと使えないわよ？」

そのシステムに気を取られすぎたのか、いつの間にかマルセラがシャルロットに接近していた。

その振りかぶられているのはシャルロットもよく見覚えがあった。

青を引き立てるような赤色。

「禊！？」

「正解」

シャルロットはその身に衝撃透過の一撃を食らう。

その硬直したシャルロットの機体に、銃口が押し付けられる。

「この銃ね、『ガルシア』って言うんだけど、どういう意味かわかる？」

シャルロットは、嫌な予感に冷や汗を流す。

それを感じてか、マルセラはその口元に笑みを作った。

「バスク語起源で、『槍』っていうの」

マルセラは、引き金を引き絞った。

その威力はまさに突き放たれた槍の如し。

シャルロットの機体は、衝撃に、その機体を宙に投げ飛ばされる。

しかし、その間に感じることは負の感情ではない。

シャルロットは思った。

楽しい。

自分の意志で動くことがこんなにも楽しいのかと。

今までは、デュノア社の命令に従うだけだった。

そこに自分の意志などなかった。

今は違う。

シャルロットは望んでここにいるのだ。

それは、自分の意思。

沙良の傍に居ると決めた、自分の意思。

――この色のついた世界で、沙良と共にいる為に！

シャルロットはすぐさま体勢を整える。未だ、その進行方向は背に向かっている。

スラスターで勢いを殺してもいいが、その一瞬の隙が怖い。

ならば、その勢いを利用するだけ。

シャルロットは、吹き飛ばされている方向にスラスターを噴かした。

その勢いで、マルセラから距離を取ると、先ほど狙撃された銃、『ガルシア』を展開する。

しかし、ただこれだけで撃っても決して当たることはないだろう。

だから、シャルロットは左手に『ＣＥＴＭＥ』を展開する。

それを見て、マルセラが笑ったのが見えた。

「正解」

そのマルセラの言葉が示すとおり、シャルロットは反撃を開始す

る。
牽制用の反動が小さい銃で足止めし、威力の高い銃で仕留める。
コンセプトとしてはシンプルでとても分かりやすい。

「でも、武装はよく確認した方が良いわよ」

マルセラは、片手を前に突き出す。
その動作はシャルロットには覚えがあった。

（まさかＡＩＣ！？）

シャルロットはすぐさまその思いを頭から払う。
あれは、独逸が長い年月をかけて完成させたシステム。
スペインが使えるはずはない。
だから撃った。
その行為を消し去るために。
しかし、その銃弾が届くことは無かった。
銃弾はマルセラの周りを円で囲むように止まっていた。

「なっ！？」

よく見ると、その円には、ぼんやりと影が浮かんでいる。

「エネルギーシールド！？」

「ご明察」

マルセラはその円の中から、銃を構える。
それは『ガルシア』。
シャルロットは避けるより撃つことを選択した。

エネルギーならいずれはゼロになる。
ゆえに、『ＣＥＴＭＥ』で弾幕を張る。
すると、そのエネルギーシールドが形を崩した。

「対処は正解だけど、詰めが甘いわ」

すぐさま銃弾を浴びせようとしたシャルロットはその身に銃弾を食らうことになる。
なぜ、あの弾幕の中で銃を撃つことが出来たのか。
その答えは、簡単だった。

「バリアユニットが一つだと思っちゃダメよ？」

その機体の周りには、エネルギーのシールドが張られていた。
二重展開していただけだが、それは、シャルロットの不意を突くことに成功する。

「ほら、ぼさっとしないの」

マルセラは一つの武装を展開していた。
それは、映像の中で見たことがある。
サテライトレーザー。
全身装甲の機体ですらも真っ二つにする、レーザー兵器。

「元々は岩盤掘削用の物を改造したらしいんだけど、その威力は作った人が頭おかしいんじゃないかと思うぐらい強力よ。大丈夫。リミッターはかかっているから死にはしないわ」

マルセラは肩を竦めて見せる。
しかし、シャルロットはその動作に付き合っている場合ではなか

った。
シャルロットは必死に考える。
そんなもの食らったらひとたまりも無い。
しかし、その考えている時間が仇となった。
その砲口には光が集まっている。

「終わりなさい」

無慈悲なレーザーがシャルロットを襲う。
シャルロットは、一筋の望みをかけて、その右手を前に伸ばした。
瞬間、目の前で、レーザーがその動きを止めた。
すぐさまシャルロットは上昇。
その場から離れる。
展開したバリアユニットは一秒という短い時間だが、確かにレーザーを止めることができた。

シャルロットは、その身を震わせる。

あんなもの直撃していたらただではすまない。
しかし、そう思考するシャルロットは、笑っていた。

「これが、僕の望んだ道……」

シャルロットは、ただ上空を目指す。
そして、ある地点で止まると、そのまま地表を見下ろす。
シャルロットの行動を見守るようにマルセラは構えている。
まるで、指導するような戦い方。
それを、本気にさせてみたい。
そうするためには、この機体が変わらなければならない。

その準備は、整っている。

目の前のウィンドウにはただ一文字だけ。

『？Ｅｓｔａｓ　ｌｉｓｔｏ？（Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？）』

その言葉の意味はわからないが、それが何を示しているかはわかった。

シャルロットはその文字に触れる。

その言葉に答えるように。

瞬間、変化が訪れた。

シャルロットの身を纏う装甲が光の粒子に弾けて、そしてまた形を成す。

新しく形成される装甲はまだ薄くぼんやりと、光を放っている。

先ほどまでの実体ダメージが全て消え、その装甲はより洗練された形となる。

一次移行。

この瞬間、『ソラ』はシャルロットの専用機となった。

『シャル、ここからが本番だよ』

アリーナに沙良の声が鳴り響く。

その声を待っていたと言わんばかりに、マルセラがその身をシャルロットに肉薄させる。

握られているのは見たことが無い銃。

だから、距離を取らず、シャルロットは接近戦に持ち込むことを選択する。

得意の高速切替で『禊』を展開し、機体を回転させ、その脚部ス

ラスターを薙ぎ払う。
しかし、その一振りは空を切った。
すぐさま連撃を放とうとするが、マルセラのほうが早かった。
射撃。
それは、散弾を放つショットガン。

「くっ！？」

シャルロットはすぐさま、マルセラの背後に回り込もうとする。
しかし、その行動は読まれていた。
シャルロットはその身に散弾を浴びる。
マルセラはシャルロットを見ていない。
銃だけをシャルロットに向け、引き金を引いたのだ。
シャルロットは、その一撃に、一瞬だが、動きを止めてしまう。
そのシャルロットにスラッグ弾が撃ち込まれた。
それで、終わりではない。
散弾が間を置かずに発射されたと思うと再びスラッグ弾が撃ち込まれる。

「連射式ショットガン『エステバン』。勝利の冠という意味を持つ銃よ」

その連続した射撃に、シャルロットの機体はその装甲を削られていく。

「あなたの機体は万能型。でもね、言ってしまえばこれといって特徴が無いだけ。勝つためには何か一つ、特別を求めなさい」

マルセラは大型のライフルを構える。

「最後はこれで沈めてあげるわ」

それはシャルロットの機体にも同じものが積まれている。

それは対物ライフル。

「『マリア』。神の贈り物という意味よ」

シャルロットは必死にその射線から逃れようとするが、その銃口はシャルロットを捉えて離さない。

嫌だ。負けたくない。

接近戦を挑んでも、バリアユニットで動きを封じ込まれてしまったらそこで終わりだ。

シャルロットは必死に機体を操る。

そのシャルロットの目の前に、とあるウィンドウが現れる。

『Ｄｉｖｉｎｇ Ｓｙｓｔｅｍ――Ｓｅｔ ｕｐ ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ．？Ｅｓｔａｓ ｌｉｓｔｏ？』

シャルロットはいきなり現れたそのウィンドウに迷いもせずに触れる。

『Ｓｈｏｕｔ，”ＤＩＶＥ”』

叫べ。

その指示通り、シャルロットは叫んだ。

「ＤＩＶＥ！！」

その叫びに反応して、『ソラ』はその装甲を閉じる。

それは潜水服のように隙間を埋めていく。
そのシステムは機体に使われている装甲の性能を最大限に引き出す。
深海の水圧にさえ耐えることのできるその装甲はあらゆる攻撃を耐え抜く。
その変化が終わり、状況を確認すると、シャルロットはあるものを見た。
マルセラが笑っているのを。
その笑みは、生徒を褒める、先生のような笑み。
マルセラは優しい笑みを浮かべたまま撃った。
シャルロットはすぐさま避けようとするが、機体は、思った通りには動かない。
システムを作動している『ソラ』は普段と同じ扱いかたでは思ったように動かない。
一撃で勝負を決めてもおかしくない銃弾が『ソラ』の装甲を削る。
負けた。
そうシャルロットは思ったが、試合終了のブザーは鳴っていない。
不思議に思ってシールドを確認してみると、四分の一だが、残っていた。
「それが『Ｄｉｖｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ』。使い方を覚えておきなさい」
その後ろから聞こえる声に、シャルロットは咄嗟に反応する。しかし、そこにあったのはグレネードだけだった。
爆発。

衝撃を防ぐため、シャルロットは腕を盾に、その身を真後ろに飛ばす。
それは、とある結果を生んだ。
とんだ先には、
「いらっしゃい」
マルケスが『祓』を持って待ち構えていた。
その大型ランスがシャルロットに突き刺さる。
「ぐっ！」
その機構により、衝撃が装甲に通り、シャルロットは息が詰まってしまう。
そのランスに突き刺さったままのシャルロットを、マルセラは地面に叩き付けた。
「――っ！」
すぐさま立ち上がろうとしたシャルロットだが、その機体には、Ｄｉｖｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍを作動させているマルセラが馬乗りになっていた。
「楽しかったわよ？　あなたはまだ伸びるわ」
マルセラは至近距離で『ガルシア』をぶっ放した。
その銃弾はシャルロットのシールドを削る。
マルセラが、『ガルシア』を撃ち終った瞬間、試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

第四十二話　決意の模擬戦（後書き）

これにて、模擬戦は終わりです。
無事に機体をシャルに渡せてよかったです。

作者が文化祭のため、金曜日から火曜日まで、執筆ができなくなるかもしれません。
なので、更新が遅れます。
もしかしたら時間を見て書くかもしれないので、「更新しないって言ってたじゃねえかよ!?」見たいな事を言われても僕はスルーを貫き通しますｗｗｗｗ
そのときはそのときなんで大目に見てやってください。

感想お待ちしております。

第四十三話　記念写真

沙良はモニター室から研究室に移動すると、自分専用のコンソールに腰をかける。
スリープモードになっていたコンピューターは、沙良のことを感知し、自動でシステムが立ち上がる。

十二個のモニターが順に光を映し出していく。
モニターに表示されるは先ほどの模擬戦の稼動データ。

その内の一つを沙良は真剣な目で見つめる。
そこには稼働率６２％と表示されている。

「シャルの方は予想値どおり。無事にシステムも作動したみたいだし、問題はないけど、使用武器がマルセラと同じなんだよね。シャルのほうにしか積んでない武装を使って欲しかったんだけどなぁ」

沙良は足をぶらぶらさせる。
切り替えたモニターには、シークエスト・カスタム・マルセラのデータが表示される。

「マルセラは予想以上に良く動けてたなぁ。機体の反応に追いついてきてる。また調節しないとなぁ」

「ふふふ、光栄ね。よく動けたなんて良い褒め言葉じゃない？」

「ひゃっ！？」

沙良はその声の主の登場に身を強張らせる。

それは、急に現れたからではない。

それは、マルセラがとある行動を取っているからである。

「ちょっと、マルセラさん!?　なにしてるんですか！」

シャルロットが、その行動に気付き沙良へと駆け寄る。

「何って……胸を揉んでるだけよ？」

「それがおかしいんですよ!?」

何事もないかのように答えるマルセラに、シャルロットは激しく突っ込みを入れる。

「ちょ、ちょっとマルシー？　その手を離してくれないかな？」

「あら、私にお願いするの？　それならもっと可愛らしく言わないと。さぁ、さぁ、さぁ！　おねだりしてみなさい！」

「ザイダさーん。ここに変態がいまーす!!」

沙良の呼びかけに、すぐさまザイダが飛んでくる。

「はいはーい、変態を受け取りに来ましたー」

ザイダはマルセラの首根っこをしっかりと掴むとその身を沙良から引き離す。

「あぁぁ、私の癒しが……」

「はいはい、大人しく軍に帰りなさい。言いつけるわよ？」

ザイダに本社直結通路まで引きずられていくマルセラを見送り、沙良はほっと一息つくのだった。

これが沙良がマルセラを苦手な理由。

セクハラ癖が強いのだ。

そのターゲットは沙良のみではなく、様々な部署からセクハラの被害届が出ている。

普段は面倒見もよく、気が利き、仕事もできる優秀な人間なのだが、たまに出るセクハラ癖だけが欠点である。

「に、賑やかだね」

シャルロットのフォローがやけに虚しく響くのだった。

◆◇◆

沙良は、機体を整備するためにシャルロットからペンダントを受け取る。

「やっぱりシャルのもペンダントなんだね」

シークエストシリーズは待機状態がペンダントの形になるものが

多い。
それはカスタム機でも同じだ。
沙良はそれを待機状態から解除し、重機により所定のハンガーに設置する。

重機を操る作業員に礼の言葉を告げ、沙良は工具セットを持って機体に近寄る。
沙良が肩を回し、工具を取り出すと、周囲に光の粒子が集まって形を作る。
それはぱっと見ＩＳの腕のように見える。
それが左右一対ずつ展開されている。

「これは……ＩＳ……？」

驚きを隠しきれないシャルロットに沙良は人差し指を振り、答える。

「違うよ。これは移動型ラボ。あの篠ノ乃博士が作成した特別製だよ」

沙良の指の動きに連動して、二対の腕が指を振る。
それを見てシャルロットは顔を強張らせる。
沙良もその気持ちは良く分かる。
最初にこれを渡されたときは同じ顔をしていただろう。

沙良は苦笑いを浮かべながら、腰に工具セットを巻きつけると、そのままＩＳ用の工具を両手に持つと『ソラ』に向かい合った。

『ソラ』の装甲を右部アームにより切り開く。
それを左部のアームと一緒に押さえておく。

その開いたスペースに沙良は身を乗り入れると、すぐさま内部機器を引きずり出した。

「な、何をするの？」

シャルロットは恐る恐る声をかける。

「スラスター系の配線を弄ってるんだ。さっきのデータから一次移行によって効率がダウンした箇所があったからね。すぐに弄った方が定着が良いから」

その言葉の通り、沙良は配線図を確認しながら両手を忙しなく動かす。

作業用ゴーグルをつけ、ＩＳのオイルに塗れながら作業を続ける沙良は、ふと視線を感じ、横を向く。

そこには、作業ではなく沙良の顔を凝視していたシャルロットの姿があった。

「ほえ？」

急に顔を合わせる形となったシャルロットは変な声を上げる。

「どうしたの？　僕の顔になんか付いてる？」

沙良の言葉に、初めて自分が沙良の顔を凝視していたことに気付いたのだろう。

シャルロットはわたわたと慌てだしてしまう。

「べ、別になんもないよ？」

その目が泳いでるシャルロットを追求するより、整備の方が優先と考えた沙良は、首を傾げ作業に戻るのだった。

◆◇◆

シャルロットは沙良に言われて、ようやく自分が沙良の顔を凝視していたことに気づいた。
シャルロットは見惚れていた。
沙良のオイルに汚れた凛々しい顔は、普段見せる温和な表情とのギャップにより、シャルロットの心を鷲掴みにしていた。

優しげに微笑む顔も、困ったように笑う顔も、拗ねた様に口をとがらせた顔も、悲しそうに歪ませた顔も、真剣な顔も、感情のままに怒る顔も、色んな表情を見てきた。

短い間だが、クラスメイトには負けないほどに沙良の表情を見てきた。
そのどれもがシャルロットの心に響く。
今まで感じたことのない感情。

心を殺す日々から開放されただけではなく、誰かを大切に思うこともできるようになった。
今は幸せと答えても良いだろう。

しかし、シャルロットは罪を犯した自分がのうのうと幸せに浸って良いとは思えなかった。

沙良には許しを得た。
しかし、沙良がシャルロットを許したとしても、シャルロット自身が自分を許せなかった。
罪を犯したものには厳罰が必要。
それはいつの時代でも変わらないことだ。
シャルロットは悩んだ。
自分が本当に沙良の近くに居て良いのかと。
一緒に居るべき人間なんかじゃない。罰を受け、ひっそりと生きていた方が良いのではないかと、そう考えたこともある。
それでも、シャルロットは沙良の近くに居続けようと決めたのだ。
それは、沙良のとある姿を見てしまったため。
真夜中、ふと目を覚ますと隣のベッドに沙良の姿がなかったことがある。
不思議に思い、ベランダを見ると、両肩を押さえて震える沙良の姿があった。
シャルロットは動けなかった。
それは言葉が聞こえてきたから。
沙良はこう言ったのだ。
怖いと。
本当にこれでいいのかと。
ただ一言そう言ったのだ。
普段まったく弱さを見せない沙良が、部屋で一人震えていたのだ。
それを見たときにシャルロットは決めたのだ。
この背中を支えようと。

守るのではない。
守られるのではない。
支えられるように、ただ力になれるようになろうと。
何が、どんなことがあっても、自分だけは沙良の味方でいようと。
何があっても、沙良のために身を犠牲にする。
それが例え何を意味するものでも。

それが自分の贖罪。

誰でもない、自分が決めた贖罪。

「シャル？　どうしたの？　怖い顔してるよ？」

ふと顔を上げると、沙良が心配そうにこちらの顔を覗き込んでいた。
思考の海に嵌っていたようだ。両手はきつく握り締められている。

肩に入っていた力を抜くと、沙良に笑みを向ける。

「大丈夫。考え事してただけだから」

「疲れが溜まってるのかもしれないね。時間も遅いしそろそろ切り上げようか」

沙良は『ソラ』の整備を終わらせるように、内部機器を元に戻していく。
装甲も特殊な溶接機器を以って溶接していく。

「そんなに厳重だっけ？」

シャルロットはラファールに乗っていた経験から会話を切り出す。

「たぶんここまでやってるのはシークエストだけじゃないかな。僕らは海に入るから、装甲は重大なファクターなんだよ」

深海にまで活動範囲があるシークエストなら、確かに必要なのかもしれない。

シャルロットは一人頷く。

「よし、ここをこうしてっと。出来た！！」

沙良は調節が終わった『ソラ』を一撫でする。

その触れ方は慈愛に満ちている。

シャルロットは同じように『ソラ』に触れる。

そのまま機体を待機状態に戻すと、光の粒子が周囲に集まり手のひらにペンダントが残った。

ペンダントとなった『ソラ』を首にかけると、壁に掲げられている大時計が視界に入る。

「もうこんな時間なんだね」

時刻は二十三時五十分を回ったところだ。

しかし、周りを見ても作業中の職員も多い。

「終業時間ってないの？」

「特にはないよ。好きな時間に来て、好きな時間に帰る。結果が出せれば良い、それが研究室のルールだから」

「あ、アバウトだね……」

「みんな結局は帰ろうとしないからね。ほぼ研究室に寝泊りしてる状態の人も居るし」

それは皆が好きで残ってるということだろう。それだけこの環境が愛されているということでもある。

「いい職場だね」

「僕的にはもうちょっと体に気を使って欲しいんだけどなぁ」

「僕だって沙良にもうちょっと気を使って欲しいよ」

「みんなに言われるよ」

沙良は指で頭を掻きながら苦笑いを浮かべる。

「とりあえず今日はここまでにして、帰ろっか」

沙良が、そう言い、ハンガーから出ようと出口にむかうが、その動作がピタリと止まってしまう。

「沙良？」

シャルロットは不思議に思い、首をかしげると、沙良がどうしようといった顔で振り向いた。

「シャルの泊まる所、手配するの忘れてた……」

◆◇◆

「ごめんね、こんな部屋で」

沙良は申し訳なさそうに頭を下げる。
それにシャルロットは慌てて手を振る。

「い、いや全然そんなことないよ!?　むしろ、沙良の家にお邪魔できて良かったって言うか、部屋が綺麗過ぎるって言うか……」

シャルロットはふかふかのベッドに座りながら、沙良に頭を上げるように促す。

「そう言って貰えると嬉しいよ。普段、家に人を呼ぶことがないから慣れてないんだ。ごめんね」

そう、シャルロットは沙良の家に泊まりに来たのだ。
申し訳なさそうにしている沙良には悪いのだが、シャルロットは内心興奮を隠せなかった。
予想もしていなかった、お家へのお呼ばれに、シャルロットのテンションは上がっていく。

「ゆっくりしてて。飲み物とって来るよ」

沙良は部屋から出て行く。
沙良が居なくなったこともあり、シャルロットは、つい部屋を見

渡してしまう。

大きなベッドが窓際に鎮座し、机が壁際に設置されている。
本棚には何ヶ国語かの本が並べられている。
中央に置かれたテーブルは、その部屋の雰囲気を作り出している。
その全ての場所に飾られているものがあった。

写真だ。

それは様々な場所で、多くの人間と写っていた。
その中でも最も多いのは、

「一夏との写真だ……」

一夏と楽しそうに笑いあう写真。それは幼い頃の写真もあれば、
中等部の頃らしき写真もある。
おそらく毎年撮っているのだろう。
そこには成長の記録が確かに刻まれていた。

そしてその次に多いのは、研究室のメンバーらしき人物達と写っている写真。
その中でも特に多く写っている人物が居た。

「この人……ソフィアさんだよね？」

小等部の卒業式らしき写真には既に一緒に写っている。

「幼馴染ってことなのかな」

そのまま、部屋の写真を眺めていると気になる写真があった。

それは、体中生傷だらけのソフィアが号泣し、沙良が泣きながら慰めているというもの。そのソフィアの手には一枚の紙が広げられている。

「これは、何の写真だろう」

「それはソフィが代表候補生に選ばれたときの写真だね。懐かしいなぁ」

「せ、セラ……」

シャルロットはいつの間にか帰ってきてた沙良に驚きを隠せない。勝手に写真を見ていたこともあり、身を小さくしてしまう。

「はい、これ。ココアでよかったよね」

「う、うん。ありがとう」

チラリと横目で沙良を窺うと、気にしていないようでほっと胸を撫で下ろす。

シャルロットはココアを一口飲むと、言葉を紡ぐ。

「この部屋って、すごく写真が多いんだね」

シャルロットは目線だけで写真を見渡す。

「そうだね」

沙良はココアを一口飲むとまた口を開いた。

「一夏と一緒に暮らしてたときから定期的に写真を撮ることにしてるんだ。その時に誰が傍に居たか忘れないようにね。そうしたら純粋に写真に残したいことが多くなっちゃって。変かな？」

「ううん。僕はとっても素敵なことだと思うよ」

そのシャルロットの言葉に、沙良は嬉しそうに微笑む。

「そうだ、シャルも一緒に写真撮ろうよ！」

沙良は急に思い立ったように声を上げる。

「僕も？」

「そうだよ。シャルの入社記念。みんなで一緒に写真に写ろうよ！そうと決まればみんなに声をかけないと」

沙良はすぐに寝室から飛び出していく。

部屋の奥から話し声が聞こえるため、おそらく電話をかけているのだろう。

「シャル！　みんな出てくるって！　僕らも行こうよ」

「ま、待ってよセラぁ！」

シャルロットは急いで沙良の背中を追いかけるのだった。

第四十三話　記念写真（後書き）

遅くなって申し訳ありません！！
学校が忙しくなったので中々執筆の時間が取れなくなってしまいました。
ゆっくりとですが更新していきますので応援よろしくお願いします。
感想もお待ちしてます。

第四十四話　ドルフィン

沙良は優雅に紅茶を飲んでいた。
気を利かせた研究員が淹れてくれたものだ。
激務の間の小休止。
その少ない休憩時間を沙良はコンソールから動くことなく過ごしていた。
普段は休憩室に行くか、ソファーに座って社員と喋ったりしているのだが、今はある人物を目で追っている。

「シャルロット！！　さっきのデータはまだ！？」

「す、すみません！！」

「シャルロット！？　ここの数字間違ってるわよ！？　やり直しなさい！！」

「すみませんっ！！」

「シャル。二時間後に武装テストをするから」

「え、今それどころじゃ……」

「それまでには終わらせなさい」

「で、でも……」

「上司の発言には口答えしない！！」

「は、はい！！」

「新人！！　入社の書類が出てないわよ！！　早く本社の庶務課に出しに行きなさい！！」

「す、すいません！！」

「シャルロット、ＩＳスーツの採寸があるから一時間後に本社の総務課に顔出して」

「一時間後……」

「シャル、三十分後の会議までにこの資料作っといて」

「そ、そんな……」

忙しく走り回る社員の中でも慌しく動く一人の少女を眺める。
その姿を見ているだけで、微笑ましくなる。
新人が入るたびに見ることになる光景に懐かしさを感じる。
この風景は沙良が入社して五年経った今でも変わらない

Ｓ・Ｑ社の中でも第一深海作業開発研究室は希望倍率が高く、中々入ることができない。
その倍率は４００倍を超える。
沙良がＩＳ学園に入学することが決定してから、新しく職員を入れたようだが、そのときも同じような光景が広がっていたに違いない。

この研究室に求められるのは即戦力。

ゆえに、初日から仕事を押し付けられてしまう。

ただでさえ人手不足なのだ。いくらテストパイロットとはいえ、研究員として入社したからには研究や雑務もこなしてもらわなければならない。

例え、明日ＩＳ学園に帰るといってもそれは変わらない。

「セラ、休憩中にごめんね。さっきのデータ纏められてる？　至急必要になったんだけど」

「ああ、出来てるよ」

「部長！　すいません！　データに間違いがあったみたいです」

「あぁ、ここは入力するデータが違うんだ。Ｂ－２６４のデータに置き換えて提出して」

「セラ、休憩中に御免だけど仕事が追加よ。一時間後にモニタールームでテスターをやって欲しいの」

「了解。詳しいデータを端末に送っといて」

「セラ！　本社から納品のミスがあったって！　部署の子が謝りに来てる！」

「うん、わかった。十分後に行くから応対室に通しておいて。出来たら先に内容聞いて対処。個人で判断できなかったらロサに通して」

「セラ、報告書が届いたから置いとくわよ」
「ありがとう。コンソールの上に積んどいて」
沙良は、紅茶から手を離すことなく対応する。
飽く迄も休憩中なのだ。
そこに仕事は入れたくない。
「大変だねぇ、セラ」
コンソールから動くことのない沙良に、声がかけられる。
声のした方に顔を向けると、白衣に身を包んだロサが
「あ、ロサお疲れ様。ロサも休憩中？」
「まぁそんなところだね。すまないね、仕事で帰ってきたわけじゃないってのに。あの子達も仕事ができないってわけじゃないんだけど、セラがやるのとは比べ物にならないからね」
その口からはため息がこぼれていた。。
その疲れきったロサの姿に、沙良は苦笑を浮かべると、両手を上に向け、肩をすくめて見せる。
「まぁ、仕方ないと割り切ってるよ。当分の目標は新人教育だね」
「それはそうと、あの子は良いのかい？」
ロサの視線はシャルロットに向く。

「言われたとおりに、大量の仕事を押し付けておいたけど、そんなことして何になるって言うんだい？」

「純粋にここでの仕事に慣れてもらうためだよ。テストパイロットといっても、所属が研究室だから研究を疎かにしちゃいけないしね」

「あの子の姿を見てると、ソフィアの時を思い出すねぇ」

「二人ともコネで入ったようなものだしね」

「あえて厳しい状況において、あの子への非難を減らそうってことかい？」

「わかってるじゃん」

沙良は楽しそうに白い歯を見せる。
シャルロットは、せかせかと働いている。
その姿は働き始めたときのソフィアと重なる。
その姿を見て、沙良はあることを思いついた。
それはソフィアのときにも行ったこと。
そのときのソフィアは信じられないといった具合に悲鳴を上げていたものだが、シャルロットはどうなるだろう。
沙良はその顔に浮かぶ楽の表情を隠そうともしない。

「あ、そうだ。ねぇ、シャル」

沙良は、思い出したかのように装い声をかける。

「な、何？」

シャルロットは忙しそうに対応しながらも、沙良に声をかけられたのが嬉しかったのか、その声色は少し喜を含んでいる。
そのシャルロットの机の上に、自分の雑務を置く。

「はい、これ。僕らが帰るまでには処理しといて」

積まれた仕事は、今までの書類の比ではなかった。
沙良がやればおおよそ三十分程度の仕事。
それはシャルロットの仕事ぶりだと、おそらく二、三時間は掛かるだろう。
シャルロットの周りの空気がまるで時が動いていないかのように止まった。
そして、極み付けの言葉を言い放つ。

「仕事が片付かない限り、帰らせないからね」

シャルロットの悲鳴が研究室に谺するのであった。

◆◇◆

「ひどい目にあった一日だった」

シャルロットは荷物をバッグに詰め込むと、ベッドに腰をかけた。
その体はＩＳ学園の制服に包まれている。

思い返すと、大変だったが、有意義な一日だったかもしれない。
仕事自体は大変で、皆も鬼のように仕事を振ってくるが、いざ仕事が終われば、優しく接してくれる。
スペインに不慣れなシャルロットのために、皆が会社周りでお勧めの店などを教えてくれたり、沙良の昔の話を聞いたり、研究所で密かに製作されているセラコレクションとやらの存在を知ったりと、収穫の多い時間を過ごせた。

当然、セラコレクションはお買い上げしている。

今日、シャルロットと沙良はＩＳ学園に戻る。
日本とスペインの時差はおおよそ８時間。
ここからＳ・Ｑ社の沙良送迎用に開発されたジェット機を使い、約三時間から四時間のフライトの予定だ。
合計時間は約十二時間になる。
向こうに十二時に着く予定のため、出発予定時刻は二十四時になっている。
今の時刻は十九時。
仕事が終わり、家に帰って来たのだが、出発まで時間は残っている。

「少しの期間だったけど、お世話になったわけだし、挨拶だけでも行っておかないとなぁ」

シャルロットは社宅に部屋を貰うことになった。
その社宅は会社まで徒歩十分という立地条件のため、気軽に足を運ぶことが出来る。

「よし、一回街に寄ってザイダさんのお勧めのチェロスをお土産に買っていこうかな」

シャルロットはＩＳ学園の制服のまま、スペインの街に出かけるのだった。

「あれ？　シャルどうしたの？」

シャルロットは手に持った袋を掲げると、沙良は納得したように頷いた。

「わざわざ差し入れ買って来てくれたんだ」

「せっかくだし街にも行ってみようと思ってね。沙良はまだお仕事？」

その言葉に頷きが返ってくる。

「シャルは知ってるよね。シークエストの第三世代機ケートゥスシリーズ」

言われた名前に、頷くことで答えとする。

「これがそのケートゥスシリーズの一つ。名を『ドルフィン』」

最初にこの研究室に足を踏み入れたときから気になっていたもの。
全面ガラスの部屋にケーブルによって繋がれた白い機体。
その周りには研究員が群がって作業している。

「帰る寸前まで作業なんて大変なんだね」

「僕しか出来ないことだしね」

その言葉に、シャルロットは首を傾げる。
その理解が足りていないシャルロットの様子に気付いたのか、沙良は説明を重ねる。

「そっか、シャルは知らないのか。ケートゥスシリーズの機体は、特殊な性質があるんだ」

「特殊な性質？」

「普通のシークエストと違って、僕らが機体を選んで専用機にするんじゃないんだ」

「うん？……えーと……」

「簡単に言うと、機体が、搭乗者を選ぶんだ」

その沙良の言葉に、シャルロットは驚きを隠せない。
確かに、ＩＳには自己があると言われており、それゆえにＩＳをパートナーと認識するのが今の流れだ。
しかし、ＩＳ自体が搭乗者を選ぶなんて聞いた事は無い。

「何でケートゥスだけが搭乗者を選ぶようになったのかは各説があるんだけど、そのおかげで、機体と搭乗者の相性は抜群なんだ」

その各説と言うのも気になるが、それよりも沙良の首に巻かれているチョーカーに目が行ってしまう。

「セラが専用機を二つ持ってるのって、もしかして」

「そ、僕が『オルカ』に選ばれたから」

おそらく『カルラ』は『オルカ』が完成していないから専用機としているのだろう。

「それじゃあ、ソフィアさんも？」

「ソフィは違うよ」

「え？　それはどういうこと？」

「あくまでも選ぶのはこうやって完成された機体だけなんだ。だから、元々使っていた機体をベースにケートゥスを作った場合はその限りではないんだ」

つまりは、ソフィアの機体は元々使用したシークエストをカスタムしケートゥスシリーズに仕上げたということになる。

沙良は簡単に言っているが、それは決して簡単なことではない。

それはバイクをベースに、車を作るようなものだ。

そこまで二世代と三世代では構造が違う。

「生憎、僕も『ドルフィン』に選ばれた訳じゃないんだけど、僕以

外の研究員には反応さえしないから仕方なくね。僕がやるしかないんだ」

「選ばれるとどうなるの？」

「選ばれると最適化（フィッティング）処理が行われるんだ。僕は初期化（フォーマット）は行われたんだけど、最適化処理は行われなくてね。でも他の人間じゃ初期化すら行われなかったから、僕がテスターをしてるんだ」

「セラの負担が大きいね……。僕も手伝えたらいいのに」

シャルロットは優しく『ドルフィン』を撫でる。
少しでも力になれたらいいのに。
そんな思いで触れる。

――ねえ、力が欲しい？

「え？」

シャルロットはパッと『ドルフィン』から手を離す。
その動作に沙良が訝しげな視線を向ける。

「あ、な、なんでもないよ！？」

シャルロットは手を胸の前で握ると、恐る恐る、その雪のような機体に触れる。

――もう一度聞くよ？　力が欲しい？

先ほどの声は気のせいではなかったようだ。

あまりのことに、シャルロットは頭が真っ白になる。

――聞こえてる？

声が離れていく。

シャルロットは慌てて聞こえてると強く念じた。

――ああ、良かった。声が聞こえたのは君で三人目だよ。

その言葉にシャルロットは選ばれたわけじゃないと悟る。

――さぁ、問いに答えて。

シャルロットは考える。

力が欲しいかといわれれば、それはもちろん欲しい。

この世の中は力が無ければ淘汰されてしまう。

どんなに容姿が良くても、どれだけ頭が良くても、どんなにお金を持っていても、それは力が無ければ、食い物にされるだけだ。

進化し続けていくためには、生き延びていくためには力が必要。

それをシャルロットはデュノアで学んだ。

だからこそシャルロットは答えた。

『欲しいけど……いらない、かな』

――なんで？

聞き返してくる声色は心なしか楽しそうに聞こえる。

『僕は沙良を守りたいわけじゃないんだ。ただ、近くで支えていたい。それだけ。力なんて無くたって支えることは出来るから、無駄に重荷を増やすことなんて無いよ』

力を持つものが近くにいるなら、自分が力を持つ必要はない。自分がその力になりたいと願っているのだから。

――わかった、じゃあ力はあげない。

『うん、なんかごめんね』

――ふふふ、君は面白いね。……うん、決めた。僕が――

シャルロットの周囲にモニターが現れる。
その数はあっという間に十を超え、そして百を超える。
シャルロットは急なことに反応が遅れ、身動きが取れなくなる。
そのモニターに覆われる形になったシャルロットに研究員が慌てた声を上げる。

「システムを落とせ!!」

「回線はどうなっている!?」

「モニター!!　データを!!」

「救助に入る!!」

シャルロットは一言、大丈夫と発しようとした。
しかし、その声が出ることは無かった。

「大丈夫、シャルを信じよう」

沙良が、そう言葉を発した。
すると、周りの喧騒が嘘の様に収まる。
そのタイミングを見計らっていたかのように、モニターが一斉にスクロールする。
流れていくのは『ドルフィン』のスペックに、

「これは、僕のデータ？」

見覚えのある数字は、シャルロットが自分でまとめて報告した自分の稼動データである。
情報の乱流は収まることは無く、その勢いを増していく。
その様子に、周りが息を飲むのが分かる。
少し、注意を外に向けると、パッとモニターが霧散する。そして、『ドルフィン』が光の粒子に変わり、シャルロットの体に纏わりついた。

しかし、その粒子は形を成さない。

疑問に思った瞬間、シャルロットにだけ見えるようにモニターが現れた。
そこに表示された文字を見て、シャルは微笑を零した。

――僕が、君を支えてあげるよ

「よろしくね、『ドルフィン』」

その言葉を待っていたかのようにドルフィンがその形を成した。

――Ｓｔａｒｔ　ｓｙｓｔｅｍ，Ａｃｃｅｓｓ――

――Ｆｉｔｔｉｎｇ　Ｓｔａｒｔ――

――Ｓｅａ　Ｑｕｅｓｔ　Ｄｉｖｉｎｇ　ｓｙｓｔｅｍ，Ａｃｃｅｓｓ――

――搭乗者を確認、搭乗者を登録――

――Ｓｅｃｒｅｔ　ｓｙｓｔｅｍ，Ｓｔａｒｔ　Ａｃｃｅｓｓ――

――皮膚装甲展開……完了――

――推進器稼動確認……完了――

――ハイパーセンサー最適化……完了――

――ようこそ。そしてよろしくね、シャルロット――

◆◇◆

「もう無理ぃ……」

「お疲れ、はいコーヒー」

モニタールームに入ってきたシャルロットに、用意していたコーヒーを渡した沙良は、そのままモニタールームのソファに腰を下ろした。
横をポンポンと叩くと、意図を察したシャルロットがそこに腰を落とす。
疲れが溜まっているのか、シャルロットは自然に沙良にもたれ掛かった。
その体は動くことを拒否しているように見える。

「疲れたぁ……本当に、本当に疲れた……」

まさしく疲労困憊といった具合でうめき声を上げる少女を、研究員はみな良くやったと言わんばかりに微笑を向けている。
時刻は既に二十四時を回っている。

あれから休憩を挟むことなく機体のテストや実験、調節を繰り返した少女は、弱音を吐くことも無く、それを乗り切った。
シャルロットが乗ることになった『ドルフィン』は未だに完成してはいない。
今までまともに乗れる者が一人もいなかったのである。
装甲や、スラスター系は沙良がテスターをしていたため、形にすることは出来ていたが、肝心の特殊兵装だけはその限りではなかったため、案だけが溜まっていく一方だった。
その装甲や、スラスター系も沙良がＩＳ学園に入学したことで触ることが出来なくなり、出来ることはプログラムや、武装などの限られた部門だけだったのだ。

そこに、ようやく機体に選ばれた搭乗者が現れたのだ。

試したかったことを我慢できる研究者など存在しないだろう。
時間はいくらあっても足りない。しかし、明日にはＩＳ学園に帰らなければならない沙良とシャルロットは、遅くても朝の九時までにスペインを出なければならない。

つまりは、寝ずのデスマーチである。

「次は二時半から武器のテストと特殊兵装のデータ取り、特殊兵装用のセンサー・リンクのテストね」

「つまりは二時間は寝れるんだね……」

シャルロットはふらふらとモニタールームから出て行こうとする。

「どこで寝るの？」

「コンソールで横になるよ」

いくら人体への負担を最小限に抑えたコンソールとはいえど、寝るように設計されているわけではない。寝ないよりはマシだが、それでも体の疲れが取れるかといえば頷き難い所がある。

「腰痛めちゃうよ？」

「……でも、他に寝る場所ないし」

「ほら、ここにおいで」

沙良はポンポンと自分の膝を叩いた。
しかし、いくら待ってもシャルロットが寄ってくる気配は無い。

嫌なのかと思い、肩を落とすと、慌てたように声が掛かった。

「あ、嫌とかじゃないんだよ？　その……いいの？」

その言葉に答えたのは周りの研究員たちだった。

「ほら、行った行った。ここでは当たり前のことなんだから遠慮すんな」

「デスマーチになると誰かしらが誰かしらの膝に顔を埋めることになるんだから、早く慣れなさい」

「セラがしてくれるのは珍しいんだからチャンス逃すと勿体無いわよ？」

その周りの声に負けて、シャルロットはおずおずと沙良に近づく。

沙良は笑顔で膝をポンポンと叩いた。

その笑顔に負けたのか、沙良の膝にシャルロットの頭がのせられた。

最初は緊張していたようだが、その疲れのせいか、時間を待たずに眠りに落ちていった。

「相当疲れてたんだね」

シャルロットの頭を優しく撫でる。

「そりゃあ、あれだけ酷使されてたらそうなるわね。ただでさえあの装備は集中力を使うのに」

「……なんで当たり前のようにここにいるの？」

顔を上げると、見慣れた顔がそこにあった。

「いちゃダメかしら？」

「良いわけないでしょ。早く本社に戻りなよ。そっちもデスマーチなんでしょ？」

いつの間に来たのか、珍しく髪を下ろしているカルラがのんびりと腰をかける。

「あ、それ僕のコーヒーだよ！」

「ケチケチしないの」

「それも僕のお菓子！！」

「けひけひしはひの」

「食べながら喋らないで！　ああ、もうほら口に欠片つけてる。ほらじっとして」

沙良はポケットからハンカチを取り出すとカルラの口を拭う。

「ふふふ、役得ね」

「何、意味のわかんないこといってんのさ。まったく、何しに来たの？　今、忙しいんだから」

「仕事から逃げてきただけよ？　向こうには癒しというものが足り

ないわ」

「あ、もしもし総務課ですか？　脱走者を確保しましたので引き取りに来てもらえますか？」

沙良はすぐに内線で引き取りを要求する。

「あ、ちょっと！」

「ああ、はいわかりました。捕獲しておきます」

その捕獲と言う単語が聞こえた瞬間、カルラは駆け出した。少しでも早くこの場を離れなければならないと言わんばかりの疾走。

いい年をした大人のするような行動では決して無い。

しかし、その足はすぐに止められることになった。

扉が開かないのだ。

「逃がさないよ」

逃がしてはならないものがいた場合はどうしたらいいか。

簡単な話だ。

閉じ込めてしまえば良い。

都合のいいことに、モニタールームに残っている研究員は全て『ドルフィン』にかかりっきりの為、この部屋を出ることは無いだろう。

数分後、引取りに来た本社の社員に引き摺られていくカルラの姿は憐れみの感情を引き起こすほど哀れだった。

第四十四話　ドルフィン（後書き）

最近スランプ気味で何回も書き直してるよ……
思ったような話が書けないんだよなぁ。
とりあえずお待たせして申し訳ない。
次は早く上げれるように頑張ります。

是非是非感想をお待ちしております。

第四十五話　エスパーニャ出発

それは処女雪のような白さだった。

誰も足を踏み入れたことの無い雪原。

穢れなき雪は純白ではなく、青の影を落とす。

その影は、昼でも夜でも変わることなくその輪郭を強調し続ける。

一夏の『白式』を「純白」と呼ぶなら、シャルロットの『ドルフィン』は「月白」や「藍白」と呼ぶべきだろう。

その姿は神秘的に見える。

それは、こんなアリーナという空間においても。

それは、こんな状況においてでも。

「待って!!　セラ、ちょっと待って!!　無理無理無理無理むーりー!!!!!」

目の前では藍白に身を包んだ少女が悲鳴を上げている。

その両腕は前に突き出され、必死に何かを堪えているように見える。

その手に対応するように、空間が歪んでいるのが確認されている。

鉄紺のような深青を纏っている沙良は、その歪みに躊躇無く弾丸を叩き込んでいく。

「本当に無理だって!!　限界!!　限界だから!!　僕が限界なら止めるって実験前に言ってたじゃない!?　だから引き受けたの

に！！」

悲鳴を上げつつも弾丸を空間に押し留め続ける姿を見て、沙良はにっこりと微笑んだ。

「シャル、人間はね、限界が来てるときには、喋ることなんて出来ないんだよ」

当たり前のように吐かれた台詞は、少女の顔を引きつらせた。
沙良は何食わぬ顔で引き金を引き続けていく。

「……騙したね？」

「人聞きの悪い。ちゃんと限界が来たら止めてあげるよ」

その言葉と同時に、壁からガトリングが突き出てくる。
笑顔を浮かべている沙良の顔を見て、シャルロットは察したようだ。

「ね、ねぇ嘘だよね？　冗談……だよね？」

シャルロットの顔から血の色が無くなっていく。
沙良はその笑みを濃くした。
その口が声を出すことなく、一つの形に動いた。

『撃て』

無言の命令にガトリングが火を噴いた。
まるで銃弾が豪雨のように藍白に迫る。
その銃弾は立ちふさがるものを蹂躙するかのように勢いを増して

いく。

しかし、その全てがある一定のラインを以って動かなくなる。

「お見事」

沙良がその手を止めると、周囲のガトリングもその空薬莢の排出を中断する。

「沙良……絶対に許さないから」

空間の歪みが消失し、空に浮いていた銃弾が地面へと行き場を変える。

藍白の機体は高度を下げると、そのまま地面にへたり込んだ。

限界が来たのだろう。

それはエネルギーが尽きたというわけではない。

純粋に、体力の限界が来たのだ。

まるで生まれたばかりの小鹿のように足を震わせている。

自力で立つことは難しそうだ。

その恨みがましい視線は沙良に突き刺さる。

『沙良』と呼ぶことにもその意が読み取れる。

「せっかく運んであげようと思ったのに、そういう態度取るなら仕方ないね」

沙良の言葉にシャルロットの顔が青ざめる。
沙良は片手を上げると、モニタールームの研究員に合図を送る。
それを見たシャルロットはそれが何の合図かを一瞬で把握し、慌てた声を出した。

「ま、待って、あれだけは許しあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

地面からいきなり出現した手のような機械に足を掴まれると、そのままピットまで連れ去られていく。
それは運ぶ相手のことを全くもって考慮していないため、終点のピットには毎回のようにゴミのように扱われた姿が確認されている。
これは、エネルギーが残っている場合なら、ただ運んでくれる便利な機能なのだが、こうもグロッキーになっている場合はバランスを取ることもできず、ただ引き摺りまわされるだけの悪魔の機能と化すのだ。
その腕に引き摺られていくシャルロットの叫び声はアリーナに反響するのであった。

◆◇◆

「沙良、僕はこんなにも君の事を憎く思ったのは初めてだよ」

熱いシャワーを頭から浴びながら、横で同じように熱いお湯をかぶっている少年に声をかける。

「ＩＳの研究は楽しいことばかりじゃないって学べたってことにしておいてよ」

横のシャワーを使う少年は、その体の線の細さを充分に見せ付け、のうのうと答えた。

その体はＩＳスーツを纏ったままである。

「はぁ、何を言っても無駄なんだろうなぁ」

思わずため息が出てしまう。

頭を洗いながら、身に付けているＩＳスーツに湯をしみこませていく。

「それにしても便利だね。このＩＳスーツ」

「でしょ？　うちの部署の自信作だよ」

沙良は胸を張って答える。

その姿に笑みがこぼれてしまう。

「まさか、これ着た状態でシャワーが浴びれるなんてね」

「もともと海水に濡れることを前提に開発をしたからね。今ではデザイン性の良さから、ウェットスーツの代わりにこのＳ・Ｑモデルのスーツを着るダイバーが増えているんだよ。保温も、体の保護もＩＳスーツの方が優れているしね」

沙良がＩＳスーツを摘まんで示す。
その体を纏う深縹のスーツの胸にはシャチの絵がプリントされている。
同じようにシャルロットの薄縹のスーツの胸にはイルカの絵がプリントされている。

「確か、スキューバの製品も扱ってるんだよね？」

「うちの売り上げの上位を占める大事な部署だよ。スキューバも僕らの研究室が関わっているから、いずれ担当者に会えると思うよ」

「スキューバかぁ。したことないなぁ」

「スキューバはすっごい楽しいよ。毎年夏になったらみんなで潜ることになるから、そのときに一緒に潜ろっか」

「うん！！」

夏にみんなで潜るということは、社員旅行か何かだろうか。
楽しいといっているのだから楽しいのだろう。
今から楽しみが増えたシャルロットは機嫌を直し、シャワーを止める。

「先に行ってるね」

「はーい」

シャルロットは、まだ知らない。
その夏の出来事が、楽しいことでは決して無いと。
それは、全社員による製品テストのデスマーチだと。
一日の半分以上を海の中で過ごす地獄の一週間だと。
このときのシャルロットは知る由も無かった。

◆◇◆

時刻は八時を過ぎていた。
既に荷物をジェット機に詰め込み、後は沙良を待つだけとなっている。
沙良は『ドルフィン』の最終チェックのため、ギリギリまで研究室で粘っている。
シャルロットと違い、こちらにも家がある沙良は最初から荷物を持ってこなかったらしい。
結局、一睡もすることがなかった沙良の背中を、シャルロットちらっと盗み見る。
手伝おうとはしたのだが、何をしているのかがさっぱり理解でき

なかったため、ソファーにトボトボと引き返したのだ。
今は、専用機である『ソラ』のスペックを眺めている。
『ドルフィン』に選ばれたとはいえ、その『ドルフィン』がまだ完成に至っていない。
故に、シャルロットは『ソラ』を専用機として持つことを許されている。

「そういえば、ケートゥスが搭乗者を選ぶ原因に各説があるって言ってたよね。それってどんな説なの？」

シャルロットの問いかけに、沙良は作業を止めることなく、口だけを動かして答える。

「あれ？　『ドルフィン』から聞いてない？」

その言葉に、シャルロットは首をかしげる。
『ドルフィン』から聞く。
その言葉の意味に気付くのに少しの時間が掛かった。

「ケートゥスシリーズの機体には意志があるの！？」

「普通のＩＳよりちょっと自己が強いって程度だよ」

確かに、自分はドルフィンと会話をした。
それは最初の選択の時もそうだが、実験中もちょくちょくと声がかけられていた。
その時のことを思い出してみる。
確か、『ドルフィン』はこういったのだ。

――僕らは『リストアップ』だからね。

「リストアップ、そう言ってた」

その時は、言葉の意味がわからなかったが、それが答えなのだろうか。

「僕は、そのリストアップを用いて作ったからだと思ってる」

「ちょ、ちょっと待って。そのリストアップってなんなの？」

当たり前のようにリストアップという単語を使う沙良に、シャルロットは待ったをかける。

「シャルはこの世の中に、コアが何個あるかは知ってるよね？」

「えっと、確か４６７個だよね」

「教科書どおりならそれで正解なんだけどね」

「……あの噂って本当なの？」

それは、一時期広まった『コアの数は５００を超えている』というもの。

しかし、それは出任せと言われ、人々の記憶から薄れていった。

「コアナンバー４６８から５１２までのコア。それを元々の目録か

ら外れた物ということで『目録外（リストアップ）』と呼ぶんだ」

「５１２……。で、でもよくそれが表に出てこなかったね。普通なら出てきてもおかしくない情報なのに」

「姉さんが何かしたんじゃないかな？　なぜかエスパーニャに十個も送られてきたし」

「姉さん？」

「ああ、篠ノ乃博士のこと」

言われてセラコレクションの中に一緒に写っていた姿を思い出す。何が一番驚いたかというと、そこに篠ノ乃博士がいることに、誰も何も思ってなかったことだろう。

（篠ノ乃博士って、世界各国から狙われてるんじゃなかったっけ？）

自分の中の常識がことごとく否定されていく。

「もともと、僕が、第三世代を作りたいんだけどコアが少ないから厳しいってぼやいてたら送られてきたものだしね」

シャルロットは口をぽかんと開けたまま、固まってしまう。

あんなに各国がコアを手に入れようと躍起になって篠ノ乃博士を追っているのに、あんなにも他国にコアが渡らないようにアラスカ条約を制定したのに、こんな簡単なことでコアが作られていたのか。

「送られてきたコアは、従来よりＩＳの意識が強く現れているのが

分析によってわかったからね。僕らはその意識を尊重して機体を作ったんだ。その意識が機体に影響を与えているのが原因じゃないかって僕らは考えている」

その説よりもシャルロットは気になる発言を耳にした。

「分析……？」

それは未だに出来ていないはずじゃないのか。

シャルロットの疑問に答えるように沙良は何でもないように答える。

「流石に作り出すのは無理だけどね。ある程度なら分析できるよ」

姉さんがコアを作っている時に傍にいたし。

そう締めくくった沙良に、シャルロットは言葉が出なくなるのだった。

◆◇◆

ジェット機の中で、シャルロットはソファーに腰を下ろして、の

んびりとコーヒーを飲む。
仮眠を取ろうかと思ったが、沙良が起きているため寝難いということもあり、今はゆったりとした時間を過ごしている。
沙良は寝てもいいよと言ったのだが、時差の関係もあるしと言って誤魔化しておいた。

「なんか色々あった三日間だったね」

観光に始まり、仕事に追われ、デスマーチを乗り越えた。
疲れが溜まっているのだろう。シャルロットの目の下には隈が出来ている。
しかし、その対面に座る沙良にはその疲れの色が見えない。
今も空中投影型のディスプレイを三つ浮かべ、仮想キーボードを叩いている。

「沙良は疲れてないの？」

声に力が篭っていないのが自分でもわかる。
シャルロットは、いまだ嘗てないほど疲れているんだと、自分の体に苦笑する。

「疲れてるけど、僕の仕事はデスクワークが殆どだからね。肉体労働のシャルとは疲労が比ではないよ」

そういう沙良だが、シャルロットは一睡もせず働き続ける沙良を見ているため、その言葉を謙遜と受け取る。
実際に、シャルロットが見ていないところでテスターをしていることはザイダに聞いている。
机に積まれた栄養ドリンクは、沙良の疲れを表しているに違いない。

しかし、沙良は働いたことでの疲労を指摘されるのを嫌う節があると聞いているため、深く掘り下げないように気をつける。

「今は何しているの？」

選んだのは話を逸らすことだった。

作業中に声をかけるのは躊躇われる所だが、沙良が同時思考をなんとも思っていないのはこの三日間で学習済みである。

一度、作業中のため、話しかけるかどうかでうろうろしていたら、「何？　用があるなら早くしてくれない？　うろうろされると気になるんだよ」と機嫌が悪そうに言われてしまったことがある。

あの時はあまりのショックに仕事に支障をきたしそうになったが、新人が通る道と言われ、実際に他の人が同じように叱られているのを見て、どうにか持ちこたえた。

あれ以降、沙良が作業中でも話しかけることにしている。

沙良も誰かと話ながら作業している方が気楽らしい。

「ん、今は『ドルフィン』のスペックをまとめてるんだ。今のうちにやっておかないと、時間が足りないからね」

「そっか。次は夏休みになるのかぁ。またあのデスマーチが続くと思うと背筋が凍りそうだよ」

シャルロットは辛かった実験を思い出し、苦笑を浮かべる。

「なに言ってんの？」

沙良が首をかしげる。
その言葉にシャルロットが首をかしげる。
お互い顔を見合って首をかしげるという不思議な光景が出来上がった。

「え、どういうこと？」

先に言葉を発したのはシャルロットだった。

「だって、夏休みまで待つなんてそんなもったいないこと僕がするわけないじゃん」

シャルロットはその言葉に嫌な予感がした。
その予感は当たることになる。
沙良は、ハードケースからとあるものを取り出した。
それは、見覚えのあるもの。
藍白のボディに黒と青のラインが入ったチョーカー。

「ドルフィン……」

その姿を見ただけで理解できる。
ここに『ドルフィン』があるということ。
そもそも、沙良がいれば研究は出来るのだ。
ＩＳ学園にはフィオナもいる。
ＩＳを作った前例があるのだ。
容易に想像できる。
あのデスマーチがＩＳ学園で繰り返される光景が。

「じょ、冗談だよね……？」

ここ数日で口癖のようになってしまった言葉を呟く。
その返事はいつもシャルロットの望む言葉を返してはくれない。

「休日なんてあるとは思わないでね」

天使のような満面の笑みで振り下ろされる死神の鎌。
それはシャルロットの顔から表情を消し去る。

「せっかく搭乗者が現れたんだから、利用しない手はないでしょ。言ってたよね、僕の役に立ちたいって。だから、役に立ってもらうよ？」

本当にあの似顔絵の人物と同じ人物なのか。
あの天使のような少年と同じ人物とは思えない。
沙良の天使のような笑みの裏に、確かに悪魔の顔を見たのであった。

第四十五話　エスパーニャ出発（後書き）

ようやく、ＩＳ学園に戻ることが出来ました。
ＩＳ学園でも、シャルロットさんは休みもなく働かされるんだろうなぁ。
ようやくラウラの最後のイベントですね。
ラウラがどっちに転がるかは、乞うご期待。

感想はいつでもお待ちしております。

第四十六話　接吻

「ただいまー」

「ただいま」

沙良は部屋につくなり、ベッドにその身を投げ出す。
やはり疲れは溜まっていたようで、横になったとたんに眠気が襲ってくる。

「沙良？　寝るなら着替えてから寝ないと皺になっちゃうよ？」

流石に恥ずかしいのか、シャルロットはＩＳ学園では沙良と呼ぶことにしたようだ。

シャルロットが優しく沙良の体を起こす。
シャルロットは少しだが仮眠を取っていたため、幾分か疲れが取れているようだ。
その首には図らずも沙良とお揃いという形になったチョーカーがその存在を主張している。

「寝る前に、千冬姉にシャルの帰化によるデータ変更の手続きの紙を出さないと……」

そう言うものの、体は動くことを良しとはしない。
いつまでたっても動こうとしない沙良は、何を思ったのかもう一度ベッドに横になってしまう。
その姿を見て、シャルロットはため息をつく。

「わかったよ。僕が出してくるから沙良はそれまでに寝巻きに着替えておくこと。いいね？」

沙良はコクコクと頷く。

「じゃあ、ちょっと行ってくるね」

シャルロットが部屋を出る。

その足音が聞こえなくなるのを確認すると、沙良はむくりと起き出した。

周りを警戒するように気を尖らせる。

その視線は部屋を一通り通り過ぎていく。

視線がベッドに止まる。

そして、ベッドの下に手を突っ込むと、小さな物体を引っ張り出した。

出てきたものはペンだった。

それは一見するとただのボールペンに見える。

しかし、持ってみるとわかる。

ペンにしては重心が前に偏っている。

ボールペン型会話用盗聴器だ。

留守にしていた三日間のうちに付けられたのだろう。

その盗聴器に口を近づける。

「部屋に盗聴器仕掛けたのは気付いてるから、早く機嫌取りに来た方がいいよ」

言い終わるとすぐさまペンを圧し折る。
もちろん、沙良にそんな力はなく、ＩＳのサポートを借りての行動だが。

沙良が盗聴器に気付いたのは部屋に入る前のことである。
普段から機密を扱う仕事をしているため、もし誰かが部屋に入ってもわかるようにと、エスパーニャに発つ前に簡単な仕掛けを用意しておいた。

それは蝶番の合わせに突起を付けるというもの。
扉を開くと、傷が残るようになっている。
ピッキング対策は万全だったため、犯人は鍵を開けて入ることが出来る人間。
そう考えると、出てくる人物は絞られてくる。

「早く入ってきなよ」

◆◇◆

「あら、やっぱりバレてた？」

かけられた声に反応を返して、ドアを開ける。
部屋に入った瞬間に沙良は、圧し折った盗聴器を投げつけてきた。
しかし、それは扇によって防ぐことに成功する。

沙良は舌打ちする。
その機嫌の悪さを隠そうともしない。
不躾な視線を生徒会長である楯無にぶつける。

「契約は破棄と、そう捉えていいのかな？」

沙良の声色は恐ろしく冷たい。

「あら、ただ盗聴器しかけただけでその言いようは酷いとお姉さん思うわよ？　うちの内部の情報を片っ端からハッキングするよりかは大分マシだと思うわよ？」

しかし、その対応する楯無の態度はどこ吹く風と言わんばかりに飄々としている。

「先に仕掛けてきたのは貴女じゃないですか、十七代目？」

「あら、契約には反していないわよ。ちゃんと、『深水沙良に対するアプローチの禁止』。それは守っているつもりよ。それをあんな大々的にやられたらこっちだって黙ってられないのよ」

「確かに、僕に関しては何もしてこなかったね。流石とでも言ったほうがいいですか？　まさか僕から姉さんを辿ろうとするなんてね」

沙良はその瞳に怒りを表す。
自分のことは気にしないが、その手が親しいものにまで伸びることは絶対に許せない。
それが言動に表れていた。
沙良の手が楯無の首へと伸び、

「次はないですよ？」

楯無を通り過ぎた。

そのまま机にもたれ掛かり、ペン立てに入っているボールペンを楯無に投げ渡した。

それを楯無は片手で受け取ると、そのまま圧し折った。

部屋に仕掛けた盗聴器は二つ。

これで、この部屋は監視から開放されたことになる。

「いい演技ね。役者に転向したら？」

「変なことに巻き込まないで下さいよ。どうせ今回のことは上に言われたんでしょ？　そっちのことはそっちで処理してくれないと困るんですけど」

沙良は先ほどの空気が、まるでなかったかのように振舞う。

楯無も張っていた気を緩める。

それはこのことが予定調和のように。

「私は反対したんだけどね。どうも上は篠ノ乃博士の影を追いすぎてるところがあるわ」

楯無はずうずうしくも沙良のベッドに腰掛ける。

そんな楯無に沙良は冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し手渡す。

「まだ上の方を掌握していないんですか？　上の言いなりになるようでしたら当主失格ですよ？」

楯無は、迷いなくプルタブを開けると、コーヒーに口を付ける。

それは自分は信頼関係を気付きたいと行動で示したもの。
沙良は嬉しそうに微笑む。

「上の方に伝えておいたほうがいいですよ。貴方達が相手をしているのは個人ではなく国なのだとね」

それは、沙良からの忠告。
国を動かせるといってしまえるほどの力を、確かに沙良は持っている。
それを充分に理解している楯無は困ったような顔を作る。

「上が使えないと大変ですね」

その表情に感じるものがあったのか、沙良は労わりの声をかける。
かけられた言葉によって、内情が表情に出てたことに気付いた楯無は苦笑いを浮かべる。
元々、今回のことは上が勝手に沙良を利用して束の足跡を辿ろうとしたのを、沙良に報復されたことに始まる。

楯無としては、沙良と問題を起こすことは避けたい。しかし、上からの圧力に答えなければならない。
そこで、今回のように、楯無にしてはわかりやすいように盗聴器を仕掛けたのだ。
それは沙良なら合わせてくれるだろうという打算があったため。

事実、それは正しかった。
こうして、盗聴器を通して、上には先ほどの会話が流れるだろう。
任務自体は終了したわけだ。
ならばすることは一つ。

「お茶菓子は出ないのかしら？」

楯無は居座る気満々だった。

「それにそろそろ、外の子を入れてあげたら？」

その言葉に反応して、ドアが開かれる。

入ってきた金髪の生徒は敵意を隠すことなく楯無にぶつけてくる。

その生徒に前振りもなく声をかける。

「シャルル・デュノア、フランスの代表候補生だったっけ？」

その言葉に、シャルロットはピクリと眉を動かす。

「知ってて聞くのは止めてくれませんか？」

「あら、心外ね。私は貴女がスペインに帰化して、新たな専用機を手に入れたことしか知らないわよ？」

「充分ですよ」

シャルロットはあからさまに敵意を剥き出しにしている。

「いつから気付いてたの？」

「シャルも部屋に入る前には気付いてたよ」
楯無の問いに答えたのは沙良だった。
「シャル、大丈夫。生徒会長はこっち側だから」
その沙良の一言でシャルロットの敵意が一瞬で薄れる。
「あ、そうなんだ。てっきり政府に繋がっているんだと思って」
楯無はその切り替えの早さに心の中だけで感嘆の声をあげる。
それだけ沙良を信用しているということだろう。
「いいのよ。シャルロット・ルイスちゃん」
それはちょっとしたからかいのつもりだったのだが、帰って来た答えは予想だにしないものだった。
「日本の暗部の方は情報が早いんですね」
楯無は、パッと沙良のほうに視線を向ける。
沙良は軽く首を横に振った。
それは、沙良が教えたわけではないということ。
シャルロット・デュノア。
沙良に言われ調べたことは本当なんだろう。
デュノア社でのテストパイロットのほかに、暗部のような仕事も請け負っていたと聞く。
その時、楯無はその娘を道具のように扱う父親に虫唾が走ったものだ。

気配の消し方や、足音を消す歩法が見に染み付いていることが、その歩んできた道を想像させる。

楯無は沙良から話を聞いた時に、この子は守ってあげようとそう思ったのだ。

「安心しなさい。ここがＩＳ学園で、私が生徒会長である以上、貴女のことも私が守ってあげるわ」

それが、望まずに世界の裏に足を踏み入れた子に、唯一してあげられることだから。

◆◇◆

「一夏、おはよ……う？」

三日ぶりに見る一夏の顔を見て、沙良は、言葉を失う。

その頬にシップが張られ、よく見ると、腕にもあざが出来ている。

「おはよう、沙良」

「どうしたの、それ？」

「ああ、この三日間、出稽古に出てたんだ」

その言葉に、沙良は納得する。
一夏の中学時代の部活動を知っていればその傷にも理解が出来る。
それを知らないのか、箒とセシリアが心配そうな顔をしていた。

「ほどほどにしときなよ」

みんな心配そうな顔してるよ。そう付け加える。

「ああ、わかってるんだけどな。特別師範が来てたから、つい興奮しちゃってずっと稽古を付けてもらってたよ」

「一夏らしいよ」

もう苦笑しか出ない。

「そういえばシャルルは？」

「職員室に寄ってから来るって言ってたんだけど、そろそろ来ないと間に合わないよね」

教室を見渡すと、ラウラもその姿が見えない。
この三日で事情聴取も終わっているだろうから、休む理由などないだろう。

「み、みなさん、おはようございます……」

ラウラとシャルロットが姿を現す前に真耶が教室に到着してしまう。
しかし、その姿は見るからに疲れており、一夏の顔を見ても大し

たリアクションを取らない。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますか、既に紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

その言葉に、沙良は思い当たる節があるため、大きなリアクションを取らなかったが、他の生徒はそういう訳にも行かないようだ。教室は一斉に騒音に包まれる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

ここ最近ずっと聞いている声に、沙良は顔を上げる。

「シャルロット・ルイスです。色々ありまして、今はＳｅａＱｕｅｓｔＣｏｍｐａｎｙ所属のパイロットです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

朝に見せてもらった女子制服に身を包んだシャルロットが淑やかに頭を下げる。

なるほど、教員に捕まっていたから遅くなったのか。

沙良はそんなことを考えていた。

「ええと、デュノア君は色々ありましてルイスさんになりました。ということです。ルイスさんはスペインに帰化し、今はスペインの代表候補生になっています。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

直接的な原因ではないが、真耶の疲労の原因になってしまったこ

とに申し訳なさを感じてしまう。

「え？　デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って織斑君、ペアを組んでたんだから知らないってことは――」

「ちょっと待って！　確かこの前男子が大浴場を使ったわよね！？」

「待て！！　俺はその時は怪我で入って――」

しかし、一夏の声は教室が喧騒に包まれたことで言い終わることがなかった。

喧騒は段々と大きくなっていき、クラスの垣根を越える。

「一夏ぁっ！！」

前の扉から鈴音が、顔を怒りに染めて乗り込んでくる。

「アンタねえ！！一体、どういうこ……と？」

しかし鈴音の言葉は尻すぼみになっていく。

その原因は一夏の顔にあった。

流石に、ボロボロの一夏を攻撃するのは良心が痛むのか、展開しようとしていたＩＳを元に戻す。

ことはなかった。

鈴音は、一人こくんと頷くと、もう一度怒りを瞳に宿す。

「死ね！！」

展開された衝撃砲が、その狙いを一夏に向ける。

衝撃波。

それは、弾丸と言う形ではなく、弱い波として伝わった。

「あれ？　俺……生きてる……？」

一夏を庇う形で間に割って入ったのは、漆黒の機体を纏ったラウラだった。

おそらくは、ＡＩＣで衝撃を相殺したのだろう。

「助かったぜ、ありが――」

一夏の礼の言葉は最後まで紡がれることはなかった。

それは、口を塞ぐという、原始的な方法。

しかし、その塞ぎ方が問題だった。

接吻。

ＫＩＳＳ。

その言い方は数多くあるが、簡単に言ってしまうと唇で唇を塞いでいるのだ。

「こんな真昼間からお熱いことで」

「沙良、その発言は何かが違う気がするよ」

沙良とシャルロットを除き、その場の全員があんぐりとしている。

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

その宣言は、何人がすぐに理解できただろうか。

「嫁？　この場合は婿じゃないの？」

沙良の冷静な突っ込みにも反応を示すことが出来ない。

一夏は、未だに混乱が解けていないようだ。固まったまま動かなくなっている。

「お前と、ルイス博士は血の繋がりはないが家族と言っていたな。私は、お前らの関係のようなものに憧れたのだ。私もお前たちと家族になりたい。そこで、日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な慣わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする！」

「あっあっ、あ……！」

鈴音が声にならない声を上げていることに気付いた沙良は、こそっと教室の端に移動する。

「アンタねえええええっ！！」

「待て！　俺は悪くない！　どちらかと言うと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってんでしょうが！　全部！　絶対！　アンタが悪い！！」

鈴音が衝撃砲を砲撃可能体勢に展開する。

一夏は迷いもなく窓から飛び出した。

その姿をセシリアと鈴音が追いかける。

「全く、嫁も落ち着きがないな」

沙良は、近くまで来ていたラウラにそれは違うだろうと言いたくなる。

「ルイス博士、私は、あなた達のように絆を紡げるだろうか」

その真剣な様子に沙良は頷く。

「私は、今日から家族になろうと思う」

「それなら、呼び方を変えていこうか。博士なんて呼ばなくても、沙良って呼んでいいんだよ」

「そ、それだったら……」

ラウラは、俯いてしまう。

ラウラより沙良の方が背が高いため、その表情を窺うことはでき

ない。

「何？」

「兄様と、そう呼んでいいだろうか」

沙良は一瞬思考を放棄してしまう。

確かに、独逸にいたころは妹のようにラウラを可愛がっていた。

そのころの印象も大いに残っているのだろう。

しかし、ここは独逸ではない。

クラスメート達はそんなことは知らないのだ。

「だ、ダメだろうか……？」

しかし、まるで捨てられた子犬のような瞳で見つめてくるこの少女を厳しく突き放せるかといわれたら微妙なラインだろう。

自分が行った行動でこうなっているのならば、自分の行動には責任を持たなければならない。

「……わかった。許可するよ」

「ほ、本当か！？」

「うん。本当」

ラウラはその頬を緩ませる。

その表情は本当に嬉しそうに破顔している。

「沙良がお兄ちゃんってことは、僕はお姉ちゃんだよね。ねえ、ボーデヴィッヒさん、一回お姉ちゃんって言ってみて」

シャルロットの発言に、沙良は「こいつ何言ってるんだ」という顔をする。

「お、お姉ちゃん……」

「か、可愛いー！！」

なんなのだろうかこの状況は。

今はＨＲの時間ではなかったのか。

沙良は、シャルロットとラウラをひとまず放置しておいて、自分の席に着いた。

最初の授業は千冬の授業のはずだ。

ならばそろそろ、

「席に着け馬鹿共！！」

教室には出席簿の音が響くのであった。

◆◇◆

「で、話って？」

沙良は箒に呼び出されて、屋上まで来ていた。

「うむ、その……」

「ん？」

「私に……私に専用機を作ってくれないか！？」

「……え？」

「沙良は知っているとは思うが、私はあの人の妹と言うことだけでこのＩＳ学園に居る」

それは知っている。

箒が束を嫌っていることも、ＩＳにいい印象を抱いていないことも。

「最初はＩＳに関わることが嫌だった。だからＩＳから逃げていたんだ。しかし、今は違う。私にも目的が出来たのだ。横に立ちたい。卑怯なことだとはわかっている。実力で勝ち取った力ではないとはわかっている。しかし、今までの私じゃダメなのだ。ＩＳを嫌いのままの私じゃダメなのだ。私はやり直したい。頼む、そのための手段を私に作って欲しい」

沙良は、箒の気持ちは良く分かる。

数年だが一緒に暮らしていた時期もあるのだ。

事件が起こるたびに、自分だけが何も出来ないという状況。

それを気に病んでいることぐらい簡単にわかる。

しかし、ただ、力だけを受けとることを恥だと思ったのだろう。

だから力を求めずに、その手段を沙良に求めてきた。

その気持ちに、沙良は応えようと決めた。

「……わかった。引き受――」

『私に任せなさい！！！！！』

沙良の言葉を遮る形で、空中投影ディスプレイが現れる。

そこに映っているのは、

「「姉さん……？」」

『箒ちゃんの話は聞かせてもらったよ！　この束さんに掛かれば――』

沙良は勝手に出現したディスプレイを消し去る。

「……わかった。引き受けるよ」

そして、先ほどの流れを無かったことにした。

「ああ、ありがとう」

箒も無かったように会話を続ける。

しかし、二人とも理解していた。

ここに束が関わってくることがどういう意味を持つか。

おそらく、いや、確実に高スペックな専用機を作り上げてくるだろう。

ならば、今必要なのは、

「……こうなっては仕方ない。あの人はおそらくやりすぎた物を送ってくるだろう。ならば、私を鍛えてくれ」

強大な力を手段と出来るほどの力を身に付けることだろう。
沙良は箒に手を差し出す。
それは了承の合図。
風の止まった屋上で、二人は契約の握手を交わすのであった。

第四十六話　接吻（後書き）

とりあえずごめんなさい。
今の僕にはこんな話しか書けないです。
スランプてめえ……
どうしてこうなった……
とりあえず、ラウラが家族になりました。
もう、後先考えずに突っ走ってます。
とりあえず、ようやく二巻の内容が終わったことに一安心です。

酷評、お待ちしております（笑）

第四十七話　開発の最前線（前書き）

三巻の内容に入っていきます。

冒頭部に危ない表現が入っていますのでお気をつけてください。

第四十七話　開発の最前線

漏れる吐息。
儚げに濡れる瞳。

その主を屈服させるかのように強引に押し倒す。

「あ……」

その声は何を紡ごうとしたものか。
濡れた視線にも構わずにその体に触れる。
それは焦らすかのように肌を撫でていく。
まれで壊れてしまうかのように、ゆっくりと優しく。

「や、め……」

翠の瞳が潤む。その唇が、拒否の言葉を紡ごうと小さく動いた。
しかしその言葉は紡がれることは無い。
その言葉が言い終わる前に、口を塞いだ。
唇が重なる。
翠の瞳は驚いたように目を見開いたが、すぐにトロンとその表情を変える。

「ん、あ……んぅ」

艶かしくあがる声に、体がうずくのがわかる。
そっと、唇を離す。

「……シャル」

名前を呼ばれる。
その愛しい人から呼ばれる名に、胸の高まりは強まっていく。

シャルロットはもう一度顔を近づける。
そのゆっくりとした動作に、沙良は顔を逸らす。しかし、金の髪の主は、そのまま首筋に顔を埋め、焦らすかのように反応を楽しむ。

「んぅ……」

その声を抑える姿を堪能すると、シャルロットは今度こそ沙良と正面から向かい合う。
瞳を逸らそうと逃げる顔は両手で押さえ、ゆっくりと顔を近づけていくと、観念したのか沙良は瞳を閉じ、そっと唇を突き出した。

艶美な表情に、自分の理性が外れていくのがわかる。
シャルロットは自分の欲望に身を委ねるのだった。

「うわあああああああああぁぁぁぁ！！！！！」

シャルロットは飛び起きる。
その行動にベッドが軽く軋みを上げる。
その慌てふためいたシャルロットは、時計を見る余裕も、同居人を気にする余裕も無い。

「な、な、ななんて夢を……！！」

夢にしては生々しく、未だにその感覚を思い出せる。
その淫靡に迫る自分の姿に、頭を振る。

「違う違う違う、あれは夢だあれは夢だあれは夢だ」

しかし、その唇には確かに夢の名残が残る。

「……」

ふと唇に触れてしまう。
その感触に、夢を強く意識してしまう。

「違う……僕はあんなにエッチなんかじゃ」

そう否定しようとすると、また思い出してしまう。
艶かしく嫌がる沙良に口付ける自分。最後に突き出されたあの唇。
シャルロットは知らずのうちに顔を真っ赤にする。

「……シャワー浴びよう」

このままでは沙良の顔を見ることすら出来ない。

シャルロットは時計を見ることもなく、脱衣所に消えていった。

◆◇◆

シャルロットは必死だった。
おそらく、人生で最も真剣に手を動かすことだけを考えている。
時刻はもうすぐで六時になるといったところ。
授業に間に合うためだけなら、あと一時間二時間は寝ていられただろう。
しかし、今はそれよりも大事な用がある。

「あ、シャルロットさん。セラがご立腹でしたよー」

「馬鹿ねえ、シャルロット。今日に限って遅刻なんて」

第三アリーナ更衣室で必死に着替えをしていると、フィオナとリナが更衣室に入ってきた。
二人とも、スペイン企業所属という立場になったシャルロットと仲良くしてくれる。

「……やっぱり怒ってた？」

会話をしつつも、着替えの手は止めない。
すぐにＩＳスーツを装着すると、急いでアリーナに向かう。

「すっごい機嫌が悪かったわよ。今日は何回リバースするのかしらね」

思いっきり顔をしかめるシャルロットの背中をリナとフィオナがポンと叩く
それに片手を上げて答えにすると、シャルロットは急いでアリーナに向かう。

ピットが開くその僅かな時間すらも惜しい。
早くしろと言わんばかりに体を揺らし、そのアリーナとピットの境界が無くなった瞬間に、足を踏み出す。

その土を踏みしめた瞬間、銃弾がシャルロットに襲い掛かった。

「――っ！？　『ソラ』！！」

その銃弾がシャルロットに当たる前には、既に空の様に淡い青色に体が包まれていた。
しかし、無情にもその機体に押し寄せる銃弾の雨は強さを増すばかりである。
いくら避けようとも、その銃弾を引き離すことは出来ない。
シールドエネルギーがガリガリと削られていく。

その銀色の雨の中でも、シャルロットのハイパーセンサーはガトリングを展開しだした沙良の姿を捉える。

「ＤＩＶＥ！！」

これ以上は拙いと判断したのか、シャルロットは強くなるであろう弾幕に備えて、装甲を閉じた。
しかし、それが仇となった。
強くなった弾幕に足を止められてしまう結果になったシャルロットは確かに見た。そこにミサイルが混ざっていることを。

そうきたか。

思考だけが冷静のまま、シャルロットは爆発に巻き込まれるのであった。

「くっ……」

その衝撃は、いくら耐久性に秀でていると言っても、そう簡単に耐えられるものではない。
シールドエネルギーを抜け、装甲に破損が生じる。
しかし、これで気を抜くわけにもいかない。

周りは爆発による煙で蔽われており、視界がまともに利かなくなっている。
どこから何が飛んでくるかはわからない。
ましてや、今日の沙良は不機嫌だという。
手加減など、思考の端にも無いだろう。

「――っ！」

ハイパーセンサーが、煙の揺らぎを感じる。
反射的にアサルトライフル『ＣＥＴＭＥ』を展開し、即座に引き金を絞る。

その弾幕が煙を引き裂いた。そこに居たのは――

「なっ！？」

普段、衝撃や人体への影響などを調べるため、人間の代わりに実験に扱われるダミー人形だった。

ここにダミーが居るということ。

それが示す答えは、

「後ろ！！」

背後から襲い掛かる物体に、『ＣＥＴＭＥ』を向ける。

しかし、その正体に、引き金を引くことができなかった。

「ダミー！？」

フェイントにフェイントを重ねられたシャルロットは、気付くことが出来なかった。

真上からの沙良の接近に。

シャルロットが気づいた時にはもう手遅れだった。

その懐に潜り込んだ、沙良の機体が握るのは見覚えのある大型ランス。

「ばか」

その一言と同時に、容赦の無い突きがシャルロットの腹部を貫いた。

「っ……！」

それは衝撃を響かせる武装のはずだった。
だからシャルロットはそれに備え、全身に力を入れたのだ。
しかし、その衝撃は、響くことなく、シャルロットの腹部を貫いた。
普段ならそのまま受け流したであろう衝撃を、真っ向から受け止めてしまったのだ。
その備えていなかった衝撃に、胃液が上ってくるのがわかる。
しかし、それを必死に押しとどめる。その隙がシャルロットの努力を踏みにじった。

「あんなに言ったのに」

沙良は持っていたランスを投げ捨てる。

「なんで遅刻するかなぁ」

そして全く同じものを両手に展開する。

「反省してきて」

沙良は再び、シャルロットの腹部に突きを放った。
その衝撃に、シャルロットは、後退を余儀なくされる。
後ろに下がったことにより、なんとか衝撃を軽減するが、重ねての衝撃に、息が詰まる。
その開いた距離を最大限に活用し最大の加速を乗せて、沙良は最後の一撃を、寸分違わぬ部位に打ち込んだ。

「……ぁ」

声にならぬ声が漏れる。

シャルロットは、地面を跳ねるように転がり、やがてうつ伏せにその動きを止めた。

「うぅ……」

手で上半身を支え、起き上がろうとするが、それより先に堪えていた堰が決壊した。

「ちょっと、シャル。出す時はちゃんと袋に出してよ」

苛立ちを隠さない沙良。しかし、シャルロットは反応する余裕すらない。

ただ、胃液の流出に堪えることに専念するのであった。

◆◇◆

「はぁ！！」

シャルロットは大きく腕を振るう。

その腕に呼応して、アリーナの地面が壁のように盛り上がった。

その壁は銃弾を受け止めると、形を土に戻していく。

そして、壁が全てなくなると、再び腕を振る。

今度は壁ではなく、土が凝縮し、宙に浮いた。
圧縮された土がシャルロットを囲み、銃弾から身を守る。
もう一度その腕を振ると、背面の土がその形を剣に変える。
それはただの剣ではない。
巨人が持つに相応しいほどの大きさを誇る。
その大きさは、シャルロットの機体よりも三倍ほど大きい。
それを、腕を振ることで自在に操る。
その動きはまるで踊りを踊るかのよう。
見てるものを魅了するその動きは、脅威を運ぶ。
しかし、その剣が相手に届くことは無かった。
「マーメイド！！」
水により構築された銃弾がその剣を半分に圧し折った。
それに、シャルロットは渋い顔をする。
「あれを圧し折るとか、どんな威力ですか！？」
「むしろ、あんなものを振り回すあなたにビックリよ」
シャルロットはすぐさま両手を前に突き出す。
それに呼応して、シャルロットの目の前の空間が歪む。
そのまま、手を回し、歪んだ空間を渦巻かせる。
片手を引き、もう片手を押し出すように放つと、呼応して、その空間から圧縮された空気が押し出される。

それは風と言う形でアリーナを蹂躙する。

まるでジェット機の後ろに立つような風圧に、ソフィアはその機体の制御にかかりっきりとなる。

「なんて圧力なの！？」

その風に、シャルロットは、土の塊を混ぜた。

それがソフィアに直撃する。

時速八十キロは出ていたであろう土塊に、ソフィアは地面を転がることになる。

ここをチャンスとばかりにシャルロットはソフィアの真上の空間を歪ませる。

「墜ちろ！！」

その叫びと共に手を下に振り下ろす。

その歪みから、空間が落ちた。

圧縮された空気が重石のようにソフィアの機体を押しつぶす。

「勝っ」

勝った。

その言葉は途中で止まった。

なぜなら、

「水！？」

ソフィアだと思っていたものが割れ、そこには水だけが残っていた。

「Ｅｘａｃｔａｍｅｎｔｅ（その通り）」

背後からソフィアの声が聞こえる。

そして、自分の周りには既にソフィアの特殊兵装『マーメイド』が囲んでいる。

これは勝負が決まっているも同然だ。

「参りました」

シャルロットは大人しく両手を上に上げるのだった。

◆◇◆

「結構扱いにも慣れてきたね」

沙良は蹲っているシャルロットに話しかける。

「……この姿でも？」

シャルロットは元気なく、袋を口に当てている。

それでも沙良は頷く。

「始めのころは数分に一回は吐いてたのに、今では戦闘までは耐えられるようになったじゃん」

最初は全然データも集まらず、試行錯誤が続いていたが、ここ最近は安定してデータが取れている。

吐かない日は無いのだけれども。

「今日のデータで、また調節してみるよ。少しはマシになると思う」

「うん……お願い」

シャルロットはふらふらと歩くと計測機器にもたれ掛かる。

ドルフィンの特殊兵装を使うと、毎回こうなる。

それは搭乗者への負担が大きく、シャルロットは毎回胃の中を空にしている。

少しずつ改良が加えられ、その負担も小さくなってはいるが、完成には程遠い。

搭乗者に影響が出ないようになるまでは完成とはいえないだろう。

ＩＳの開発はそんなに簡単なものじゃないのだ。

そんな一週間や一ヶ月でＩＳが作れたら苦労はしない。

このドルフィンは構想を含めると二年以上が経過している。

それがシャルロットという搭乗者が現れてから、段違いのスピードで研究が進んでいる。

シャルロットが関わり始めてから既に一ヶ月近くが経過している。

完成も見えてはきている。

臨海学校まで残り一週間と少し。

それまでには完成させたい。

「まさか、学校でもデスマーチすることになるとはね」

シャルロットはボソッと呟いた。
残り一週間。
確かにそこには地獄が待っているであろう。

「せめて、日曜日だけは休みにしてあげるよ」

「本当!?」

シャルロットは急に元気を取り戻す。
実際はへろへろのままなのだが、瞳に力が戻っている。

「本当だよ」

「やったー!」

そこまで嬉しかったのか、シャルロットは沙良の手を掴むとぶんぶんと降り始めた。
沙良は微笑を浮かべる。喜んでもらえたならよかったと。
シャルロットは沙良に笑顔を向け、そのまま沙良の唇に視線を止めると、いきなり顔を赤く染めた。

「ん？　どうしたのシャル？　なんかついてる？」

不思議に思った沙良はシャルロットに顔を近づけるが、余計にシャルロットは慌ててしまう。

「ち、ちかっ、近い……！」

沙良の顔を離そうと、シャルロットは手を伸ばす。
しかし、シャルロットは顔を背けているため、その手は、きちん

と顔を捉えることはなかった。
シャルロットの指先が、沙良の唇に触れる。
「へ？　この感触……」
その自分が触れた場所に気付いたのか、シャルはそのまま固まってしまう。
沙良としては何をそんなに慌ててるのかわからないため、反応も出来ずただ、唇に指を添えられたままでシャルロットの反応を待ち続けている。
「……やわら……」
「え？」
その言葉を聞き取ることは出来なかったが、シャルロットは聞かれたと思ったのだろう、目を泳がせて、慌てだした。
「え、あ、その、あの、えっと」
「シャル？」
沙良は、とりあえず、この体勢をどうにかしようと試みる。そしてシャルロットの手を掴もうと手を伸ばすと、
「わ、わあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
シャルロットは悲鳴をあげ、アリーナから走り去った。

残された沙良は、近くに居たソフィアと視線を合わせると、お互い首をかしげるのであった。

第四十七話　開発の最前線（後書き）

うちのシャルロットは主人公してるなぁ……
ヒロインがシャルってよりも、沙良がヒロインのような気がしてきたよ（笑）
それにしても原作から離し過ぎたか？
少し戻さないとね。

第四十八話　サブタイトルの必要性について私と語らないか？（仮タイトル）

もう沙良はヒロインでいいやって思う。

第四十八話　サブタイトルの必要性について私と語らないか？（仮タイトル）

「……何してんの？」

沙良の目線はどこまでも冷たい。

朝早くからの開発によって疲れた体を引き摺り、部屋まで帰って来たのだろう。

そこでこんな光景が繰り広げられていたら誰だってこうなるだろう。

扉を開けると、ラウラが一夏を押し倒し、その唇を奪おうとしていたのだ。

一夏自身、逆の立場なら冷静になれるかわからない。

「ち、違うんだ沙良！　話を聞いてくれ！」

一夏は沙良にこの状況を説明しようと必死に頭を回転させる。

とりあえずは、包み隠さずに話してしまおう。

一夏は朝起きてから、今の段階までのことを簡単に説明する。

朝起きたらベッドにラウラが居たこと、裸は拙いとシーツを纏わせようとし押し倒されたこと。

沙良はその話を聞きながら手を額に当てた。

沙良は何事も無かったかのように自分の机に歩み寄ると、抱えていた荷物をおろす。

そして一呼吸入れると、一夏とラウラに向かい合った。

その瞳は呆れの色が見えている。

「ラウラ？」

問いかけに背筋を伸ばすラウラ。

一夏は顔が離れたことで少しほっとする。

「はい、なんでしょうか兄様」

「何でここに居るの？」

「これが夫婦の一般的起こし方と聞きましたので、早速実践してみようと思いまして」

「ラウラ」

沙良がラウラに向かい合う。

一夏は沙良が注意してくれるならもう大丈夫だろうと、安堵を隠せない。

「せめて裸は止めなさい。夏とはいえ、体を冷やしてしまう恐れがあるからね」

「ならば、肌で暖めあえばよろしいのですね？」

「せめて下着ぐらいはつけなよ」

「了解しました。兄様がそういうのであれば」

その内容にリアクションを忘れてしまう。

一夏は裏切られたと沙良に怨嗟の視線をぶつける。

そういうことじゃないと。

確かに裸よりかはマシだが、そういう問題ではない。

このラウラの行動を止めて欲しかったのだが、沙良のせいで許可が出てしまったようなものだ。

そして何を思ったのか再びラウラの顔が近づいてくる。

沙良は既にいつでも出れる準備をしている。

助ける気は更々無いようだ。

沙良だけに。

「なんか変な事考えた？」

「べ、別に」

そうなことを話している場合じゃない。

ラウラは残り5センチというところまで接近している。

その頬を染めた表情に言葉が詰まってしまう。

だからか、大した抵抗も出来ず、ただ接近を待つだけになってしまった。

そして、こんなタイミングの悪い時に限って、いらぬ来客が来るものなのだ。

「沙良居る？　さっきはごめんね。一緒に朝食にでもどうかな」

扉の向こうから聞き覚えのある声が聞こえてくる。

一夏は今の状況を考えてみる。

自分。床に押し倒されている。

ラウラ。一夏の上に裸で馬乗り。瞳を閉じてキスを待っている。

沙良。何事も無かったかのように、朝食に向かおうと扉に手をかけようとしている。

「って待て！　開けるな沙良！！」

しかし、既に時遅し。

扉からは明るい蛍光灯の光が漏れる。

その光からは綺麗な金髪が見えている。

「さっきはごめんね。一緒に食べ……」

ひょこっと顔だけ入ってきたシャルロットは沙良の後ろにいる、一夏とラウラの存在に気付いた。

最初は状況に唖然とし、その意味が理解できるにつれて、その顔はどんどん朱に染まっていく。

一夏は天を仰いだ。

終わった。

裸の女子に押し倒されてキスをされようとしている。

こんな話が広まってしまったら幼馴染達の鉄槌は逃れることは出来ないだろう。
最悪の場合は世界最強と名高い姉も出てくる恐れもある。
一夏は、悟ったかのように穏やかな顔で瞳を閉じた。

短い間だったけど、楽しかった。
心残りは沢山あるけど、これが運命なのか。
しかし、瞼を閉じてから十秒が経過したが、周りは静かのままだ。
いつまでたっても反応を起こさないシャルロットに疑問を感じ、瞳を開ける。

シャルロットは混乱していた。

挙動がおかしく、口から漏れる言葉も「あうあう」と意味を成していない。
百人がみたら百人が混乱してるというだろう。
そのぐらいの錯乱具合だ。
しかし、その視線だけは沙良の口元を凝視している。
沙良もその理由が思い当たらないのか、首をかしげている。

「……シャル？」

その沙良の唇が形を変えると同時にシャルロットは走り出した。

「う、うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

周りの迷惑も顧みない悲鳴に、残された一夏はポカンとするしか方法が無かった。

「ちょ、ちょっと！？」

沙良が、すぐさま、その後姿を追いかける。
正直、逆効果だと思うが、行ってしまったものは仕方がない。
一夏に出来ることなど何も無い。
今はそんなことを考えてる場合ではない。
なぜなら、

「一夏、せっかくだから朝食を一緒にしようと……」

そこに鬼がいたからだ。
早朝の鍛錬をしていたのであろうか、その手には竹刀が握られている。
一夏は、これから自分がどんな目に遭うかを悟った。

「一夏ぁっ！！！！」

◆◇◆

頭のたんこぶを擦りながら、一夏は箒に非難の目を向ける。
既にチャイムの音は鳴っており、ＳＨＲの始まりを告げているのだが、痛みは引くことはない。
しかし、一夏を被害者だと露程も思っていないのか、視線を向けられた箒は鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまう。

これには少しカチンと来る一夏だが、一年一組の教卓には担任教師、織斑千冬の姿が見える。
ここで騒ぐと、恐怖の出席簿が降りかかるのは、火を見るより明らかだ。
真耶のＳＨＲとは違い、誰も私語することなく、連絡事項が伝えられていく。
その様子に、どれだけ恐れられているかがわかる。

「今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生とはいえ、お前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

ＩＳ学園と言えど、高等教育機関に変わりはないため、一般教科を当然のように履修しなければならない。
勿論、成績というものを出さねばならないため、期末テストは存在している。
ここで赤点を取ってしまうと、夏休みは補習で埋まってしまうのだ。
故に、テスト前には自習室や図書館で机に噛り付く生徒が続出する。
勿論、一夏も沙良に泣き付くつもりで居る。
いつも厳しいことを言いながらもなんだかんだで教えてくれるため、つい甘えてしまうのだ。
それに、ここでテストに気をやっている生徒など一人も居ないだろう。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物するなよ。三日間だけだが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

そう、七月頭に行われる校外実習。すなわち臨海学校。

三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間。勿論そこは海なので、十代女子たちにとっては抗えぬ魔力があるのだろう。
それはテストのことなど、頭の片隅に追いやるほどに強力らしい。
一夏としては海自体は楽しみだが、水着を買うのはめんどくさい。
その旨を素直に口にしたらセシリアと鈴音が口を酸っぱくして注意してきたので、沙良に相談したところ、S・Q社の新作水着のモニターを頼まれてしまった。
一夏としては、タダで水着が貰えると言う事なので快く引き受けた。

「ではSHRを終わる。各人、しっかりと勉学に励むように」

その一言で、場の空気が弛緩する。
千冬が教室を出るのを皮切りに、クラスが一斉に騒がしくなる。
話す内容は、臨海学校のことだろう。
しかし一夏は、違うことを考えていた。
もちろん臨海学校も大事だ。
だが、それと同じくらい大事な案件が一夏にはあるのだ。
そのことには沙良もいたほうがいいだろう。

「日曜日とか空いてないかな」

いつも忙しそうに動き回っているが、日曜日ぐらいは休みを取っているだろう。
そう思い、沙良に話を通すため、席を立つのだった。

◆◇◆

アリーナでは、三つの影があった。
一つは計測機器を操作するのもの。
残りの二つは、銀灰色の装甲を纏っている。
その重厚な装甲を持つ『打鉄』を纏っている箒は、スラスターを噴かし、ブレードを肩の高さまで引き上げる。

「はあぁぁぁ！！！！」

振りかぶる刃は、銀灰色の装甲を掠ることなく、ただ空を切った。
続けて身を回し、その回転で薙ぎ払いを放つが、あっけなく避けられてしまう。

「機動力が違うんだから、馬鹿正直に近づいたって当たらないよ」

アリーナの端で計測機器を操作している沙良の一言に、何も言えなくなる。
実際に、模擬戦が始まってから刃が当たったことはまだ無い。
わざわざ訓練に付き合ってくれている、面識の無かった少女にも申し訳が立たない。

「簪、稼動データは充分。『夢現』を使っていいよ」

「……わかった」

珍しい髪色をした少女は、新たに薙刀のような武装を展開した。
データ取りをかねて訓練に付き合ってくれているのだから、それ

相応の動きを示さなければならない。
つまりは、そのデータが取れるぐらいに、箒がその稼動についていかなければならない。
自然に右手に力が入る。
そのブレードの感触に、箒は自分を奮い立たせる。
自分は弱い。
ならば出来ることをやるだけだ。
箒はブレードを正中に構える。
今からは、一切余計なことを考えるな。
ただ、相対することだけを考えろ。
そう自分に言い聞かせる。

「っ……」

相手の表情が変わった。
そのより一層引き締められた空気に、自分が押しつぶされぬように、気を張り続ける。
恐らく、今の状態は長く持たない。
ならば、勝負は一瞬。

「っ！！」

少女が動いた。
その動きを、五感全てを以ってして感じ取る。
一直線。
何のフェイントも無い突き。
相手の薙刀の軌道が読める。
後は、その線上にブレードを添えるだけで良い。
そう判断し、それを実行に移した。
それが罠だと気付いたのは、少女の口元に笑みが浮かんでいるの

に気付いてからだった。

「なに！？」

軽い金属音が響き渡る。

その薙刀はブレードによって受け流されるはずだった。

しかし、現実に箒の目に映る光景は、薙刀に弾かれた自分のブレードだった。

その信じがたい光景に、箒は硬直を余儀なくされる。

その時間はほんの僅かだっただろう。

しかし、そのほんの僅かが生と死を分けることを、箒はよく知っていた。

沙良がよく言う言葉。

『情報とは武器である』

その武器を持たない箒は、対処する術を持たない。

故に、迫り来る刃をただ見つめることしかできないのだった。

◆◇◆

「え？　臨海学校来ないの？」

沙良は計測機器を操作しつつ、問い返すように簪に言葉を投げかける。
既に箒はシャワーを浴びに行ってしまったが、計測データを出す必要があるので、沙良と簪は、未だにアリーナに残っている。
あのボロボロになった後姿には、簪でさえも同情を誘う。

「更識で出ないといけないことがあって……」

本当は行きたいんだけど。その意志が反映したのか、語尾が弱まっていく。

「それに、錦の開発は完全に倉持から離れちゃったから、追加武装なんて来る筈が無いし……」

口から漏れる言葉はただの言い訳。
海に行きたかったなぁ。
そう呟きがこぼれてしまう。
それを沙良は優しく頭を撫でることで慰めてくれた。

「また夏休みに入れば海に行く機会なんていっぱいあるよ」

沙良の柔らかい笑みに、簪は頬をほんのりと朱に染める。
ここにシャルロット達スペイン勢が居たら簪に対して何かしらのアクションを取っただろう。
しかし、シャルロットは、第二アリーナで誰かしらの訓練に付き合っているはずだ。
リナとフィオナが整備室に居ることは知っているし、ソフィアも今日はアリーナに顔を出す用事は無いと沙良から聞いている。
簪は、シャルロットが居ない今がチャンスと言わんばかりに、身を乗り出す。

「あ、あのね沙良。良かったら今度のやすーー」

「セラー！！」

「あ、シャルだ」

「……」

言葉を遮るように沙良の名前が呼ばれる。
あからさまな妨害に、ムッとしてしまう。
こちらに走ってくる金髪の持ち主を見ると、その瞳は簪から離れない。
その瞳は語りかけてくる。
『抜け駆けは許さない』と。

「箒の訓練は終わったんだね。こっちも一夏の訓練は終わったよ」

「そっか、お疲れ様」

「そうだ、一緒に夕飯を食べようよ」

そのわかりやすい妨害。
それを簪に見せ付けると言うことは、

「……その前に、模擬戦をしよ？」

恋愛においては容赦しないと言うことだろう。
それなら、簪だって同じ事だ。

その喧嘩、買った。

――友達と言えども譲れない部分はあると言うことを教えてあげる。

沙良の静止の声も聞かず、アリーナに青と銀灰の線が通っていくのであった。

第四十八話　サブタイトルの必要性について私と語らないか？（仮タイトル）

実は、ただ簪を出したくなっただけです。

三巻はいまだイメージが固まってないんですよねぇ……

福音で誰を墜とすか迷ってるんですよ。

感想とか意見とかもらえると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9967v/

ＩＳ　深海の探索者

2011年12月13日06時46分発行